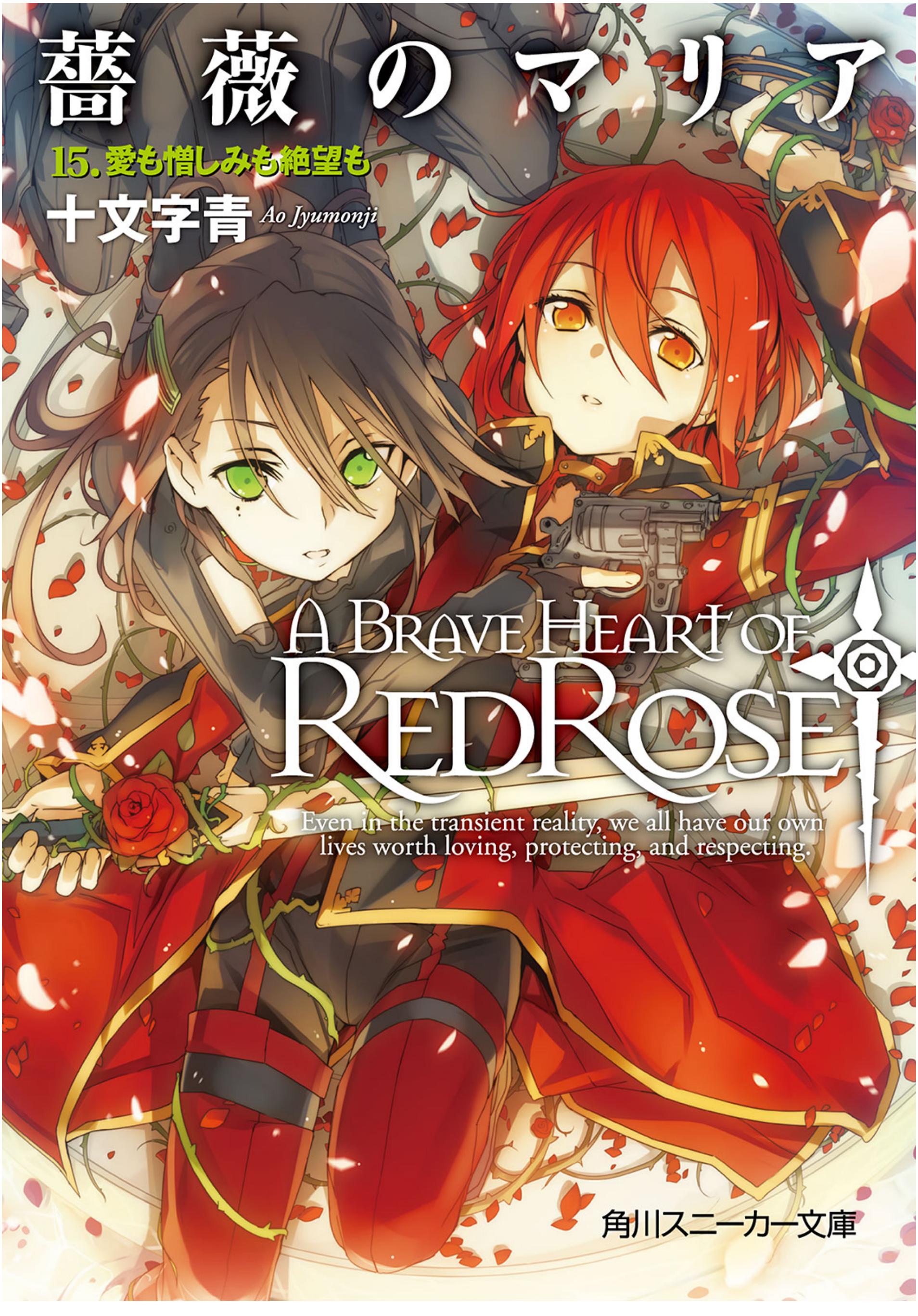

薔薇のマリア
15. 愛も憎しみも絶望も
十文字青
Ao Jyumonji
A BRAVE HEART OF RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.
角川スニーカー文庫


彼女は正体を偽って暮らしてきた。方便として嘘をつくことはできる。
べつに苦痛を感じることもない。
なぜなら、自分自身を騙しているわけではないからだ。
何が彼女にとっての真実か、彼女は知っている。
A BRAVE HEART OF RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.
薔薇のマリア
15.愛も憎しみも絶望も


「――というわけで、あたしは
SSに入りこむことに
成功したんだけど……」
〝バニーメリー〟はリビングの床に正座している。
彼女の話を聞いているマリアローズたちはソファーだ。
「SS、か……」マリアローズは膨らました右のほっぺたを
人差し指でつつきながら、天井を仰いだ。
「ぜんぜん聞いたことないや。あたりまえなんだろうけどさ」


「大好きなんだね、飛燕のことが」
「ええ」
ユリカは目を細めて頬をゆるめ、そっとうなずいた。

薔薇のマリア

15．愛も憎しみも絶望も

十文字　青

角川スニーカー文庫

A BRAVE HEART OF RED ROSE 15

In despair, hatred and love

Ao Jyumonji

First published 2011 in Japan

By

Kadokawa Shoten Publishing Co.,Ltd.

illustration : BUNBUN

design work : design CREST

A BRAVE HEART OF RED ROSE

15

CONTENTS

CONTENTS

A BRAVE HEART OF REDROSE

15

MAIN CHARACTERS



Azian
アジアン

クラン《昼飯時(ランチタイム)》の頭領(マスター)。



Mariarose
マリアローズ

主人公。美貌の侵入者(クラッカー)。



Katari
カタリ

トラブル＆ムードメーカー。



Pimpernel
ピンパーネル

元暗殺者(アッサシン)。



Tomatokun
トマトクン

クラン《ZOO》の園長(マスター)。



Lucy
ルーシー

成長期のニューカマー。



Yurika Snow-white
ユリカ白雪

最強伝説。



Safinia
サフィニア

魔術士。不幸。



Johann Sunrise
ヨハン・サンライズ

《秩序の番人》の総長。



Q'bell-Adrus
きゅー

キューベルアドラス。



Honeymerry
ハニーメリー

謎の機術師。



Fall
琺瑠(フォール)

《秩序の番人》の副長。



SIX
シックス

幽閉者。



Fei Yang
飛燕(フェイヤン)

クラン《S＊K》の頭目。

and the others

Agna Kurtiba
アーニャ・クルチバ

Otomi
オトミ

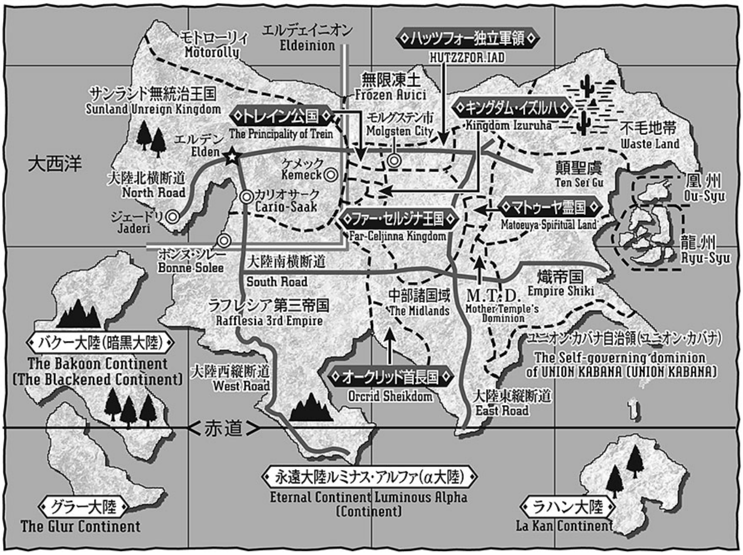
Katsuwo
カツヲ

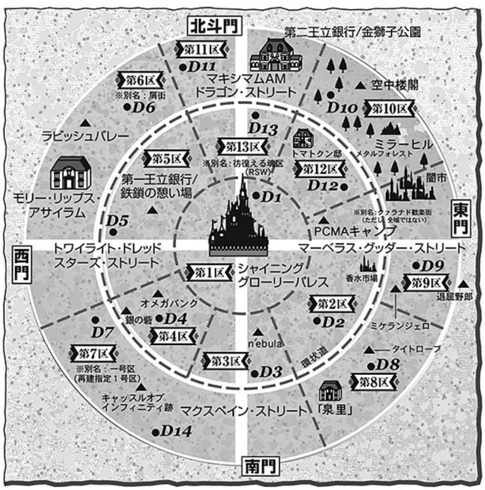
Octavian Gustave vie de Rafflesia
オクタヴィアン・ギュスターヴ・ヴィド・ラフレシア

Louis Aschmedai Magnus-Ikis Adeimontdio
ルイ・アシュモダイ・大智永世・アデモンディオ

and etc.

The World of "A BRAVE HEART OF RED ROSE"





Elden : the Metropolitan area of Sunland Unreign Kingdom

サンランド無統治王国 首都エルデン

MAP製作／On Graphics

the deep past "My Pride"

高度四千七百メーテル。

巨きよ大だいというよりむしろ広大な八枚の翼つばさを羽ばたかせ、ゆったりと高空を飛ひ翔しようしている碧へき竜りゆうは、主しゆ頭とうの他ほかに八つの副頭を持つ。

九く頭ず竜りゆうナ・イン。

それが彼女の名だ。

超ちよう硬こう度どの非金属無機材や金属や合金以上に頑がん丈じようで、磨みがき抜ぬかれた宝石のごとく輝かがやき、荘そう厳ごんにして優美な彼女の主頭に、その巨きよ軀くと比べれば豆まめ粒つぶ以下の人間たちがこびりついている。まさにこびりついていると表現するほかない。

女王〝恵めぐみと慰なぐさめのジヴリール〟が、そのあまねく慈じ愛あいと稀け有うなる英えい智ちによって統すべているタナソア王国の貫つらぬく矛ほこにして磐ばん石じやくの盾たて、タナソア聖せい騎き士し団だん〝三本槍トライランス〟の一人、聖騎士ロレンツといえども、彼女の威い容ようには畏い怖ふの念を抱いだかざるをえない。

ナ・インは圧あつ倒とう的な存在だ。このような、生物の概がい念ねんを遥はるかに超ちよう越えつしている怪かい物ぶつを超こえた怪物を使し役えきする者が、この世にいていいのか。そのような者こそが邪じやなのではないか。

しかしながら、たとえ邪であろうと聖であろうと、大いなる力がなければ、我々の敵にはとうてい抗こうしえない。その厳然たる事実は重々承知している。心得てはいても、苦々しいのだ。

ロレンツは九頭竜ナ・インの碧へき鱗りんに楔くさびを打ちこんで固定してある鞍にまたがり、留め具を腰こしと腿ももに締しめたうえ、身体からだを前に倒たおして鞍くらの握にぎり棒につかまっている。こうしていても吹ふき飛ばされてしまいそうだし、聖騎士の軽甲かつ冑ちゆうの下に防寒着を着こみ、甲冑の上に防風衣をつけていても、猛もう烈れつに寒い。途と方ほうもない風圧だ。ゴーグルを装着していなければ、一秒たりとも目を開けてはいられない

だろう。酸素を供給するマスクが外れたら、たちまち低酸素症しように陥おちいってしまうに違ちがいない。

　ナ・インの主頭には、ロレンツだけではなく、五百名以上の人間がこびりついている。大半は女王陛下に肉体と精神と魂たましいを捧ささげ、女王陛下の意志を体現するために己おのれを鍛きたえ抜いてきたタナソアの聖騎士たちだが、皆みな、ロレンツと似たり寄ったりの有様だ。それもやむをえない。彼らは飛んでいるのだ。正確に言えば、高空を飛翔する巨竜に、死にものぐるいでしがみついている。

　それなのに、あの二人だけは違う。

　平然としている。

　ロード・キング・グッダー。

　長い髪かみをなびかせ、王おう冠かんを戴いただいて、主頭の鼻はな面づら近くに王おう錫しやくを突つき立て、長なが髭ひげをしごいているあの男こそが、九頭竜ナ・インの支配者だ。

〝原子のアトミック・極大マキシマム魔術師ドレッドスター〟であり、総勢二十五万の魔導兵団ドレッドループスを率いる払暁ドウー千年ンミレ王国ニアムの王でもあるロード・グッダーは、ナ・インのみならず、その弟竜であるノ・インをも竜界ドラガンドでの決けつ闘とうで打ち負かし、〝不壊のエバラスト誓約フエイス〟の魔ま術じゆつによって完全に屈くつ服ぷくさせたのだという。事実、ナ・インもノ・インもロード・グッダーに従っている。その伝聞は真実なのだろう。ロレンツには、しかし、想像できない。

　彼の女王をふくめた魔導王たちの偉い大だいな力を、知らぬわけではない。よく知っているつもりだが、人がナ・インのごとき竜を打ち倒して支配できるとは、どうしても思えないのだ。それはもはや人のなしうる所業ではない。ロード・グッダーは人ではないのではないか。

　そして、ロード・グッダーの少し後ろで、前まえ屈かがみになってはいるが、二本の足で立っているあの男もまた、人とは思えない。

　ロレンツの位置からは後ろ姿しか見えないものの、茫ぼう々ぼう

として渦うず巻まく蛇へびの群れのごとき頭とう髪はつの合間からのぞく禍まが々まがしい黄玉トパーズの瞳ひとみを思いだすと、心臓がつめたくなる。男は両りよう腕うでと腰から下を覆おおう赤黒い鎧よろいを身につけているが、それ以外の部分は胸も、腹も、背中も、浅黒い肌はだがあらわになっているのだ。地表より三十度近くも気温が低いだけではない。この凍いてつく強きよう烈れつな風にさらされつづけていて、ロード・グッダーのような魔術士でもないのに、平気でいられるものなのか。

それに、あの男が背中に負っている黒い大刀を見るがいい。

大懺滅刀カタストロフアー。

その刀身を形づくっている七百七十七枚の鱗りん牙がと骨組みは、竜の脳である竜核を守っている竜玉と、竜の鱗うろこの中でもっとも硬かたい逆げき鱗りんに加えて、竜りゆう骨こつや竜の腱けんを材料としているらしい。今は男の身の丈たけよりいくらか短いくらいなのだが、最大で三十三メーテルもの長さになるという大懺滅刀カタストロフアーの刃やいばは、竜すらやすやすとしとめる。神さえ両断しうるともいわれている。明らかに人の手には余る凶きよう悪あくな兵器だ。

サー・ディオロット・マクスペイン。

ロレンツにはわからない。なぜ我らが女王陛下は、あのような魔物を客将として招いたりしたのか。

いや、陛下は誰だれよりも何よりもおやさしい御お方かただ。人じん智ちを越えた深い愛をお持ちになっておられる。だからこそあのような、人にも悪魔にも竜にも、神にすら恐おそれられ忌いみ嫌きらわれている魔物に、情けをおかけになったのだろう。そのこと自体が、陛下の愛の広さと深さとを表しているのだろう。

だがしかし、ロレンツは受け容いれることができない。あれは人ならざる魔物なのだ。鎖くさりに繋つないで猟りよう犬けん代わりにでもすればいい。なぜ陛下は、あの魔物を敬う態度さえ見せ、重く用いようとするのか。

それどころか━僭せん越えつすぎて考えたくもないことだが、あの魔物を前にしたときの陛下は、主君が臣下に対しているというよりも、一人のうぶな女が一人の男を恋こい慕したい、なんとか関心

を引こうと手を尽つくしているかのようではないか。

　ロレンツは首を振ふった。何を愚おろかな。陛下があの魔物を、だと。ありえぬ。おそらく、自らの邪じや心しんがそのように邪推させるのだ。そう──

　ロレンツは女王陛下を崇すう拝はいし、敬愛し、そして思し慕ぼしている。これは決して邪じや恋れんなどではない。聖せい騎き士し、他ほかの文官武官、また、陛下は下々の者たちにも気き兼がねなくお声をおかけになるから、一いつ般ぱんの国民の中にも、陛下に焦こがれている者は決して少なくないだろう。だが、我らが女王陛下〝恵めぐみと慰なぐさめのジヴリール〟は、いかなる思慕や劣れつ情じようにも汚けがされることがない。陛下はどこまでも気高く清らかだ。当然のことながら、その純潔には一点の曇くもりもない。そう信じているのではなく、我々は知っているのだ。

　陛下はタナソア王国の至宝である。

　何なん人ぴとの所有物にもならぬからこそ、陛下は我々の至宝でありつづける。

　本来ならば、あのような汚らわしい魔物には、陛下の足あし許もとに影を落とすことすら許してはならないのだ。

『まだなのかよ……！』

　耳につけているイヤホンから、雑音混じりの声が聞こえてきた。

　ロレンツは振り返って、すぐ後ろの鞍にしがみついている同どう僚りようの聖騎士に一いち瞥べつをくれ、酸素供給マスクの中に仕込んであるマイクロフォンに向かって叫さけんだ。『音をあげるのか、ゲーデ卿きよう……！』

『そうじゃねえよ、ロレンツ！　俺はただ……！』

　聖騎士ゲーデは〝三本槍トライランス〟の一人だが、三人のうちでは最年少だ。身の丈たけ百七十サンチほどしかなく、聖騎士としては圧あつ倒とう的に小こ柄がらではあるものの、人間離ばなれした瞠どう目もくすべき身体能力を有している。

　それもそのはずで、ゲーデは純血の人間ではない。猿えん人じんオラーという異界生物フリークスと人間との混種、亜人デミヌス

だ。

　今は酸素供給マスクに隠かくされているが、ゲーデの異様に大きな口は醜しゅう悪あくきわまりない。一口に亜人デミヌスと言っても様々で、彼のように誰の目にも明らかな非人間的な特とく徴ちようを持つ者は、とくに獣人ブルタスと呼ばれている。蔑べつ称しようだ。ロレンツも亜人デミヌス、とりわけ獣人ブルタスは反へ吐どが出るほど嫌いだが、分け隔へだてしないどころか、哀あわれで醜みにくい連中ほど慈いつくしんでやまぬ女王陛下の手前、表立って彼らを侮ぶ蔑べつするわけにもゆかない。それに、ゲーデのように性能がよく、陛下への忠誠心が高ければ、いざというとき使い捨ての道具くらいにはなる。

　ロレンツは嘲ちよう笑しようにならぬように注意しつつ、笑いながら怒ど鳴なった。『恐ろしいのなら、目をつぶって数でもかぞえていることだ……！』

『冗じよう談だんはよせ……！　この俺がびびるかよ……！』

『無む駄だ口ぐちはそのあたりにしておけ……！』と別の野太い声が割りこんできた。『──逸はやらずとも、そろそろだ……！　我々は女王陛下の貫つらぬく矛ほこにして磐ばん石じやくの盾たてである……！　身も心もただその務めを果たすためだけにあると知れ……！　余分な雑事によってわずかな体力気力さえ浪ろう費ひすることまかりならん……！　しかも、全聖騎士に模も範はんを示すべき〝三本槍トライランス〟が──』

『いや、ヘルメル……！　ていうか、おまえの喋しやべりが一番長えよ……！』ゲーデが獣人ブルタス風ふ情ぜいにしてはもっともなことを言った。

『むむ……！』ヘルメルは唸うなり声にしては大きすぎる声を出した。『たしかに……！　ゲーデ、おぬしの言は正しいやもしれぬ……！　しかし……！　しかしだ……！』

　ヘルメルは女王陛下の信しん頼らい厚い聖騎士だが、所しよ詮せんは獣人ブルタスだ。虎とらと熊くまをかけあわせたようなゾーオックという異界生物フリークスとの混種で、ごつごつした骨格と図ず抜ぬけた体格、鬱うつ蒼そうと茂しげる太くて硬い体毛は、完全に人間の枠わくから外れている。人並みの知能を持っていないわけではないが、ロレンツに言わせれば、どうにも締しまりがない。

タナソア随ずいーいちの大だい胆たん不ふ敵てきな聖騎士と見なされているヘルメルは、剛ごう胆たんなのではなく単に鈍どん感かんなのだ。あまりにも鈍にぶいせいで、怖おじ気づくことすらできない。うすのろだから、サー・ディオロットの危険性を察知することもできず、ただあの男の超人的というより超常的な武勇に感かん銘めいし、無批判な共鳴者シンパと成り果てている。サー・ディオロットにつきまとってうるさがられ、犬コロ呼ばわりされても喜んでいる馬ば鹿かで阿あ呆ほうなゲーデより、さらに質たちが悪い。

ロレンツはヘルメルの声こわ音ねだけ重厚で無駄きわまりない長ちよう広こう舌ぜつに倦うみ、口を挟はさもうとした。声が出なかった。出せなかったのだ。突とつ然ぜんだった。

九く頭ず竜りゆうナ・インの主頭が下を向いた。頭と首だけではない。全身が前ぜん傾けいしたようだ。

ロレンツは歯を食いしばって、両手両りよう脚あしに力をこめた。

降下している。急降下だ。感覚的には落下に等しい。

視線をロード・グッダーに向けた。魔ま導どう王おうの体勢は微み塵じんも変わっていないが、何らかの手段でナ・インに合図をして、高度を下げるように命じたのだろう。それならそうと、皆みなに声をかける程度のことができないのか。その気になれば、音声を使わずとも、自らの意思を伝達するくらいのことは可能なはずだ。やる気がないということだろう。

ロード・グッダーは万ばん事じこの調子だ。常に独断専行で、余人のことなど眼中にないかのように振る舞まっている。まったく信用ならない男だ。手を組むべき相手ではないが、大陸南東部の機械化王国ギアロゴス全域を空くう襲しゆうし、壊かい滅めつさせつつある大だい邪じや竜りゆう兵へい団だんに対たい抗こうするには、九頭竜の力をもってあたるしかない。九頭竜を操あやつることができるのはロード・グッダーのみだ。かといって、全ぜん幅ぷくの信頼を置くことができぬ男に一任するわけにはゆかない。それで、我がタナソア聖騎士団の精せい鋭えいが九頭竜に同乗することになったのだが──これは正直、きつい。

『むううううう……！』『うわわわわ』『た、助け──』『だめだ、もう』『ああああ……！』

同僚たちの悲鳴が耳をつんざき、脳を震ふるわせる。聖騎士ともあろう者が情けない。そうは思うが、ロレンツにも彼らを叱しつ咤たする余よ裕ゆうなどない。

気が遠くなりそうだ。

死ぬ。

これは死ぬ。

間ま違ちがいなく死ぬ、いや——

ロード・グッダーはともかく、あの男を見ろ。

サー・ディオロット。

だいぶ腰を屈かがめているが、やはり二本の足で立っている。根でも張っているのか。魔物め。だが、あの男が立っているのだ。聖せい騎き士しの誇ほこりにかけて、否いな、自分自身の矜きよう恃じにかけて、せめて鞍くらにしがみついているくらいのことができなくてどうする。前を。前を向け。雲。雲だ。積雲。突とつ入にゆうした。

一いつ瞬しゆんで突とつ破ぱする。

その直前に、九頭竜は八枚の翼つばさで思いきり空を二度、三度打った。

止まった。

完全に静止したわけではないが、そう感じた。

『ぐう……！』『のわっ！』『たっ——』『どおぉあっ！』『ぬうううううううううあ……！』

同どう僚りようたちがまた叫さけんだ。ロレンツは耐たえた。

ナ・インはゆっくりと積雲の向こうに降りてゆくつもりだ。

ロード・グッダーは相変わらず動かないが、サー・ディオロットは大懺滅刀カタストロフアーの柄つかに手をかけている。

ロレンツは左手を背中に回して、落らつ下か傘さんをさわった。

この状じよう況きようで、左手を握にぎり棒から離はなすことができた。そのことにロレンツは満足した。大だい丈じよう夫ぶだ。

　やれる。

　九頭竜はとうとう積雲の層を抜ぬけた。

　眼下に広がる地上を蝕むしばんでいるかのようだった。

　羽を生やした黒やら褐かつ色しよくやらの芋いも虫むしのごとき邪じや竜りゆうどもが、高度千メーテルから八百メーテルあたりの一帯を飛び交かっている。

　数百ではきかない。単位が違う。少なくとも数千、それ以上だ。

　大邪竜兵団。

　竜に似た姿をしているが、竜では決してない。邪竜。連中は地じ獄ごくの悪魔だ。

　ちょうどナ・インの真下を飛んでいた数十匹ぴきの邪竜が、頭上を振ふり仰あおいで鳴いた。不ふ愉ゆ快かいな金切り声だ。

「ナ・イン」

　地の裂さけ目から噴ふきあがる湿しめった冷気のような声だった。

　サー・ディオロットはマイクロフォンもイヤホンもつけていない。それなのに、なぜ聞こえたのか。ロレンツにはわからないが、空耳ではなかった。

「俺に近寄るなよ」

　サー・ディオロットはそう言い捨てると、わずか三歩の助走でナ・インの主頭から飛び降りた。一瞬でロレンツの血が沸わきたった。

『ヘルメル卿きよう……！』

　ロレンツは叫びながら腰と腿ももの留め具を外し、鞍に固定してあった突撃重槍ストームランスと斬竜大刀ドラゴンスレイヤー、そ

れから狩竜長銃ドラゴンスナイパーを手にとった。ヘルメルが怒ど号ごうめいた声で総員に命じた。

『総員！　戦せん闘とう態勢に入れ……！　サー・ディオロットにつづくのだ……！』

『行くぞおらぁっ……！』

　早くもゲーデが突撃重槍ストームランスと狩竜砲ドラゴンカノンを抱かかえて大空へと身を投げた。馬鹿が。まだヘルメルが号令をかけていない。先走りだ。

　ロレンツはいつでも鞍から離れて飛びだすことのできる姿勢で待った。サー・ディオロットはすでに大殲滅刀カタストロフアーで一頭の邪竜を真っ二つにして──今、二頭目をしとめた。ゲーデがぶっ放した狩竜砲ドラゴンカノンの砲ほう弾だんは当たらず、邪竜を散開させただけだった。何をやっている。阿あ呆ほ猿ざるめ。焦じれたわけではない。二頭の邪竜が背後からゲーデを襲おそおうとしている。放ほうっておくわけにもゆくまい。ロレンツは突撃重槍ストームランスと斬竜大刀ドラゴンスレイヤーを腰にくくりつけ、狩竜長銃ドラゴンスナイパーを構えた。タナソア聖騎士団が誇る狙撃スナイプ聖騎士パラデインは、スコープを覗のぞいて息を止めれば自動的に照準があい、人差し指が引き金を引く。一頭の邪竜の──左ひだり眼めだ。撃うち抜いた。邪竜は足あ掻がきながら落下してゆく。ロレンツはレバーを引いて空から薬やつ莢きようを排はい出しゆつしつつ次弾を装そう塡てんし、すぐさま第二射を行って、二頭目のやはり左眼に命中させた。その直後、ヘルメルが叫んだ。
『──総員、降下開始……！　吶とつ喊かんせよ……！』

　ロレンツは鞍をきつく挟はさんでいた両りよう脚あしから力を抜いた。

　身体からだが浮ういて、鞍から離れた。

　ロレンツは鞍を蹴けり、宙に身を躍おどらせた。

　その途と端たん、意識が全方位に拡散した。そんな感覚だった。

　落ちている実感はない。

　ただ回っている。

　回転する。

　無意識のうちに身体が動いて、間もなく姿勢が安定した。とっさにスコープ越ごしに標的をとらえ、息をつめて引き金を引いたが――外した。落下しながらの射しや撃げきは、やはり勝手が違ちがう。訓練どおりにはいかないということだ。予想はしていた。心はわずかにも乱れていない。レバーを引いて、第四射。狙ねらいをつけた邪竜の左眼には当たらなかった。頭頂部だ。邪竜は揺ゆらいだものの、それだけだった。白はく濁だくした眼でこっちを見て、小さく旋せん回かいしつつ上じよう昇しようしてくる。その一頭だけではない。他ほかにも三頭の邪竜がついてくる。

　ロレンツはためらわずに狩竜長銃ドラゴンスナイパーを肩かたのホルスターに固定するなり、腰から突撃重槍ストームランスを抜いた。そのときにはもう、邪竜は至近距きよ離りに迫せまっていた。

　望むところだ。

「貴様ら汚お物ぶつは滅ほろびるが宿命さだめだ……！」

　邪竜が口を開けた。

　オレンジ色の口こう腔こうと淡あわい紫むらさき色いろの舌、ずらりと並んだ黄色い牙きばがはっきりと見えた。

　奥のほうで、青い炎ほのおがちらちらと揺らめいている。

　本物の竜ではないくせに、こいつらは気吹ブレスを吐はく。まともに浴びたら、ひとたまりもない。

　それがどうしたというのだ。

　ロレンツはかまわず邪竜の口の中に突撃重槍ストームランスをぶちこんだ。気吹ブレスになりそこねた熱い息が襲いかかってきたが、たいしたことはない。一気に根元まで突つき入れると、槍やりの先が邪竜の後頭部から飛びだした。竜の頭ず蓋がいの中には竜りゆう核かくを鎧よろう竜玉がある。邪竜は違う。邪竜の脳を守るのは頭蓋だけだ。ロレンツの槍は邪竜の脳をぶち抜いただろう。そうはいっても、こいつらはしぶとい。邪竜はわめきながら槍ごとロレンツの腕うでに嚙かみつこうとした。その前に、ロレンツは槍を手放して、邪竜の腹を蹴りつけた。すぐそばに別の邪竜がいることはわかっていた。ロレンツは斬竜大刀ドラゴンスレイヤーを抜き放

ち、その邪竜の羽を斬きり裂いた。思うように飛べなくなった邪竜は、戦列を離り脱だつするしかない。とはいえ、邪竜はまだいる。いくらでもいる。しかも、この一帯に展開している部隊は、大邪竜兵団の一部にすぎないのだ。

〝鴉大帝グレイト・クロウ〟ギュンツァーが治めるミッドランズ中部の雄国バルテッサも、北部と西部を支配しているキング・グッダーの払暁ドウー千年ンミレ王国ニアムも、大陸西南部の楽園だった我らがタナソア王国も、絶えず地獄軍団に攻せめたてられている。〝東の原野の魔ま導どう王おう〟天テン正セイ具グ象シヨウが統治している大陸北東部の冬トウ亥イや、東部で強固な支配体制を築いているレディ・麟リン霊レイの蔓バン王朝の各所にも、地獄軍団や地獄帝てい王おうと手を結んだ異界生物フリークスの軍が出しゆつ没ぼつしているという。海を隔へだてたアヌーン帝国まで激しい攻こう撃げきを受けているらしい。

　もはやこの地上に安全地帯など存在しないと考えるべきだ。

　戦せん況きようは悪化の一途をたどっている。

　好転の兆きざしはない。

　たとえこの奇き襲しゆうが成功し、大邪竜兵団に打撃を与あたえることができたとしても、ギアロゴスは早晩灰かい燼じんに帰するだろう。〝機関王エンジンタイクン〟マハリク・ゴンドラゴナと、ギアロゴス機械化軍四十七師団を失ったこの国は、すでに死に体なのだ。その運命はおそらく、ギアロゴスだけのものではない。同じように潰ついえる国がこれからも続出するだろう。

「──ッ……！」

　ロレンツは斬竜大刀ドラゴンスレイヤーで邪じや竜りゆうの首を三分の二ほど斬り裂さき、返す刀で左前ぜん肢しを両断した。そうして身体をかすめて落ちてゆく邪竜には脇わき目めもふらず、斬竜大刀ドラゴンスレイヤーを左手に持ちかえて、右手で狩竜長銃ドラゴンスナイパーを肩のホルスターから抜ぬいた。猛もう然ぜんと襲いかかってきた別の邪竜に向けて発はつ砲ぽうするのに、狙いを定める必要はなかった。また一頭の邪竜を撃げき墜ついしてから、ロレンツは素す早ばやく周囲に視線をめぐらせた。

　九く頭ず竜りゆうナ・インが、遠くのほうで邪竜どもを蹴け散ち

らしている。

　ときおり空を焦こがす光は、ロード・グッダーの魔術だろう。

　突撃ストーム聖騎士パラディンヘルメルは、手榴弾グレネードをそこかしこで炸さく裂れつさせつつ、破砕剣クラツシヤーで邪竜を駆く逐ちくしている。阿呆猿ゲーデも、狩竜砲ドラゴンカノンの砲ほう弾だんを有効活用する方法をいくらか学習しつつあるようだ。ただ、陸の上でならどの聖せい騎き士しよりも巧たくみに、効果的に突撃重槍ストームランスを操あやつる強襲アサルト聖騎士パラディンゲーデといえども、空中では勝手が違うらしい。いまいち使えない猿だ。そうはいっても、他の聖騎士たちよりはだいぶいい。

　邪竜に突撃重槍ストームランスを見み舞まおうとしてあっさりかわされ、鉤かぎ爪づめで引き裂かれる聖騎士がいる。

　何もできず、ただ落ちてゆく無能者もいる。

　たぶん、恐きよう怖ふに駆かられたのだろう、早々と落らつ下か傘さんを開いてしまい、なすすべなく邪竜の餌え食じきになる間ま抜ぬけもいる。

　善戦している聖騎士はごく少数、悪戦苦く闘とうしている者がいくらかいて、残りは自ら死の顎あぎとに向かって身投げしているようなものではないか。

　それとは逆に、無ぶ遠えん慮りよに死を撒まき散らしているのはサー・ディオロットだ。あの魔物は、一頭の邪竜にまたがって、大慨滅刀カタストロフアーを縦じゆう横おう無む尽じんに振ふりまわしている。邪竜もべつに敵を乗せて飛びたいわけではなかろうが、サー・ディオロットの両りよう脚あしに首をがっちりと締しめつけられていて、振り落とすこともできないのだ。それにしても、邪竜を無理やり乗騎にしてしまうとは。考えることがめちゃくちゃだ。というより、何も考えていないのだろう。あの男にとっては、王国の行く末すらどうでもいい。戦い、殺すことしか頭にないのだ。

　私は違う。

　聖騎士として、王国を、女王陛下をお守りする。

　それが私の生きる道だ。

　ロレンツは大空に吼ほえ、急接近してきた邪竜めがけて斬竜大刀ドラゴンスレイヤーを振りおろそうとした。

『──ロレェーンツッ……！』

　誰だれかに名を呼ばれた。そんな気がした。ヘルメルか。何だ。暗い。影かげが。上か。

　ロレンツは視線を頭上に投げた。「な──……」

　雲だ。

　先刻ナ・インに乗って突とつ破ぱしてきた雲から、次々と邪竜が飛びだしてくる。

　別働隊。敵の救きゆう援えんか。そのうちの一頭は目と鼻の先に迫せまっていた。

　ロレンツはとっさに斬竜大刀ドラゴンスレイヤーを振りあげて、その一頭を追い払はらった。ほぼ同時に身をよじったが、間に合わなかった。

　先に斬りかかろうとしていた邪竜だ。

　嚙かみつかれたという感じはない。

　一いつ瞬しゆんで食いちぎられて、持っていかれた。

　左脚だ。

　それで重心が狂くるったせいか。ロレンツの身体からだが螺ら旋せん状に回転しはじめた。

　空が。

　回る。

　目が。

　三頭か四頭の邪竜に群がられ、ばらばらになったゲーデの姿を視界の隅すみのほうでとらえた。ヘルメルらしき巨きよ漢かんは、なぜか破砕剣クラッシャーを持っていなかった。そもそも右腕がないのだ。馬ば鹿かどもが。何をやっている。我々は王国の、女王陛下

の、貫つらぬく矛ほこであり磐ばん石じやくの盾たてではないか。こんなところで──こんな空で果てることが許されるとでも思うか。少なくとも、私は──私は許さぬ。

　ロレンツは両腕と右脚を駆く使しして、どうにか姿勢を安定させようとした。

　やがて回転の速度がゆるんだ。

　距きよ離りはわからない。ただ、そう遠くない場所で、ヘルメルが邪竜どもに食われていた。

『──女王陛下万ばん歳ざい……！』

　おそらく手榴弾グレネードを一つ起き爆ばくさせ、それによって手持ちの手榴弾グレネードがすべて誘ゆう爆ばくしたのだろう。自爆だ。邪竜どもを道連れにして爆散したヘルメルの名を叫さけびかけて、ロレンツは歯を固く嚙みあわせた。愚おろかな。自ら死を選ぶとは。愚か者どもめ。

　だが、私は死なぬ。

　ここはまだ、私の死に場所ではない。

　斬竜大刀ドラゴンスレイヤーを捨て、狩竜長銃ドラゴンスナイパーを両手でしっかりと構えてスコープを覗のぞくと、標的に照準が定まった。息を止めて引き金を引いた。外したか。まだだ。レバーを。次弾を装そう塡てんしなければ。くそ。手が動かぬ。指に、力が。目が霞かすむ。おのれ。どうしてだ。

　なぜ、きさまが。

「つかまれ、ロレンツ……！」

　邪竜にまたがったサー・ディオロットが猛速度で近づいてきて、ロレンツに向かって左手をのばした。

　名を呼ばれたことなど、ついぞない。きっと知らぬのだろう。覚える気もないのだろう。そう思っていた。

　それにしても、魔ま物もののくせに、人間のような顔もできるのか。

　いや、きっとそう見えただけだ。

　ロレンツは笑った。

「余計な真ま似ねを……するな……」

　だしぬけに、目の前が真っ暗になった。

　闇やみの向こうに女王陛下がいる。

　遠いな。

　えらく遠い。

　どうにかしてそこまで行きたいが、果たして私はたどりつけるだろうか。

prologue 蘇る女豹

　――夢の中でまで意い気く地じなしなんだ。

　ずっとあの言葉の意味を考えている。

　考えても考えても、答えは一つしか浮うかばない。

　ボクは意気地のなさを責められた。裏返せば、勇気を出せと励はげまされた。そう受けとったとしても、勘かん違ちがいだとなじられる心配はそれほどないように思えてならなくもないような気もしたりしなかったりする。

　勇気を出すということは、つまり――どういうことなのか。やはり、あれか。

　あれなのか。

　進展させてもいいということか。

　むしろ、進展させるべき？　進展を望んでいる？

　それがキミの願望？　希望なのかい？

　だとしたら、ボクは――いったい、どうすれば……？

　まず、進展について考察するべきだ。進展。何をもって進展と呼ぶのか。

　進展とは、進歩発展することだ。進歩させる。発展させる。何を？

　もちろん、二人の関係を。

　関係。

　そもそも、現在の関係とは……？

　友人。

　そういうことになるのだろうか。他ほかに適切な表現は思いつかないので、そうなのだろう。所属するクランだって違うわけだし。所属というか何というか、ボクはこれでも一応、昼飯時ランチタイ

ムの頭領マスターだからネ。いや、一応じゃないヨ？　まぎれもなく完全に頭領マスターサ。一方、キミはＺＯＯの一員。あの腐くされ野菜野や郎ろうが園長マスターを務めているクランＺＯＯ。いや、野菜野郎のことはとりあえずいい。思いだして愉ゆ快かいな気分に浸ひたれる顔じゃないしネ。それどころか、ムカツク。間違いなく超最低ＳＵＣＫだヨ。

　とにかく、友人から、たとえば、たとえば、だよヨ？　こ──

　こ、

　こ……、

　恋こい人びとに──恋人同士になるとする。あくまで仮定にすぎないが、こ、恋人になろうとしたら、どういった手続きを踏ふむべきなのかな？　適切な手順は？　そのあたりをしくじったら、うまくゆくはずのものがこじれて、あれあれあれ……？　──といったような状じよう況きようにならないともかぎらないから、手違いがあってはいけない。キミは繊せん細さいだしネ。

　この乾かわききった汚けがらわしい世界全体を潤うるおし救うほどに心優やさしく、他に類を見ないほど霊れい妙みようにして典てん雅が、ようするにたとえようもなく美しいだけに。それだけにキミは精せい巧こう、精密きわまりない、たぐいまれな神宝級の硝子ガラス細工のごとく儚はかない。ふれようとしたら消えてしまう幻まぼろしのようなものだから、こちらとしても慎しん重ちようにならざるをえないのサ。そういう気き遣づかいは、必要最低限のものとして求められているはずだヨ。そうだろう……？

　ああもう、いっそのこと、誰だれかに相談──なんて、できるはずもない。できたらとっくのとうにやっているヨ？

　できないから、困っているんじゃないか！

　自分自身で考えるしかないから！

　経験が！　経験がないんだヨ！

　ないなんて！　経験が！

　言えないじゃないか、そんなこと！

　口が裂さけたって、言えるはずがない……！

「何かこう━かっこ悪いし、ネ……」

　彼は前まえ髪がみをかきあげて、低い位置で高笑いしている忌いまゝいましい太陽を睨にらみつけた。

　エルデンを吹ふき渡わたる風は、生ぬるいどころか熱風に近い。しかも、ひどく湿しめっている。

　暑さを感じても、彼はほとんど汗あせをかかないが、それが異常だという自覚はある。その彼でも、汗まみれになることはないものの、昼間は手て袋ぶくろを外して、襟えり元もとをはだけているくらいだ。

　まだ夏の盛さかりまでいくらか間があるはずなのに、この猛もう暑しよはおかしい。誰もが口を揃そろえてそう言っているし、彼も同感だ。

　あまりに暑いもので、太陽が出ている間は人出が極きよく端たんに少ない。日が落ちると皆みな、夜行性の虫みたいにねぐらから這はいだしてくる。それでも涼すずしいとは言いがたいから、半死半生の体ていでそのへんをうろついたり、しゃがみこんだりしている者の姿が目につく。地上の炎えん熱ねつもアンダーグラウンドには及およばないので、侵入者クラッカーたちはむしろ、盛んに活動しているらしい。大売れに売れている商品は、かき氷とよく冷やした麦ビ酒アだという。

　異常気象だ。

　いずれ何かとんでもない大災害が襲おそってきて、世界が終わるのではないか。本気か冗じよう談だんか、そんなことを口にしていた男が、その翌日、路上で素す裸はだかになってくたばっていたとか。与よ太た話ばなしだろうが、実話でもおかしくはない。昼飯時ランチタイムにも何人か、熱ねつ疲ひ労ろうや熱射病で死にかけた者がいる。彼は正直、驚おどろいたのだが、人間は暑すぎるだけでも命を落とすことがあるのだ。

　もうだいぶ日が傾かたむいているのに、暑熱がゆるむ気配はない。

　大小新旧様々な集合住宅が所ところ狭せましと建ち並んでいる第

三区は、死し霊りようの街みたいに閑かん散さんとしている。

　足を止めて見上げた頑がん丈じようさだけが取り柄えといった外観の四階建ても、さながら夕ゆう陽ひに溶とかされつつある廃はい屋おくのようだ。

　それにしても、妙だ。

　野の良ら猫ねこが──といっても、この建物の持ち主にして、一階の定食屋で料理の腕うでをふるっているオトミの飼かい猫に近いのだが、いつもはそこかしこでくつろいだり、だらだらと遊んだりしているのに──猫の姿が見あたらない。

　この暑さのせいか。どこか涼しい場所にでも避ひ難なんしているのだろうか。

　彼は三分の二ほど開いていた定食屋の扉とびらをくぐって中に入った。客はいない。以前は一人の老人が常連というより居ついていたが、行方ゆくえをくらました。この建物は昼飯時ランチタイムの連中のたまり場だ。中ちゆう途と半はん端ぱな時間帯ではあるものの、誰かいてもおかしくはない。さりとて、何しろ暑いから、いなくても訝いぶかしむようなことでもない。

　カウンターに若い男が伏ふしている。寝ね息いきが聞こえるので、居い眠ねむりをしているのだろう。いつものことだ。

　黒い髪、浅黒い肌はだで、オークリッド首長国出身らしいカツヲは、経営者兼けん料理人のオトミに叱しかりつけられ、尻しりを叩たたかれないとまともに働かない。とにかく怠たい惰だな従業員だ。

　なぜオトミはこの男を雇やとっているのだろう。尋たずねても、オトミもカツヲも答えを濁にごすだけだが、親類縁えん者じやのたぐいなのに違いない。そうでもなければ、オトミはとうにカツヲを叩きだしているはずだ。

　彼はカツヲの隣となりの席に座った。

　オトミはどこにいるのか。厨ちゆう房ぼうに人の気配はない。かくれんぼをする意味はないから、誰もいないのだろう。外出中か。

　オトミはたいてい、カツヲに店番をさせて外に出るよりは、カツ

ヲに用を言いつけて店にいることを選ぶ。めずらしいこともあるものだ。

　カツヲはカウンターに唾だ液えきの湖を広げて眠っている。

　そういえば、この男は何歳なのだろう。初めてこの店であってから、もうずいぶん経たつ。当然、時が過ぎたぶん、年をとっているはずだ。たしかに変わったようにも思えるが、印象はあのころと大差ない。

　彼はなにげなくカウンターを人差し指で叩きながら、店の中を見まわした。

　なんだかくたびれている。というよりも、薄うす汚ぎたない。新しい店ではないが、こんなに古びていただろうか。

　彼がn'ebulaを訪おとずれたのは四日ぶりだ。前にきたときはこんなふうには感じなかった。たかが数日で何が変わったというのか。

　彼はカウンターの端はしのほうに人差し指を這わせた。

　べたつく。

　掃そう除じが行き届いていない。

「……んにゃ」カツヲがおかしな声をもらして、ぼんやりと薄うす目めを開けた。

　彼は人差し指と親指をこすりあわせた。「やあ」

「うお……」カツヲは身体からだを起こして、よだれにまみれている口の周りを手でぬぐった。「ああ……何だ。きてたんすか。言ってくれれば」



　彼はわずかに肩かたをすくめた。「気持ちよさそうに寝ねていたものだからネ」

「いやあ……」カツヲはエプロンでカウンターをふいた。「そうでもないっすけど。寝るならやっぱ、ベッドとかじゃないと。最低、ソファーじゃないと」

「そうかい」

　なんだか力が抜ぬけて、苦笑いするのも億おっ劫くうだ。カツヲは皮肉が通用するような相手ではない。かといって、真ま面じ目めに話をしても受け流されそうだ。だいたい、オトミならともかく、カツヲと喋しやべるようなことなんて思いつかない。

「オトミさんはどうしたの」

「へ？」カツヲは焦しよう点てんのあわない目で彼を見つめた。「何がっすか？」

「だから、オトミさんがいないようだけど──」

「はあ。いないっすね」

「うん。いないネ。それで訊きいてるんだけどサ」

「いやだから、いないっすよ」

「いない？」

「だって、いないじゃないっすか。ほら。いないでしょ。見たとおりっすよ」カツヲはあくびをしながら笑った。「ちょっと野暮用で。みたいに言っとけって、本人に言われたんすけどね。あれ。聞いてないんすか」

「聞いてない……ネ」

「そーなんすか。大将さんには言って出たんじゃねーのとか、勝手に思ってましたよ。根こん拠きよとかねえけど、なんとなく」

　カツヲに「大将さん」と呼ばれるたびに、小こ馬ば鹿かにされているような気がしてならないのだが、そんなことよりも──

「どこに行ったんだい？」

「さあ」

「いつから？」

「えーと……出たのはおとといっすかね」

「泊とまりがけなんだ」

「ですね」

「帰ってくるのは？」

「あぁー……」カツヲは顔をしかめて頭を掻かいた。「どうなんすかねぇ。そのへんは、予定は未定っつーか。あんまり決まってないっぽいっすけど。まあ、そのうち帰ってくるんじゃないっすか」

「旅行かい」

「そんな感じかも」

「長くかかりそうなの？」

「明日とかあさって帰ってくるってことは、たぶんないんじゃないっすか」

　彼は目を細めてカツヲの瞳ひとみを見すえた。望まぬ二つ名だが、虐殺人形カーネイジドールと呼ばれることもある彼の眼まな差ざしを、だが、カツヲは正面から受け止めて平然としている。この若い男に得体の知れなさを感じるのはこういうときだ。ただの無ぶ精しような若者ではない。意外と腹の据すわったところがある。そもそも、本当に若者と言える年ねん齢れいなのか。

　いずれにしても、カツヲはオトミの行く先について、ただ訊くだけでは打ち明けないだろう。脅おどせば白状するかもしれないが、そこまでする理由はない。何か事情があるということだ。

　彼は目を伏ふせて一つ息をついた。「──オトミさんが帰ってくるまで、キミが一人で店を切り盛りするわけか」

「そっすね」

「大変だ」

「ええ」カツヲは力なく身体を揺ゆすりながら、へらへら笑った。「あの人が帰ってくるまで、この店が潰つぶれなきゃいいんすけど」

見渡すかぎりの深い、深い密林を、空気というより透とう明めいな水蒸気が満たしている。

夏季のラフレシア-オークリッド国境地帯は、この環かん境きよう、気候に慣れない者にとっては死地だ。それは大おお袈げ裟さな表現でも何でもない。この地の高温と多た湿しつは人間たちを大いに苦しめ、弱らせる。不意打ちのように降る強きよう烈れつな驟雨スコールは、天の恵めぐみというよりも試練だ。集団が密集して行動するのは不可能に近く、散開すればいつの間にか離はなればなれになってしまう。蚊かなどが媒ばい介かいする感かん染せん症しようにでもかかれば、発ほつ作さ的な発熱を繰くり返したあげく、命を落とすことも少なくない。病死は多くの場合、蘇そ生せい式しきでも救えない死に方だ。蘇よみがえらせることができても瀕ひん死しの状態で、結局、ふたたび死ぬことになる。

国境地帯の密林──ヨナ樹海は天然の要害だ。文明国であるラフレシア第三帝てい国こくの兵士たちにとっては、天然の罠わなと言ってもいいくらいだろう。

それでもラフレシア第三帝国軍は、過去、何度となくこの樹海に侵しん攻こうした。しばしば一時的に一定地域を勢力下に置いて、砦とりでを築いたこともあったが、これを橋きよう頭とう堡ほにしてオークリッド領を削けずりとる前に、持続的な遊ゆう撃げき戦法による反撃に耐たえきれず、撤てつ退たいの憂うき目に遭あった。とりわけ、ここ七十年ほどの間、ラフレシア第三帝国軍が国境地帯で目覚ましい戦果をあげた事例は、片手で数えられるほどしかない。

オークリッド軍がシノビと呼ばれる特とく殊しゆ遊撃部隊を創設し、密林における防衛戦術を確立させてから、ラフレシア第三帝国軍は苦戦を強しいられつづけてきた。

それにもかかわらず、帝国は侵しん略りやくの意志を決して捨てず、休戦期間のあとには必ず国境を侵しん犯ぱんした。

ラフレシアは大国だ。

オークリッドも小国とは言えないが、ラフレシアとは比べるべくもない。国力には差がある。それに、オークリッドは五十七部族に

よる連合国家だ。有力な部族には一定の自治が認められていて、国主である首長の権限は決して大きくない。挙国一いつ致ちにはほど遠く、各部族は派は閥ばつ争いに明け暮れている。常に内ない紛ふんの可能性を孕はらんでいる不安定な国だ。

　帝国は遠大な長期戦を挑いどんでいるのだろう。倦うむことなく攻せめつづければ、いつかはオークリッドの側に綻ほころびが生じる。そのときにこそ大兵力を国境地帯に投入して、一いつ気き呵か成せいにヨナ樹海を突とつ破ぱする腹積もりなのだろう。

　独自の主義ドクトリンを掲かかげているラフレシア第三帝国が、世界制せい覇はの野望を隠かくしたことは一度もない。それでいて、戦せん況きようが膠こう着ちやく状態に陥おちいれば、ためらわずに和平の提案を持ちかける。他国と同盟を結ぶこともある。矛む盾じゆんしているようだが、ラフレシア帝家は十年、二十年で宿願を達成しようとは考えてないのだろう。百年、数百年、ひょっとしたらそれ以上の長い時間をかけて、世界統一を果たそうとしているのだ。

　帝国は焦あせらない。逸はやることなく、それでいて虎こ視し眈たん々たんと好機をうかがっている。たとえ代だい替がわりしても、帝国の戦略に変化はない。今まではそうだった。

「変わった、ということだねえ……」

　オトミは首にかけている手ぬぐいで顔と首筋の汗あせをふいた。年のせいか、暑さはさして感じないが、汗は大量に出る。こまめに水を飲んで塩を舐なめるようにしなければ、ただでさえもう長くない寿じゆ命みようが、早晩尽つきてしまうだろう。

　現役のころは、二日でも三日でも立っていられたが、さすがに今は無理だ。立派なアダの木の根元に小さな脚きや立たつのような椅い子すを置いて腰こしかけ、いつでも立ちあがれるようにしている。

「姫ひめ様」と後ろから声をかけられた。

　振ふり向くと、左ひだり頬ほおに刺青いれずみを入れているネリ族の若造だった。現在の族長マツトの甥おいだというが、七十年近く前に部族を捨てたオトミにしてみれば、実じつ兄けいの孫とはいえ、五十いくつのマツトも見知らぬ他人だ。その甥おい御ごで三十

かそこらの青二才となったら、近所の洟はな垂たれ小こ僧ぞうと大差ない。

「何だい」

「トク族の部隊から救きゆう援えんの要よう請せいがきておりますが――」

「ボケ」オトミは手ぬぐいを振って、若造の顔面を叩はたいた。「あんた、シノビの掟おきてを習わなかったのかい」

「いえ……」若造は頬をゆがめてうつむいた。「もちろん、姫様が打ち立てられたシノビの教則は、一言一句記き憶おくしております。戦力を集中させてはならない。拠きよ点てんを設けず、薄うすく広く部隊を展開させ、散発的に奇き襲しゆうと移動を繰くり返すことで、敵軍を混乱させ、疲ひ弊へいさせる。それが我々シノビの戦い方です」

「わかってるんだったら、なぜじっとしてないんだ」

「しかし、こたびの敵は……」若造は口ごもって、唇くちびるをへの字に曲げた。

　族長マツトの反対を押し切り、自らエルデンを訪おとずれてオトミに協力を求めたのは、この若造だ。おそらく、派は閥ばつの中での立ち回りと、部族の存続しか頭にない典型的な族長のマツトよりは、いくらか有能なのだろう。

　若造は独自の情報源を持っていて、ラフレシアの変化を敏びん感かんに察知していた。これまでの体制では、間近に迫せまっている次の侵攻をしのぎきることはできない。そう考えて、若造は若造なりに八方手を尽くした。その中に、オトミのシノビ復帰という離はなれ業わざもふくまれていた。おもしろいと思い、オトミは乗った。成算云うん々ぬんよりも、帰国したらどうなるか、死ぬ前にこの目で確かめてみたい。そんな気持ちが強かった。

　オトミは祖国を捨てたつもりだ。国はオトミを追い払はらったつもりでいる。

　もともとオトミを陥おとしいれたのは、当時のオークリッド首長ネツマだ。

ネツマは勝ち目の薄い、必要性のない前進作戦の指揮をオトミに命じたうえ、手の者を使ってラフレシア側に情報を流した。形勢は芳かんばしくないどころか不利で、首長の息がかかった前線指揮官が勝手に後退しはじめ、戦線を維い持じできなくなった。オトミが直接率いていた部隊は孤こ立りつした。部下を撤退させるために奮戦して踏ふみとどまったが、オトミ自身はラフレシア軍に捕とらえられた。

シノビの創設者で、〝戦場の女め豹ひよう〟の異名をとっていた女将軍は、首長やその後こう継けい者しやが脅きよう威いを感じるほど支持者が多かったから、当然、捕ほ虜りよ交こう換かんの交こう渉しようが行われるはずだった。帝国はそのつもりでいたのだが、オークリッドの動きは鈍にぶかった。当然といえば当然だ。首長ネツマはオトミが戦死してくれることを願っていた。オトミにそのつもりは毛頭なかったから、部下をあらかた逃にがし終えると、両手をあげて敵軍に投降した。首長の目もく論ろ見みを知っていて、嫌いやがらせをしたのだ。

交渉はついに行われなかった。

オトミは子飼いの部下たちの手によって救出された。

その後は反政府組織や革命勢力に荷か担たんして世界中を転戦したが、祖国の土だけは一度も踏まなかった。

「……いやだねえ」

呟つぶやくと、若造がおっかなびっくりという感じで首を傾かしげた。「は……？」

「なんでもないよ。こっちの話さ」

最近のことはすぐに忘れてしまうのに、昔の出来事はありありと思いだせる。気がつけば、時を忘れて思い出と戯たわむれている。

オトミが自分の思いを率そつ直ちよくに打ち明けた相手は、生しよう涯がいでたった一人しかいない。真夏の暗黒大陸で出会い、同じ戦場に立っているうちに恋こいに落ち、それからは先立たれるまで片時も離はなれなかった連れあいだけだ。

オトミは祖国を愛していた。だからこそ、この森よりも深く憎ぞう悪おした。

自分を裏切ったのはこの国ではない。当時の首長一派だ。わかってはいても、憎にくしみの炎ほのおを消すことができなかった。

稀き代だいの軍略家で、戦場の猛もう将しようでもあったとはいえ、オトミは一部族の族長の娘むすめでしかなかった。それにもかかわらず、首長一派はオトミを恐おそれた。オトミの父、ネリ族の族長フナツが、反体制派を糾きゆう合ごうしうる立場にあったトク族の族長イツナと昵じつ懇こんだったからだ。

かといって、オトミがイツナと意を通じていたわけではない。そもそも、オトミは父とそりがあわず、顔をあわせるたびに言い争いになった。口くち喧げん嘩かでは終わらずに、殴なぐりあいどころか斬きりあいを演じたこともある。父とイツナが親しかろうと、オトミには関かかわりのないことだった。それでも、オトミの存在が反体制派の旗印に、さらには実際的な力になる可能性がある以上、首長一派はこれを放置できなかったのだ。首長個人の資質はさしたる問題ではない。長い歴史を積み重ねて、オークリッドはそのような国になってしまった。

虫むし酸ずが走る。だが、変えようとすれば、政治に身を投じねばならない。

オトミがその気になれば、首長一派を排はい除じよして、新しい首長を立てることもできただろう。時間をかけ、権けん謀ぼう術じゆつ数すうをめぐらして、辛しん気きくさい権力闘とう争そうの果てに、勝利を収める。そうするだけの堪こらえ性しようは、あのころのオトミにはなかった。まだ若かったのだ。若すぎた。やるとしたら、武力で一いつ瞬しゆんのうちに片をつけるしかない。ぐずぐずしていたら、ラフレシアに付け入る隙すきを与あたえることになりかねないからだ。計画を立てもした。それなりに勝算もあったが、結局、実行に移すことはなかった。

自分は一種の異常者だ。オトミはそう思っていた。

八歳のとき、勝手に父のあとを追って戦場に迷いこんで以来、戦争が好きで好きでたまらない。最初は身を守るために人を殺し、次の相手は敵と見て、明確な殺意を持って殺した。人を殺して胸が痛んだことなど一度もない。味方が死んでも、その損害がどの程度のものかという観点でとらえていた。自分はただの戦争馬ば鹿かだ。政治はできない。

逃げたのだと思う。

連れあいにはそう話した。

いつか戻もどりたい。死ぬ前に、祖国を目に焼きつけておきたい。そのとき、隣となりに連れあいがいればよかった。だが、愛した男は、オトミが戦場から身を退ひき、エルデンの片かた隅すみに店を構えて、十年もしないうちに逝いった。

連れあいを亡なくして、祖国への思いも萎しぼんだ。あるいは、自分は定食屋のババアとして、エルデンで静かに死ぬのかもしれない。それならそれでいい。

連れあいはオトミの手を握にぎってただ一言、「いい人生だった」と言って微笑ほほえみ、目をつぶって旅立ったが、きっとやり残したことの一つや二つはあっただろう。何かあったとしても、これでいいと納なつ得とくできれば、たしかにいい人生だ。愛する男にめぐりあうことができたのだから、オトミも自分の人生に悔くいはない。

きっかけがなければ、そのまま死ぬつもりだった。

おまけのつもりで祖国にやってきて、老いて濁にごった血をたぎらせる羽目になるとは、想像もしていなかった。

本当にそうだろうか。

オトミは瑠る璃り色のかんざしをさわった。連れあいは空の上からオトミを見下ろして、何と言っているだろう。呆あきれながらも、やりたいようにやれと笑ってくれているに決まっている。老いさらばえても、くたばる寸前まで自分は自分だ。

オトミは立ちあがって、アダの木を見上げた。幹から幹へと縦じゅう横おう無む尽じんに縄なわが渡わたしてあり、滑かつ車しやにぶら下がって移動できるようになっている。シノビは特別な目的がないかぎり拠きよ点てんを作らないが、地上や樹上に簡易陣じん地ちを設営することはよくある。その場所、設営方法。落とし穴や大おお鋏ばさみ、飛び矢等々の罠わなの仕し掛かけ方と、その目印。迷めい彩さい戦せん闘とう服ふく、ダンビラと呼ばれる幅はば広びろで頑がん丈じような万ばん能のう刀、短刀、短たん弓きゆう、吹ふき矢や筒づつ、各種矢、携けい帯たい袋ぶくろ。こうしたシノビ

の装備一式にしてもそうだ。武具は新式のものが用いられているが、オトミが〝戦場の女め豹ひよう〟としてシノビの部隊を率いていたころから、基本的にはさして変わっていない。

「ヤナギ」

　オトミに名を呼ばれると、若造は弾はじかれたように背筋をのばした。「はい」

　ネリ族には、オトミの支持者というよりも崇すう拝はい者しやが大勢いた。選えり好みが激しい傭よう兵へいとなったオトミに付き従った者もいるが、部族に残った者もいる。かつての戦友はもう一人も生きていまいが、〝女豹〟の名は伝説と化して、信しん仰こうは消えなかった。ヤナギはそれを受け継ついでいる。オトミを過大評価し、崇あがめてさえいるのだ。

「今のシノビの総そう代だいはモロ族のナダイだ。ヤナギ、あんたは四人いる大おお頭がしらの一人でしかない」

「そのとおりです、姫ひめ様」

「……その姫様ってのはおよし。ババアを姫様呼ばわりするのは、かえって嫌いやみだよ」

「そ、そんなつもりは、決して！　ですが、何とお呼びすれば……」

「ババアでもいいんだが、そうもいかないか。オトミでいいかね」

「では、オトミさま、と」

「……まあ、いいさ」オトミはため息をついて、手ぬぐいで汗あせをふいた。「ともかく、大頭のあんたには、担当地域における指揮権しかない。上意下達はシノビの掟おきてだ。大頭はあくまで総代の手足でしかない」

「むろん、心得ております」

「ナダイはババアがここにいることに気づいてないね」

「はい。知れば、総代は難なん癖くせをつけて、私を解任するやもしれません」

「よりにもよって、モロ族だからねえ……」

　ネリ族とモロ族は伝統的に犬けん猿えんの仲だ。モロ族の男が総代であるのに、ネリ族のヤナギが大頭の一角を占しめている。本来ならばありえない話だ。それほどヤナギは名望を集めているのだろうが、隙を見せたら刺さされる。ナダイはその機会を狙ねらっているはずだ。くだらなくて、こみあげてくる笑いは反へ吐どの味がする。オークリッドはそういう国だ。

　オトミは肩かたを回した。どれだけやれるか。いつの間にやらそう考えるようになっていて、現げん役えきを退くことにした。退いて、進みたい道があったからだ。連れあいと水入らずで、ゆっくりしたかった。

「刺される前に、刺すかい」

「……は？」ヤナギは驚おどろいたように眉まゆを上げたが、同時に少し腰こしを落として、両手を握りしめていた。

　察しのいい男だ。これなら使いようがあるかもしれない。

　オトミは目を細めて耳を澄すまし、アダの木き肌はだを叩たたいた。「──まだ間がありそうだからね。いい機会だ。一つあんたに訊きいておきたい」

「何なりと」

「シノビは子を産めなかったこのババアの子供みたいなものさ。しばらく面めん倒どうを見てやりたかったけど、いろいろあってそうもいかなかったから、里子に出した。ところが、どうだい。しばらくぶりに会った息子むすこが、てんで成長してやしないじゃないか。いったいどういうわけなんだい」

「それは……」ヤナギは傷きず跡あとのある左頬をこわばらせて顎あごを引いた。「負けなかったからです。我々は致ち命めい的な敗北を経験せず、今日までやってこられた。それだけオトミさまが築きあげられたシノビの理念と組織、戦術がすぐれていたからですが……」

「しかしね。負けることは許されないんだよ。このヨナ樹海で敵を食い止められなきゃ、国が滅ほろんじまう」

「むろんです」

「勝利は必要ない。負けないために、シノビは変わりつづけなきゃならなかったのさ。いいかい、ヤナギ。時が移っても人間はさして変わらないけどね。時代が変われば、技術は進歩する。便利な道具が増えて、人を殺すのだって簡単になる」

「そうはおっしゃいましても、技術を運用し、道具を扱あつかうのは、あくまで人間です」

「たしかに、ババアがシノビの教則本にそう書いたんだけどね」オトミが苦く笑しようしてみせると、ヤナギは目を伏ふせた。

「でも、覚えときな、ヤナギ」オトミはゆっくりと膝ひざを屈くつ伸しんさせた。「──だからこそ、なかなか変われない人間も、変わっていかなきゃならないんだよ」

　ヤナギは無言でうなずいて、オトミを見つめた。

　過か剰じように意気込んでいるわけでも、萎なえているわけでもない。ただ、すでに覚かく悟ごは決めている。そういう目だ。悪くない。

　妙みように正直なところがあったり、オトミに対して無む警けい戒かいすぎたり、脆もろさも感じさせるが、頭の回転は速いようだ。

　ひょっとしたら、ヤナギは最初からそのつもりだったのではないか。

　だとしたら、仕込み甲が斐いのある男ということになる。

「シノビを掌しよう握あくするよ、ヤナギ」

「はい。では──」

「ああ。まずはトク族の部隊を救きゆう援えんして、こっちにとりこんじまおう」

「ただちに準備します」駆かけだしたヤナギの後ろ姿を目で追っていたはずなのに、いつしかオトミの感覚はどこか別の場所に焦しよう点てんをあわせていた。

かつて〝女豹〟と呼ばれた百ひやく戦せん錬れん磨まの傭よう兵へいも老いた。もはや棺かん桶おけに片足を突つっこんでいる。それにしては、すっかり錆さびついてはいても、完全に失ってはいなかったということか。

往時のオトミは、広い戦場をおおまかに把は握あくして、感じることができた。その感じ方を言葉で説明するのは難しい。とにかくわかるのだ。これを、オトミや連れあい、それから仲間たちは、戦いくさ勘かん、と呼んでいた。

「待ちな！」オトミはヤナギを呼び止めて、戦勘が示すほうへと目をやった。

八時の方向。方角でいえば、西南西といったところだ。かなり遠いが、この音は間ま違ちがいない。木々の間に渡わたしてある綱つなを伝って、滑かつ車しやがこっちに近づいてこようとしている。伝でん兵ぺいだろう。その向こうだ。この胸がくっと狭せまくなるような感じ。敵だ。敵がくる。

「……トク族の部隊が展開してるほうじゃないね。イナ族か、スミ族の部隊か。突とつ破ぱされちまったのか。情けない」

「迎げい撃げきの用意を進めます……！」ふたたび駆けだしたヤナギを、老いた〝女豹〟はもう見ていなかった。伝兵だ。

滑車にぶら下がって近くのアダの木に到とう達たつした伝兵が、地上に降りてきた。

「何があった！」オトミが怒ど鳴なると、ヤナギを追おうとしていたのだろう伝兵が、息せき切って駆けよってきた。

「──はっ！　大頭キクオさまから、大頭ヤナギさまに伝令ですので……」

四人の大頭はヨナ樹海の北、北西、南西、南をそれぞれ受け持っている。キクオは南の部隊を統とう括かつしている大頭だ。

オトミは伝兵の頰に手ぬぐいをお見み舞まいした。「いいから話しな！」

「は、はい……！　敵は新兵器をもって我が軍を駆く逐ちくしつつあり！　総代にご判断を仰あおぐ旨むね、ご注進なされたし！　な

お、総代、大頭カズサさま、大頭ヨフネさまには、それぞれ伝兵が向かっております！」

「新兵器……」オトミは耳を澄ました。

　この音は何だろう。魔ま術じゆつ。炎えん霊れいか何かを使し役えきする要素魔術で、似たような音を聞いた覚えがある。爆ばく発はつ。あれよりは、だが、軽い音だ。距きよ離りのせいか。ただ、音は多数だ。連続して鳴りつづけている。

　ヤナギが駆け戻もどってきた。「キクオどのはご無事か！」

「はっ！　キクオさまは直属の部隊を率いて、現在──」

「どんな兵器なんだ！」オトミは伝兵に詰つめよって、胸むなぐらをつかんだ。「あんたは直接、見たのかい!?」

「と、飛び道具です！　恐おそろしい音がして、何か小さなものが飛んでくる──それから、馬に引かれなくても走る戦車が……」

「飛び道具……戦車……？」オトミは伝兵を突き飛ばして走りだした。

　ヤナギがついてくる。「──オトミさま！　いずこへ行かれるのですか！」

「ラフレシアの新兵器とやらを、この目で確かめる！　今このときにそうしておく必要があるって、ババアの勘が言ってるんだよ！」

「それでは、私もごーいつ緒しよします！」

「おたんこなす！　あんたは大頭だろうが！」

「でしたら、どうか供の者をお連れください！」

「いらないよ、お供なんざ！　ババアだからって馬ば鹿かにするんじゃないよ！」

　背後でヤナギが何か叫さけんだ。五人、いや、六人の兵士がオトミを追いかけてきて、すぐに並んだ。若かりしころは、大の男にもめったに負けない脚きやく力りよくを誇ほこっていたが、今となっては走っているだけで年寄りの冷や水にしか見えないだろう。実

際、体力というより、命が限られている。無む駄だな力を使うべきではない。わかってはいても、気が急せいてしょうがない。

　オトミはようやく足をゆるめ、身体からだの動きを最小限に抑おさえて、早足くらいの速度で樹海を進んだ。

　兵士たちは一言も喋しやべらない。息をする音すらひそめ、黙だまってオトミの両りよう脇わきと背後を固めている。よく鍛きたえられているようだし、無む駄だ口ぐちを叩たたかない、いい兵だ。

　あの音はどんどん近づいてくる。目ではまだ何も確かく認にんできない。ヨナ樹海はシノビの指導のもと、定期的に間かん伐ばつしている。そうすることで、地表まで日光が届き、低木や下草、蔓つるなどが生おい茂しげって、人が歩きづらい半はん障しよう壁へきと化す。この半障壁によって敵の行動を制限するのも、シノビの基本戦術の一つだが、今はわずらわしい。

　新兵器。

　飛び道具。

　自走戦車。

　ラフレシアの新しん皇こう帝ていオクタヴィアンは、継承大典レサクセシオンで兄クリストフを殺して帝てい位いに就ついた。高名な魔術士を召めし抱かかえているとか、ルイ・アシュモダイ・アデモンディオとかいうあやしげな人物を、皇帝にかわって全軍を統とう帥すいする大権を持つアデナ大元帥に任命したとか、妙みような噂うわさばかり聞こえてくる。

　もともと帝国は底知れない敵だったが、今は輪をかけて不気味だ。

　オトミがアダの木に身を寄せ、手を振ふって合図すると、兵士たちは無言で散開した。

　もうだいぶ近い。この半障壁の先は戦せん闘とう区域だろう。

　オトミは腰こしのダンビラに手をかけ、低い姿勢で慎しん重ちようにに前進した。しかし、なんてやかましい音だ。人間の怒ど鳴なり声も聞こえるが、新兵器とやらが発しているらしい音に、ほとんどかき消されてしまっている。こんな戦場は経験したことがない。時

代が変わった。果たして、その一言で片付けられるのか。

　右往左往しているオークリッドの兵たちの姿が、木々の合間に見える。シノビは決してまっすぐ後退しない。その鉄則に従っているのか。もしくは、恐きよう慌こうに陥おちいって、でたらめに逃にげているのか。どちらともとれない。

　少し耳が慣れてきたが、やはりひどい音だ。〝女豹〟ともあろう者が、足がすくみそうになる。伝兵は飛び道具と言っていたが、矢ではないのだろう。前方に煙けむりがたちこめている。火災か。森を焼いている？　だが、火は見えない。煙の中でチカチカとまたたいている無数の光は何だろう。

　五十メーテルほど離はなれた場所で、一人のオークリッド兵が「あっ」と声をあげて倒たおれた。新兵器か。

　敵軍は煙えん幕まくの中にいるようだ。距離は二百メーテル以上。三百メーテルまではいかないか。

　この密林では、弓矢や弩いしゆみだと、数十メーテルの距離でも使い物にならないことがある。数百メーテルの有効射程を持つ飛び道具とは何なのか。極ごく小しようの矢か金属の球か何かを、超ちよう高速で長距離直進させ、目標を殺傷する。想像しうるのはそこまでだ。

　オトミはざっとお供の兵士たちを見まわした。全員、表情が硬かたい。いやしくもシノビだ。怯おびえているとは思いたくないが、衝しよう撃げきを受けていることは間ま違ちがいない。

「もっと接近するよ。もしババアがくたばったら、ただちに退ひきな。そして、その目で見たことをすべて、ヤナギに報告するんだ。いいね」

　これは命令だ。返事はいらない。オトミはアダの木々を盾たてにしつつ、さらに前へ、前へと進んだ。

　煙幕の中から何かが飛んでくる。それが何かはわからない。速度が速すぎて、軌き道どうが直線としてとらえられるだけだ。

　一度、手をかけたアダの木が音を立てて震ふるえたので、前面のほうを見てみたら、小さな穴が穿うがたれていた。危険を感じたので顔を引っこめると、また木に何かが当たった。この衝撃。たいし

た威い力りよくだ。

オトミは手をあげて停止の合図を出し、地面に片かた膝ひざをついた。

この地域に展開していたシノビは、あらかた逃げ散ったようだ。

音が散発的になってきた。

やみつつある。

顔を半分だけ出して前方を見やると、煙がだいぶ薄うすらいでいた。もうかなり近い。五十メーテルないだろう。間もなく四十メーテルだ。

敵兵が見えた。

何か筒つつ状じようのものを両りよう腕うでで抱えるようにして持ち、その先せん端たんを前方に向けている。あれが新兵器か。

おそらく、新兵器による射しや撃げきが収まったせいで、耳に届くようになったのだろう。

地じ響ひびきのような音が聞こえる。

横隊をなしている敵兵の向こうだ。何か巨きよ大だいな物体の影かげが見える。

「戦車……」オトミは低く呟つぶやいた。

馬に引かれなくても走る戦車。伝兵がそう言っていた。

戦場で馬車を用いることも、ないではない。オトミも現げん役えき時代、顚テン聖セイ虞グで十二頭立ての鉄戦車を見たことがある。ただ、多頭立ての小回りがきかない戦車を使うくらいなら、騎き兵へいを運用したほうがいい。遥はるか昔には一頭立ての戦車が使われていたこともあったというが、乗馬にならない小こ柄がらな馬しかいなかったのだろう。攻こう城じよう兵器以外の戦車は実用的ではない。オトミはそう考えていた。しかし、馬に引かせなくても自走する戦車となると、話は違ってくる。

巨大だと感じたが、さほどでもないようだ。車しや幅はばはせい

ぜい三メーテルほどで、車高は二メーテル以下。車長はわからない。大きな車輪を備えている。何かに引かれているわけでも、押されているわけでもなさそうだから、その車輪が回ることで前進しているらしい。車輪を回転させる仕し掛かけが車内にあるのか。この重低音は、その仕掛けの作動音なのかもしれない。後部から黒こく煙えんを吐はきだしながら、徒歩より少し速いくらいの速度で進んでいる。

　戦車は金属製か、少なくとも装そう甲こうされていて、まるで移動式の小型要よう塞さいといった趣おもむきだ。

　上部から突つきだしている太い筒は何だろう。敵兵が持っている新兵器の大型版か。

　その筒の脇わきに、男が一人、立っている。

　オトミは胸をきつく押さえて歯を食いしばり、鼻だけでゆっくり呼吸をした。

　男は顔の上半分を覆おおうゴーグルをかけている。頭頂部に一ひと房ふさ、それから耳から耳を繫つなぐようにして残っている頭とう髪はつは、すべて真っ白だ。身にまとうは白と黒の小こ袖そでで、襟えりをはだけさせ、右腕を突っこんでいる。左手は袂たもとの中だ。

「……あのクソジジイ」

　ある日、ふらりと店に現れて、以来、常連というより居つくようになった。たまに見かけなくなっても、猫ねこのようにそのうち帰ってきた。

　男はＢ□Ｂと名乗った。何者なのか。察しはついていたが、あえて訊きかなかった。酒を酌くみ交かわして、昔話をすることはあった。どちらも肝かん心じんな部分にはふれず、曖あい昧まいで、わかるようなわからないような話をした。

　なぜ去るのか。どこへ行くのか。尋たずねることもできたが、しなかった。お互たがい人並み以上に生きた。もう二度と会うことはあるまい。そう思っていた。ついこの前までは。

　噂うわさは耳にしていた。

血に汚けがされたラフレシア第三帝てい国こくの継承大典レサクセシオンで、一人の老人が、皇帝位を継けい承しようするはずだったクリストフの近ガ衛ル団デを、素手で撫で斬りにした。

それはまさしく、剣けん聖せい直系正統派剣けん闘とう術じゆつ奥おう義ぎ〝無む太だ刀ち〟。

老人は〝一介のジ・オー老人ルドマン〟を名乗っているというが、そんな離れ業わざを演じられる人間がそうそういるわけもない。伝聞が事実なら、〝一介のジ・オー老人ルドマン〟の正体は、三十数年前に小説『胸むな騒さわぎのキス』を発表したのち、隠いん遁とん生活に入ったとされている人物だろう。

新皇帝オクタヴィアンの幕下に、剣聖ヴァン・ヴラドＸＬ〝モータルレッド〟の弟で子し、バーニング・バラッドがいるらしい。

あの男が牙きばも爪つめも失った鷹たかだとは、オトミも考えていなかった。

「……しかし、こんなふうに再会することになるとはねえ」

戦車の上で虚こ空くうを睨にらんで微び動どうだにしない男を見つめながら、オトミは神経の高ぶりを抑おさえきれずにいた。

バーニング・バラッドが相手となれば、接近戦を挑いどんだところで万に一つの勝ち目もない。それに、あの戦車。敵兵が持っている新兵器。さて、どうする。何も浮うかばないが、負けるとは微み塵じんも思わない。

オトミは知っていた。真の勝利とは生き抜ぬくことだ。死に場所を求めて祖国に戻もどってきたようなものだが、ここで果てる気はなくなった。死なないつもりで戦って命を落としたことは一度もない。

つまり、ババアが負けることは絶対にないってことさ。

あのクソジジイに負けてたまるかい。

新皇帝オクタヴィアン・ギュスターヴ・ヴィド・ラフレシアの継承大典レサクセシオンからわずか四十日後の、オーメネイジ九〇〇年八巡じゅん月げつ三番日。アデナ大だい元げん帥すいルイ・アシュモダイ・大智永世マグナスイキス・アデモンディオは、大だい侵しん攻こう作戦〝大津波デバクル〟の開始を宣言、即そく日じつラフレシア第三帝国軍十六万名余がオークリッド首長国との東南国境地帯に投入された。

オークリッド首長国軍は、特とく殊しゅ遊ゆう撃げき部隊シノビを中心として防衛にあたったが、八巡月七番日、あえなくヨナ樹海戦線が崩ほう壊かい。しかし、蘇よみがえった伝説の〝女め豹ひょう〟がシノビの残存部隊を結集させ、各地で妨ぼう害がい戦せんを展開した。この動きに、五十七部族の老ろう若にゃく男なん女にょが呼応して蜂ほう起きしたものの、帝国軍の侵攻を食い止めるには至らなかった。

八巡月二十三番日、帝国軍がオークリッド首長国首都アマツを包囲すると、首長フラトは強きょう硬こうな反対派を粛しゅく清せいして降こう伏ふくを申し出た。アマツは無血で開城し、正規軍、義勇軍とも、順次やむなく抗こう戦せんを停止して、武装解除に応じた。

蘇った〝女豹〟は、首都へとつづくカナイ峡きょう谷こくで帝国軍を奇き襲しゅうし、戦車十一台を撃破したが、討うち死じにを遂とげたという。

遺体はシノビの生き残りに運び去られたものと見られ、確かく認にんされていない。

Omenage 900 8th revolution 24th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

chapter.1

ぼくは獣

もやもやして、もわもわして、むらむらして、黙だまっていたらうがうがしてしまいそうなこんな夜は、走る。

走る。

走る。

走る。

走れ……！

だって、破は裂れつしてしまいそうなんだ。

頭を、胸を、身体からだ中を満たして、ぱんぱんにして、内側から徹てつ底てい的にぶち壊こわしてしまいそうなこれが何なのか、ルーシー・アッシュカバードにはわからない。ただ、放ほうっておいたら、よくないことになる。これに支配されて、突つき動かされるまま行動するようになったら、きっと取り返しのつかないことをしてしまう。

正体はわからないけれど、これはたぶん、毒だ。際限なく欲よく望ぼうを膨ふくれあがらせて、耳みみ許もとで甘く囁ささやきかけてくる。おまえの望みはわかっているよ。いいんだよ。やりたいようにやればいい。欲しいものがあるんだろう？　手に入れろ！　腕うでずくで物にするがいい。苦しいんだろう？　苦しくてたまらないんだろう？　もう我が慢まんしきれないんだろう？　耐たえなくていいんだよ。解放しろ！　解き放て……！

ダメだ。

ダメだダメだダメだダメだダメだダメだダメだダメだダメだダメだダメだダメだダメだ。

これは燃やさないといけない。燃やし尽つくすんだ。そう。これは燃料だ。ほとんど無む尽じん蔵ぞうで、正直、怖こわい。でも、せっかくどこからともなくわきあがってくるのだ。有効活用しよう。

走るんだ。走れば走るほど、足あし腰こしが鍛きたえられて、体力がつく。足腰がしっかりして体力がつけばつくほど、激しい訓練

にも実戦にも耐えられるようになる。強くなれる。

　強く強く強く強くなるんだ。

　誰だれよりも何よりも、強く。

　大好きな人を守れるように、強く。

　ぼくは強くなりたい。

　もっと強くなりたい。

　どこまでも強くなりたい。

「Ｓｙａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａｈｈｈｈｈ……！」

　走れば走るほど、速く駆かけることができるようになる。全力疾しつ走そうしたときの速度が、もちろん少しずつではあるけれど、日ごとに上じよう昇しようしてゆく。それが体感できる。単純に筋力が向上しているだけではない。身体の使い方だ。無む駄だな部分が削そぎ落とされ、磨みがかれて、どんどんシャープになってゆく。

　靴くつも大事だ。靴がいいと、ぜんぜん違ちがう。だから最近、ルーシーは靴にこだわっている。モトロール刀よりも防具よりも、靴が重要だ。

　速い、素す早ばやい、鋭するどい足捌さばきは、戦い方に幅と厚みをもたらす。視野には自信がない。どうしても目の前にいる敵に集中してしまう。殺すことに。でも、人一倍動きまわることができれば、結果的に戦場を広く見み渡わたすことができる。一つ一つの仕事を迅じん速そくに片付けることができれば、次々と新しい仕事にとりかかれる。そうすれば、より多くの仕事をこなせる。

　ＺＯＯにはちょうどいい手本がいる。元アッサシンのピンパーネルだ。彼を見習って、その技術を盗ぬすみ、吸収して、もっと、もっと速く、速く、速くなってやる。

　ルーシーは夜のエルデンを疾しつ駆くしていた。限界まで速度を上げて、急に落とし、しばらくしてから加速する。へとへとになるまで、それを繰くり返すのだ。

この肉体は努力に応こたえてくれる。ＺＯＯに入ってから一年と少し経たった。その間に身長が十五サンチ以上のびて、体重もかなり増えた。現在のルーシーの背せ丈たけは、カタリよりもちょっと低いくらいだ。そのうち追いついて、追い越こしてしまうと思う。たくさん運動して、たらふく食べているからか。それだけではないだろう。父親の血だ。

今はまだ、身体を動かすことで発散できているけれど、もしいつかそれでも足りなくなったら、ぼくはいったい、どうなってしまうんだろう。

急に足が止まった。

ルーシーは膝ひざに手をついて、肩かたで息をした。

大量の汗あせが雨みたいに地面を叩たたいている。

どれだけ走っただろう。二時間、いや、もっとか。その間、一度も休んでいない。

疲れはもちろんある。呼吸はとてつもなく乱れているが、それだって――ほら、もう収まってきた。

ルーシーは身を起こして、顔の汗を手でぬぐった。さすがに多少だるいが、これからまた二時間走ろうと思えば、走れないことはない。

みんなに褒ほめられる。すごい体力だって。ほとんど異常だって、言われることもある。そのとおりかもしれない。自分でも思う。ぼくは変だ。

だけど、走らずにはいられないんだ。そうしないと、ぼくは何かに食べられて、とりこまれてしまう。それがいやで、恐おそろしくて、ぼくは必死なんだ。

みんな、わかっているのかな。

わかってない。わかってくれていない。

どうしてわかってくれないのかな。

「……やめよう」

　ルーシーは頭を振ふってため息をつき、ゆっくりと歩きだした。

　これは自分の問題だ。相談したいという気持ちはある。助言が欲しい。話せば、仲間は親身になって聞いてくれるだろう。何か解決法を考えてくれるかもしれない。でも、心配をかけたくないし、自分自身で乗り越えたいという思いもある。

　それに、わかってもらいたくはあっても、気づかれたくない。

　胸が痛んだ。

　とくに、マリアさんには、絶対に知られたくない。

　わきあがってくるものに負けそうになったぼくが、どんなことを考えているのか。耐えられなくなったぼくが、どんなに卑ひ劣れつな妄もう想そうに取り憑つかれるか。

　いけないことだ。ぜんぶ頭から追いださないといけない。

　わかっていても、できない。

　ぼくは汚けがしたくて、汚したくて、たまらないんだ。大好きな人も、ぼく自身も、何もかも。だけれど、そんなことはしたくない。傷つけたくないし、失いたくないんだ。

　お父さんに会いに行こうか。

　きっとお父さんなら、ぼくのことをわかってくれる。

　そう思い、父がさらし者にされているあの場所の近くまで、何度足を運んだことだろう。

　無理だった。

　遠くから見るだけで膝が震ふるえ、内臓という内臓が揺ゆれて、たまらなくなった。

　あの事件があってから、父と会ったのは一度きりだ。最初のうちは、引きも切らず見物人が取り囲んでいた父の檻おりも、今はもうただそこにあるだけの物と化している。外からエルデンを訪おとずれた者は、物もの珍めずらしさが手伝って見に行ったりもするようだが、大半のエルデン市民はまず寄りつかない。

お父さんはどうなっているのかな。

自分の目で確かめる勇気がない。想像もしたくない。

自じ業ごう自得だし、自ら選んだことだ。しょうがない。それはわかっている。でも、何もあんなふうになることはなかったんじゃないのかな。もっと他ほかになかったのかな。

お父さんなら、わかってくれる──だって？

ぼくには、お父さんが考えていることなんて、さっぱりわからないのに。

いつの間にか、足が環かん状じよう通どおりのほうへと向いていた。

もうあと一ブロック東に行けば、環状通に出る。環状通を南に進んだら、マーベラス・グッダー・ストリートとぶつかって、その交差点のど真ん中に父の檻がある。

ルーシーはたぶん、父に会いたいのだ。話はできなくてもいい。したくない。何を話せばいいのかわからない。ただ、死ぬことがないという父だが、せめて人間の姿でいてほしい。

安心したいのかな。あんなお父さんだけど、一応、人間だって。だからぼくも、いろいろおかしいかもしれないけど、人間だって。それともやっぱり、ぼくにとってはお父さんだから、たった一人の肉親だから、あまりひどくない状態で、生きていてもらいたいのかな。

わからない。

ルーシーは環状通に出た。

立ち止まって、考えようとした。でも、何を考えれば？

頭の中が真っ白だ。むしろ、真っ黒だ。

回れ右しかけて、途と中ちゆうでやめた。身体からだが勝手に止まったのだ。何だろう。

ここは第十二区、大きな家が建ち並んでいる地区だ。環状通の向

こうは第十区で、魔ま術じゆつ士ししか立ち入ることができない、魔術士たちのための街、中核地帯セントラルが広がっている。天に向かって螺ら旋せん状の回かい廊ろうがのびている空中楼ろう閣かくも、様々な形の透とう明めいな構造物がひしめいているミラーヒルも、光こう沢たくのある細長い塔とうが押しあいへしあいしているメタルフォレストも、色とりどりの精せい霊れい灯とうや半永久灯でライトアップされていて、とてもきれいだ。

ただ、中核地帯セントラルの外縁部ネイバリングは、雑然というより混こん沌とんとしている。変わった物を扱あつかっている珍ちん品ぴん堂どうや、古すぎて使い物にならない古道具に埋うもれている古物商、奇き怪かいで獰どう猛もうな愛あい玩がん動物が売られているペットショップ、剥はく製せい製作販売所、死んだ画家のアトリエ、妙みように大人びた子供たちが給仕する料理店くらいは、ルーシーものぞいたことがあるけれど、怖こわくて前を通るのも遠えん慮りよしたいようなおどろおどろしい店や、朽くちかけた集合住宅等々に埋めつくされているのだ。サフィニアはメタルフォレストに住んでいるので、毎日のようにあの一帯を通り抜ぬけているはずだが、ふつうの人はあまり近づきたがらないだろう。

そんな外縁部ネイバリングに人がいる。

それだけならどうということもないが、走っている。

一人じゃない。複数だ。

先頭の一人が逃にげていて、他がその一人を追いかけている。そんなふうに見える。

ルーシーは目を大きく見開いて、唇くちびるを舐なめた。逃げているとおぼしき先頭の一人は、髪かみが長い。黒髪だ。暗色のボディスーツを着ている。上背はありそうだけれど、あの身体つきは女性のそれだ。

ルーシーの舌が、チチチチチチ……と鳴りはじめた。勝手に腰こしが落ちる。右手が腰の後ろにのびた。マリアローズにはいつも無む謀ぼうだと叱しかられるが、真夜中のエルデンで武器も持たずにランニングするほど不用心ではない。ベルトに固定してある鞘さやには、サハ・リドル作の奇き想そう脇わき差ざし「天てん罪ざい地ち罰ばつ」が収まっている。天罪地罰の柄つかはうねっていて、慣れないと使いづらい。ただ、手に馴な染じむと、凶きよう暴ぼう

な破は壊かい力りよくを発揮できるようになる。一ひと目め惚ぼれして、思わず言い値で買ってしまった。後こう悔かいはしていない。刃は渡わたり四十四サンチと短いが、ずっしりと重くて頑がん丈じようだ。多少乱暴に扱っても、曲がったり折れたりしない。

追っ手は二人──いや、三人か。濃こい色の外がい套とうを身につけている。容姿はよくわからないが、おそらく男だろう。

逃げる女は外縁部ネイバリングの環状通沿いを駆かけていたが、方向を変えた。環状通を横切って、第十二区か、その南にある第二区に向かおうとしているようだ。

ルーシーは環状通のこちら側、彼らの北西にいる。

女も、三人の追っ手も、まだルーシーに気づいていない。笑えみがこぼれた。

「大の男が、三人がかりで女の人をいじめるなよ。それって、いけないことだよ……？」

あんなやつら、ぶっ殺しちゃってもいいよね？

ＹＥＳ！　ＹＥＳ！　ＹＥＳ！

ルーシーは天罪地罰を抜いて駆けだした。見み様よう見み真ま似ねの走法だ。思いきり前ぜん傾けい姿勢になって、一本の棒みたいにした身体を、両りよう脚あしでどんどん押しだせ。押しだせ。押しだせ！　マリアさんに尋たずねられました。なんでそんな走り方して、つんのめっちゃわないの？　知らない知らない知らなーい！　本家本元のピンプさんに訊きいてよ！　とにかくできるんだよ！　ぼくにはできちゃうんだよ！　すごいでしょ!?　Ｈａ␣Ｈａｈａｈａｈａｈａａａａａａａｈ！

あっという間！　あっという間だ！　Ｇｙｕｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｅｎ……！

女の人がこっちを見た。立ち止まりはしなかった。追っ手の男たちはルーシーに気づいて速度をゆるめた。Ｋｕ␣Ｋｕｋｕｋｕｋｕ……！　それでいい、それで！

ルーシーは先頭の追っ手めがけて突とつ進しんした。相手は両手で一本ずつ剣けんを抜いた。双そう剣けん使いだ。応戦するつもり

か。一人がルーシーを止めて、残りの二人で女の人を追う気らしい。させるかよ、クモソウ野フ郎オども……！

　ルーシーは急停止して、二番目の追っ手に襲おそいかかった。そいつは背中に槍やりみたいなものを斜ななめ掛がけしていた。あれだと、すぐには手にとることができない。二番目は横っ跳とびしてルーシーの突とつ撃げきをかわし、くるっと回転して起きあがりながら背中から槍を抜いた。そのときにはもう、ルーシーはそいつに肉にく薄はくしていた。あと二歩で、そいつの懐ふところに入りこんで腹をかっさばいて内臓をぐちゃぐちゃにして、超最低ＳＵＣＫな臓物と血のにおいを胸一いつ杯ぱいに吸いこむことができたのに、阻はばまれた。

　三番目の追っ手だ。

　両手持ちの大剣が頭上から降ってくる。

　力強いし、速い。堂に入っている。並なみ大たい抵ていじゃない。すごい打ちこみだ。でも、トマトクンほどじゃない。これなら、かわせる……！

　ルーシーは身をよじりながら、斜めに下がって大剣をよけた。そこに槍がのびてきた。舐めるなぼくを舐めるなよＨａａａａａａｎ？　ルーシーはとっさに天罪地罰の柄つか頭がしらに左手を添そえ、渾こん身しんの力をこめて槍を打ち払はらった。槍使いの追っ手はよろめいた。追撃しようとしたら、背後から殺気が吹ふきつけてきた。双剣使いか。大剣使いもくる。畜生ファツク！　畜生ファツク！　畜生ファツク……！

　考えたわけじゃない。身体が動いた。ルーシーは天罪地罰の刀身をくわえ、ほとんど伏ふせるようにして体勢を低く、極限まで低くした。そして両りよう腕うで両脚を駆く使しして奔はしった。ＷＯＷ！　ぼくって速い！　疾とく駆けていったん距きよ離りをとり、それから双剣使いに急接近して足あし払ばらいをかけた。双剣使いは転てん倒とうしたが、槍使いが槍を繰くりだしてきたせいで、とどめを刺さすことはできなかった。大剣使いはルーシーの背後をとろうとしている。何だろ。

　むかつくなあ、こいつら。

　きっと慣れてるんだ。人間相手の戦いというよりも、狩りに。

　複数で一人を確実に殺す。それがたぶん、こいつらの仕事なんだ。わかってるのかな？　それってクソみたいっていうかクソそのものだよ……？

　ルーシーはふたたび三人から離はなれると、天罪地罰を右手に持って低く構えた。

「気にくわないなＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ……！」

　瞬しゅん時じに大剣使いとの距離を詰つめたら、やつは右脚の蹴けりで出で迎むかえてくれた。ルーシーはその右脚にしがみついて、膝ひざ裏うらに天罪地罰をぶちこんだ。それなのに、大剣使いは呻うめき声一つもらさなかった。右脚を大きく振ふりまわしたが、ルーシーを振りほどこうとしたわけじゃない。双剣使いだ。自分の右脚ごと、ルーシーを双剣使いにぶった斬ぎらせてしまおうとしたに違いない。なんてやつだ……！

　ルーシーは大剣使いの右脚から天罪地罰を引き抜ぬきつつ離れて、地面に身を投げだした。槍。槍だ。槍がくるよ。槍が。転がって、這はって、跳んで、槍から逃のがれると、前に双剣使いが立ちふさがった。左に跳ちよう躍やくしたら、もう少しで大剣をまともに食くらうところだった。やりづらい。こいつら、弱くない。ていうか、強い……！

　槍を払いのけ、双剣をかわして受け流し、大剣の剣風に煽あおられながら、ルーシーは必死に勝機を見いだそうとしていた。

　ない、かも。

　勝てない。

　三対一は無理だ。逃げるにしても、簡単じゃない。

　女の人は──いた。大剣使いの後ろだ。え？　そこ？　そんな近くに……？

　大剣使いが振り向こうとした。それより早く、女の人は大剣使いの外がい套とうをつかんだ。そうしながら、何か呟つぶやいていた。

「Gyn-Ray-Shen-Guy-Nang-Run-Toe-Yen-Kay-Zai-Zen-Gyn-Jigret.」

　つめたくて深い、頭の奥まで染しみいるような、不思議な声だった。

　女の人は黒いゴーグルをしていた。おかげで顔はよくわからなかった。左手で大剣使いの外套をつかまえて、右手には何かを握にぎりしめているようだ。

「──爆燃デフラグナ」

　ルーシーは度ど肝ぎもを抜かれた。大剣使いの外套が一気に燃えあがったからだ。

　魔ま術じゆつか。あの女の人は魔術士なのか。

　大剣使いは地面に倒たおれこんでごろごろ転がった。火を消そうとしているのか。でも、すごい火勢だ。あんなことをしたくらいでは、とても消えないだろう。ていうか、ぼんやりしてる場合じゃない！

　ルーシーは女の人に向かって駆かけた。双剣使いと槍使いが、女の人に殺さつ到とうしようとしている。やらせない。ルーシーは女の人と追っ手二人の間に割りこんだ。ちょっと無茶をした。そのせいだ。双剣使いの右手の剣が頬ほおをかすめて、左手の剣が肩を薄うすく斬り裂さいた。痛みはとくに感じなかったが、頭にきた。

「Ｋｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙ……！」

　ルーシーはひたすら攻せめた。相手が二人だから、それがどうしたっていうんだ。関係ない。動いて、動いて、動いて、天罪地罰を振りまわした。当たるか当たらないか。そんなのどうだっていい。剣けんだの槍やりだのが、多少この身を削けずったって知るものか。死にはしない。どうってことはない。双剣使いも槍使いもたじたじだ。ぼくが！　ぼくが！　このぼくが！　押している。Ｙｅｅｅｅｅｅａａａａａａｈ！　でも、まだだ。まだ動く。もっと動く。ぼくの身体からだは。獣けものだよ、まるで獣みたいだよ、獣なんだよ、殺すの大好き！　Ａ□ｈａ！　おまえも、おまえも、ぜんぶ殺す！　殺してやる！　殺して──

「どいて……！」

　女の人の声だ。ルーシーの頭は一瞬で冷れい却きやくされた。ど

いて。そう言われた。

　瞬時に反応して、ルーシーは右斜ななめ後方へ跳とんだ。すかさず女の人が進みでてきて、双剣使いと槍使いに向かって両手を突つきだした。

「爆轟デトネータ……！」

　魔術。間ま違ちがいなく魔術だ。地を震ふるわせて、衝しよう撃げきを撒まき散らした、それは──火か炎えんというよりも、爆ばく発はつだった。サフィニアの要素魔術と比べたら見み劣おとりするけれど、マリアローズのハーレム・ゴードンよりはずっと激しい。爆風に押されて、ルーシーは尻しり餅もちをついてしまった。ルーシーだけじゃない。女の人も後ろのほうに吹っ飛ばされて転んだ。

　追っ手たちは？

　わからない。

　やつらは爆発の向こうにいた。今は煙けむりが邪じや魔まで見えない。でも、ちょっと離れた場所で転がっていた大剣使いが、外套を脱ぬぎ捨てて起きあがろうとしている。殺そう。

　あいつから。

「逃げて……！」と女の人が叫さけばなければ、ルーシーは大剣使いに飛びかかっていた。

　女の人は片かた膝ひざ立ちの姿勢で、腰こしから何か黒い物体を抜きとって構えた。飛び道具か。でも、弓矢じゃない。弩いしゆみでもなさそうだ。

　夜空が破れてしまいそうな、ものすごい音がして、その飛び道具の先から小さなものが飛びだした。それは大剣使いの左ひだり肩かたに命中した。大剣使いは、そのあたりを棒か何かで強く突かれたようにふらついた。持ちこたえようとしたのだろうが、結局、大剣を地面に突き立て、右手で左肩を押さえた。

　ルーシーは女の人に目を向けた。女の人は立ちあがりながら、ゴーグル越ごしにこっちを見ているようだ。「──聞こえない!?　逃げろって言ってるんだけど！」

煙は薄れつつある。人ひと影かげが見えた。双剣使いと槍使いか。大剣使いも大剣を担かつぎあげた。

ルーシーは顎あごを振ってみせた。「──こっちへ……！」

「はぁ⁉　バカ⁉」

「いいから、ついてきてください！」

もし女の人が逆方向に走りだしたりしたら、無理やりつかまえて、引きずってゆこうとしたかもしれない。その必要はなかった。女の人はルーシーのほうに駆けてきた。

「あっちです！」ルーシーは方向を示して女の人を先に行かせた。

この人、やっぱり背が高い。でも、ルーシーよりはいくらか低いみたいだ。ボディスーツはぴったりしていて、身体のラインがわかる。細身に見えるが、ほっそりしているというよりは、しっかりと鍛きたえられていて、余分な肉がついていないのだろう。気がついたら、小さいけれどぷりんとしたおしりを凝ぎよう視ししていた。いけない。

後ろを見ると、追っ手の姿が目に入った。双剣使いと槍使いは、ぼろぼろになった外套を脱ぎ捨てもせずに追いかけてくる。大剣使いは遅おくれているようだ。

まっすぐトマトクンの家に行くか。それとも、連中を撒いてからのほうがいいか。

もう第十二区に入った。女の人はなかなか足が速い。なかなかどころか、女性にしてはそうとうな脚きやく力りよくだ。これなら突き放せるかもしれない。

「そこを左に……！」ルーシーが小声で指示を飛ばすと、女の人はすっと左の路地に入りこんでいった。しなやかな身のこなしだ。かっこいいなあ。見とれている場合じゃない。わかっていても、心を奪うばわれずにはいられなかった。

というか、ルーシーはわかっていなかったのだ。

自分が何をしているのかなんて、まったく考えていなかった。

Omenage 900 8th revolution 24th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

chapter.2

我らが伝統

この世で一番嫌きらいなことを今すぐこの場で挙げるとしたら、躊ちゆう躇ちよなんて絶対しない。するわけがない。即そく答とうする。振ふりかぶらずに、光の速さで答えを投げつけてやる。

熟じゆく睡すいしているときに、しかも、二時半という夜よ更ふけの夜更けに、納なつ得とくのいかない、いくわけがない、意味不明なわけのわからない理由で、問答無用に叩たたき起こされることだ。

あー、もう──寝ねてたのに、寝てたのに、寝てたのに、夢すら見ないほどぐっすり気持ちよく寝てたのに。

何してくれちゃってるわけ、いったい？　ふざけないでよ。てゆうか、ふざけてもふざけなくても、どっちにしてもダメだから。そういうことはしないで。禁止。何があっても不可。不可。不可。不可……！

禁止令を出すのが一足遅おそかった。起こされてしまった。すでに目が覚めている。

超最低ＳＵＣＫ。

現在、トマトクン邸てい玄げん関かんホールの人口密度は、ちょっとした高さを誇ほこっている。

この家は土足厳禁だ。玄関ホールの上がり口手前で靴くつを脱ぬがないといけない。その上がり口のこっち側にマリアローズ、トマトクン、ピンパーネル、それからきゅーがごちゃっと固まっていて、あっち側には汗あせみずくのルーシーと、正体不明の女が並んで立っている。

黒くて長い髪かみの毛。上背がある。めきめきめりめり背がのびているルーシーよりはいくらか低いけれど、百七十くらいありそうだ。動きやすそうな暗い色のボディスーツは、戦せん闘とう用というよりもどこか魔術士衣を思わせる。細身に見えるが、瘦やせているのとは違ちがう。そうとう鍛えられている。

見覚えのない女だし、黒いゴーグルをつけていて、目のあたりというか、顔の上半分がほとんどわからないので、なおさら正体不明感が強い。強すぎる。ただ、一つだけ、これだけは間違いない。

この女は厄やつ介かい事ごとの種だ。

わかるんだよ。長く生きてるとさ。それくらいね。や、そんなに長く生きてるわけでもないけど。まだ若いつもりではあるんだけど。どうも年ねん齢れいのわりに老成しちゃってるような気がしてならないんだよね。無む駄だに苦労してるし。したくてしてるわけじゃないんだけど。できればしたくないんだけどさ。いつの間にか身の回りでいろんなことが起こって、気がついたら巻きこまれちゃってるっていうか。そうでもなきゃ、地味に地味に孤こ独どくな侵入者クラッカー稼か業ぎようをつづけて、そのうち何かへまをするか、運悪く死んじゃったりして、誰だれにも記き憶おくされることなく一生を終える──そんな人生が、僕にはふさわしかったはずだし。そのほうがよかったとは、さすがに言えないけどさ。そうはいっても、こういうのは勘かん弁べんしてほしいんだよね。

てゆうか、僕はただ単に、純じゆん粋すいに、寝てたかったんだよね。

静かに朝まで眠ねむらせてほしかったんだよね。

これってべつに、分不相応な願いってわけじゃないと思うんだよね。

それなのに、なんでぶち壊こわしてくれちゃうんだろうね。

超最低ＳＵＣＫ。

「……んむぁ」トマトクンは腹のあたりをぽりぽり掻かきながら、何か言おうとしたのだろうか。ぜんっぜん言葉にならなかった。

それにしても、絵に描かいたような寝ぼけまなこだ。眠いのはわかるけどさ。僕も同じだし。それはいいんだけど、よくもないけど、みっともないんだよ。ダメだ。我が慢まんならない。

マリアローズは舌打ちをした。「……トマト、ちょっとこっち向いて」

「んぁ？」と妙みような声を発してマリアローズのほうに顔を向けたトマトクンの両目は、今にも閉じてしまいそうだ。

「じっとしてて」マリアローズはトマトクンの大いにはだけているシャツの胸むな元もとを直した。

　これでよし、と。少しだけ気持ちが落ちついた。見も知らない女の人がいるところでさ。こんな恰かつ好こうしてたって、あとでサフィニアが知ったらやばいよ。怖こわいんだから。なんとなく、僕が怒おこられそうだし。だから当然、言わないけどね。

　まあ、マリアローズも、慌あわてて起きて、そのまま部屋を出てきたので、タンクトップにショートパンツという寝ね間ま着きスタイルだ。ちょっと無防備かもしれないが、だらしないというほどではない。はずだ。髪に寝ね癖ぐせがついていないかどうか。それだけは気になるんだけど。たぶん、ついてると思うんだけど。

　ちなみに、ピンパーネルは黒いインナースーツ姿だが、服装をのぞけばふだんどおりにしか見えない。雌し雄ゆう一いつ対ついの短たん剣けんをさりげなく両手に持っているあたりはさすがだ。

　もともとルーシーを出迎えて門を開けてやったらしいきゅーは、女を警けい戒かいしているのか。目つきが険しいし、全身の毛がわずかに逆立っている。

　マリアローズは短くため息をついて、女の様子を注意深くうかがいながら、ルーシーに視線を向けた。「それで？」

「あ、はい……」ルーシーは下を向いて、手の甲こうで顔の汗をぬぐった。「えと、どういうことかっていうと、ぼくはランニングをしてて──それで、環かん状じよう通どおりのところで、あ、十区の外縁部ネイバリングのあたりなんですけど、でも、ぼくは十二区にいて、それで、環状通の向こうに──」

　うわ。

　最高にイライラする。

　イライラしすぎて、マリアローズはにっこり笑った。「場所はいいよ」

「え──」ルーシーは目を見開いて、すぐにそっぽを向いた。「……そ、そうですか？」

　その挙動がまた癇かんに障さわった。

　本音を言えば、最低三十分間くらいは罵ののしってやりたい。でも、そうしたらさらに、とってもくだらない、どうでもいいことで

大切な睡すい眠みん時間が削けずられてしまう。それは非常に堪たえがたい。正直、今日はもう眠れないような気がしてしょうがないんだけどさ……。

　マリアローズは咳せき払ばらいをした。「なんでその人をここに連れてきて、僕らを叩き起こしたのか。僕が知りたいのはそこなんだよね。それ以外はどうでもいいんだよ」

「……ええと、ですから、彼女は追われていて──三人の男に、それで、やっぱりそういうのってよくないじゃないですか？」

「そう？」

「よ、よくないと、ぼくは思うんですよね……なんで、助けたっていうか、助けようとしたっていうか」

「かっこつけようとしたんだ？」

「いや、あんまり、かっこよくっていうふうには、ちょっといかなかったんですけど……」

「へえ……」マリアローズは腕うで組みをして目をつぶり、こめかみを指でぐりぐり押した。

　何なの。このいまいち要領をえない話。てゆうかさ。背のびすぎだから。にょきにょきにょきにょきのびて、きもいんだけど。それで、栄養があれじゃない？　ぜんぶ身長をのばすほうに使われちゃっててさ。頭にはこれっぽっちもいってないんじゃない？　もともとベつに、すごく頭がいい子ってわけじゃないけど、それにしても最近とみにひどすぎるのは、そのせいなんじゃないの？　そうでしょ？

　言ってもしょうがないことだから、言わないでおいた。

　マリアローズはゆっくりと目を開けた。「……わかった」

「え？　わかりました？　今ので？」

「きみに訊きいても無む駄だっぽいってことは、よくわかった」

「な、なんでわかったんですか？」

「へ？」

「いや、家までずっと走りどおしで、喋しやべる余よ裕ゆうもなかったので、実は──」ルーシーは飼い主に許しを乞こう犬みたいな上うわ目め遣づかいでマリアローズを見た。「……事情とか、尋たずねる暇ひまもなかったっていうか……だから、ぼく、ほとんど何も知らないんです」

「何も知らないのに、連れてきたんだ？」

　ルーシーはうなだれた。「はい……」

「ふうん……」

　呪のろわれてしまえ。

　マリアローズはゴーグルのせいでまるっきり表情が読めない謎なぞの女を睨にらみつけた。

　たしかに、あらためて見ると、顔がいくらか汗あせばんでいる。でも、上気してはいない。口紅を塗ぬっているのか。唇くちびるは灰色だ。腰こしに吊つるしてあるものが気になった。ケースに収まっているので、それが何かはわからない。形からして、刀剣のたぐいではなさそうだが、おそらく武器だろう。

「きみはなんで追われてたの？」

　女は顔を左右に振った。何らかの意思表示をしたのではない。マリアローズたちを見まわしたのだろう。

　そうして女は左手をすっと持ちあげ、人差し指でピンパーネルを示した。「発見」

「え」マリアローズは慌ててピンパーネルを見た。

　ピンパーネルは三度、まばたきをした。表情は変わっていないが、戸と惑まどっているようだ。

　女は唇の両りよう端はしをかすかにつりあげた。「好みのタイプ」

　ピンパーネルはわずかに首を傾かしげた。「木の実……？」

「や」マリアローズはピンパーネルの胸を手の甲で叩たたいた。「違ちがうでしょ……」

　べつにつっこみたくなんかないのに、思わずつっこんでしまう自分が悲しい。

　女は「くっ」と低く笑った。「おもしろい」

「ど、どこが!?　今のつっこみ、まったくキレがなかったよね!?　おもしろくはないよね!?　余裕で失しつ笑しようレベルだよね!?」

　女はこっくりとうなずいた。「うん」

　マリアローズは己おのれの内側に渦うず巻まく殺意の波動をかすかに感じた。「何、この人……」

「何って言われても──」女は形のいい指で顎あごをつまもうとしてやめ、突とつ然ぜん、くるりと身をひるがえして右手を軽くあげた。「じゃ」

　よ……読めない。

「ちょ、ちょっと……！」ルーシーは女の肩に手をかけた。「どこ行くんですか！　外は危ないですよ！　まださっきの連中がいるかもしれないんですから！」

「まあ、いるかも。ていうか、まず間違いなくいるはず」女はルーシーの手をさっと振ふりほどいた。「──でも、知らない人に迷めい惑わくかけたくないし」

「……迷惑なんて」ルーシーはちらっとマリアローズたちのほうを見て、うつむいた。「す、少なくとも、ぼくはべつに、そんなふうには思ってないっていうか……」

「たとえあなたが思ってなくても、他ほかの人はどうだろ」ゴーグルをつけていても、それくらいはわかる。女は明らかにマリアローズに視線を向けている。

「僕？」マリアローズは鼻を鳴らした。「もちろん、迷惑だけど？」

「でしょ」女は顔の下半分でにっこりと笑った。「だから、あた

し、もう行かないと」

「だけど……」ルーシーはまだぐじぐじ言っている。よく言えば、粘ねばり強い。悪く言えば、粘ねん着ちやく質しつなのだ。

　マリアローズは腕組みをしてため息をついた。「ルーシー」

「はい」

「きみはお人ひと好よしっていうか、女の子が大好きだし、こういうわけのわからない人が相手でも、つい肩かた入いれしたくなっちゃうんだろうけどね」

「ま、待ってください！　ぼくは女の子が好きなわけじゃないですよ!?　いや、嫌きらいなわけじゃないですけど、そうじゃなくて、きれいな人とか、かわいい人が好きなんです！」

「……オウ」とピンパーネルが低い声をもらした。

　トマトクンはきゅーにもたれかかって、半分以上、たぶん三分の二くらい寝ねている。

　女は少しだけ首を傾かたむけた。「ようするに、面食い？」

「み、見た目だけじゃないですよ！　内面も大切です！」

「……ルーシー。きみはいったい、何を語っちゃってるわけ」

「マリアさんが言いだしたんじゃないですか！」

「とにかく」マリアローズは目を細めて女を睨んだ。「その人に騙だまされないほうがいいよ」

　ルーシーは眉まゆをひそめた。「……どういう意味ですか？」

「迷惑かけたくないとか、殊しゆ勝しようなこと言ってたけどさ。そんなの嘘うそっぱちだからね」

「え？」ルーシーは見開いた目を女に向けた。

　女はただ突つっ立っているように見える。でも、決してそうじゃない。ピンパーネルの立ち姿に少し似ている。身体からだに余計な力が入っていない。次の瞬しゆん間かん、何が起こってもすぐに対

応できる体勢だ。

　あの大きなゴーグルは、覆ふく面めん代わりなのではないか。上等そうで、性能はよさそうだが、どうも侵入者クラッカー向けとは思えないボディスーツだ。やはり魔ま術じゅつ士しなのか。腰のものは何だろう。まだちょっとしか話していないけれど、なんだかとらえどころがない。そして、何者かに追われている。あやしいところだらけだ。というか、あやしいところしかない。そう言っても大おお袈げ裟さではないだろう。

「だって、おかしいでしょ」マリアローズは肩をすくめてみせた。「迷惑かけたくない？　だったら、なんでここまできたの？　本当にそういう気持ちがあるんだったら、他ひ人と様さまの家に足を踏ふみ入れたりしないんじゃない？」

「そ、それは……」ルーシーは口を尖とがらせた。「ぼくが、連れてきたから……」

「どうかな」マリアローズは苦笑いを浮うかべた。「きみがその人を連れてきたってより、その人がきみについてくことにしたんじゃない？」

「……結局、同じことじゃないですか」

「違うね。だいたい、迷惑はもうかかってるんだよ」

　ルーシーは首をひねった。女の様子は変わらない。ルーシーのように、マリアローズが言わんとしていることを理解していないのか。それとも、図星か。

　確信があるわけではない。推測にすぎないけれど、マリアローズはあえて断定的な言い方をしてみることにした。「──その人がこの家に入った時点で、ね。もしすぐに立ち去ったとしても、その人の痕こん跡せきがこの家に残ることになるわけでしょ。ここに立ち寄ったか、ここで行方ゆくえをくらましたかってことになったら、追っ手は無視しないんじゃない？　まあ、訪ねてきて、これこれこういう人はいませんか、くらいのことは訊ききそうだよね。そんな行ぎよう儀ぎのいい連中なのかどうか、僕は知らないけどさ」

「だ、大だい丈じよう夫ぶですよ」ルーシーの顔はこわばっている。「追っ手はちゃんと、振りきったはずなので……」

「はず？」

「大丈夫だと……思いますよ？」

「そうだといいんだけどね」

「はっきり言って」女は左手を持ちあげて、空を払はらう仕し種ぐさをした。「そんなに甘い相手じゃない。悪いけど」

　ルーシーは目を剝むいて跳とびあがった。「えええええええええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇーっ！」

「む……？」トマトクンは二度、まばたきをして、のんびりとあたりを見まわした。「……かぼちゃか」

　寝ぼけてるよ。この人。どうなの。この状じょう況きようで。いいけど。や、よくはないんだけどいつものことだし、まあ、トマトが堂々と寝ぼけてるってことは、差し迫せまった危険はないってことだろうし……ね？　たぶん。

　ピンパーネルがほんの少しだけ物ぶつ騒そうな雰ふん囲い気きを醸かもしだしはじめている。マリアローズが一声かければ、砂色の元アッサシンはたちどころに女を片づけてくれるだろう。場合によっては、そうしてしまったほうがいいのかもしれない。

　ただ、ここは家の玄げん関かんだ。あとの処理──具体的には掃そう除じとか、清せい掃そうとか、洗せん浄じようとか、そのあたりのことを考えると、だいぶめんどくさい。

「きみは利用するつもりだったんだね。ルーシーを」

　女は少し考えてから、うなずいた。「うん。ちょっとだけ」

「えええええええ
ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇー……」

「ごめんね」女はルーシーの肩かたをそっと叩たたいた。「悪気はなかったんだけど。知らない人だし、まいっかと思って」

「正直すぎますよ……」

「でも、事実だし」

「率そつ直ちよくな人は、嫌いじゃないですけど……」

「あたしは、あれ」女はピンパーネルに顔を向けた。「あっちの人のほうがいい」

「……率直すぎますよ……」ルーシーはもう半べそをかいている。

　マリアローズは横目でピンパーネルを見た。無表情だけれど、なんとなくさっきより気が抜ぬけているようにも感じられる。

「──とりあえず」女は頭を下げた。「迷めい惑わくかけちゃって、ごめんなさい。変なやつが押しかけてきたりするかもしれないけど、あんまり気にしないで」

　呆あきれて物も言えないが、何も言わないのは沽こ券けんに関かかわる。どんな沽券だ。

　マリアローズは口をひん曲げた。「気にしないだけですむ問題？」

　女は顔を上げて小首を傾かしげた。「すまないかも」

「だろうね」

「ぬ」トマトクンは急に目を見開いて女を見つめた。目に力をこめすぎて、気持ち悪いほどくっきりした二重になっている。「何だ。誰だれが拾ってきた」



「拾ってって……」

　二の句が継げないマリアローズの代わりに、きゅーがルーシーを指さした。「くう」

「おお。そうか。ルーシーか。で、どこで拾ってきたんだ？」

「え。あ、えと……環かん状じよう通どおりで──」

「ちょっと待ったちょっと待ったちょっと待った」マリアローズはトマトクンとルーシーの間に割りこんだ。「話を思いっきり戻もどさないでくれる？　てゆうか、拾ってきたとか、そういうことじゃないからね？　そもそも、人間は拾うものじゃないし」

「む？　だが、マリア、お前もルーシーを拾ってきたじゃないか」

「うっ…………」

「あぁー……たしかに、ぼくはマリアさんに拾ってもらったみたいなものですね……」

「や、そんなこと言ったら、僕だってあれだからね！　トマトに拾われたみたいなところも、なきにしもあらずだし……」

「うむ。そう言えばそうだったな」

「ワタシも」ピンパーネルは自分を指さした。「拾われマシタ。トマトクンに」

　女はマリアローズたちをざっと見て、小声で呟つぶやいた。
「……何？　この人たち」

「きみに言われたくはないから！」

「まあ」トマトクンは片方の眉まゆをつりあげて顎あごを撫なでた。「人間生き物を拾ってくるのはＺＯＯうちの伝統みたいなものってことだな。だとしたら、これでルーシーもようやく一人前か」

「変な伝統、勝手に作らないでくれる？　てゆうか、違ちがうよ？　この人はルーシーに拾われてきたわけじゃないからね？　そういう話を今、してたんであって……」

「そうなのか？」

「くう」きゅーはこくりと首を縦に振ふった。ああもう、世界中が敵に回っても、きっときゅーだけは僕の味方でいてくれる。そんな気がする。そう思いたい。信じたい。

「というわけで」女はぱちんと両手を打ちあわせた。

　マリアローズはちょっぴりたじろいでしまった。「……強ごう引いんな」

「名残なごり惜おしいけど」女はゴーグル越ごしの視線をピンパーネルに投げかけてから、左手をあげてみせた。「あたしはこれでおいとまします。さよならまた会う日まで。もう会わないか」

「あ……」ルーシーは女を引き留めようとしたのだろう。でも、手が出なかった。

　トマトクンはマリアローズをちらりと見た。「いいのか？」

　睨にらみつけて「何が？」と問い返してもよかった。でも、しないでおいた。

　女は別れを告げておきながら、まだその場から動いていない。こちらの出方をうかがっているのか。それとも、見み透すかされているのか。わからない。あのゴーグルだ。

　ゴーグルがなんとも邪じや魔まだ。

「きみ、名前は？」

「知らないままのほうがいいんじゃないかな」

「知っても知らなくても同じだよ。きみはここにいるんだから」

「たしかに」女はゴーグルに手をかけた。

　ゴーグルが外されて、素す顔がおがあらわになった瞬しゆん間かん、思わず息をのんでしまった。

　上がり眉まゆだし、全体的にシャープな顔立ちだけれど、美人といってもいいだろう。身体からだつきに比べると、顔の肉づきはややふっくらしている。実はけっこう若いのかもしれない。

　そんなことよりも、なんて色だ。

　これまで生きてきて、一度も見たことがない。

　瞳ひとみだ。

　薄うすい緑色ということになるのだろうか。

　輝かがやいている。

　発光していると言ったほうが正確かもしれない。

　──蛍光緑ルミナスグリーン。

「魔術士……？」

　声に出して言うつもりはなかった。気がついたら口からこぼれていた。

「残念」女はかすかに首を左右に振った。「あたしは魔術士じゃない。機術師メカニスタ。元、だけど」

「メカニスタって……機術士匠しよう合ごうの、親方のことだよね。弟で子しがいる」

「不思議？　若そうだから？　ちなみに、あたし、十九だけど」

「……年下なんだ」

「ぼくよりはお姉さんですね！」ルーシーはなぜか嬉うれしそうだ。

　トマトクンが低く唸うなった。「俺よりもずっと若いな」

「そりゃそうでしょ……」

「くう」

「ワタシよりワ──」

「や、いいいから。そんな、張りあうようなことじゃないし」

「機術士の世界では」女はゴーグルのベルトを指に引っかけて揺ゆらした。「年は関係ない。実力主義だから。あたしは十五で機術師メカニスタになった。あたしのお父さんは、十二で機術師メカニスタに」

「へえ……そういう血なの？」

「血も関係なくはないみたい。あたしの場合、教育もよかったんじゃないかな」

　こちらが訊きいてもいないことを、おそらく女はわざと喋しゃべっている。

　僕は乗せられてるのかな。そうかもしれない。

　たぶん、女はルーシーを利用しようとしたのだろう。今だって、何か企たくらんでいるのかもしれない。

　でも、それだけじゃないような気もする。

「そうはいっても、十二歳で親方になるっていうのは、そんなにありふれたことではないんじゃない？」

「うん。エルデェＥイニオンＭ機術士匠合Ｕの最年少記録が十一歳だから、それに近い」

「お父さんは有名な機術士なんだろうね」

「だった」

　女の瞳が一瞬、輝きを増した。

　そう見えただけだろうか。あるいは、目つきによって、輝きが強く見えたり、弱く見えたりするのかもしれない。

「──もう違う。あたしもだけど」

　マリアローズは顎を引いてそっとため息をついた。ルーシーは唇くちびるを引き結び、上うわ目め遣づかいで女を見つめている。父親絡がらみ、か。

　どうして人は自分の血から逃のがれられないのだろう。とくに、親が並外れて優ゆう秀しゅうだったり、有名だったり、異常だったりすると、その呪じゅ縛ばくはいや増しに増す。

　僕のお父さんは、いい人だったから。ただ本当にいい人で、それだけの人だったから。

　でも、それだけでよかったのかもしれない。

　ルーシーなんかを見ていると、心の底からそう思う。

「で？　きみの名前は？」

「ああ……」女はマリアローズの目を見すえて、まばたきをした。「あれ。あなたの目、すごくきれいな色」

「……僕のことはいいよ」

「これ、してると」女は指を振ってゴーグルを示した。「物の色が、はっきりとはわからなかったりして」

「だから、いいってば。そんなのは、どうでも」

「あ。彼も」女はピンパーネルを見て微笑ほほえんだ。「色つきのほうが、ずっといい感じ」

　ピンパーネルは眉み間けんに浅い皺しわを寄せた。もはや戸と惑まどうというよりも、いやがっているのかもしれない。そんなピンパーネルを一いち瞥べつして、いじけ声で「……いいなあ……」とか呟つぶやいているルーシーは、あふれる若さをどうにかしてちょっと抑よく制せいしたほうがいい。

　女はマリアローズに向きなおった。「あたしは〝ハニーメリー〟。ハニーでいい」

「ハニー、ね……」マリアローズは唇の片かた端はしをつりあげてみせた。「どうせ本名じゃないんだろうけど」

「本名は捨てたから。そのへんは魔ま術じゆつ士しと一いつ緒しよ」

「わかった。ハニーメリー。覚えたよ」

「それじゃ」ハニーは左手をあげて、回れ右した。

　玄げん関かんのドアは施せ錠じようしてある。鍵かぎは二つだ。ハニーは一つ目を解かい錠じようした。

　黙だまって出て行くつもりなのか。そのようだ。それでいい。そのほうがいい。頭の半分はそう言っているけれど、残りの半分は違ちがう。

　もし、正体不明の追っ手が、ハニーを捜さがして押しかけてきたら、どうする？　まあ、相手がよっぽど礼れい儀ぎ正しく、穏おん便びんに事を運ぼうとしないかぎりは、腕うでずくで追い払はらうことになるだろう。トマトクンがいて、ピンパーネルがいて、
きゅーもいる。ルーシーだって、だいぶ計算できる戦力だ。不安要素といったらマリアローズだけなので、十中八九なんとかなる。

　ただ、ハニー曰いわく「そんなに甘い相手じゃない」らしい相手について、くわしく知っているわけではないから、確たることは言えない。まずそこが問題だ。こうなってしまったからには、もっと情報が欲しい。

　それに、ハニーの身み柄がらは交こう渉しようのカードになる。いざ相手がやってきたとき、こちらがハニーというカードを持っていなければ、痛くもない腹を探さぐられ、不ふ愉ゆ快かいな目に遭あわされるだけ遭わされて、ただそれだけ、ということにもなりかねないのだ。めんどくさくなったら、ハニーを引き渡わたしてお帰り願う。できればこの選せん択たく肢しを確保しておきたい。

　もちろん、ぜんぶ取り越こし苦労かもしれない。ルーシーとハニーは、追っ手を完全に撒まいてきた。もしそうだとしたら、ちゃんと用心してさえいれば、追つい跡せきの手がのびてくることは当分ないだろう。

「ねえ、ハニー」

　声をかけると、ハニーは無言で振ふり向いた。少し表情が硬かたい。身構えている。

「きみのお父さんって？」

「あたしの、お父さんは……」ハニーは目を伏ふせて、ベルトに固定されているケースを左手でさわった。そうか。

　左利きなんだ、この子。

　だからどうしたってこともないけど。

「言えないなら、いいよ。無理しなくて」

「そうじゃない。でも、どう説明すればいいのかな」

「複雑なんだね」

「ぜんぜん」ハニーは軽く肩をすくめて笑えみを浮うかべた。「本当はすごく簡単な話。わかってしまえば、何だってそう。複雑に感じるのは、わからないから。知らないから。わからないままとか、知らないままとか、あたしはいや」

　なんだか、泣き顔に近い笑顔だった。

「──〝ピンクショット〟」

　ハニーメリー。

　彼女の口からその名が飛びだしても、マリアローズはこれっぽっちも驚おどろかなかった。

「あたしはお父さんをその名前で呼んだことがないから、なんだか変。知らない人みたい」

　べつに予想していたわけではない。予想なんかできるはずもない。

　ピンクショットといえば、あの回転ラニン式連グフ発弩アイヤを開発したとされる、有名なはぐれの機術士だ。機術士の世界は閉へい鎖さ的で、彼らはふつう、機術士匠合の中だけで活動する。そのため、個人名が表に出ることはまずない。そんな中で、はぐれとはいえ、ピンクショットはほとんど唯ゆい一いつ、機術士以外にも広く名を知られている機術士だろう。

　回転ラニン式連グフ発弩アイヤの他ほかにも、たくさんの兵器を開発したという鬼きオさいピンクショットは、だが、行方ゆくえ知れずで、生死も不明だ。

　ハニーはその娘むすめらしい。本人が言うには。

　疑ってかかるべきなのかもしれないけれど、ああ、そういうこともあるのかな、というふうにも思える。

　この子は明らかに尋じん常じようじゃない。

「忘れて。今のは」ハニーは瞳ひとみの輝かがやきを曇くもらせて、小さく息をついた。「──でも、話せてよかった。ちょっとでも

いいから、誰だれかに自分のこと、話したかったのかも。たぶん、そう。ありがと、マリアローズ」

「……僕、名乗ったっけ？」

「その子が」ハニーは視線でルーシーを示した。「あなたのこと、マリアさんって」

「や、でも—」

「それから、その人は」ハニーはトマトクンを見た。「トマトクンでしょ。そう呼んでた。ま、その前からだいたいわかってたけど。クランＺＯＯ。小所帯らしいけど、エルデンこの街ではけっこう有名みたい？　あとは秩ちつ序じよの番人とか、鉄の心臓アイアンハーツ協会ソサエテイとか、王おう龍りゆうとＳ＊Ｋシリアル・キラーズの龍りゆう州しゆう連合とか、昼飯時ランチタイムとか」

　マリアローズは前まえ髪がみを引っぱって顔をしかめた。いつから気づいていたのか。

　この真っ赤な髪の毛が目立つことはわかっている。橙だいだい色いろの瞳も人目を引く。自覚はあるので、外ではわりとフードをかぶるようにしていたりもする。

　ハニーはゴーグルを外してから、マリアローズの目の色についてふれた。あのときか。

　何にしても、抜ぬけ目がない女だ。

　ただ、誰かに話したかったのかも、という言葉には真情がこもっていたような気がする。

　わかってしまえば何だって簡単なもので、複雑に感じるのは、わからないか、知らないからだ。ハニーがそう言っていた。たしかに、そのとおりなのかもしれない。

　人はいろいろな面を持っている。どれだけ親しくなっても、たいていの場合、何もかも知ることはできない。だから、人間って難しい、理解できるものじゃないと思ってしまう。知らないだけなのに。

「ハニー」

「はい？」

「ここでいつまでも立ち話してるのもなんだし、上がったら？」

　ハニーは形のいい眉まゆをひそめた。「え……？」

「そこまで聞かされると、気になるしね」

　信用していい女だとは思わない。きっとハニーは、その必要があれば、他人を騙だましたり出しにしたりするだろう。でも、おそらく、自分自身だけは裏切らない。無数の偽いつわりを身につけて周りを欺あざむいても、自分にだけは嘘うそをつかない人だ。それだけはなんとなくわかるし、この考えは間ま違ちがっていないと感じる。

「もっと聞かせてよ。できれば、くわしく。洗いざらい話せとまでは言わないけどね。僕らはもう、巻きこまれてるんだからさ。きみが追われてる理由とか、きみを追ってる相手について知る権利くらいはあるでしょ？」

Omenage 897 12th revolution 25th day

モトローリィ バストール山脈

chapter.3

影追い

　──寒い。

　猛もう烈れつに寒い。

　今すぐ死んでしまいそうなほど寒い。

　澄すみきって凍いてつきそうな山の空気は、生き物の肺はいを破は壊かいしようとしているとしか思えない。四年ぶりだからか。関係ない。もともとこの山では二年しか過ごしていないのだ。

　遠い。本当に遠い、遥はるか遠い昔のように感じる。でも、二年。あの二年は長かった。七歳のときにカリオサークを出てから、居場所を転々と、めまぐるしく変えて、落ちつくことができなかった彼女が、ようやく手に入れた安住の地だったからだろう。

　彼女はそれを自ら捨てた。たった二年で。ここに居つづけることだって、望めばできたはずなのに、彼女は別の道を選せん択たくした。

「……寒いのが、いやだったから？」

　そんなことはない。一年の半分以上は冬で、とくに朝晩は冷えこんだが、大きな暖だん炉ろがある家の中にいれば、寒くなんてなかった。

　広くて、広すぎなくて、堅けん牢ろうで、よく手入れされていて、どこにもかしこにもぬくもりが感じられるあの家は最高だった。とりわけ、たった一人の人間の手で建てられたという点が、この上もなくすばらしかった。

　物を作る際には、それが大がかりになればなるほど、多くの人手が必要となる。やむをえないことだが、本当は何もかも自分でやりたい。部品の一つ一つまで、自分自身で仕上げたい。そうしたくても、なかなかできるものではないのに、彼は一人であの家を建ててしまった。あの家の中にあるものは、ほとんど──もとはぜんぶだったのだが、彼女が作ったものも二年間で増えたから、ほとんど、ということになる──彼が生みだした。

　理想の家だ。

彼はあの家から離はなれようとしない。その理由はよくわかる。あの家は彼の世界だ。彼が彼のために作った彼だけの世界だ。

彼女はあの世界が好きだった。

でも、あれはあくまで、彼の世界だ。

彼女はやはり、彼女の世界が欲しかったのかもしれない。

彼の世界で暮らすうちに、もとからあったのだろうその欲よつ求きゅうが、いっそう膨ふくらんだのかもしれない。

彼女もいつか、その気持ちが抑おさえがたいほど高まったら、どこか人のこない場所に家を建てて、そこで作りたいものだけを作り、自ら生みだしたものに囲まれて、命の終わりを迎むかえるのかもしれない。

ただ、それにはまだ早すぎる。彼女は外の世界を知りたい。様々なことを吸収したい。彼女の世界は狭せまいのだ。あまりにも狭すぎて、ひどく乏とぼしい。

彼の世界で遊んでいると、彼女は心地ここちよくもあったが、たまに焦あせりを感じることもあった。こんなことをしていてもいいのか。彼の創作物に目を輝かがやかせたり、胸を打たれたり、いじり回して壊こわしてしまったり、それを直してもらって、その過程を興味深く眺ながめたり。それはとても楽しいことなのだけれど、これでいいのか。

彼は〝沈黙サイレンス〟と呼ばれていた。感情を表に出すことはめったになく、自分の意思を伝える際には、言葉よりもちょっとした身み振ぶりと視線を用いた。機術に関する説明だけは、ときどきしてくれた。低くて、尖とがったところが一つもない、頭の中心にゆっくりと染しみこんで、いつまでも消えない声だった。彼は大男だった。髭ひげは十日にいっぺんしか剃そらず、剃った翌々日にはもう髭だらけになっていた。髪かみは自分で切って、短くしてあった。不潔ではなかった。彼の家には、彼手製の温水を供給する機械があって、いつでも入浴できた。毎日ゆっくりと湯船につかる習慣が、彼にはあった。

彼は父の友人だった。もしかしたら、彼女の父にとっては、ただ一人の友人だったのかもしれない。ひょっとすると、彼にとって

も、彼女の父が唯ゆい一いつの友人だったのかもしれない。

　父は流る浪ろうというより逃とう亡ぼうの旅を余よ儀ぎなくされていた。それでも父は彼女を手て許もとに置いた。離さなかった。どこへ行くのにも連れて歩いた。彼女にいろいろなことを教えてくれた。夜は身を寄せあって眠ねむった。

　そんな父が、彼女を彼に預けた。

　彼は黙だまって彼女を引き受けた。父は彼を心底から信しん頼らいしていた。だから、彼女も無条件で彼を信じた。

　言葉はさして重要ではなかった。機術についての解説だって、よほどのことがないかぎり、彼女は求めなかった。教わるよりも、自分の目で見て、自分の耳で聞き、自分の鼻で嗅かいで、自分の手でさわり、自分の頭で考えて、自分で答えを出したほうがずっといい。

　言葉よりも、彼の家が、彼の世界が、彼の豊かさを雄ゆう弁べんに語っていた。彼の世界は広大無辺にして深遠だった。

　彼女は彼が好きだった。彼のことを知りたかった。どこまでも知りたい。知りつくしたい。そう願えば願うほど、求めれば求めるほど、彼女は悔くやしくなった。

　彼女自身の世界は、彼の世界には及およびもつかない。彼は彼女のことを知りたいなんて、微み塵じんも思っていないだろう。彼は彼女の底を見み抜ぬいているに違ちがいない。

　彼の世界の中にいるかぎり、おそらく彼に並び立つことはできない。

　彼女は居い心地ごこちのいい彼の世界から飛びだすことにした。

　バストール山脈。

　人を拒こばむ峻しゅん厳げんな山々の中にひっそりとたたずむ彼の家をあとにして、彼女はひとり街へと下りた。エルデェＥイニオンＭ機術士匠合Ｕに入合すると、機術士マシニストたちの技術の拙つたなさ、知識の浅せん薄ぱくさに呆ぼう然ぜんとさせられた。何から何まで戒律コマンドに縛しばられる暮らしは、窮きゅう屈くつなことこの上なかった。自分の選せん択たくは誤りだったのではな

いか。彼女は後こう悔かいしたが、機術士が機術士匠しよう合ごうの外で活動することの困難というより苦難は、身をもって知っている。何はともあれ、機術士匠合で身を立てるしかない。

さいわいＥＭＵは、年ねん齢れいや経験ではなく、実力のみで機術士を評価する組織だった。十二歳でＥＭＵ入りした彼女は、十五歳で機術師メカニスタになった。十歳かそこらで入合して、三十歳程度で機術師メカニスタになり、一歩一歩匠合内で出世してゆくというのが理想的な機術士の歩みだが、一いつ介かいの機術士のまま一生を終える者のほうがずっと多い。十五歳という年齢はともかく、入合わずか三年足らずでの機術師メカニスタ昇しよう進しんは異例だった。

機術士全体のレベルの低さは彼女を失望させつづけたが、上のほうにはさすがに優ゆう秀しゆうな者もいる。彼女は彼らに認められたのだ。誰だれにも明かせないけれど、彼女の父は鬼き才さいと呼ばれた機術士で、その友〝沈黙サイレンス〟も異才だ。彼女はそんな二人に育てられたのだから、これくらい当然だという思いはあった。そうはいっても、誇ほこらしくないわけがない。

機術師メカニスタになって一年、彼女は初めて長期休きゆう暇かを申しん請せいし、受理された。

目的は帰省だ。彼女は大陸東部の南、ユニオン・カバナのサー・マルク州にあるリオ・フレメンダスという辺へん鄙ぴな漁村で生まれ育った。ＥＭＵではそういうことになっている。

彼女はモトローリィを出てトレイン公国を通り抜け、ハッツフォー独立軍領のモルグステン市を経由して中部ミツド諸国域ランズを南下する高速馬車に乗り、途と中ちゆうで下車してバストール山脈へと向かった。父はどこにいるのかもわからない。帰る場所といえば、彼女には一つしかなかった。当然、彼の家だ。

それにしても、寒い。

冬山用の装備はきっちり調ととのえてきたし、体力にはけっこう自信がある。忍にん耐たい力りよくもあるつもりだ。でも、寒い。

気が急せいている。早くあの家に帰りたい。ただ、無理をすることを、彼女は自分自身に許さない。天候が悪化したら、安全な場所を素す早ばやく探して露営ビバークする。休みながらも、ちゃんと

周りの状じよう況きようを観察しつづけ、食事と水分をしっかりとる。早く彼に会いたいけれど、急いではいけない。わかっているのに、苛いら立だちが募つのる。本当は、寒さなんてたいしたことはないのだ。寒くても耐たえられる。それより、とにかく一刻も早く彼に会いたい。

彼女はあのころより確実に成長した。今の彼女なら、当時とは違う目で彼の世界を見ることができるはずだ。その結果、彼女は落らく胆たんするかもしれない。逆に、前よりずっと感じ入ることになるかもしれない。少しだけ怖こわくもあり、楽しみでもある。もうすぐだ。

彼女はすでに、最大の難所、強風のせいで低木しか生えない、風かぜ山やまと呼ばれる一帯を越こえていた。そこから半分凍こおった沢さわをさかのぼるコースに入って、今日が三日目だ。五時間前に見覚えのある巨きよ岩がんを見つけ、沢から出て雪深い冬の森を歩いている。

このあたりになると、樹木の枝に縄なわが結びつけてあったり、切り開かれた広場があったりして、そこかしこに彼の気配が感じられる。もっとそれら一つ一つをゆっくりと味わって、じっくりと胸を躍おどらせることができるだろうと思っていたのに、想定外だ。近づけば近づくほど、焦しよう燥そうに駆かられるなんて。

彼女の足どりはだんだんと速まっている。

これでも我が慢まんしているのだ。本当は走りだしたい。

二年の間に、何度も何度も通った道だ。

彼女はふと立ち止まった。

振ふり返ると、当然のことながら、自分の足あし跡あとがある。前に向きなおると、何もない。

彼は彼の家から一歩も出なかったわけではない。食べ物はすべて山で手に入れていた。彼は猟りよう師しでもあり、山菜とりの名人でもあった。釣つりも得意だった。家の裏手のほうには、秋に果実を熟させる木々が植えてあって、彼はそれを「小さな果樹園」と呼んでいた。山や羊ぎも飼っていた。彼は山の鳥ちよう獣じゆうのことを知りつくしていた。野獣から学ぶことは実に多いと、言葉少な

に彼女に語ったこともある。

　家を出れば、彼はこの道を通るはずだ。

　季節も季節だし、何かの研究や製作に没ぼつ頭とうしているのか。

　いや、昨日も雪が降った。一日もすれば、足跡なんて消えてしまう。

　彼女はふたたび歩きだした。

　さっきまであれほど浮き立っていた心が、この森みたいにどこまでも静かだ。

　やがて木々の合間に彼の家が見えた。

　十六時を少し過ぎている。雪山を燃え立たせている夕ゆう陽ひも、間もなく沈しずむだろう。

　家の煙えん突とつから煙けむりが出ていない。

　心臓が大きく震ふるえた。

　彼女は駆けだした。

　実は、自分が動どう揺ようどころか狼ろう狽ばいしていたことに、彼女は気づいた。

　足あし許もとがおぼつかなかった。彼女は雪に足をとられて、二度も転んだ。

　いろいろなことを考えた。考えても無む駄だだと思った。まずは確かめることだ。知ることだ。知らずに判断してはいけない。

　彼の家は木造だ。外側は。内側は違ちがうが、外観は巨大な丸太小屋だ。

　玄げん関かんの扉とびらは施せ錠じようされている。彼女が知るかぎりにおいてはそうだった。

　彼女は扉のノブをつかんだ。回った。鍵かぎがかかっていない。開けると、あたたかい空気があふれてくる。そうはならなかった。

外気とほとんど変わらない。暖だん炉ろに火が入っていないということだ。当然だ。だから、煙突から煙が出ていなかった。

　誰もいないのだ。誰も？　彼以外に誰かいるとでも？　いない。いないはずだ。

　きっと留守なのだろう。何か用事があって遠出しているのだ。だったらなぜ、施錠されていなかったのか。

　彼女は家の中に入って扉を閉め、ゴーグルを上にずらしてマスクを引き下ろした。すぐそこの壁かべに枯かれ草くさ色の外がい套とうが掛かかっていた。見覚えがある。彼女は手て袋ぶくろを外して外套をさわった。これは彼のものだ。

　彼女は足音を忍しのばせて、暖炉のある部屋へと向かった。食事をとったり本を読んだりするその大きな部屋を、彼女は勝手に居間と呼んでいた。居間の暖炉で生みだされた熱は、張り巡めぐらされた伝熱管によって家全体を暖める。居間には案の定、誰だれもいなかった。もちろん、暖炉を中ちゆう核かくとする暖だん房ぼう設備も稼か働どうしていなかった。

　書しよ棚だなが乱れていた。

　彼は書棚のどの位置にどの書物を収めるか決めていて、それを破ることはなかった。彼と一いつ緒しよに暮らしていて、彼女は自分の野放図さに気づいた。彼女の父も、あれほど手先が器用で緻ち密みつな計画を立てて精密な図面を引くのに、けっこうずぼらだった。彼女は父より神経質だったが、それでも彼にはとうていかなわなかった。彼女は結局、最後まで本の置き場所をだいたいしか覚えられなかったし、今となってはほとんど記き憶おくしていない。

　でも、これは違う。

　並べられている本の大きさや、色、質感──彼のやり方とは、まったくといってもいいほど異なっている。しかも、部分的に乱れているのではない。すべてがめちゃくちゃに引っかきまわされている。それでいて、どの本もきっちりと収まっているのだ。収まるべきではない場所に、きっちりと。



頭に血がのぼって、目がくらんだ。

これは怒いかりだ。

それも、今まで経験したことのない、とても激しい怒りだ。

「……誰の仕し業わざ？」

　彼女は腰こしに固定してあるケースに手をのばした。ケースの中には手製の武器が入っている。かつて彼女の父が研究していた、黒色火薬ブラックパウダーの作用で弾だん丸がんを射出する飛び道具だ。父は大きなものを長ちよう銃じゆう、小さなものを拳けん銃じゆうと称しようしていた。彼女の拳銃は単発式だ。愛あい称しようは、リトルジョニー。彼女の父はいくつもの名を持っているが、彼女の前ではいつもジョニーだった。父のただ一人の友も、父をジョニーと呼んだ。そして、父と、父の友だけが、彼女をカレンと呼んだ。

　彼女はケースからリトルジョニーをとりだした。ブラダーとも呼ばれる黒色火薬ブラックパウダーは、機術士匠しよう合ごうが絶対Ａ禁制品Ｃに指定している。彼女がこんなものを自作していることが露ろ見けんしたら、どうなるか。間違いなく匠合は彼女を拘こう束そくする。機術師メカニスタの地位を失うだけではすまない。機術士マシニストの資格を剝はく奪だつされ、全身に刺青いれずみを入れられて、封印シールという脳の特定部位を破は壊かいする手術を施ほどこされる。そうなったら、二度と機術を使うことはできない。大半の機術士はそう信じているが、本当は違う。封印シールは強力な暗示だ。方法さえ知っていれば、破ることもできる。とはいえ、封印シールを施されたうえ、監かん禁きんされるのだから、死ぬのと同じだ。無む為いに生かされるだけなら、ある意味、死ぬより悪いかもしれない。拘束される前に逃にげたとしても、追っ手がかかる。ＥＭＵ執しつ行こう部ぶにはそのための特とく殊しゆ部隊があるのだ。

　トラジェディー。

　彼女の父もトラジェディーに追われていた。父はＥＭＵカリオサーク支部で機術師メカニスタとしてＥＭＵの仕事をしながら、秘密結社〝黒雄鶏ブラックルーの会スターズ〟に所属して絶対Ａ禁制品Ｃの研究と開発、それを利用した機械、兵器の製作を行っていたのだ。あるとき黒雄鶏ブラックルーの会スターズの会員がＥＭＵに捕ほ縛ばくされ、その自白によって父の関かん与よも発覚した。トラジェディーが動きだす前に、父は彼女を連れて逃にげた。正体不明、所在不明のはぐれ機術士〝ピンクショット〟の名が世に轟とどろくようになったのはそれからだ。

　彼──〝沈黙サイレンス〟もまた、匠合に属さない機術士で、その

製作物には絶対Ａ禁制品Ｃにふくまれるものや、類似するものもあった。とくに、彼が生みだした燃える水ＣＯＷを燃料とする内燃機関ＩＣＥはすばらしい出来だった。

　機術士であるからには、彼もかつて匠合に在ざい籍せきしていたはずだ。たぶん、何らかの事情で抜けたのだろう。

　機密保持のために、匠合は原則として機術士の離り脱だつを認めない。彼女の父と同じように、彼もトラジェディーに追われている。その可能性はある。というより、トラジェディーの亡名録デスレクトリには十中八九、彼の名前が載のっているだろう。

　まさか、連中がここを突つき止めたのか。

　彼女は荷物を床ゆかに下ろして、リトルジョニーを握にぎりしめた。

　一いつ瞬しゆんだけ目をつぶると、居間を出て奥にある彼の部屋へと向かった。

　彼はその部屋の寝しん台だいで眠ねむる。寝台以外には書棚と作業机、資材棚、機械類が置かれていて、小規模な製作ならそこで行えるようになっていた。

　彼女は彼の部屋が好きだった。彼の寝台に寝ね転ころんで、作業中の彼を眺ながめたり、本を読んだりしている時間は、彼女にとって特別だった。彼の脇わきで、自分の作業をすることもあった。彼が彼女をうるさがることはなかった。そもそも、彼女の存在を意識してさえいないようだった。彼は彼女がそばにいても一人だった。彼女も同じだった。彼女の父もそうだった。

　孤こ独どくに怯おびえる必要はないことを、彼女は学んだ。孤独を恐おそれることと、誰かを愛することは似ている。でも、別々なのだ。

　彼女が父を愛し、父の友を愛しても、彼女は孤独だが、だからといって彼女の愛が損そこなわれるわけではない。父は彼女を抱だきしめてくれたが、父の友は彼女に指一本ふれなかった。彼女はときおり寂さびしく思ったが、そうかといって、彼が彼女を愛さなかったわけではない。

　部屋の扉は少しだけ開いていた。

何も聞こえない。

誰もいないのか。

不意に、この家を出る決心をして、彼にその旨むねを伝えたときのことを思いだした。

夕食の最中、彼女は彼に言った。「あたし、ＥＭＵに入る」

彼は静かに彼女を見つめた。おそらく、二十秒間くらい。そうして、深くて低い染しみ入る声で言った。「わたしはここにいる」

彼の言葉の意味を誤解するほど、彼女は愚おろかではなかった。彼はここにいる。いつでもここにいる。だから、戻もどってきたくなったら戻ってくればいい。ここには彼女の居場所がある。彼は彼女にそう言ったのだ。

家を出る日は山の麓ふもとまで送ってくれた。別れ際ぎわに「気をつけろ」と声をかけてくれた。彼女は彼に抱きつきたかった。彼に抱きしめてほしかった。ずいぶん迷ったが、そのまま彼女は旅立った。

彼女は今、悔くいていた。

扉を開けると、彼は寝台に横たわっていた。

着き替がえをせず、布ふ団とんもかけずに、眠ってしまった。そんなふうにはとうてい見えなかった。

胸だ。黒く汚よごれている。真っ黒ではない。よく見ると、いくらか赤みを帯びている。あれは血だ。濡ぬれているとは言えない。すでに乾かわいている。だいぶ時間が経たっているのだ。

彼女は部屋の中を見まわした。

誰もいない。

誰も。

彼女はそれを確かく認にんしてから、床に膝ひざをついた。

「……ああ……」

頭では理解していた。すっかり、完全に理解していた。

彼は死んだ。何者かに殺されたのだ。

それなのに、彼女は首を左右に振ふっていた。何？　これ？　何なの？　どういうこと？　認めたくない？　受け容いれることができない？

「ああ……！」

彼女は寝台まで這はっていった。死し臭しゅうは強くなかった。でも、臭くさかった。彼女は彼にすがりつきたかったが、できなかった。彼の頰ほおにふれた。つめたかった。死後何日経過しているのか。昨日、今日、死んだのではない。それは間ま違ちがいない。見たところ、外傷は胸だけのようだが、だめだ。蘇そ生せい式しきは間に合わない。

彼は死んでしまった。

本当に死んでしまったのだ。

殺された。

彼を殺した者がいる。

誰が彼を殺したのか……？

彼女は彼を埋まい葬そうして、彼の家を徹てつ底てい的に調べたが、何の手がかりもえられなかった。

父に会いたい。相談したい。せめてこのことを伝えたい。伝えないといけない。でも、彼女は知らない。彼女を唯ゆい一いつの友に預けて、父はどこへ行ったのか。ＳＳという言葉だけは記き憶おくにある。父が〝沈黙サイレンス〟に話していた。それを聞いたのだ。「──ああ、ＳＳだ」と。

ＳＳとは何だろう。

父のことだから、自分自身の機術を広め、深めるための道を歩んでいるはずだ。その道とは何なのか。どこで何をしているのか。彼女は知らない。知らせるべきではないから、父は彼女に何の情報も与あたえなかったのだろう。

ひどい父親だと思ったことは一度もない。父は彼女を愛していた。父にとって、彼女は目に入れても痛くない一人娘むすめだった。ただ、それよりも大切なものが父にはあった。そのためには、他ほかのすべてを捨てる。父はそういう人だ。彼女にはわかる。なぜなら、彼女も同じだからだ。どれだけ悩なやんでも、苦しんでも、自分自身にとって正しい選せん択たくをする。せざるをえない。おそらく〝沈黙サイレンス〟もそうだったはずだ。

父と連れん絡らくをとることはできない。手段がない。

彼女はＥＭＵモトローリィ支部に戻った。しばらくＥＭＵ内で情報を集めるという手も考えられなくはないが、彼女の推測どおり匠しよう合ごうが〝沈黙サイレンス〟を始末したのだとしたら、間違いなくトラジェディーの仕し業わざだ。トラジェディーの存在はよく知られている。だが、その実態は誰も知らない。将来を嘱しよく望ぼうされている機術師メカニスタの彼女でも、執しつ行こう部ぶの部員にすら面識がないのだ。機術士の九割以上は技術部に所属していて、他に執行部、監かん査さ部ぶ、外交部があるものの、執行部、監査部、外交部の部員とは接せつ触しよくする機会さえない。さすがに技術部の上役となれば違うだろうが、はっきりとしたことはわからない。十年、それ以上の時間をかけて昇しよう進しんしなければ、糸口をつかむことすらできそうにないのだ。待てなかった。

待てるはずがない。

彼女はモトローリィ支部の技術部長〝ジェントルゲイザー〟の部屋を訪おとずれ、ＥＭＵ脱だつ合ごうの意思を直接伝えた。

背が低く、やたらと目が大きくて、老人のようにも子供のようにも見える、実際は四十代半ばの技術部長は、当然、慰い留りゆうした。「あなたはまだ若い。考えることもいろいろおありでしょうが、匠合にとどまって研けん鑽さんを積むことが、きっとあなたのためになります」

「そうは思えません。匠合の戒律コマンドは機術の可能性を狭せば

めるだけです」

「人には守らねばならない節度というものがあるのですよ、〝メロウゴールド〟」

「なぜあたしたちが人でいないといけないんですか」

「機術は魔ま術じゆつとは違います。人の世に利する技術です。我々機術士マシニストは自らその道を選んだ者たちなのです」

「どうやら、あたしは違う道を選ぼうとしているみたいです」

「あなたの父親が、かつて我々の人名録デイレクトリから削さく除じよされ、現在〝ピンクショット〟と呼ばれている者だということは、承知しています」

　予想していたわけではないが、意外ではなかった。それでも彼女は驚おどろいてみせた。周しゆう章しよう狼ろう狽ばいするふりをした。

　温厚な人格者というのが〝ジェントルゲイザー〟の評判だった。しかし、それだけの男ではないことが、そのときわかった。

　慌あわてふためいている、そう装よそおっている彼女を見て、技術部長は明らかに愉たのしげだった。

「我々はすべて承知の上で、それでもあなたがＥＭＵにとって有ゆう為いな人材であると判断したからこそ、その素質、能力にふさわしい待たい遇ぐうを与えているのですよ。我々の道は、あなたが考えるよりも広く深いのです」

「……あたしには、そうは思えません」

「年を重ね、経験を積みなさい、〝メロウゴールド〟。高みに至れば、見えなかったものが見えてきます。そのために時を費ついやすことを恐おそれてはなりません」

「〝沈黙サイレンス〟という男を知っていますか」

「サイレンス……？」技術部長はかすかに眉まゆをひそめて考えるそぶりを見せた。

演技だろうか。そうは思えなかった。モトローリィ支部の技術部長といえども、何もかも知っているわけではないということだ。欲しい情報に接するためには、どこまで昇のぼらないといけないのか。気が遠くなる。彼女はすでに決断していた。

「あたしは〝ピンクショット〟の娘むすめです」

彼女は懐ふところに隠かくしていたリトルジョニーを素す早ばやくとりだして、銃じゆう口こうを技術部長の額に向けた。途と端たんに技術部長は目を見開いて身じろぎした。怯おびえている。拳けん銃じゆうを知っているのだ。

一いつ般ぱんの機術士は見たことも聞いたこともないだろう、黒色火薬ブラックパウダーを用いた武器についての知識を、技術部長は持っている。

ＥＭＵは何を隠しているのか。

技術部長が言うように、時を費やせば、そこに到とう達たつする道が開かれるのかもしれない。

でも、そのために十年、二十年待つなんて、彼女にはできない。

「さようなら、〝ジェントルゲイザー〟。あたしは〝メロウゴールド〟の名を捨てます」

「……我々が、認めるとでも？」

「それはあなたがたが判断することです。あたしがどうするかは、あたしが決めます──ああ、動かないでくださいね？　あなたを殺したって何の意味もないけど、やらなきゃいけないときは、あたし、ためらいませんから」

「我々もまた、躊ちゆう躇ちよせずに適切な処置をとることになります」

「ご自由に」彼女は微笑ほほえみながらあとずさりして、部屋の出口へと向かった。「昔に戻もどるだけです」

「あなたには失望しました、〝メロウゴールド〟」

彼女は答えなかった。〝メロウゴールド〟はもう彼女を示す名で

はないからだ。それでは、今の彼女は何者なのか。自分自身を探す必要はない。彼女はここにいる。

　彼女は技術部長の部屋をあとにして、走った。すぐに追っ手がかかることはわかっていた。執行部の特とく殊しゆ部隊トラジェディー。組織の中にいて接触できないのなら、いっそ彼らに追われる身になってしまえばいい。

　父がたどった道をなぞれば、どこかにたどりつけるのではないかという思いもあった。カリオサークを出て、彼女を〝沈黙サイレンス〟に預けるまでの間、父が誰だれの手も借りなかったわけではない。父には行く先々に「知りあい」がいた。必ずしも親しそうではなかったが、彼らは父と彼女に隠れ家がを提供したり、父のために物資を買い集めてきたり、製作物を売ばい却きやくする仲ちゆう介かいをしてくれたりした。彼女は彼らの居場所や顔、名前をおおよそ記き憶おくしていた。父と旅した街を回って、彼女はまず彼らにあたってみるつもりだった。

　ＳＳとは何なのか。

　父はどこにいるのか。何をしているのか。

　誰が〝沈黙サイレンス〟を殺したのか。

　本当にトラジェディーなのか。

　彼女は歩いた。馬車に乗った。乗馬を覚えた。ときに身を隠した。移動した。

　父の協力者たちはなかなか見つからなかった。もしかすると、トラジェディーに始末されたのかもしれない。

　トラジェディーはどうやってか彼女を発見して、何の前まえ触ぶれもなく襲おそいかかってきた。あわよくば返り討うちにし、彼らを捕とらえて尋じん問もんしよう。そんなことを考えていた自分の甘さを笑いたくなった。彼らは〝沈黙サイレンス〟よりも寡か黙もくだった。全身を覆おおう衣を身につけていて、正体不明だった。一人の例外もなく手て練だれだった。戦せん闘とうの専門家でもな

い彼女が、まともにやりあって勝てる相手ではなかった。

　彼女は以前から行っていた薬物による肉体の強化をさらに進めた。体術の研究もした。余よ裕ゆうがあれば、リトルジョニーに改良を加えた。機術はもともと魔ま術じゅつだ。工く夫ふう次し第だいで破は壊かいの力にもなる。攻こう撃げき用の機術を編みだし、トラジェディー相手に試ためしつつ、改善した。

　百五十五サンチしかなかった背を、百七十サンチ近くまでのばした。金きん髪ぱつを黒く染めた。薬物の副作用で、青かった目が緑色に変わった。そのうち光を放つようになったので、遮しゃ光こう硝子ガラスをはめこんだ眼鏡めがねをかけるようにした。もぐりの医術士に頼たのんで、顔をいじった。声も変えた。彼女は右みぎ利ききだったが、意識的に左手を使うようにした。それでもトラジェディーの追つい跡せきはやまなかった。

　サンランド無統治王国のケメックで、見覚えのある男と行き違ちがった。

　見直すと、鼻の形や髪かみの色、肉づきが記憶とは重ならなかった。商人風の装いで、だいぶ恰かっ幅ぷくがいい。別人か。

　念のために、声をかけてみた。「〝フラスコ〟」

　彼女が知っている名を呼ぶと、男はちらりとこっちを見ただけで足を速めた。彼女は男を追った。男は路地に入った。

　彼女は後ろからもう一度、声をかけた。「わからないかもしれないけど、あたし、カレンなの。〝フラスコ〟。あたしのこと、覚えてない？」

「……馬鹿な」男はようやく足を止めて振ふり返った。「カレンだと。嘘うそだろう……？」

「嘘じゃない」

「お父さんは？」

「わからない。捜さがしてるの」

「一いっ緒しょに逃にげたんじゃないのか」

「途と中ちゆうで別れた。〝沈黙サイレンス〟を知っている？」

「……マーティンの友人だな」

　マーティン・レッド、ロバート・グッド、ルーカス・トッド、ジョン・ウッド。すべて父の名だ。カリオサークにいたころは、ＥＭＵでは〝フレンジー〟、〝黒雄鶏ブラツクルーの会スターズ〟ではマーティン・レッドを名乗っていた。〝フラスコ〟は〝黒雄鶏ブラツクルーの会スターズ〟で父と一緒に活動していた仲間の一人だった。

「名を聞いたことがあるだけだが。きみは彼のところにいたのか？」

「一時期。〝沈黙サイレンス〟は殺された」

「そうか……」〝フラスコ〟は温厚そうな顔をゆがめて、厚ぼったい手で頬ほおを撫なでながら、周囲に視線をめぐらせた。

「今は大だい丈じよう夫ぶ」彼女は肩をすくめてみせた。「あたし、ＥＭＵにいたの。三年間。抜ぬけて、追われてる。だいぶ慣れてきて、やつらが近くにいるかどうかくらいは、だいたいわかるから」

「やっぱりマーティンの娘むすめなんだな」〝フラスコ〟は一いつ瞬しゆん、苦く笑しようして、すぐに沈ちん痛つうな面おも持もちを浮うかべた。「──スコットは捕つかまって封印シールされたらしい。ダフニーと〝ライムナット〟は殺やられたようだ」

　皆、〝黒雄鶏ブラツクルーの会スターズ〟に属していて、彼女とも面識がある男たちだった。〝フラスコ〟は情報を持っている。当時、この男は誰よりも人がよさそうだった。今もそう見える。ただ、父は彼のことを「あれで、あいつはやり手だ。何をやっても生きていける」と評していた。頼たよりにしてもいいのではないか。

　彼女はすぐにその考えを打ち消した。トラジェディーは甘くない。かつて父と彼女がなんとか生きのび、現在、彼女が無事でいるのは、決して一いつ箇か所しよにとどまらず移動しつづけ、できるだけ他人と交わらず、痕こん跡せきを残さないように気をつけてきたからだ。〝フラスコ〟との接せつ触しよくも、この場かぎりにとどめておいたほうがいい。

「ＳＳを知ってる？」

「カレン……」〝フラスコ〟は目を細めた。「やめておけ。それにはふれないほうがいい」

「知ってるんだ」

「いや、私は知らない。くわしいことは何もな。私は関かかわらなかった」

「お父さんは関わってた？」

「……マーティンは天才だった。私はもう機術から離はなれたんだ。なぜだと思う。私はマーティンを知っているからだ。彼のように、すべてをなげうって機術を追究することなど、私にはできない」

「お父さんはあたしを連れて逃げた」

「だが、結局、捨てたんだろう？」〝フラスコ〟は目を伏ふせた。「……すまない」

「いいの」彼女は首を振った。「でも、あたしは捨てられたと思ってない。〝沈黙サイレンス〟はいい人だった。お父さんはあたしと彼を引きあわせてくれた。それはあたしにとって、とても大事なことなの」

「きみも絶対Ａ禁制品Ｃに手を出しているのか」

「うん」

「匠しよう合ごうはそのことを知っているんだね」

「疑いなく」

「〝黒雄鶏ブラツクルーの会スターズ〟は壊かい滅めつした」

「ええ」

「スコットは封印シールされた」〝フラスコ〟は小さなため息をついた。「──私はそう言ったが、あの男はどうやら逃げたらしい」

「逃げた……？」

「きみも知っていると思うが、封印シールはまやかしだ。破る方法がある。ただ、匠合に身み柄がらを拘こう束そくされていたら、打つ手がない。どうやってか知らないが、スコットは脱だつ出しゅつした。名を変えて、エルデンにいるという話を聞いたことがある」

「いろいろ知ってるんだ」

「このなりを見ればわかるだろうね。私は商売をやっている」

「儲もうかってそう」

「まあまあだ」〝フラスコ〟は、たぶんわざとだろう、ずるそうに微び笑しようしてみせた。「今はケメックにいるが、サンランドだけじゃない、世界中を回っている。手を広げれば広げるほど、根も葉もない噂うわさをふくめて、様々な話が耳に入ってきてね。情報と人脈は宝だ。それらは金以上に私を守ってくれる」

「あなたはＳＳの何を知っているの？」

「関わらないほうがいい。知らないほうがいい。私はそう思う」

「ザムエルは？」

　先ほど〝フラスコ〟が挙げた男たちは全員、とくに父と深くつきあっていた〝黒雄鶏ブラツクルーの会スターズ〟の会員だ。しかし、一人だけ欠けていたことに、彼女は気づいていた。〝フラスコ〟は失念したのか。あるいは、ザムエルの安否だけは知らなかったのか。もしくは、何か理由があって、あえて言げん及きゅうしなかったのか。

「きみには敵かなわないな」商人は口をへの字に曲げて、鼻から息を吐はいた。「──ザムエルは慎しん重ちような男だった。変装の名人でもあったしね。用心深く、そのうえ大だい胆たんだった。あれはまだＥＭＵのカリオサーク支部にいるよ。おそらく、誰だれもあれが〝黒雄鶏ブラツクルーの会スターズ〟の会員だったことを知らないだろう」

「彼はＳＳについて知っている？」

「なぜそう思ったんだね」

「勘かん」

「違ちがうな」〝フラスコ〟はやさしくたしなめる口調で言った。「当てずっぽうだろう？」

「そうとも言う、かな」

「カレン」

「うん」

「モルフォ党という組織を知っているかい」

　唐とう突とつな問いだった。彼女は眉まゆをひそめた。「たしか――ハッツフォーの独立戦争で初代軍王ガハムドニオ・ザイレンを支し援えんした……」

「それが実績としてはもっとも有名な事例だね。だが、モルフォ党は何百年もの間、世界中で無数の戦争に関かん与よしてきた。かの有名な〝女め豹ひよう〟が率いていた〝旅団ブリゲイド〟は、反政府軍や革命組織だけに荷か担たんする一種の義ぎ賊ぞく的な軍事集団だったというが、それとはまったく違う。党首キプリス・モルフォが実在の人物なのかどうか、私にはわからない。ただ、モルフォ党は、今日もどこかの戦場で死を撒まき散らしているだろう」

「それと何の関係が？」

「モルフォ党が、グラー大陸で長ちよう銃じゆうを使用したという噂がある」

「長銃を……？」

「ああ。それに、燃える水ＣＯＷを利用した焼しよう夷い弾だんで焼かれた森もあるとか。長銃にせよ、焼夷弾にせよ、私に絶対Ａ禁制品Ｃの知識があるからそれとわかることで、知らない者は魔ま術じゆつか何かとしか思わないだろうがね」

「わからない」彼女は唇くちびるの端はしを嚙かみそうになって、我が慢まんした。「どう繫つながるの？」

「言ったろう、カレン。私は知らないんだ。知らないほうがいいと、私の勘が告げている」

「身を守るために？」

「ああ、そうだ。私がぴんぴんしている理由がわかるだろう。つまり、私は分際をわきまえているんだ。自分の能力以上のことはしない。できないんだよ」

「それなら、このことは話さないほうがよかった」

「そのとおりだ」〝フラスコ〟は眉を八の字にした。心底から悲しそうだった。「きみにとってもよくない。こんなことは言うべきじゃなかった」

「違うと思う」

　彼女は正体を偽いつわって暮らしてきた。方便として嘘うそをつくことはできる。べつに苦痛を感じることもない。なぜなら、自分自身を騙だましているわけではないからだ。何が彼女にとっての真実か、彼女は知っている。

　父もそうだったし、〝沈黙サイレンス〟も同じだった。〝フラスコ〟はどうだろう。彼は自分を偽っている。生きるために、そうせざるをえなかった。本当は偽りたくなんかないのだ。

「あたしのために、あなたは話してくれた。あたしがそれを必要としてるから。あたしはそう思う」

「……きみはマーティンによく似ている。似すぎているくらいだ」〝フラスコ〟は目を伏ふせて、手で口を覆おおった。「ザムエルの居所は教えよう。ただ、彼は何も語らないかもしれない」

「それならそれで、しょうがない」

「モルフォ党の件については、確証があるわけじゃない。たとえば、私たちの〝黒雄鶏ブラツクルーの会スターズ〟のような━もっと大規模な結社があるかもしれないわけだから」

「あったら、潰つぶされているんじゃない？」

「そうだろうな」〝フラスコ〟は眉を曇くもらせたが、すぐに笑え顔がおを作った。「マーティンに会えることを願っているよ」

「うん。ありがと」

彼女はカリオサークへと急行して、ザムエルの――〝ヴォルケーノ〟という名で、ＥＭＵカリオサーク支部の技術部事務次官補を務めている男の家を訪ねた。

別れ際ぎわに、〝フラスコ〟はいくつかの助言を彼女に授さずけてくれた。まず、面会を求めるのではなく、強ごう引いんに対面しろ。ザムエルに会ったら、チャールズについて訊きけ。それから、自分の正体は明かさないほうがいい。彼女はそのとおりにしたから、家を訪ねたというのはかなり控ひかえめな表現で、実際は深夜に押し入ったのだ。

彼女は寝しん台だいで上半身だけ起こしているザムエルの額にリトルジョニーの銃口を突つきつけて、その容姿をまじまじと観察した。

彼女が覚えているザムエルは、まだ若い木ぼく訥とつな男だった。それとは似ても似つかない、頑がん固こそうな中年男といった印象で、まるで慌あわてている様子がないのが奇き妙みようだった。〝フラスコ〟はザムエルのことを用心深くて大だい胆たんだと言っていた。たしかに動じない男のようだった。

「チャールズに会わせて」

「きみは何者だ」

「あたしは……」彼女はとっさに名乗った。「〝ハニーメリー〟」

逃とう亡ぼうの間、彼女はベラとかベルとかマーサとかリンダとか、いろいろな変名を用いていたが、ぜんぶ適当だった。父もよく思いつきで名前を決めていた。そのことが頭をよぎって、彼女は笑いそうになった。もちろん、そんな場面ではなかったから、笑みを押し殺そうとした。それでも、唇の端が少しだけ動いてしまったかもしれない。その瞬しゆん間かん、ザムエルはうなずいた。

「いいだろう。ただし、その前に、きみが誰だれか教えてほしい」

彼女は決断を迫せまられた。

正体を明かさないほうがいい。〝フラスコ〟にはそう言われた。彼女は従うつもりだったのに、正反対の要求をぶつけられた。しか

も、ザムエルは落ちついていた。彼女が引き金を引けば、ザムエルは脳みそをぶちまけて死ぬ。それなのに、これっぽっちも動どう揺ようしていなかった。脅おどしても無む駄だだということだ。

　彼女はリトルジョニーを引っこめた。「あたしはカレン。マーティンの娘むすめ」

　ザムエルは軽く顎あごを引いた。うなずいたようだった。「大きくなった」

「あなたは誰？　──って感じ」

「言っておくが、きみの父親がＳＳに参加したことは、私も聞き及およんでいる。ただ、それ以上のことは知らない」

　彼女はあやうく表情を変えてしまうところだった。なんとか持ちこたえた。「そうなんだ」

「私はＳＳの中には立ち入っていない。窓口ですらない。窓口の窓口だ。覚かく悟ごを決めさえすれば、いつでも足を踏ふみ入れることができるだろう。その場所に立っているだけで満足している。私は臆おく病びよう者ものなのだ」

　彼女は少しだけ首を傾かたむけた。「人それぞれでしょ」

　ザムエルはかすかに口くち許もとをゆるめた。「きみがチャールズに会う手配はしよう。だが、私にできるのはそこまでだ。それから先はきみ次し第だいということになる」

「もちろん」

「カレン」ザムエルはため息ともつかない小さなため息をついた。「私はマーティンがうらやましかった」

　ザムエルの屋や敷しきはカリオサークの郊こう外がいにあった。豪ごう華かではないが、立派な建物だった。広い庭は美しく整えられていた。彼には妻がいて、息子むすこが二人、娘は三人もいた。彼はずっとカリオサークで暮らしていた。家族に囲まれ、仕事に精を出して、技術部事務次官補というなかなかの要職にあった。かつては〝黒雄鶏ブラツクルーの会スターズ〟の会員だった。ＳＳの窓口の窓口役をしていることで、彼はおそらく、何らかの見返りをえているはずだ。少なくとも、それだけで満足している、と自ら語っ

たように、精神的には。

「うらやむことなんか、ないじゃない」

「……そうだな」ザムエルは下を向いて、唇くちびるをさわった。

　嫌きらいだな。

　下を向いている人の姿を見るのって、大嫌い。

　ザムエルはさっそくチャールズに連れん絡らくをとった。その翌日の暮れ方だった。彼女は指定された待ち合わせの場所へと向かった。

　カリオサークは西に海を望む森の街だ。高い塔とうが建ち並ぶ中心街から離はなれれば離れるほど、緑が多くなる。多種多た彩さいな樹木と草花に彩いろどられた庭園。並木道。幼少時代をこの街ですごした彼女にとっては、すべてが懐なつかしかった。

　ギーレンズ通りの楓かえではまだ色づいていなかったが、夕ゆう陽ひに染められていた。

　男はアール・ベルアノンのスーツを身にまとい、黒いシルクハットをかぶって黒こく檀たんのステッキを持っていた。口くち髭ひげは付け髭めいていて、青い目をしていた。背は彼女と同じか、少し高いくらいだった。年ねん齢れいは三十代か、四十代か。とくに若々しくもなく、老ふけて見えるわけでもない。カリオサークにはよくいるタイプの男だった。

　男は向こう側から歩いてきた。

　彼女も歩いていった。

　二人はすれ違ちがった。

　その直後だった。

　彼女はリトルジョニーを抜ぬいて男の腰こしに銃じゆう口こうを押しあてた。「あたしは役に立つ」

　男は青い目で彼女を一いち瞥べつしてから、シルクハットを少しだけ持ちあげてみせた。「……そのようだ」

Omenage 900 8th revolution 24th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

chapter.4

あるいは悲劇のリアリスト

「――というわけで、あたしはＳＳに入りこむことに成功したんだけど……」

〝ハニーメリー〟はリビングの床ゆかに正座している。

　彼女の話を聞いているマリアローズたちはソファーだ。

　マリアローズはソファーに腰かけて、立てた片方の膝ひざを両りょう腕うでで抱かかえこんでいた。

　ピンパーネルはマリアローズの右みぎ隣どなりですっとした座り姿を見せていて、左隣にいるきゅーはいつもどおりもふもふしている。

　そのきゅーにもたれかかっているトマトクンは、居い眠ねむりをしたり目を覚ましたりだ。

　ピンパーネルの右隣で前まえ屈かがみになっているルーシーは、きっとハニーの胸むな元もとでも見ているのだろう。

　しばらく前に、ハニーはボディスーツのファスナーを胸の途と中ちゆうまで下ろした。途と端たんにルーシーの視線がその部分に釘くぎ付づけになったことに、ハニーは気づかなかったのか。あれだけあからさまに凝ぎよう視ししているので、気づかないはずはないと思うが、どうでもいいのかもしれない。それくらいハニーにとってルーシーは、本当に、まったく眼中にないということだ。それはそれで哀あわれといえば哀れな話だけれど、まあ、僕が哀れむのもなんか、ね。

「ＳＳ、か……」マリアローズは膨ふくらました右のほっぺたを人差し指でつつきながら、天てん井じようを仰あおいだ。「ぜんぜん聞いたことないや。あたりまえなんだろうけどさ」

「正式名めい称しようは〝贖罪のスカーレツト緋山羊スケープゴート〟」ハニーは指で宙にＳＳと描かいてみせた。「それでＳＳ」

「トマト」マリアローズはきゅーのもふ毛に半ば顔をうずめているトマトクンの髪かみの毛を引っぱった。「きみはどう？　聞いたことない？」

「……むあ」トマトクンは三分の一くらい目を開けてこっちを見た。「んあ？　何だ……？」

「てゆうか、よだれが……」マリアローズはため息をつき、テーブルからティッシュをとってトマトクンの顔やらきゅーのもふ毛やらをふいてやった。「──きゅー。きみも、黙だまってなくたっていいんだからね。邪じや魔まだったら、どかしちゃってもかまわないんだから」

「くう」きゅーはうなずいてみせたが、どうせどかしたりしないのだろう。

「もう……」

「あの」ハニーが身を乗りだしてきた。「最初から思ってたんだけど」

「何？」

「その生き物」ハニーは比ひ喩ゆではなく文字どおり輝かがやく瞳ひとみできゅーを見た。「人間の言葉がわかるの？　そもそも、どういう生き物？　異界生物フリークス？　初めて見た」

「きゅう……」きゅーは首を傾かしげた。

「きゅーは！」ルーシーはここぞとばかりに立ちあがった。目はしっかりハニーの胸元を見つめている。筋金入りだ。「強いんですよ！　すごいです！　ぼくもまだ、一対一、なかなか勝てませんから！」

「へえ」ハニーは軽く流して、マリアローズに顔を向けた。「それで？　人間の言葉は理解してるの？」

「うん。喋しやべるのは、さすがに無理だけどね。何を言いたいのかは、だいたいわかるよ」

「どうやって？」

「どうやってって……何だろ。慣れかな？　気がついたらわかるようになってたけど。きゅーが異界生物フリークスなのかとか、そのあたりは知らない。まあ、どうでもいいっていえば、どうでもいいしね」

「なんで？」

「関係ないでしょ。きゅーはきゅーなんだから」

「そういうことじゃなくて、知りたいとは思わない？」

「知ったってべつに、それで何かが変わるわけでもないし……」

「どうして？　なんで変わらないの？」

「や、なんでって訊きかれても……」

「知ること、理解することで、何も変わらないなんて、ありえないとあたしは思うけど」

「そんなこと言われたって、きゅーだって自分のことはよくわからないっぽいしさ。たとえ知りたくたって、知る方法がないんだから、しょうがないでしょ」

「興味はない？」

「なくはないけど」

「だったら、なんで知るための方法を探そうとしないの？」

「……探すっていっても、そんな──知らなきゃ困ることが、何かあるわけでもないし」

「興味はあるけど、とくに問題がないから、そのままにしておいてるってこと？」

「まあ、そうかな」

「現実的なんだ」

「侵入者クラッカーだしね」

「でも、マリアって──」

「わ。いきなり呼び捨て……？」

「だめ？」

「いいけどさ……」

「マリアって、魔術士？　じゃないよね？」

「違ちがうけど」

「見た感じ、あんまり侵入者クラツカーに向いてるとは思えないけど」

「悪かったね。わかってるよ、そんなことくらい」

「じゃあ、なんで侵入者クラツカー？　マリアって女の子でしょ？」

　きたよ。久しぶりに。

　ぷちんときたよ。

　マリアローズはぐっとハニーに顔を近づけ、その鼻を思いきりつまんでやった。「いい？　二度は言わないから、一度で理解して。僕は女じゃない。わかった？」

「……うん」ハニーはそっとうなずいて、マリアローズの顔をまじまじと眺ながめた。「理解したけど、ちょっと信じられないかな？　骨格とか、いろいろふくめて、男とは思えない。どうなってるの？」

「べつにどうもなってないから」

「じゃあ、見せて？」

「はあ？」

「全身。見てみたい」

「な……」マリアローズはハニーの鼻から指を離はなして身を引いた。「な、何言ってんの、この人、いきなり。怖こわいんだけど……」

「あ。何だったら、あたしも見せるし。見せっこしよ？」

「しないよ！」

「ぼ、ぼくじゃあだめですか！」ルーシーが唾つばを飛ばしながら叫さけぶと、すかさずピンパーネルが「ダメdeath」とつめたく切って捨てた。

　打ちのめされ、しゃがみこんだルーシーになんて、ハニーは目もくれない。

「なんで？　いいでしょ？　ちょっとくらい」

「よくなぁーいっ！」

「だったら、見せてもらうかわりに、何かする？　何でもいいけど」

「な、な、何でもって何だよ！」

「いや、あたしもよく知らないけど。してほしいこととか、もしあったら、する。あたしのことだから、きっと何でもうまくできると思う」

「しないでいいから！　てゆうか、してほしいことなんてないし！　だいたい、なんで見せなきゃならないんだよ！」

「だって、知りたい」

「知らないよ！　きみの好こう奇き心しんとか欲よつ求きゆうとか、僕の知ったことじゃないから！」

「えー……」

「えー、じゃないよ！　だいたい、話の途と中ちゆうじゃないか！　ＳＳに入って、それからどうしたんだよ！　大事なとこでしょ！」

「話はいつでもできるし」

「見せっこだって、いつでもできるだろ！」

「じゃあ、話のあとで？」

「しないって言ってるでしょ！　何なの、この人！　かなりうざいんだけど！」

「……ＳＳ？」トマトクンは顎あごをごしごしとこするように撫なでた。

「え──」マリアローズはトマトクンを見た。「何？　知ってるの？　ＳＳ」

「あー……」トマトクンは片方の眉まゆをつりあげて、首をひねった。「どこかで聞いた覚えがあるような気もするんだが。何だったかな」

「聞いた覚えがあるような気もするぅ……？」

「気のせいかもしれんな」

　マリアローズは吐はき捨てた。「気のせいなんじゃないの」

「うむ……」トマトクンは急に鼻をひくひくさせた。

　きゅーが窓のほうに目をやって、トマトクンもそっちを見やった。ピンパーネルが腰こしを浮うかした瞬しゅん間かん、背筋が寒くなった。

「何か──」ルーシーはそこまで言って口をつぐんだ。

　ハニーが腰のケースから何かをとりだして、片かた膝ひざ立ちの体勢になった。

　トマトクンときゅーが立ちあがった。ピンパーネルはすでに雌し雄ゆう一いつ対ついの短たん剣けんを抜ぬいて身構えている。

　この家のリビングには大きすぎる窓がある。カーテンは閉めていない。いつものことだ。まだ早朝とはいえない時間帯だが、外はわずかに明るい。窓の向こうは裏庭だ。最近、きゅーが園芸に凝こっていて、隅すみのほうに小さな畑を作っている。きゅーが麦わら帽ぼう子しをかぶって畑仕事に精を出している姿は、かなり愛らしい。そんなことはどうでもいい。

　裏庭には誰だれもいない。

　一瞬前まで、誰もいなかった。

　現れた。

右から。そして、左から。

二人とも、ぼろぼろの外がい套とうを身につけている。フード付きだ。右のやつは腰の両側に剣らしきものを一本ずつ提さげている。左のやつが背に負っている長物は槍やりだろうか。

ハニーが叫んだ。「――トラジェディー……！」

双そう剣けん持ちと槍持ちが一いつ斉せいに窓を蹴けり砕くだいた。

すっ飛んでいったのはピンパーネルときゅーだった。双剣持ちには、ピンパーネルが。きゅーは全身の毛を逆立て、黄金色に輝かがやかせて、槍持ちに襲おそいかかった。ルーシーもモトロール刀を持って駆かけだそうとしたが、マリアローズは手をあげて制した。「――まだ！　ルーシーは待機……！」

ルーシーはおとなしく従った。「はい！」

トマトクンも様子を見る構えだ。まあ、剣がないしね。寝ていたところを起こされて、そのまま話を聞いていたから、武器は部屋に置いてある。トマトだけじゃなくて、僕もだけどさ。くそ。不注意だった。家の中だから、つい。

ハニーは腰のケースからとりだしたものを両手で握にぎり、その先せん端たんを窓のほうに向けている。あれが話に出てきた拳けん銃じゆう、リトルジョニーか。「ごめん、あたしのせい……！」

マリアローズは舌打ちをした。「窓の修理代……」

「え？」

「誰に請せい求きゆうすればいいの？　やっぱりＥＭＵ？　あの窓、高いんだけど」

「……現実的なんだ」

「あったりまえでしょ」

ピンパーネルときゅーは不届き者たちを室内には入れなかった。三人と一頭――というか、きゅーを頭で数えるのもなんだから、この際、四人でいいだろう――四人は裏庭でやりあっている。ピンパーネ

ルもきゅーも押しているけれど、双剣使いにしても、槍使いにしても、今のところはまだ、完全に押し切られてはいない。持ちこたえている。ピンパーネルときゅーの技量を考えれば、敵は健けん闘とうしていると言ってもいいだろう。大健闘だ。

　あいつら、弱くない。

　機術士匠しよう合ごうがあんな腕うで利ききを飼っているなんて。

「む」トマトクンが鼻柱に皺しわを寄せた。「まだくるぞ」

「ルーシー！」

「はいっ……！」

　マリアローズに命じられて、ルーシーは待ってましたとばかりに飛びだした。それとほとんど同時だった。槍使いは、槍を鋭するどく突つきだしたり振ふりまわしたりして、接近戦を挑いどもうとするきゅーからなんとか距きょ離りをとっていた。そこに横合いから援えん軍ぐんが登場したのだ。

　新手は外套を身につけていない。黒っぽい、ボディスーツというよりは甲かつ冑ちゆうみたいなものを着ている。トマトクンほどではないかもしれないが、背が高い。髭ひげを蓄たくわえ、長い髪かみを振り乱みだして、大剣を両手持ちしている。

「あ……」トマトクンが低い声をもらした。気になったけれど、今はそれどころじゃない。

　きゅーは斜ななめ後ろに跳とんで、大剣使いの斬ざん撃げきと槍使いの突きをいっぺんに回かい避ひした。

「ＲＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨ……！」

　ルーシーが大剣使いに突っかかってゆき、きゅーはふたたび槍使いに迫せまった。

　ピンパーネルは双剣使いをだいぶ追いこんでいる。

　誰かが相手を倒たおせば、一気にこちらが有利になるだろう。

　てゆうか、トマトが加われば、あっという間に決着がついちゃいそうなんだけど。

　ちらっと視線を送ってみたら、トマトクンは大剣使いを目で追っていた。呆あつ気けにとられている。そんなふうに見える。トマトが？　めずらしいこともあるものだ。もしかして、大剣使いを知っているのか。同じ大剣使いだけに。や、そんなのは関係ないだろうけど。

「……トマト？」

「ありえん」

「へ？」

「ジヌビニフ」トマトクンは呻うめくように言った。「メルアドラの……ジヌビニフだと？　そんなわけがない」



　メルアドラ。ジヌビニフ。マリアローズには何のことやらさっぱりだが、ハニーにとっては違ちがうらしい。

「メルアドラ……？」ハニーは目を見開いて、蛍光緑ルミナスグリーンの瞳ひとみを爛らん々らんと光らせていた。「それって、昔、中部ミッド諸国域ランズにあったメルアドラ……？」

　トマトクンは答えずに外へ向かって走りだした。「どけ、ルーシー……！」

「──はいっ⁉」振り向こうとしたルーシーを、横よこ薙なぎの大剣が猛もう襲しゆうした。「うわっ……！」

　間かん一いつ髪ぱつだった。ルーシーは地面に身を投げだして、どうにかこうにか大剣をよけたが、危ないってば。

「ちょっ──」マリアローズはトマトクンを止めようとした。遅おそかった。

　トマトクンはもう、大剣使いに飛びかかろうとしている。

　あの。素す手でなんですけど。鎧よろいも着てないんですけど。そのへん、忘れてない……？

「こい……！」トマトクンは無造作に踏ふみこんだ。斬きってくださいと言わんばかりだ。

　もちろん、大剣使いは誘さそいに乗った。あの大剣。柄つかがずいぶん長い。短たん槍そうの穂ほ先さきが巨きょ大だいな剣身になっているような感じだ。柄を握っている左右の手の間かん隔かくが広い。そのおかげで振りが速いのか。

　大剣とはちょっと思えない速度だった。斜め上から素早く振りおろされた大剣を、トマトクンは、でも──速くてちゃんとは見えなかったけれど、たぶん、その剣身の腹を、平手で打ち払はらった。「ふん……！」

　ふん、じゃないよ。

　いいけど。たいしたものだけど。

「俺を──」トマトクンは、バランスを崩くずした大たい剣けん使いの腹に膝ひざ蹴げりを見み舞まった。「覚えてないのか……！」

　大剣使いは息をもらしたが、声は出さずに大剣を構えなおそうとした。できなかった。トマトクンがさせなかった。手首だ。トマトクンは大剣使いの手首に、鉄てつ槌ついのような拳こぶしを打ち下ろした。「挨あい拶さつくらい、したらどうだ……！」

　もちろん、挨拶なんかできるわけもない。大剣使いは大剣を取り落とした。トマトクンはすかさず大剣使いの顎あごに掌しよう底ていを叩たたきこんでぐらつかせると、今度は首の後ろに手刀をぶちこんだ。大剣使いは崩れ落ちた。

「むう」トマトクンは顔をしかめて首を左右に曲げた。「意外と骨がないな」

「すごい……」ハニーは感心したり唖あ然ぜんとしたりしているわけではなさそうだ。何か企たくらんでいるのかもしれない。そんな顔をしている。

「あっ……！」とルーシーが叫さけんだ。

　破は裂れつ音おんがして、あっという間に裏庭が白い煙けむりに包まれた。何も見えない。

「ぬ!?」「きゅう！」「──ッ……！」「わわわわ……！」

「──逃にげられる……！」ハニーはゴーグルをかけて立ちあがり、窓のほうへ向かった。

　マリアローズも追いかけたが、外の煙が室内にも傾なだれこんできた。視界が──って。

　それより何これ、痛っ……!?

「め、目が……！」

「催さい涙るいガスだから！　気をつけて！」

「遅いよ！　早く言ってよ！　そういうことは──ううううう、いたたたたたた、目が……！」

　おかげで、悲しくもないのに涙なみだが。ダメだ。前に進むどころの騒さわぎじゃない。マリアローズは床ゆかに座って目をこすった。

「目、こすらないで！　かえってよくないから……！」

「──だから、そういうことは先に言えっての……！　うああぁぁぁぁぁぁぁもう……！」

　結局、一分か二分は涙を滝たきみたいに流しながら悶もだえていただろう。ピンパーネルはとっさに目をつぶったようでほとんど平気だったらしいし、鈍どん感かんすぎるのではないかと思えるほど苦痛に強いトマトクンもかまわず逃げる敵を追おうとしたみたいだが、残念ながら取り逃にがしてしまった。双剣使いと槍使いは。

　連中も、さすがに仲間を担かついでゆく余よ裕ゆうはなかったらしい。大剣使いは置き去りにされた。

　煙が晴れた裏庭で、マリアローズたちは失神して大の字になっている大剣使いを囲んだ。

　まだ目が痛くて、ぬぐってもぬぐっても涙がにじむけれど、だいぶましになった。催涙ガス。錬れん金きん術じゆつの生成物か何かなのだろうか。ハニーみたいにゴーグルをつけていれば防げるが、備えがない相手にはいい目くらましになる。もっとやばいものでなくてよかった。そう考えるべきだろう。危なかったんだ。

　大剣使いは、よく見ると顔に火傷やけどを負っていた。身につけているやたらとパーツが多そうな甲かつ冑ちゆうは、煤すすやら何やらで汚よごれて黒ずんでいたのだ。なんでも、環かん状じよう通どおりでハニーが大剣使いの外がい套とうに火をつけたらしい。それでこんな有様になったのだろう。右みぎ膝ひざから出血している。これはルーシーが負わせた傷か。けっこうな深ふか傷でだ。よくもあれだけ動いていたものだ。

　ところどころ焼け焦こげているが、長い髪かみと髭ひげは金色だ。頭に何かつけている。冠かんむりか。これはもともとだろう。黒い。茨いばらをかたどった漆しつ黒こくの冠だ。王様でもあるまいし。

「メルアドラって──」ハニーはまだゴーグルをつけている。「言ったよね？　さっき、メルアドラのジヌビニフって」

「ああ」トマトクンは大剣使いのそばにしゃがんだ。「だが、ないな」

「ないっていうか、メルアドラって、魔ま導どう王おうの時代より前にあった国じゃないの？」

　トマトクンは返事をせずに、いきなり大剣使いの顎と額を押さ

え、口を開けさせようとした。それより一いつ瞬しゅん早く、大剣使いが奥歯を嚙かみあわせるようなそぶりを見せた。気絶していたのではなかったのか。目が覚めていたのに、意識がないふりをしていたのかもしれない。

　大剣使いは白目を剝むいて、全身を痙けい攣れんさせはじめた。

「毒……！」ハニーは大剣使いに飛びついて、口の中に指を突つっこんだ。トマトクンが顎を押さえているから、嚙まれる心配はない。大剣使いは咳せきこんで嘔おう吐としたが、痙攣は止まらなかった。それだけではない。目から涙があふれる。すぐに涙に血が混じった。耳からも、鼻の穴からも、口からも出血しはじめた。

「……だめ」ハニーは大剣使いから離はなれて首を振ふった。「こうなったらもう、無理」

「そうか」トマトクンは一つ息をついて立ちあがった。「迂う闊かつだったみたいだな」

「どうせ何も喋しやべらないと思うけど」ハニーは手の甲こうでゴーグルを押しあげてずらした。「口を割るどころか、本当に喋らないの。そういうやつら」

　トマトクンは妙みようにうつろな黄玉トパーズの瞳ひとみで大剣使いを見下ろした。「人間なのか……？」

　ルーシーが身み震ぶるいをした。きゅーは隣となりのルーシーを見やって「くう」と低く呟つぶやいた。

　ピンパーネルはどこまでも静かに凪ないだ砂色の目でトマトクンを見つめている。

　マリアローズは動かなくなった大剣使いを一いち瞥べつして、リビングを振り返った。「……で、もろもろの修しゆう繕ぜん費ひはどこに請せい求きゆうすればいいの？　できればっていうか、慰い謝しや料りようもあわせて払はらってもらわないと、気がすまないんだけど？」

Omenage 899 10th revolution 13th day

サンランド無統治王国カリオサーク

chapter.5

西へ

ここが探し求めていた場所なのか。彼女にはわからなかった。

ただ、絶対Ａ禁制品Ｃだろうと何だろうと、研究、開発に関する禁きん忌きは一いつ切さいなかった。ＳＳの中では〝案内係アシヤー〟と呼ばれているチャールズに相談すれば、同じ分野を手がけている会員メンバーに引きあわせてくれた。カリオサークにはＳＳの拠点ベースがいくつもあった。それは開放されている民家だったり、裏口のある酒場だったり、古めかしい工こう房ぼうだったりした。チャールズ以外にも複数いる〝案内係アシヤー〟に申しん請せいすれば、会員メンバーは自由に各拠点ベースを利用することができた。カリオサークから一日半か二日ほど離れた場所に、大規模な地下工場アンダープラントもあったが、そこに立ち入るには資格タイトルが必要だった。

資格タイトルには二つある。許可証ライセンスと位階クラスだ。

許可証ライセンスは、会員メンバーの全員が持っている標準免状スタンダードや、一定期間、拠点ベースを占せん有ゆうする際に与あたえられる家主免状ランドロード、地下工場アンダープラントに出入りするための工員免状オペレーターなどがある。

位階クラスは〝案内係アシヤー〟、〝呼び子バードコール〟、〝旅人トラベラ〟、〝門番ドアマン〟等々、ＳＳ内での役割と称しよう号ごうが組みあわされたもので、功績に応じて与えられた。位階クラスはＳＳ内における暗号名コードネームでもあり、等級でもあったが、その仕組みは複雑だった。たとえば、〝案内人アシヤー〟は研究開発においては最下位の十七等級だが、人材管理においては上位の下に位置する五等級で、設備管理においては中位の八等級にある。誰だれが誰より上なのか下なのか、よほど上の位階クラス以外は判断しづらいようになっていて、大半の会員メンバーは上下の差を考えるよりも、自分の仕事に専念することを好んだ。

外との窓口であり、連れん絡らく係でもある〝案内係アシヤー〟のような位階クラスにある者は、むしろ変わり種だ。許可証ライセンスにしろ、位階クラスにしろ、自らの興味を突きつめ、技術を進歩させ、成果をあげるためにある。そのための手段でしかないのだ。

ほとんどの会員メンバーはある意味、純じゆん粋すいだった。彼

らはたいてい機術士か錬れん金きん士しで、中には魔術士や医術士もいた。得意分野で自分の才能をいかすことが彼らの望みで、ＳＳは彼らの欲よつ求きゆうによく応こたえた。代わりに、ＳＳが彼らに要求するものもあった。秘密の厳守だ。

　会員メンバーは、自分がＳＳの一員であることを会員メンバー以外に明かしてはならない。ＳＳに関する一切を口外してはいけない。ＳＳは会員メンバーの資格タイトルに応じて必要な情報を与えるが、それ以上、それ以外を求めることについては慎しん重ちようになるべきだ。ＳＳからの脱だつ退たいは認められない。機密を保持するためだ。会員メンバーは会員メンバーとして生き、会員メンバーとして死なねばならない。

　会員メンバーと会員メンバーとの橋はし渡わたしは〝案内係アシヤー〟が行う。他ほかの会員メンバーが何を研究しているかは、共同作業をする相手に尋たずねる以外、知るすべはない。

　何か大きなものに包まれているような感覚はあった。あるいは、丸めこまれている。

　機術士匠しよう合ごうでいう絶対Ａ禁制品Ｃ、錬金士組合では禁タ忌ブ物ーと呼ばれるたぐいのものは、ＳＳでは種子シーズと称しようされていた。種子シーズを利用、応用した果実フルーツの開発が、地下工場アンダープラントで行われているという話を工員免状オペレーター持ちの会員メンバーから聞いた。くわしい内容を知りたければ、〝案内係アシヤー〟に工員免状オペレーターを申請して地下工場アンダープラントで働けばいいと言われた。

　新しい火薬の開発と、機術の発展が彼女のテーマだった。彼女は自分の仕事に没ぼつ頭とうしたが、違い和わ感を覚えつづけていた。自由を与えられながら縛しばられているような、この状態が不快なのか。それだけではない。奇き妙みようだった。

　彼女は父に会いたかった。〝ピンクショット〟、マーティン・レッド、ロバート・グッド、ルーカス・トッド、ジョン・ウッド、〝フレンジー〟──父が使っていたありとあらゆる名前をあげて、〝案内係アシヤー〟のチャールズに消息を尋ねたが、そのような者は存じあげないというのが回答だった。「存じあげない」は、だが、〝案内係アシヤー〟の方便のようなもので、実際には知っていても、制限されている情報についてはそう答えることになっている。

　他の会員メンバーにも〝ピンクショット〟について訊きいてみた。その名とはぐれの機術士としての業績は皆みな、承知していたが、ＳＳの会員メンバーだとは考えていないようだった。ザムエルを訪ねて問い質ただしてみても、ＳＳの中のことは知らないの一点張りだった。

　会員メンバー同士はたいてい位階クラスで呼びあう。父も当然、そうだろう。

　彼女は会員メンバーになってすぐ、〝鷺ヘロン〟の位階クラスを与えられた。一巡じゅん月げつすると〝黒トビブラックカイト〟になり、今は〝鷹匠ファアルコニア〟の位階クラスにあった。会員メンバーの業績は〝審査員レフエリー〟が持ち帰り、おそらくＳＳの上層部が裁定して、新たな位階クラスや研究費イクスペンスの授じゅ与よが行われる。彼女は間ま違ちがいなく評価されていた。きっと上にいるに違いない父とも、いずれ再会できるかもしれない。でも、おかしい。

　ＳＳの会員メンバーになって以来、彼女はカリオサークで暮らしていた。

　会員メンバーとしての活動をのぞけば、普通の生活がそこにはあった。

　彼女はカリオサークの郊こう外がいにある小さな家に住んでいた。食事はたいてい自分で作った。買い物も自分でした。人を雇やとうという選せん択たく肢しはなかった。見知らぬ他人を家には入れられない。彼女は警けい戒かいしていた。何しろ、追われる身だった。どこでトラジェディーが目を光らせているかわからない。いつ見つかってしまうかもしれない。用心に用心を重ねることが習慣になっていた。でも、おかしい。

　一度も、一度たりとも、だ。

　会員メンバーになってから、彼女はただの一度も、トラジェディーに襲おそわれるどころか、その気配を感じることさえなかった。

　元機術士の会員メンバーは彼女だけではない。中にはトラジェディーに追われた経験を持つ会員メンバーもいるはずだ。それとなく探さぐりを入れてみたが、何らかの脅きよう威いにさらされてい

る者はいないようだった。

　会員メンバーは後こう顧この憂うれいなく、研究開発に専心することができた。

　快適ではあった。それだけに、薄うす気き味み悪かった。

　彼女にとって、世界はいつも危険に充みち満ちていた。敵がいた。悪意があった。殺意すら渦うず巻まいていた。それがあたりまえだった。理り不ふ尽じんだと思ったことはない。たくさんの人間がいるのだ。それぞれに利害がある。好き嫌きらいもある。欲望がある。希望がある。相反したり衝しよう突とつしたりすれば、敵になる。敵が味方になることもあるだろう。味方が敵になることだってありうる。それが現実だった。現実のはずだった。

　これは何だろう？

　この作られたような世界は？

　彼女は目には見えない何か大きなものに包まれていた。なまあたたかい透とう明めいな膜まくのようなものに。その中にいれば、飢うえ死にすることはなく、寒さも感じなかった。透すきとおって見えるが、この膜は彼女の姿を覆おおい隠かくしているのかもしれない。敵は彼女を見つけられない。近づいてくることさえない。余計なことを考えなくてすむ。寝ねて、食べて、あとの時間は自分の仕事に打ちこんでいればいいのだ。何か変だ。

　彼女は火薬を用いた機械の開発に携たずさわりたい旨むねの希望を〝案内係アシヤー〟に伝えた。

　彼女の父〝ピンクショット〟は兵器の開発者として知られている。回転ラニン式連グフ発弩アイヤが一番有名な例で、父は自分が生みだした武器を軍隊に売りつけようとしたこともあった。高値を吹ふっかけたので、たいていうまくゆかなかったが、父が人殺しの道具を作っていたことは事実だ。殺しあいたいやつには、勝手にやらせておけばいい。それが父の考えだった。ただ、火薬を用いた飛び道具だけは、決して他人の手に渡わたそうとしなかった。

　父は黒ブ色ラ火ダ薬ーや燃える水ＣＯＷを利用して、途と方ほうもないものを作りあげる計画を立てていた。それは〝沈黙サイレンス〟が専門にしていた内燃機関ＩＣＥとも関かかわりがあった。父

は原動機エンジンで車輪を回転させたり、物体を飛ばしたりすることを夢見ていたのだ。「──馬より速く走ってみたいと思わないか、カレン。できるはずだ。絶対やってみせる」

　父がＳＳに入ったならば、きっと原動機エンジンの研究開発に勤いそしんでいる。その道を歩いてゆけば、父と巡めぐりあうことができるのではないか。

　彼女の望みは叶かなえられ、〝案内係アシヤー〟は協力者を紹しよう介かいしてくれた。

　指定された拠点ベースはカウマン通りの一いつ軒けん家やだった。訪ねると、一人の女が彼女を出で迎むかえた。薄布を一枚まとっただけのあられもない恰かつ好こうをして、退たい廃はい的な雰ふん囲い気きを漂ただよわせている女で、位階クラスは〝藍色インデイゴ〟だった。〝藍色インデイゴ〟は彼女を中へと導いて、工こう房ぼうのような居間で何やら作業中の男に声をかけた。

　男は頭にタオルを巻いていて、上半身裸はだかだった。顔も、首も、胸も、肩かたも、腹も、腕うでも、どこもかしこも刺青いれずみだらけだった。戒律コマンドを破った元機術士なのだろう。

　見覚えがある顔だった。

　全体的には整っている顔立ちなのだが、少し鼻が高すぎる。顎あごがやや長めで、唇くちびるは薄く、目つきがえらくふてぶてしい。茶色い瞳ひとみは拗すねているかのようだ。立派な大人なのに、どこか子供っぽい。

　彼女は微び笑しようして手を差しだした。「あたしは〝鷹匠フアルコニア〟。〝ハニーメリー〟でもいいけど」

「〝門番ドアマン〟」男は彼女の手を握にぎった。しつこい握り方だった。「いい女。年の差は気にするほうだったりしちゃう？」

「べつに」

「あらそう。そりゃよござんした。ボッキー安心だよ。美人は大好きなんでさ。でもそれって生まれつきなんで、きっと必ずしもボッキーのせいじゃないんすよね」

「手を離はなして？」

「おぉーっと、こいつぁーすまない」〝門番ドアマン〟は名残なごり惜おしそうに手を引っこめようとした。

　彼女はその手をつかまえ、自分のほうへとぐっと引き寄せて小声で囁ささやいた。「久しぶり、スコット」

「なっ──」〝門番ドアマン〟は大きく目を瞠みはって鼻の穴を広げた。「な、な、なぁーんのことだかさっぱぁーりなんだけど、ど、ど、ど、どういうことだか説明してくれたりすると、ボッキーとしてはちょい助かりだったりしなくもなかったりするんじゃないっすかねーとか……」

〝藍色インデイゴ〟は腕組みをして、不ふ審しんそうに彼女と〝門番ドアマン〟を眺ながめていた。不審というより、不ふ機き嫌げんそうだった。彼女がこの男について覚えていることがある。父が言っていた。「やつは女おんな癖ぐせが悪い。きっといつか、あれで身を滅ほろぼすぞ」と。たぶん、〝藍色インデイゴ〟は〝門番ドアマン〟とーいつ緒しよに仕事をしているだけではない。親密な間あいだ柄がらなのだろう。

　彼女はもっと〝門番ドアマン〟に身体からだを近づけて、耳みみ許もとで言った。「覚えてないの、あたしのこと。ひどい男ひと」

「うぇっ……いや、お、覚えて──覚えてないっつーことはまあ、なかったりあったりなんすけど……どうなんすかね、そのへんは、ボッキーほら、あの、地味に逆境に弱いっつーか記き憶おく力がたまに減退しちゃったりもして、えへへ……」

「スコット」彼女は〝門番ドアマン〟の目を見すえた。「──ほんとに覚えてない？」

「あ……」〝門番ドアマン〟はまばたきをした。「ひょっとして……ミランダちゃん？」

「誰だれそれ」

「へ……？」

「だめだ、こいつ」

　彼女が人ひと払ばらいを願うと〝門番ドアマン〟は受け容いれて、〝藍色インデイゴ〟が拠きよ点てんから出ていった。

　二人きりになった途と端たん、〝門番ドアマン〟は表情をあらためた。

「で？　きみ誰？　なんでボッキーの名を知ってるわけ？」

「他ほかの名前も知ってるけど」

「マジっすか。ためしに言ってみてくれる？」

「ミギー・左・トラットリオ・シュトラウスベルン」

「……そっちの名前を知ってる人間はかぎられてるはずなんすけどね」

「じゃあ、あたしが誰か、わかるんじゃない？」

「まさか、ね……」〝門番ドアマン〟は天てん井じようを仰あおいで、掌てのひらで額を押さえた。「──カレンちゃんかよ。久しぶりっていっても、変わりすぎじゃないっすか。どうしてこう……」

　スコットは、たしかにろくでもない男ではあった。ただ、機術士としては有能だった。独創的な着想と、機術を精密に制せい御ぎよする技量を持ち、機転が利きいた。スコットは自らＳＳの会員メンバーになったのではなく、〝呼び子バードコール〟に勧かん誘ゆうされたらしかった。それだけにＳＳでは即戦力扱あつかいで、自分の仕事をしながら地下工場アンダープラントにも出入りして、果実フルーツの製造にも関わっていた。

　工房のような居間で、スコットは床ゆかにあぐらをかき、彼女は正座して、二人は向かいあっていた。

　スコットは彼女の正体を知ってから、ずっとばつが悪そうにしていた。〝黒雄鶏ブラツクルーの会スターズ〟での活動が発覚して、彼はＥＭＵに拘こう束そくされ、刺青だらけの身体にされたのだ。思いだしたくない、忌いまゝいましいだけの過去なのかもしれない。果たして、それだけなのか。

「お父さんのこと、何か知ってる？」

　彼女がそう尋たずねると、スコットは顔をしかめてうなだれ、左右の足の裏をあわせて、両足の爪つま先さきを両手で包むように握りしめた。「……つーことは、だ──カレンちゃんは知らないんすね。マーティンがどうなったのか」

「どう……なった？」

「あの人はＳＳにいましたよ。けっこう上のほうでね。〝冥王プルトー〟だったんで」

「〝冥王プルトー〟って……」

　ＳＳの位階クラスは複雑だが、上位十じゆつ傑けつは誰でも知っている。最上位は〝無ゼ位ロ〟で、ダイ・モノアディットという人物が長らくその位にあるらしい。次が〝日天スーリヤ〟、さらに〝玉輪ヘカテー〟、〝軍星デイツパ〟、〝蜃楼ミラージユ〟、〝隠者ハーミツト〟、〝真帝エンペラ〟、〝廃帝デイセンペラ〟、〝冥王プルトー〟、〝車輪ホイール〟とつづく。

　つまり、〝冥王プルトー〟は十傑に入る第九位の位階クラスなのだ。ＳＳの会員メンバーがいったい総勢何名なのか。彼女には見当もつかないが、百人や千人ではきかないだろう。その中の第九位だから、けっこう上のほうどころか、かなり上だ。

　彼女は胸に手をあてた。「……だった？」

「もう違う」スコットは下を向いたまま、首を左右に振ふった。「少なくとも、オレが知ってるかぎりではね。〝冥王プルトー〟は今、空位のはずだよ」

「どこに……行ったの？」

「抜ぬけたんすよ。カレンちゃん、あんたのお父さんはね。ＳＳから脱だつ退たいした」

「できないはずでしょ？」

「そう。できない」スコットはちらりと彼女を見た。「カレンちゃんもＥＭＵに？」

「うん」

「じゃあ、オレと一緒か。あんたのお父さんも同じだったから、もともと知ってたかもしれないけど……それなのになんでＥＭＵになんか入ったのか、オレには理解できんけどさ。とにかく、それならわかるかもね。似てるんだよ。なんか」

「ＥＭＵと──」

「ここが、ね。ぜんぜん違ちがうんだけど、どこか似てる。カレンちゃんはそう思わない？」

「あたしは……」

　ＥＭＵとＳＳの類似点を明確に意識したことはない。ただ、気味の悪さは感じていた。

　これは作られた世界だ。秘密を守ってさえいれば、この世界は安住の地になりうる。ここに骨を埋うめる覚かく悟ごがあれば、他のことは一いつ切さい考えず、自分の仕事にだけ精を出して、それだけで一生を終えることもできるだろう。理想的な環かん境きようだが、こんな世界があっていいのか。あるはずがないのではないか。

　でも、ＥＭＵだってそうだった。ＥＭＵの戒律コマンドに従って、ＥＭＵの機術士として働いているかぎりは、ふさわしい持ち場を与あたえられ、必要十分以上の金を支給された。あの世界に染まることができれば、快適だったはずだ。げんに、そうやって自分の人生をＥＭＵに捧ささげている機術士が大勢いた。ほとんどはそうだった。彼女にはできなかった。不自由で、不快だった。

　ＥＭＵから抜けようとしたら、トラジェディーに追われる。

　だったら、ＳＳは……？

「スコット」

「訊ききたいことはわかるよ、カレンちゃん。オレは言いたくない。この目で見たわけじゃないしね。噂うわさみたいなものだし。でも、話さないわけにはいかないよね……」

「教えて、スコット。お願い。お父さんはどうなったの？」

「あんたのお父さんは──」

「あなたは」女は男に告げるでもなく呟つぶやいた。「知りすぎているのです」

「そうでもないと思うけどな。しかし──」男は垢あかと埃ほこりと髭ひげにまみれた顔を笑わせた。襤ぼ褸ろを身にまとい、どこもかしこも汚よごれているのに、歯は抜けるように白かった。「こいつは光栄と考えたほうがいいのかね。〝隠者ハーミット〟自らおいでになるとは。こういう仕事用の駒こまは、他にいくらでもあるだろうにな」

　夜よ更ふけのエルデン第七区は無人の廃はい墟きよのようだ。そう見えるだけで、実際は崩ほう壊かいした建物や瓦が礫れきの陰かげで息をひそめている者もいなくはない。

　かつて第七区にはキャッスルオブインフィニティがあった。今はない。すべて崩くずれ去った。

　男はこの第七区──一号区とも呼ばれるこの場所に身を隠かくしていた。昼間はたいてい塒ねぐらで過ごし、夜にエルデンを徘はい徊かいして食しよく糧りようやら何やらの生活必ひつ需じゆ品ひん、それから仕事の材料を手に入れる。頭の中にはいくつかの計画があった。障害は多いが、実現のための方策を考えているだけでも胸が躍おどった。男はようやく気づいたのだ。

　与えられるものには価値がない。自分自身で生みだすことにこそ意味がある。他を利用すれば、利用されるのだ。男はおそらく焦あせっていたのだろう。遠回りしたくなかった。近道を求めた。それがよくなかった。せっかちなのだ。性格だ。もう少し堪こらえ性しようがあればよかったのだろうが、これればかりはしょうがない。

　女は豊満だが引き締しまっている身体からだを紫むらさき色いろのドレスで包んでいた。艶つやのある髪かみの毛は絹のようだ。彫ほりの深いくっきりした面おも差ざしだが、一いつ瞬しゆんごとに印象が変わる。強い、強きよう烈れつな瞳ひとみだ。男なら誰だれでもこの女を欲ほつするだろう。同時に諦あきらめるだろう。この

女が誰かを自分のものにすることはあっても、この女が誰かのものになることは決してない。

「理由を知りたいのですか、〝冥王プルトー〟」

「訊いてみるのも悪くないとは思ってるよ」

「あなたは──」女が口を開こうとした。その瞬間だった。

　男は衣の中から拳けん銃じゆうをとりだして、狙ねらいをつけずに引き金を引いた。互たがいの距きょ離りは五メーテルほどだ。それでもあたらなかった。男の拳銃から放たれた銃じゆう弾だんは、女の頭の十サンチ横を通り抜けていった。かすりもしなかったとはいえ、女はぴくりともしなかった。さすがというか、呆あきれるしかない。男はすぐさま撃げき鉄てつを引き起こし、今度はしっかりと拳銃を固定して照準を定めた。

　発はつ砲ぽうした。

　女は少しだけ前まえ屈かがみになって赤い唇くちびるをすぼめ、ふう、と息を吹ふいた。

　その吐と息いきが銃弾をからめとって空中で静止させるなんてことが起こりうるのだから、まったくこの世界はおもしろい。

　男は拳銃を下ろして、肩かたをすくめた。「──話には聞いてたが、本当に超越者オーバリストなんだな。加えて、魔ま術じゆつの天才でもある。あんたみたいな女が、なんでＳＳにいるんだ」

「道を探しているのです」

「何の道だよ」

「〝冥王プルトー〟。あたくしがいつかその道を見つけたとしても、あなたにはわからないわ」

「だろうな」

「あなたは抜ぬけ目のない男」

「それで、腕うでの立つあんたが俺を殺しにきたってわけか」

「残念でしょうが、あなたは逃のがれられない」

「悪いけどな、〝隠者ハーミツト〟」男は拳銃を持ちあげて銃口を自分のこめかみに突つきつけ、撃鉄を起こした。「せっかく手に入れた自由だ。誰だろうと、俺を好き勝手にはさせない」

「手が震ふるえているわ」

「怖こわいんだ」

「正直なのね」

「まあな」男はにやりと笑って、人差し指にゆっくりと力をこめはじめた。「あんたはやさしいな」

「やさしい？　あたくしが？」

「最後にいいものを見せてもらった。あんたはとても美しい」

「知っているわ」

「だから、余計に美しいんだ」

　男は引き金を引いた。

　――〝冥王プルトー〟は〝隠者ハーミツト〟に始末されたらしい。

　確実な情報ではないとスコットは言ったが、〝隠者ハーミツト〟が決して失敗を犯おかさない殺し屋だということも教えてくれた。ＳＳには他ほかにも脱だつ退たい者しやの追つい跡せきや処分を専門とする者の位階クラスがあるらしいが、〝隠者ハーミツト〟は別格なのだという。〝冥王プルトー〟ほどの位階クラスにあった人間なら、当然、多くの機密に接していたはずだ。ＳＳとしては、必ず抹まつ殺さつしなければならない。〝隠者ハーミツト〟が動いてもおかしくない事案だし、それはまず間ま違ちがいないだろう。〝隠者ハーミツト〟が動いたのなら、〝冥王プルトー〟は死んだだろう。この件を少しでも知っている者ならば、すでにそれを確定的な事実として受け容いれている。

「カレンちゃん。あんたのお父さんは、ＳＳに殺されたんだ。正直ね。オレも複雑っちゃー複雑だよ。あんたのお父さんに教わったことはいっぱいある。それが、死んじまっただなんてさ。殺されたなんて。なんであの人、そんなやばい決断したんだろうな。どうなるかなんて、わかってたはずなのに」

　彼女は自分でも意外なくらい冷静だった。

　父は死んだ。

　もういない。どこにもいない。二度と会うことはできない。

　頭の隅すみには常にその可能性があった。〝沈黙サイレンス〟の死はまるで予想していなかったが、父の場合は違う。いつも危ない橋を渡わたってきたのだ。ときには彼女も一いつ緒しよに。生と死は隣となりあわせだった。いつ命が果ててもおかしくない。彼女も覚かく悟ごしている。この人生には終わりがあるのだ。父も同じ考えだっただろう。死を目前にして、じたばたしたりはしなかったに違いない。だけれど、もう一度、会いたかった。

「スコット、〝沈黙サイレンス〟を知ってる？」

「マーティンの友だちだな。聞いたことはあるよ。あんたのお父さんと〝沈黙サイレンス〟が、とっくのとうに形けい骸がい化かしちまってた〝黒雄鶏ブラックルーの会スターズ〟を復興したんだ。世捨て人みたいになって、どこにいるのかもわからないっていう話だけど……」

「彼も殺されたの」

「何だって？　殺された？　誰に？」

「トラジェディーだと思ってた」

「待ってくれ。なんでカレンちゃんがそのことを知ってんだよ？　まるで〝沈黙サイレンス〟と面識があったみたいな──」

「あった。ていうか、あたし、彼の家にいたから。二年くらい」

「マーティンは〝沈黙サイレンス〟が行方ゆくえをくらましてからも、連れん絡らくをとりあってたってことか。だとしたら──」

「彼を殺したのは、トラジェディーじゃないのかもしれない」

「ＳＳには〝隠者ハーミツト〟以外にも〝短剣ダガー〟とか〝鉄拳フイスト〟、〝啄木鳥ウツドペツカー〟みたいな、密みつ偵ていとか殺しを任されてる連中がいたりするしね」

「くわしいんだ」

「いろいろあってさ。ボッキーすっかり用心深くなっちゃったんすよ。悲しいよね。つい知らなくていいことまで知ろうとしちゃう。まあでも、知らないってのは怖こわいことだからねえ」

「一つ気になることがあるの」

「何？」

「あたしはトラジェディーに追われてた」

「やつら、しつっこいし」

「でも、会員メンバーになってからはさっぱり」

「それはね、カレンちゃん」スコットは目を細め、唇くちびるに立てた人差し指を押しあてた。「実は、よくあることなんすよ。ただ、誰だれもそこにはふれようとしない。オレも考えたくないよ。余計なことを考えなきゃ幸せでいられる。ここは楽園なんだから」

　彼女にとってはそうではなかった。

　当然だ。

　ＳＳは父を、そしてたぶん、〝沈黙サイレンス〟を、彼女から永遠に奪うばった。

　スコットには止められたが、彼女はＳＳからの離り脱だつを決意して、すぐさま実行に移した。

　彼女はカリオサークを出てエルデンを目指した。その道中で、さっそく二人の男が襲おそいかかってきた。改良に改良を重ねて回

転式の連発拳けん銃じゆうになったリトルジョニーと、機術を駆く使ししてなんとか追い払はらったが、追跡と襲しゆう撃げきがやむことはなかった。

　やむをえず、彼女は大陸西縦断道から外れて山野へと分け入り、武装農園アームドファアームやら野や盗とうの砦とりでやらを渡り歩きながら、東へ、東へと向かっていったんケメックに入った。

　エルデンほどではないが、ケメックも交通の要よう衝しようだ。各国の貿易担当官や商人たちが通商の拠きよ点てんにしていて、人が集まれば、情報も集まる。

　彼女はザムエルのことを教えてくれた〝フラスコ〟とふたたび接せつ触しよくした。〝フラスコ〟は彼女から事情を聞くと手を引きたがったが、代わりに情報源となりうる人物を何人も紹しよう介かいしてくれた。

　彼女はモルフォ党について知った。最近、モルフォ党が活動の場にしているのは主にグラー大陸で、暗黒大陸の紺碧王国シア・ルカナムによる侵しん略りやく戦争に傭よう兵へいとして荷か担たんしているらしい。モルフォ党の部隊は常に最前線に配置され、多大な戦果をあげている。彼らは銃器や焼しよう夷い弾だんを用いているだけではない。自走する戦車も確かく認にんされているという。そうした新兵器はかなり大量に投入されている。それだけの兵器を生産するとなったら、莫ばく大だいな資金と大がかりな設備が必要だ。ＳＳならどうか？

　彼女は後こう悔かいした。せめて地下工場アンダープラントの中を見ておけばよかった。

　ただ、地下工場アンダープラントはカリオサークの近辺だけにあるわけではないだろう。その名が示すとおり、エルデェＥイニオンＭ機術士匠合Ｕはαアルフア大陸北西部のエルデェイニオン地方に根を張っている機術士匠しよう合ごうだが、その影えい響きよう力りよくはラフレシア第三帝てい国こくや中部ミッド諸国域ランズにも及およんでいる。サンランド無統治王国は、特とく殊しゆなお国くに柄がらのせいで、かさばる物資の調達や輸送の面においてはやや不利だ。安定した国で、安全に、ある程度の土地を確保することができれば、そっちのほうがいろいろな意味で都合がいい。たとえば、ラフレシアとか。

　ラフレシアといえば、暗黒大陸の紺碧王国シア・ルカナムは非公式に帝国の支し援えんを受けているという。表向きは、帝国と関係の深い政商クロード・メシアンが、彼かの王国を援えん助じよする形をとっているらしい。それでは、モルフォ党と帝国の繋つながりは？

　ないとは言えない。内乱状態の国に侵しん攻こうして、これを手中に収める。帝国は何度もそのような形で領土を拡張してきた。その内乱に、モルフォ党が絡からんでいた形けい跡せきはないのか？

　ざっと調べた範はん囲いでも、そうした事例が三つあった。現在は広大な国土を有しているラフレシアだが、かつては大陸南西部の一都市国家にすぎなかったのだ。ここまで勢力を伸しん張ちようさせるために、モルフォ党と持ちつ持たれつでやってきたのだとしたら？

　今のところは状況証しよう拠こしかないが、もしかしたら証言をえられるかもしれない。

　かつてモルフォ党の党員だった男が、エルデンにいるという話を聞いた。

　エルデンにはＥＭＵ本部がある。

　父はエルデンで死んだ。スコットは風の便りにそう聞いたらしい。

　彼女は西を目指した。

　エルデンへ。

Omenage 900 8th revolution 24th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

chapter.6

名前が示すものとは

「ほむほむほむ……なるほどのぉ」

　近ごろの半魚人は変だ。

　もともとだいぶ変なのだが、輪をかけておかしい。てゆうか、きもい。

　まず、服装は変わっていないのだけれど、髪かみ型がたが気持ち悪い。具体的には、もみあげをのばして、頭頂部あたりの毛を逆立てている。何なの？　あれ？　もしかして、かっこつけてるつもりなのかな。そうだとしたら、魚並みの脳みそもないってことになるけど。まあ、ないんだろうけど。

　あと、表情が不ふ愉ゆ快かいだ。本人じゃなくて本半魚人的には大人ぶっているつもりなのかもしれないが、たとえて言えば、三歳児が付け髭ひげをして、煙草たばこを吸ったら噎むせてしまうから、とりあえずおしゃぶりをしゃぶって悦えつに入っているようにしか見えない。気取った顔つきや訳知り顔がこれほど似合わない人間もめずらしいだろう。人間じゃないから、しょうがないのか。

　それから、身のこなしが腹立たしい。今もトマトクン邸ていリビングのソファーに腰こしかけているのだが、クソ生意気なことに長くもない脚あしを組んで腕うで組ぐみをし、前まえ屈かがみ気味になって、顎あごを引き気味にし、髪の毛をいじったりしている。ひょっとして、よかれと思ってやってる？　たぶんそうなんだろうけど、百万人中九十九万九千九百九十九人に蔑さげすまれても仕方ないくらい、正直、超最低ＳＵＣＫだよ？

「とりあえず、や。ここまでの話は理解したで」半魚人は口をへの字に結んで、両手を軽くあげてみせた。そういう仕し種ぐさもむかつく。「──ハニーはんは、父親代わりで初はつ恋こいの相手を殺され、さらには父親まで殺されてもうた」

「ちょっと」〝ハニーメリー〟は左手をあげた。

　いいんだけど、この人、いつまで床ゆかに正座しているつもりなのだろう。

「何や」

「初恋の相手って何？」

「ちゃうんかい」半魚人はせせら笑った。すごく感じが悪い。「ハニーはんは〝沈黙サイレンス〟っちゅう男のことを好いとったんやろ。少なくとも、わしにはそう思えたけどな」

「そういう気持ちはなかった」

「気づいとらんだけやないか」

「そんなことない」

「ま、ええやろ。そのへんは。どうでもええっちゅうたら、どうでもええ話やねん」

「……てゆうかさ」

　とうとう耐たえきれなくなって、口を挟はさんでしまった。

「何なの？　きみごときが、なんでそんなに偉えらそうにしてるわけ？　バカなの？　や、バカだってのは知ってるけど。屑くずなの？　それとも、もうすぐ死ぬの？　それでどうかしちゃってるの？　助からないの？　助けないけど」

「腐フっ……」半魚人は腐くされ魚顔に汚けがらわしい冷れい笑しょうを浮うかべた。「わからんのかい。マリアローズ。わしの考えが。ええかげん、そこそこのつきあいやないか。ほんだのに、なんでわからんのかなあ」

「わかりたくないからじゃない？」

「ま、ええやろ」半魚人は、ぱん、と手を打った。「わかってもらえんでもな。わしはべつにええねん。一人だけでええ。わしの理解者は、この世にたった一人いてくれよったらな。他ほかにはなぁーんもいらんのや」

「……始まったわ」ユリカは半眼の横目で隣となりの半魚人を見た。

「また……ですか……」その隣のサフィニアは、半魚人など見たくもないといった様子だ。

「たったひとぉぉぉぉーりぃぃぃぃぃーっ！」半魚人は立ちあがって拳こぶしを振ふりあげた。「彼女さえ、わしのことを理解してくれたったら！　わしは！　わしはわしはわし
はぁぁぁぁぁぁぁぁぁーっ……！　それでええねん！　この愛だけがぁぁぁぁぁぁぁぁぁーっ……！」

「愛……」ルーシーの目が輝かがやいている。半魚人に負けず劣おとらず頭がわいているのだろう。

　ピンパーネルが呟つぶやいた。「いっそ・灰になれバ……」

「くう」ときゅーがうなずいた。

　トマトクンはきゅーの膝ひざ枕まくらで完全に寝ね入いっている。

　今日はもともと朝からトマトクン邸に集まって、Ｄ３〝混沌峡間ケイオスハーロウ〟の攻こう略りやくについて話しあうことになっていた。それで、リビングの掃そう除じをしたり、ちょっと休んだり、朝ご飯を食べたりしながら、皆みなを待った。九時過ぎには全員集合したので、急きゅう遽きょ予定を変へん更こうする旨むねを伝えて、まずはカタリとユリカとサフィニアにざっと事情を説明してから、ハニーに話のつづきをしてもらっているという次し第だいだった。

「ええか！」半魚人はマリアローズに人差し指をビッと突つきつけた。「お前じぶんにはわからんかもしれへんけどな！　こう見えてわしは、ちゃぁーんと考えとんねん！」

「え。考えられるの？　その頭で？」

「あったりまえやろ！」半魚人は地じ団だん駄だを踏ふんだ。「あったりまえやろッ！」

「なんで二回……」

「そんなん、あったりまえすぎるからに決まっとるやないかッ！　わしはなあ！　もちろん、愛する人はたった一人やけどもな！　ＺＯＯのことやって、むっちゃ大事やねん！　愛する人とＺＯＯのためやったらなあ、わしは鬼人オーガにでも地じ獄ごくの悪あく魔まにでもなるッ！　なるっちゅうたらなるんやッ……！」

「今すぐなってくだサイ」

「おお！　ゆうたな、ピンプゥッ！　ピンパーネルッ！　ええわ。ええやろ。なってやろうやないかッ。とりあえず鬼人オーガにな──って、なれるかい、アホダラァッ！」

「じゃあ……言わなきゃいいのに……」サフィニアの声はつめたい。

「しょうがないのよ」ユリカは鼻で笑った。「いちゅだって、口だけなんだもの」

「なんやねん！」半魚人は半魚目を剝むいて、ぐるりと皆を見まわした。「なんやねんなっ！　みんなしてな！　わしのこと、とれすぎても食べられへん魚みたいな目ぇで見よってからにしてからに！　わしが何したっちゅうねん！」

「何って……」マリアローズはため息をついた。

　言うのもバカバカしいが、本人が幻げん覚かくでも見ているのでなければ、どうやら生まれて初めて彼女ができてしまったらしい半魚人の言動には、目を覆おおいたくなるものがある。はしゃぎすぎだし、人じゃなくて半魚人が極きよく端たんに変わったというよりも変わろうとしすぎだ。

「はっはーん……」半魚人は眉まゆ根ねを上げて、大おお袈げ裟さに肩かたをすくめてみせた。「そうかい。お前じぶんらはあれかい。そぉーんなにわしのシワワセがねたましいんかい。何やねん。ここはつっこむとこやろが。シワワセやのうてシアワセやろっちゅうてな。つっこみもせえへんくらい、わしに嫉しつ妬としとんのかい。心が狭せまいのう」

「はいはい」マリアローズは半開きの目で何度もうなずいた。「狭い狭い」

「狭ぁーいのぉー！　狭すぎやのぉー！　セマセマッ！　やーい！　セマセマッ！」

「あの」ハニーはカタリを指さして、マリアローズを見た。「ちょっといい？」

「何？」

「まだ話の途と中ちゆうなのに、この人、意味のないことばっかり言っててうるさいし、かなり邪じや魔まなんだけど」

「待てぇーいッ！　邪魔って何やぁぁッ！　邪魔て！　わしはお邪魔虫かぁーい！　ちゃうがな！　わしはなあ！　あえて邪魔しとんねん！」

「え。どうしてですか？」とルーシーが訊きいた。

「決まっとるやろ！」カタリは顎あごをしゃくってハニーを示した。「この女の話はこれ以上、聞かんほうがええ！　今すぐこの家から放ほうりだして、金こん輪りん際ざい、関かかわらんほうがええんや！」

「で、でも……」

「デモもドモもモモもスモモもヘチマもあるかい！」

「もうここまで関わっちゃいましたし！　家の地下には、トラジェディーの人の死体だってあるんですよ！」

「あんなん、そのへんに捨ててまえばええ！　ポイッてな！　そしたら、脂羽蟲ゴキがきれいさっぱりカタしてくれるわ！」

「そんな！　だいたい、ハニーさんはお父さんを……それに、お父さんの友だちも──大切な人たちを殺されちゃったんですよ!?　気の毒だと思わないんですか!?」

　カタリはいきなりルーシーの胸むなぐらをつかんで持ちあげ、その頬ほおに鉄てつ拳けんをぶちこんだ。「思わんわけあるか、ボケェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェッ……！」

「──ぐべっ」

　吹ふっ飛ばされてソファーの背もたれに叩たたきつけられたルーシーを見下ろし、カタリは目を真っ赤にして顎を震ふるわせていた。「──あ、アホゥッ！　こォォォォォのアホクソがぁ！　そんなん……そんなんなぁっ！　めっちゃ気の毒に決まっとるやろ！　そら、かわいそうや！　かわいそすぎて、涙なみだもろくに出えへんっちゅうの……！」

きゅーがそっとカタリにティッシュを差しだした。カタリはそれを受けとって目の周りをぬぐい、ちーんと洟はなをかんだ。「……と、とにかくッ！　それとこれとは別ッ！　別のこととして考えなあかん！　顧かえりみればッ！　わしらは毎度毎度、いらんことに首ぃ突っこんで、そんで毎回毎回面めん倒どうなことになっとんのやからな！　そんなんで仲間が危険な目ぇに遭あうのんは、もうやめやッ！　やめッ！　あかんねん！　わしらもそろそろ、大人にならなッ……！」

リビングが静まりかえった。

トマトクンの寝息だけが響ひびいている。

──たしかに、ね……。

半魚人の台詞せりふだから認めたくはないけれど、一理ある。ＥＭＵ。トラジェディー。ＳＳ。モルフォ党。さらには、ラフレシア第三帝てい国こく。てゆうか、ミギー・左・トラットリオ・シュトラウスベルンって、店を畳たたんで消えた〝ショコラット〟じゃないか。なんであの男まで。とにかく、聞けば聞くほど、この件はやばそうだ。壮そう大だいすぎて眉まゆ唾つば物ものに思えてもくるが、実際、ハニーは狙ねらわれている。脅きよう威いが本物なのだから、その背景にも間ま違ちがいなく何かがあるのだろう。

「お前じぶんらはわりと情報に疎うといから、知らんかもしれへんけどな」カタリはソファーに腰こしを下ろし、まじめくさった顔で両手を組みあわせた。またかっこつけてるし。そういうことしなきゃいいのに。「──最近、ラフレシアがオークリッドに攻せめこみよった。それ自体はよくあることや。せやけどな。今回はラフレシアが見たこともない新兵器を前線に投入しとって、オークリッドが大苦戦を強しいられとるっちゅう、そないな噂うわさがちらほら聞こえてきとる」

ハニーの瞳ひとみが蛍光緑ルミナスグリーンの輝かがやきを強めた。

「それって」マリアローズは眉をひそめた。「まさか──」

「わからん」カタリはかすかに首を横に振った。「ハニーはんの話に出てきよったのと、同じモンかどうかはな。ラフレシアとオークリッドの国境はこっから遠いからの。戦せん況きようが伝わってき

よるのにも、時間がかかるやろ。せやけどな。ラフレシアは代だい替がわりして変わりよった。誰だれも彼もが口を揃そろえてそうゆうとるで」

　ハニーは膝ひざを進めてカタリに近づいた。「具体的に、どう変わったの？」

「ん。おお……」カタリはのけぞった。その半魚眼は確実にハニーの胸元に釘くぎ付づけになっている。クルチバに密チ告クってやろうかな。「──せ、せやな、まあ……な、なんちゅうかその、せ、せや、こ、これは昨夜、仕入れたネタなんやけども……」

　ハニーはさらにカタリに接近した。「うん」

　カタリはそっぽを向いて、咳せき払ばらいをした。「──新皇帝が即そく位いしてから、アデナ大だい元げん帥すいの座に就ついた、ルイ・アシュモダイ・大智永世マグナスイキス・アデモンディオっちゅう男やけどな……」

「む……」トマトクンがぴくりと頭を震ふるわせた。

「わしらにとっては、ある意味っちゅうか、そうとうびっくりネタなんやけども」カタリはマリアローズとピンパーネル、ユリカをちらっと見た。「……なんと、あのルイ・カタルシスらしいんや」

「ルイ……」マリアローズはまばたきをした。

「カタルシス……」と呟つぶやいたのはユリカだった。

　ピンパーネルは首をひねった。「それワ……」

「ありえない──」マリアローズはユリカと顔を見あわせた。「よね……？」

「しょの、はじゅだけど……」

「たしか……」サフィニアは小さく息をついた。「その人は……蜥蜴とかげ人に、殺されてしまったはずでは……？」

「ぬう」トマトクンは身を起こして、髪かみの毛を引っかきまわした。「ジュジか」

　マリアローズはトマトクンを見た。「じゅじか……？」

「ん？」

「や、今、何か言わなかった？　じゅじか……とか、何とか」

「俺か？」トマトクンは首の後ろをボリボリ掻かいた。「言ったか。そんなこと」

「えーっと……」ルーシーは探さぐるような目をした。「何のことかまったくわからなくて、置いてけぼり状態っぽいんですけど、ぼく……」

　ハニーは不満げに口を尖とがらせてうなずいた。「あたしも」

「そのへんはな。説明すると長くなるさかい……」

「小説家だよ。ルイ・カタルシスは。いっぱい本を出してて、けっこう有名だったみたい。もう三年近く前かな。エルデンにきたんだけどね。トラブルに巻きこまれて、死んだ──はずなんだよね」

「短ッ！」

「まとめれば、こんなものでしょ」

「というか……」ユリカは可か憐れんに顔をしかめた。「わたしはこの目で見たのよ。しょの場面を。でも──変だったわ」

「変って？」

「……白かったの。血じゃなくて、何か白い液体が──」

「つまーりっ！」カタリは過か剰じようなまでの決め顔でユリカを指さした。「あのルイ・カタルシスは偽にせ物ものやったっちゅうことや……！」

　ピンパーネルがカタリの首の側面に短たん剣けんを突つきつけた。「確かめてみまショウ」

「な、何をやっ」

「アナタも偽物カモ。斬きったら、白い液体が出てくるカモ」

「出るかいっ。わしは人間やっ。ちゅうか半魚人やっ。いやいや、人間やっ。よしんば偽物でも、白い液体とか出るわけないやろっ」

「……しょうよねえ」ユリカは肩を落とした。「見み間ま違ちがいだったのかもしれないわ。正直、しょうとしか思えなくて、今まで誰にも言わなかったし……」

「ですガ」ピンパーネルは短剣をしまった。「実ワ・ワタシも見マシタ」

「ふむ……」トマトクンはシャツの襟えりぐりに手を突っこんだ。無理やりだった。おかげでシャツのボタンが弾はじけとんだ。「……む」

「あっ……！」サフィニアがトマトクンに飛びつくというより飛びかかって、はだけたシャツをかきあわせた。「……ぼ、ボタンが……とれてしまって……いますね……これは、つけなおさないと……」

「そうか？　ボタンの一つや二つ、なくても困らんし──」

「そ、そういう、わけには……！　だめ、ですよ……いざというときに、ないと……」

「きゅう」きゅーが拾ったボタンをサフィニアに差しだした。

「……あ、ありがとう、きゅー……悪いけど、お裁さい縫ほう道具、貸してくれる……？」

「くう」きゅーはうなずいてリビングから出ていった。

　サフィニアは食くらいつくようにトマトクンのシャツをあわせている。顔が真っ赤だ。目を回しているようにも見える。がんばっているのだ。そのわりに進展はない。でも、サフィニアなりに精せい一いつ杯ぱい、がんばっている。

　ハニーはきょとんとしているけれど、なんとなくリビングの空気がなごんだ。

　なごんでどうする。

　あのルイ・カタルシスが生きていた。しかも、ラフレシア第三帝

てい国こくのアデナ大だい元げん帥すいになったというのだ。

　アデナ大元帥といったら、皇帝にかわって全軍を統とう帥すいする大権を持たされている、要職中の要職だ。これは常時置かれているわけではない。マリアローズが知っているかぎりでは、非常時に有ゆう為いの人材が任命される。具体的には、帝国が南部の反乱と外敵に苦しめられていた百五十年ほど前、時の帝国軍元帥リオネル・ド・コルベールが、アデナ大元帥に任じられたことがあった。とりあえずルイ・カタルシスと同一人物なのかどうかはおくとしても、ルイ・アシュモダイ・大智永世マグナスイキス・アデモンディオという名からすると、貴族ですらない。ラフレシアは因習にとらわれている国だ。氏うじ素す性じょうの知れない男がアデナ大元帥になるなんて、それだけで驚きよう天てん動どう地ちの出来事といってもいいだろう。

「……アデモンディオ……」ハニーは顎あごをつまんで目を伏ふせた。「変な名前」

　しかし、ほんと、何なんだろ、この人。

　どうも天才肌はだというか正しよう真しん正しよう銘めいの天才みたいだし、普ふ通つうではないのだ。

　でも、それを言ったら、ユリカにしても、サフィニアにしても、ピンパーネルにしても、もちろんトマトクンにしても、確実に常人の域を超こえている。ルーシーだってそうか。能力的にはまあ、常識の範はん囲い内なのかもしれないカタリにしたって、半分魚なのに人間のふりをするという謎なぞ技能の持ち主だし。きゅーはもふもふでかわいすぎだし。

　まともなのって、地味に僕だけじゃないか。

「ね」ハニーはだしぬけにマリアローズのズボンの裾すそを引っぱった。「紙、ある？」

「は？　紙……？」

「あと、書くもの」

「や、そりゃあ、あるけど……何するの？」

　ユリカがぱたぱた歩いて、サイドボードの抽斗ひきだしから一枚

の紙とペンを持ってきた。「はい。どうじょ」

「ありがと」ハニーは受けとった紙をテーブルに置いて、何やら書きはじめた。

　マリアローズはユリカを横目で睨にらんだ。「……ユリカ」

「あ、ごめんなしゃい。ちゅい……」ユリカは首をすくめた。「でも、わたし、ハニーしゃんが悪い子だとは、どうしても思えないのよ」

「わ、わしかてなっ」カタリは腕うで組ぐみをしてあさってのほうに半魚顔を向けた。「べつに、悪い子や思とるわけやなくてなっ。そうやのうて、あくまでクランの──みんなのことを考えてやなっ。物事には優先順位っちゅうもんがあるねやんかっ。あれもこれもっちゅうわけにはいかんわけやからっ。せやから、わしは一人の立派な大人として……」

　マリアローズはため息をついた。「似合わないんだよ、そういうの」

「似合わんからっちゅうて、いつまでも変わろうとせえへんかったら、進歩がないやろがっ」

「しょの心意気は立派だと思うわ」ユリカはカタリの前に立って、両りよう肩かたの上に小さな手を置いた。「でもね、カタリ。変わることだけが進歩じゃないのよ？　変わらじゅに守りつぢゅけるのだって、簡単じゃないんだから。カタリのいいところは、なくしゃないほうがいいと、わたしは思うの」

　カタリは口を真一文字に結んで、顔を真っ赤っかに染めている。半分魚のくせに、茹ゆでた蛸たこみたいだ。海の生き物だから、もともと近いのか。

　マリアローズはちょっとだけ笑った。「まあ、困ったことに、カタリの場合、いいところと悪いところが表裏一体だったりもするんだけどね」

　カタリは唾つばを飛ばして叫さけんだ。「ほっといたってくれ！」

　ユリカはくすくす笑いながらソファーに座りなおした。

「あ、あの！」ルーシーは挙手した。「後学のために教えてもらいたいんですけど、ぼくのいいところは……!?」

　ピンパーネルが即そく答とうした。「臆おく面めんもないところデス」

「臆面……」ルーシーはバッとピンパーネルに向きなおった。「それっていいところじゃないですよね……!?」

「素直なの・いいことデス」ピンパーネルは穏おだやかに微笑ほほえんだ。「うるさいですガ」

「玉に瑕きず……!?」

「ずいぶん瑕だらけの玉だけどね……」

「マリアさんまでっ……!?　ていうか、このごろぼくに対して、皆みなさん当たりがハードすぎません!?」

「だってきみ、厳しくしないとすぐにつけあがるんだもん」

「そのとおりですけど……！」

「ま、いい機会や思て、打たれ強くなることやな」カタリはしたり顔でにやりと笑った。「どんな道も長く険しいもんやで。せやけど、歩きつづけることで見えてくるモンがある。それが人生や」

「……カタリさんと同じ景色は見たくないんですけど」

「見ろやっ。見てから判断するんが漢おとこやろっ」

「漢……っ」

「せや！」

「カタリさん、ぼく……間ま違ちがってました！」

「わかればええ」

　や、そこはわからなくてもいいんだけどね。むしろ、わからないほうがいいような気がしなくもないんだけど。

　そうこうしているうちに、きゅーが裁縫道具を持って戻もどって

きた。

　そのころには、トマトクンはだらしない恰かつ好こうで熟じゆく睡すいしていて、サフィニアはその姿を至し近きん距きょ離りから凝ぎよう視ししながら、妄もう想そうの世界を旅しているようだった。「……わたしが……このボタンになったら……」

「くう」きゅーはサフィニアに裁縫道具を差しだした。

「あ……」サフィニアは裁縫道具を鼻先に突つきつけられて、やっと我に返ったようだ。「あ、ありがとう、きゅー……ああ、これで、このボタンに、わたしは、わたしを……ふふふ……」

　そうでもないか。

「ね」ハニーは紙を持ちあげて示した。「これを見て」

　マリアローズは紙を受けとった。「……何これ」

　紙には共通語の表音文字で次のように書かれていた。

　Die Monoadit

　Amedi Don Toi

　Ian Tidemood

　Didoa Montie

　Louis Aschmedai Magnus-Ikis Adeimontdio

　Idiot Daemon

　どれも人の名前らしい。

　Louis Aschmedai Magnus-Ikis Adeimontdio

　というのは、先ほど話に出ていたルイ・カタルシスかもしれないラフレシア第三帝てい国こくのアデナ大だい元げん帥すいだろう。

あとは――

　Idiot Daemon

　これは四百年以上前に、初めて大規模で計画的なアンダーグラウンドの探たん索さくを行ったとされている男だ。エルデンの街区とアンダーグラウンドを対応させ、ディビジョンと称しようする区画に分けたり、侵入者クラッカーという呼び名を考えたりしたのも彼だと言われている。

「ほむほむほむ……」カタリは魚顔をしかめて紙を見つめている。「ディドア・モンティは、なんとなぁーく記き憶おくにあるような、ないような……いや、わからんな。後ろの二つ以外は知らん名前や」

「カタリも？」マリアローズは眉まゆをひそめた。「きみはけっこう、無む駄だなこといっぱい知ってたりするのにね」

「その膨ぼう大だいな無駄の中に、宝の山が眠ねむっとったりするモンなんやで？」

　ユリカは首を傾かしげた。「わたしも、ルイしゃんとイディオット・デイモンしゃんしかわからないわ」

「ていうか……」ルーシーは紙の上の文字を指さした。「変な名前ばっかりですね。一つ目は、何だろ……ダイ・モノアディット？かな。二つ目は、アメディ・ドン……トイ？」

「たぶん、ドン・トワ。ラフレシア風の発音だね」マリアローズは三つ目の名前を視線でなぞった。「それから、イアン・タイドムード？　四つ目が、ディドア・モンティ、か……」

「形ガ……」ピンパーネルは目を伏ふせた。「――いえ。何でもないデス」

　ハニーがにっこり笑った。「それ、正解」

「え……？」マリアローズはもう一度、六つの名前をまじまじと見た。形……？

　言われてみれば、たしかにそうだ。

　似ている。形が。似ている？　どういうことだろう。考えろ。や、違ちがう。

　考えるよりも、これは──

　Die Monoadit

　Amedi Don Toi

　Ian Tidemood

　Didoa Montie

　Adeimontdio

　Idiot Daemon

「……そっか」

「わたしも、わかったわ」

「ほっほーう……なるほろのう。そういうことかい」

「くう」

「ねっ……!?　きゅーまで!?　な、何ですか!?　ぼくはわからないんですけど!?」

「まず」ピンパーネルは最初の名前を構成している文字を一つずつ指さした。「──文字の数。十一デス」

「おお……！　あ──でも、ルイなんとかさんだけは違いますよ？」

「それは最後のアデモンディオだけ見て」マリアローズは鼻を鳴らした。「……けど、この綴つづり、ちょっと強ごう引いんだよね。たしかに、ラフレシア風に読んだらそうなるけど」

「でも、不思議じゃないでしょ？」ハニーは蛍光緑ルミナスグリーンの瞳ひとみをきらきらと輝かがやかせている。

　マリアローズはうなずいた。「そうだね。考えようによっては、ぜんぜん不思議じゃない」

「ど、ど、ど、どういうことなんですか……？」

　ピンパーネルはルーシーをちらりと見てから、最後の名前を形づくっている文字を一つ一つ人差し指で示していった。「Ｉ□Ｄ□Ｏ□Ｉ□Ｔ□Ｄ□Ａ□Ｅ□Ｍ□Ｏ□Ｎ」

「それが何か……あっ！」ルーシーは両目をいっぱいに見開いた。「ああああっ……！」

　ほんっと、うっさいなあ、もう。騒さわぎすぎなんだよ。そんなに大騒ぎするようなことじゃないのに──少なくとも、まだ、この段階では。

「ようするに」マリアローズは軽く肩かたをすくめた。「アナグラムなんだ。この六つの名前は、文字数と、使われている文字の種類が同じで、並び替えてるだけなんだよね。だからどうしたっていう気もしなくはないんだけど。アデモンディオについては、イディオット・デイモンにあやかろうとしたのかもしれないし」

「あたしにも、これが何を意味しているのか、はっきりとしたことは言えない」ハニーはーいつ瞬しゅん、目には見えない場所を見ようとするかのような目つきをした。「──ずっと何か引っかかってたけど、気づいたのは今だから。でも、すぐに思いついただけでも、これだけいる。調べれば、もっと見つかるかもしれない」

「説明してくれる？　残りの四人は何者？」

「ディドア・モンティは錬金Ａ士組合Ｇの創設者。一人じゃない。同じ名前の人物が、これまで何人かＡＧの会長になってる。とくにすぐれた功績をあげた錬金士に与あたえられる名なの」

「おうっ！　それやそれ！　聞き覚えがあるはずやで」

「イアン・タイドムードはエルデェＥイニオンＭ機術士匠合Ｕの総Ｇ帥Ｍ。でも、大Ｇ老Ｅ師Ｍのレオナルド・〝パパ〟・デスパレードのほうが有名だと思う。死ぬまでに一度でいいから総Ｇ帥Ｍにお目にかかりたいって、ＥＭＵの中でもよく言われてたくらいだから」

「デスパレードっていうおじいちゃんは、たしか、秩ちつ序じよの番人の二代目総長襲しゆう名めい式しきに出席してたよね」

「それから、アメディ・ドン・トワは、トラジェディーの隊長だとされている人物」

「ＡＧ……ＥＭＵ……」ユリカは深刻な表情をすればするほど愛らしい。「しょして、ラフレシア第だい三しやん帝てい国こく……アンダーグラウンドの開かい拓たく者しや」

「ダイ・モノアディットは、ＳＳの〝無ゼ位ロ〟」ハニーは灰色の唇くちびるをゆがめた。「……けど、それだけじゃないかも。あたしは昨夜、一人の男に会った」

　エルデンは混こん沌とんとしている。それだけに、身を隠かくすのも別人になりきるのも容易だ。この街ではフルネームを名乗る者が少ない。もともと偽ぎ名めいや通り名を用いている者が多いし、家名など何の役にも立たないからだ。だから、逃とう亡ぼう者しやはたいていこの街にたどりつく。金と物と人が渦うず巻まくエルデンで適当な衣をまとい、好きに名乗って、再起を図るのだ。

　彼女の父もそのつもりだったのか。

　今となっては知るよしもないが、父ならおそらく、この街に居場所を見つけても、またどこかへ旅立っただろう。父は誰だれよりも何よりも速く走りたいと願っていた。高く飛ぶことさえ夢見ていたかもしれない。ひとつところに腰こしを落ちつけていられる人ではなかった。そうでなければ、〝沈黙サイレンス〟のような生き方を選んでいたに違いない。

〝沈黙サイレンス〟のもとで安あん穏のんに暮らしていることに耐たえられず、彼のもとから去った彼女は、やはりあの父の娘むすめなのだ。

　彼女は土と地ち鑑かんを養うためにあちこち見てまわり、宿を転々としながら調べるべきことを調べ、探さぐるべきことを探った。アンダーグラウンドにも潜もぐってみた。知れば知るほど興味深い街ではあるが、しばらくすれば離はなれたくなるだろう。その前に、やらなければならないことがある。そのために、彼女はトラジェディーに何度も襲おそわれて、山歩きも辞さずに遠回りをし、

なんとか追つい跡せきを振ふりきって、この街までやってきたのだ。

〝フラスコ〟の人脈は多た岐きにわたっていた。彼の扱あつかう商品は金属や宝石、繊せん維いの材料、染料から、服ふく飾しよく品ひん、化け粧しよう品ひん、食料品に及およんでいて、それは武装隊商を効率よく運用するため、片時も荷馬車を空にしないように努めた結果、そうなったにすぎないと本人は語っていた。金と人と物資を動かすことにかけて、彼には間違いなく天てん賦ぷの才があった。彼の運輸会社は物の数年で急成長を遂とげていたが、彼自身は有名人ではなかった。彼の会社にはたくさんの看板があって、それらは捏ねつ造ぞうされたものでも、急造されたものでもなく、もとから存在していたものだった。彼はたくさんの会社を買収し、それらを統合することによって商しよう圏けんを拡大させた。彼は直接的に、あるいは間接的に、ありとあらゆる分野の人材を知っていた。

モルフォ党の元党員は〝フラスコ〟の知人の部下の兄だった。それ以上、くわしいことは教えてもらえなかったし、知るべきではないのだろう。

男はハッツフォー独立軍領出身で、かつては治安維い持じ騎き士し団だんの騎士だったようだが、退団してモルフォ党に入党した。党員として十四年間働いたのち、脱だつ党とうして放ほう浪ろう、今はエルデンで余生を過ごしている。年ねん齢れいは四十七歳。通り名はギァム。居場所はエルデン第十区外縁部ネイバリングの料理店「楼薗ローエン」。男はその趣味と実益を兼ねた店の経営に携たずさわっている数名のうちの一人らしい。

楼薗は鼻が曲がりそうなほど強きよう烈れつな香こうの匂においが立ちこめる子供ばかりの店だった。給仕も、店の奥で調理に勤いそしむ料理人も、会計係も、全員、十歳かそれ以下の子供なのだ。外見は幼いのに、どこか大人びている。

彼女は一人用の席について、プルケット・パイ、シュバルデ、ドイスイットといった聞いたことのない名の料理を頼たのんだ。味付けは辛からく、濃のう厚こうで、なかなか美味だったが、彼女はどれも四分の一ほどしか食べなかった。きわめて微び量りようではあるものの、麻ま薬やくが入っていたからだ。

彼女は給仕の少女を呼んでギァムに会わせてほしいと頼み、〝フ

ラスコ〟が知人の部下にしたためさせた手紙を渡わたした。

少女は一度下がり、十五分ほどすると戻もどってきて、丁てい寧ねいに一礼した。「ご主人様がお会いになります」

彼女は子供たちが立ち働く厨ちゆう房ぼうの奥へと導かれた。その先は折れ曲がる通路で、やはり子供たちがいた。彼ら、彼女らは通路の角に設しつらえられた寝しん台だいの上に寝ねそべっていたり、壁かべの向こうにある檻おりの中でじゃれあっていたり、床ゆかに座って虚こ空くうを見つめていたりした。彼女に目を向ける子供はいなかった。通路を抜ぬけると、広い部屋の中に廟びようのようなものが築かれていた。

廟の真ん中に置かれている寝椅子に、一人の男が身体からだを横向きにして腰かけていた。男はきらびやかな絹のガウンを羽織っているだけで、他ほかには何も身につけていなかった。男の周りには同じように薄うす着ぎの子供たちがいて、男の身体を撫なでたり口づけしたりしていた。男は隻せき眼がんで、左ひだり脚あしがなかった。ひび割れたまま硬かたくなったような唇に金色の煙管キセルをくわえて、青白い煙けむりをくゆらせていた。短く刈かられた頭とう髪はつは白いのに、眉まゆ毛げは黒々としていた。

「俺に何か用か、お嬢じようちゃん。惜おしいな。あと十歳若けりゃあ、俺の好みなんだが」

「ギァム。あなたに訊ききたいことがあるの」

「教えてほしい──の間ま違ちがいじゃないのか」

「違う。あたしが尋たずねたことに、あなたは答えて。そのほうがいいと思う。お互たがいのために」

男はしばらくの間、妙みようにからっぽな黒い目で彼女を睨にらんでいたが、不意に笑えみを浮うかべてうなずいた。「いいだろう。血を分けた弟の頼みだしな。腹の据すわった女を怒らせると面めん倒どうだ。面倒がいやで、俺はこんなふうに生きてるんだからな」

彼女は質問した。男はＳＳのことは知らないと言った。聞いたこともないと。ただし、モルフォ党は常に最さい先せん端たんの装備に身を包んだ最上の兵隊が最大限の戦果をあげる最高の軍隊だとい

うことは請うけあった。

　モルフォ党の党員に比べれば、各国正規軍の軍装は百年遅おくれている。従って、モルフォ党は勝つべくして勝つ。

　党員の任務は、戦って勝利することだ。戦場は黙だまっていても与あたえられる。党員の数はさして多くない。男が知るかぎりでは五百人程度だ。それだけいれば、万単位の敵を駆く逐ちくできるだけの力を党は持っている。もちろん、一万の騎き兵へいに正面切って突とつ撃げきするような馬ば鹿かな真ま似ねはしない。地の利を生かし、敵軍を巧こう妙みように分断して、各個撃破する。要害を攻せめ落とすような戦いも得意だ。党には工作部隊がある。彼らは隧道トンネルを掘ほり、炸薬ＡＢＮＰで城じよう壁へき等を爆ばく破はする。この技術は秘中の秘だ。

　党は金を持っている。腐くさるほど持っている。党員は機密を守り、与えられた戦場で戦いつづければ、欲しいものは何でも手に入る。

　党員は党に忠誠を誓ちかい、団結している。裏切りは許されない。男も裏切り者を自らの手で処断したことがある。三人殺した。仲間たちと一いつ緒しよに嬲なぶり殺しにした。

　男は有能な兵士ソルジヤーで、厳格な指揮官リーダーでもあったが、五年前、グラー大陸で戦せん闘とう中に崖がけから滑かつ落らくした。気を失い、目が覚めると、左ひだり眼めと左脚がだめになっていた。待てど暮らせど救助がこなかったので、自力で人里にたどりついた。

　党の外に出てみたら、戻る気にはならなかった。党員ではなく、ただのギァムとなった男は無一文だったが、生き抜くための知ち恵えは備わっていた。

　α大陸に渡って、久しぶりに会った弟は、まっとうな商売でそこそこ稼かせいでいた。兄は弟に金を融ゆう資ししてもらい、あれこれ手を出したあげく、ここに落ちついた──あるいは、堕おちた先がここだった。

「俺は子供好きだった」男はうつろな目をした少女の柔やわ肌はだに指を這はわせながら、青白い煙を吐はきだした。「ずっとな。この店は俺の趣味と実益を兼ねてる。儲もうけもそれなりにあるし

な。ただものめずらしいから飯を食いにきてハマるやつもいれば、お楽しみを期待して大枚をはたくやつもいる。俺にとっては、どっちも大事なお客様だ」

　男は五年前にモルフォ党から離はなれた。だから、それ以降のことは知らない。

「今となっちゃあ、ぜんぶいい思い出だ。俺は戦場が好きで、人殺しを愛してた。党は俺が望むものをすべてくれた。不満はなかった。何もかも、俺にとっては麗うるわしい過去だ。自じ慢まんの種もいくつかあるが、戻りたいとは思わんね。この脚じゃあ──」男は、たぶんもとの三分の一ほどの長さしかないだろう左脚をさすってみせた。「前みたいには戦えんしな。何だかんだ言って、結局、そこなのかもしれん」

「自分を哀あわれんでいるの？」

「いいや。そうは見えんだろう？」

「うん」

「人生の先せん輩ぱいとして、幸せに暮らすための秘ひ訣けつを一つ教えてやる。満足することだ」

「あまり得意じゃない」

「だろうな。そういう面つらをしてるよ」

「自慢の種って？」

「お嬢ちゃんに言ってもわかるまい」

「言ってみて」

「俺は一度だけ、党首に会ったことがある」そう言って目を輝かがやかせた男の表情は、周りの子供たちよりもあどけなく見えた。「俺たちの党首キプリス・モルフォに。党員の前にも姿を現さない、実在を疑う向きすらあった、あの党首に。この先も誰だれかに話す機会はないだろうから、お嬢ちゃんに話してやる。俺はあのとき、ラフレシアのボンヌ・ソレーから暗黒大陸に向かう船に揺ゆられてた。我らがパトロクルス号！　商船に偽ぎ装そうした党の船でな。見た目以外は完全に軍ぐん艦かんだ。俺はかなり飲んでた。だ

いぶ酔よっぱらってた。当時、俺はまだ若くてな。割り当てられた部屋は三等船室。八人部屋だった。船乗りってやつは、陸おかと海は違うって強きよう迫はく観かん念ねんに取り憑つかれてて、船の上ではいつだって威い張ばりちらしてやがる。よっぽどの下っ端ぱ以外は、どの船員も俺たちよりいい部屋で寝てやがった。俺はそれがよっぽど腹に据えかねてたのか？　気がつくと、酒さか瓶びんを片手に一等船室がずらっと並んでる船内廊ろう下かにいた。いったい俺は、何をしようとしてたんだろうな……？　わからんが、俺の手は奥の部屋のドアを開けようとしてた。もし船長の部屋だったら、俺は海に叩たたき落とされてたかもしれん。さいわい、違った。パトロクルス号には、特別の船室があったんだ。船上では王様より偉えらい船長様。それより偉い、遥はるかに偉い、我が党の象しよう徴ちようにして、幻げん影えいみたいな指導者たる党首様。党首専用の船室！　俺はへべれけになって、党首の部屋のドアを開けちまったんだ。いや！　正確に言えば、開けようとしたが、開かなかった。鍵かぎでも掛かかってたんだろう。俺はドアを叩いた。そうしたら、中からドアが開いた。俺は見たんだ」

　彼女は男の話に耳を傾かたむけながら、何かを感じていた。

　これは何だろう。

「―どうってことのない、三十かそこらの男だった。『どうしました』と男は言った。俺は答えずに、部屋の中を見た。いい部屋だった。上等な、立派な船室だった。奥にもう一人、男がいた。俺は目を疑った。なぜかって？　同じだったんだ。ドアを開けて、俺に声をかけた男と、服装こそ違ったが、まったく同じ顔をしてた。双ふた子ごだ―俺はそう思った。奥の男が言った。『単に酔っているだけのようですよ、ダイ・モノアディット』と。手前の男は笑って肩かたをすくめた。『深酒は身体からだに毒です。もう休みなさい』。そう言って、男はドアを閉めた。そのあとだ。俺はこの部屋が党首専用の船室だってことに気づいた。開かずの間とも呼ばれていた、党首専用の船室の中を、俺は見ちまった！　大変なことをしでかした……！　俺は自分の船室に駆かけ戻もどって、寝しん台だいの上で丸くなり、毛布をひっかぶった。絶対に処しよ罰ばつされると思った。当然、このことは誰にも言わなかった。だが、不思議と何も起こらなかった。もしかして、夢でも見たのか……？　違う！　俺は覚えてる。はっきりと記き憶おくしてる。モルフォ党の党首キプリス・モルフォはちゃんといた！　しかも、二人！　瓜うり二つの、双子だった！　キプリス・モルフォが党首を示す暗号名

コードネームだってことは誰だって知ってる。二百年近く前に、ハッツフォーの独立戦争を支し援えんした党首、稀き代だいの軍師〝マスター・バタフライ〟もキプリス・モルフォを名乗ってたんだからな。当代の党首キプリス・モルフォは、双子！　少なくともその片方は、ダイ・モノアディット！　それが党首の名だ……！」

　彼女の解かい釈しやくは必ずしも男のそれとは一いつ致ちしないが、おもしろい話ではあった。

　男が言うとおり、ダイ・モノアディットがモルフォ党の党首だったとしたら？

　あるいは、彼女が思うように、ダイ・モノアディットがモルフォ党の党首の関係者だったとしたら？

　いずれにしても、モルフォ党とＳＳは繫つながっているのだ。ひょっとしたら、彼女が想像していた以上に密接な関かかわりを持っているのかもしれない。

　男はもっと決定的な、重要な情報を持っているだろうか。そうは思えないが、男と会ったことは無む駄だではなかった。彼女は腰こしのケースに手をかけた。

　男も気づいたようだ。子供たちを乱暴にはねのけ、寝ね椅い子すに立てかけてあった義足を手にとった。「……余計な客を連れてきたのはおまえか、お嬢じようちゃん」

　彼女はケースからリトルジョニーをとりだした。「ごめんなさい」

「畜生ファアツク」男は子供たちに手伝わせて左ひだり脚あしに義足を装着すると、モトロール刀を持って立ちあがった。「相手は何者だ」

「おそらく、トラジェディー」

「ＥＭＵの特とく殊しゆ部隊か。話には聞いたことがあるが──」

「これから会えるかも」

「お目にかかるなら、飽あきるほど生きて、もっと年をくってからのほうがよかったな」男は不敵な笑えみを浮うかべ、鞘さやを払は

らったモトロール刀で子供たちを追い散らした。「おまえらは裏口から逃にげろ。ぐずぐずするな。早くしろ。急げ」

「あなたは逃げないの？」

「子供たちを逃がしてからだ。言わなかったか。俺は子供好きなんだ」

「本当に、ごめんなさい」彼女は頭を下げて、通路のほうに向きなおった。

　子供たちの悲鳴が聞こえる。それから、複数の足音も。通路と部屋を仕切っている幕が割れた。彼女は発はつ砲ぽうした。

「……ギァムは死んだ。トラジェディーに殺された。子供も何人か──あたしが確かく認にんしたかぎりでは六人、犠ぎ牲せいになった」

「それで……その楼薗から逃げだしたあとに、ぼくと出くわしたってことですか」

「正確には、楼薗を出て、四時間くらい逃げたり、隠かくれたり、見つかったり、また逃げたりしたあと──だけど」

「……そんなに」

「そうとうしつこいから。あいつら」

「でも」マリアローズは目を細めてため息をついた。「なんでトラジェディーは、その店できみを襲おそったんだろうね。たまたま、なのかな。きみがその店に行くことを知ってて、待ち伏ぶせしてたって可能性は？」

「ないとは言えない」ハニーは下した唇くちびるを嚙かもうとして、やめた。「もしそうだとしたら、ギァムの弟とか〝フラスコ〟に迷めい惑わくがかかってるかも」

「言いたぁないけどな……」カタリは腕うで組ぐみをして難しい魚

顔をした。「正味の話、お前じぶんの境きよう遇ぐうに同情はするわ。父親や何や殺されて、黙だまっとられんっちゅう気持ちはわかる。せやけどな。行く先々で、やで。そこまでいろんなモン巻きこんで、お前じぶんはいったい何をしたいねん」

「あたしは」ハニーは自分の腿ももに両手を押しつけた。「知りたい。何がどうなっていて、こうなったのか。ちゃんと知りたいの」

　ユリカは自分が痛みを感じているかのように顔をゆがめた。「知ったところで、失ったものをとりもどしゅことはできないのよ？」

「うん。わかってる。でも、納なつ得とくはできると思うから」

「事じ実じちゆ関かん係けいを一から十まで知れば、何もかもしょうがないことだったって割り切れる？」

「たぶん」

　ユリカはうつむいてかすかに首を横に振ふっただけで、何も返さなかった。

　マリアローズも、どう言えばいいのかわからない。

　知ることと納得することはまったく別だと思う。でも、それはあくまでマリアローズの場合だ。ハニーは違ちがうのかもしれない。ハニーは、知れば納得できると信じたくて、信じようとしているのではないか。そんなふうに感じられてならないけれど、所しよ詮せん、マリアローズは自分の尺度で物を考えているわけだから、勘かん違ちがいかもしれない。それを言ったら、何だってそうなんだけどさ。

　きゅーは硝子ガラスのない窓まど際ぎわにたたずんで、外を眺ながめている。あの窓、どうにかしないと。

　ピンパーネルはいつもどおりの静かな砂色の瞳ひとみで、きゅーを見つめている。

「……わたしには……」トマトクンのボタンを付けなおしたあとは、その場から微び動どうだにしないでじっと話を聞いていたサフィニアが、ぽつりぽつりと言った。「……わからなくも、ありません……ハニーさんの考えは。知ることは……とても大切です。少

なくとも、ある種の人間にとって……事実を突つき止めたいという欲よつ求きゅうは、ごく自然なものですし。それに……自分自身の裡うちに、処理しきれないものを抱かかえているときは……外を向いていたほうがいいんです。そのほうが……きっと、楽だから」

「自分──自身……」ハニーは胸を押さえた。「あたし……」

　そうして彼女はあたりを見まわした。まるで何かを探しているかのようだ。けれど、ここには彼女が探しているものなんてない。

　それはここにはない。

　そこにある。

　彼女の中に。

　気づかなかったのか。気づきたくなかったのか。とにかく、最初からあった。

　たぶん、そのときようやく理解したのだ。

「あ……」彼女は両目の下に指をあてた。もう濡ぬれていた。「──あたし……」

　唇を、顎あごを、肩かたを、震ふるわせて、彼女は涙なみだを流していた。そのうち声をあげはじめた。小さな子供みたいな泣き声だった。

　マリアローズはサフィニアと、それからユリカと目を見み交かわした。サフィニアは困ったように口くち許もとをゆるめ、ユリカは立ちあがってハニーに近づいていった。ユリカに抱だきしめられると、ハニーの声はいちだんと大きくなった。ユリカにしがみついて、ハニーはいつ果てるともなく泣きじゃくった。

　鼻をすすっているカタリと、完全にもらい泣きしているルーシーを横目で見ながら、マリアローズは眉み間けんに皺しわを寄せていた。

interlude エリオットの手記

コーラルモードを発たって四日。シギムグウェイエンに到とう着ちやく。帝てい王おう直ちよつ轄かつ地ちはおろか六十六公こう爵しやく領りようは遥はるか遠く。

私は地獄ヘルの辺境にいる。

侯爵ラデオンギギ・スターラストが治めるこの一帯は、タァダムドと呼ばれる青い沼地スワンプと旋せん回かい樹じゆが生おい茂しげる紫むらさき色いろの森ニュエァランデリ、他ほかは赤土の荒こう野やチェザルォンダという、実に色しき彩さい豊かな土と地ち柄がらだ。スターラスト侯爵領ラデオニアの周りにはロリケンヌ伯爵領テリオニア、ナフラット子爵領アーロニア、ボツアングラ男爵領ツエペリオニア等々があり、彼らは互たがいに所領をうかがいあっている。大半の悪魔ヒトは己おのれの欲よく望ぼうを隠かくさない。陰いん謀ぼうは大好きだし、頭が回る悪魔ヒトはそれが得意だが、基本的には正直者たちだ。

生き馬の目を抜ぬく悪魔ヒトの世界だが、スターラスト侯爵領ラデオニアは繁はん栄えいを極きわめているといっても過言ではあるまい。侯爵ラデオンといったら公爵ヴエリオンの近親者もしくは辺境の実力者に地獄帝王が授さずける爵しやく位いだが、ギギ・スターラストは後者に該がい当とうする。彼女は地獄ヘルの辺境で知らぬ悪魔モノとていない一いつ騎き当とう千せんの強者つわものだ。ひとかどの知恵者でもあるという。地獄帝王の覚えめでたく、彼女の領地には帝王直属地獄軍団の想定前線ハイポスライン基地ベーストリスタンゾートが築かれている。いわば正規軍の後ろ盾だてを、彼女はえているのだ。むろん、それに値あたいする悪魔モノだということを、彼女は絶えず証明しつづけなければならない。彼女はうまくやっているようだ。

スターラスト侯こうの居城があるコーラルモードもにぎやかな街だったが、侯爵領ラデオニア第二の都市シギムグウェイエンもまた、活気に充みち満ちている。

イグルギィ正門をくぐると、そこは駐屯地キャンプドゥアヌゴアだ。地獄軍殲せん滅めつ師団〝地獄の雷ヘルサンダー〟がこの地に駐ちゆう留りゆうしている。地獄帝王に忠誠を捧ささげている勇ゆう猛もう果か敢かんな戦士たちは荒あらくれ者ぞろいだが、あからさまに喧けん嘩かを売ったりしなければ突っかかってくることはま

ずない。

　見物は身長十五メーテルを超こえる巨きよ人じんといった姿のドアンガルたちだ。彼らは平時でも重武装しているが、それは戦いくさに備えているのではなく、暴れぬよう拘こう束そくされているのである。彼ら専用の鎧よろい兜かぶとには重じゆう鎖さを装着するための仕組みが備わっている。それによって彼らは繫つなぎ止められ、制せい御ぎよされているのだ。

　ドアンガル使いは貴重な兵種であり、特別な待たい遇ぐうを受けている。ドアンガルの鎧兜とそっくりな甲かつ冑ちゆうを着こみ、偉えらそうにふんぞり返って歩いている悪魔モノを見かけたら、たいていそれはドアンガル使いだ。ドアンガル使いに出くわしたら、可能なかぎり近づかぬようにしたほうがいい。彼らは戦士の誇ほこりを持たぬ驕きよう慢まんな愚おろか者たちである。

　駐屯地キャンプドゥアヌゴアを貫つらぬいてまっすぐのびるトゥルアルド大通りは、いつも混みあっている。前を向いていても、右を見ても、左を見ても、後ろを振ふり返っても悪魔ヒト、悪魔ヒト、悪魔ヒトだ。立ち止まってぼんやりしていたら、すぐに突つき飛ばされる。飛び交う言葉は格式高い帝王語、帝王語の簡易版的な一いつ般ぱん語ご、様々な方言、各種族の独自言語。たいていどの言葉にも、私のような人間ひとにとっては懐なつかしさが感じられる外来語が多分に混じっている。

　フィザナ市場はシギムグウェイエンの台所だ。食材の宝庫で、屋台がひしめく一角では、見た目も香かおりも味付けも派手で濃のう厚こうな辺境料理をぞんぶんに味わうことができる。タァダムドの沼ぬまでとれる、黄色い腹で細長い足が八本ある巨魚といった見た目のパリオッチを蒸むして身をほぐし、ニュエァランデリの森産の茸きのこと和あえて、衣をつけて揚あげ、とろみのある汁しるをかけたシギムグウェイエン名物、パリオッチフレックは大変美味だった。他にもブァマラ串くし、ツォンブルチョイズァ、ゴンブルソイボラは必見ならぬ必食である。

　美食に飽あいたら、街のほぼ中心にある高さ三百メーテル以上の巨きよ塔とうに登ってみるのもいい。塔の名はシギムグウェイエン。街の名の由来である。バツ・ヌクロという狂きよう気きの芸術家がたった一人で設計し、建造を開始した巨塔シギムグウェイエンの周りにできた集落が、徐じよ々じよに大きくなって今に至るのだ。巨塔は今なお建設中であり、完成した暁あかつきには五百メー

テルにも達するのだという。

　他にも、バツ・ヌクロの作品と蒐しゆう集しゆう物ぶつが展示されているモンパーヌズ収蔵館、はたまた、かつて悪魔大公グランヴエリオンアーマンが滞たい在ざいしたというリンムリシュルト記き憶おく外宮など、見所は決して少なくない。

　シギムグウェイエンは訪おとずれるだけの価値がある街だ。しかし、旅行者（地獄ヘルにも旅行という概がい念ねんは存在する）はよくよく用心しなければならない。

　トリスタンゾートよりもさらに想定前線ハイポスラインに近いこの街の向こうは、無数の准男爵ツエペリアがしのぎを削けずる最辺境オーバー地帯フロンテイアだ。

　この先に棲すむ悪魔ヒトは、地獄帝王の威い光こうにもひれ伏ふすことのない蛮族ババリンたちである。悪魔ヒトは普ふ通つう、連中を同じ悪魔ヒトとは見なさない。彼らを悪魔ヒトと呼ぶのは悪魔ヒト生態学者だけである。しかしながら、地獄帝王に忠誠を誓ちかいさえすれば、蛮族ババリンであってもたちまちのうちに悪魔ヒトとして認められる。悪魔ヒトにはそうしたおおらかさがある。〝世界のワールド終わりエンド〟にまします帝王に向かって頭こうべを垂れるものは皆みな━私のような人間ひとからすれば、単なる獣けものや面めん妖ような怪かい物ぶつにしか見えなくても、蚤のみや蛆うじ虫むし程度の知能しか持たなくても、それは悪魔ヒトなのである。

　ともあれ、シギムグウェイエンの向こうは蛮族ババリンの地だ。准男爵ツエペリアたちは相争いながらも蛮族ババリンの攻こう撃げきから想定ハイポ侵攻路スルートを死守している。シギムグウェイエンも、一歩街の外に出て最辺境オーバー地帯フロンテイアに足を踏ふみ入れれば、探しまわらなくても蛮族ババリンのほうから近づいてきてくれて壮そう絶ぜつな奪うばいあいが始まる。何を奪いあうのか。当然、互たがいの命だ。

　シギムグウェイエンにある猟師組合ハンターギルドの組合長ＧＭはスターラスト侯だ。実際には名代が運営を統とう括かつしているが、侯爵ラデオンが深く関かかわっている組織だということは間ま違ちがいない。猟師組合ハンターギルドに登録した悪魔ヒトは、蛮族ババリンを討とう伐ばつすることで報ほう酬しゆうと名めい誉よ、さらには地位が与あたえられる。猟師ハンターとして目覚まし

い活かつ躍やくをすれば、准男爵ツエペリアになって領地を持つことも夢ではないのだ。

　シギムグウェイエンは、猟師ハンターとそれを志す悪魔モノ、そして彼らに衣食住等々を提供することで生計を立てている悪魔モノたちで成り立っている。

　何しろ、とくに血の気の多い悪魔モノたちが集つどっているので、道を歩けば罵ののしりあいや暴ぼう力りよく沙ざ汰たに出くわす。喧嘩が行きすぎて、つい殺してしまった。そんなこともめずらしくない。

　この街では、蛮族ババリンの生首を腰こしにぶらさげて威い風ふう堂どう々どう闊かつ歩ぽしている猟師ハンターの姿が、そこらじゅうで見受けられる。首以外の部位も、市場に持ってゆけば売り物になるから、蛮族ババリンの死体を担かついで運んでいる様子も頻ひん繁ぱんに目にする。

　シギムグウェイエンの名所を一通り巡めぐったあと、私はとある酒場で一服することにした。

　地酒を飲みながら、土地の煙草たばこを吸う。旅を愛する私の楽しみの一つだ。

　フィザナ市場で仕入れたチョチョという濃こい紫むらさき色いろの煙草は、かすかに甘く、酸味があり、それをくるんでいる重厚な苦味とあいまって、独特の刺し激げきをもたらしてくれた。これは大変美味である。

　一方、すすめられたアロッポとかいう緑色の酒は、途と方ほうもなく青あお臭くさく、一口飲んだだけで胸一いつ杯ぱいになってしまう。それでいて、すぐさま二口目が欲しくなるのだから、この味わいに独特で不可思議な魅み力りよくが備わっているというよりも、何か麻ま薬やくに類する成分が含ふくまれているのだろう。地獄ヘルの酒にはよくあることだ。多種多様な毒と薬（両者は不可分なのだが）を摂せつ取しゆしてきた私にはさして効きはしないが、酒場を見渡すと一杯目の半ばから早くも酩めい酊ていしている悪魔モノが実に多い。

　踊おどる悪魔モノがいる。歌う悪魔モノ、囃はやす悪魔モノ、怒ど鳴なる悪魔モノがいる。激げつ昂こうして殴なぐりあいを始め、

ただちに店から叩たたきだされる悪魔モノたちもいる。

　今、店に入ってきた八本腕うでのギィヨスフレブドゥナという種族の悪魔モノは、おそらく楽師だろう。案の定だった。店のあるじと何やら交こう渉しようしていたギィヨスフレブドゥナの若者（私の見立てでは、たぶん百年は生きてないと思う。地獄ヘルにおいては若者の部類である）は、やがて背負っていた楽器を、八本腕を駆く使しして合計五つも構えた。

　このような荒っぽい街では、楽師も命がけである。つまらぬ演奏をしたら、腹を立てた悪魔モノに叩き殺されてしまいかねない。この楽師の腕前は、しかし、見事なものだった。低音の弦げん楽器と高音の弦楽器、鍵けん盤ばん楽器、打楽器を二つ、これらを自在に操あやつりつつ、ときに囁ささやくように、あるいは叫さけぶように、むせび泣くように、笑うように歌うのである。

　私は専門家ではないが、その技量に未熟な部分は一つもないように思われた。ただ、一般語の歌詞や歌声の端はし々ばしに瑞みず々みずしい感性がほとばしっていて、それがまた鮮せん烈れつな印象を与えていた。そして、楽師は毅き然ぜんとしていた。楽師風ふ情ぜいと侮あなどられるいわれはないと言わんばかりの堂々たる態度だった。

　酒場に集った悪魔々々ヒトビトは最初、じっと聴きき入り、そのうち手て拍びよう子しをとりはじめた。すると楽師も、明るい調子で、覚えやすい旋せん律りつの曲を奏かなでた。媚こびはせぬが、サービスはするというわけである。こうなると皆、大喜びだ。私も楽師を囲む悪ヒ魔ト垣がきに加わり、見知らぬ悪魔モノと肩を組んで身体からだを揺ゆらしたり、足あし踏ぶみをしたり、歌ったりした。

　騒さわぎながら飲むアロッポは、この上なくうまいとしか言いようがなかった。悪魔々々ヒトビトは競きそうようにアロッポをがぶ飲みして、楽師は皆を煽あおるように歌った。少しだれると、愛らしい恋れん歌かや切々たる哀あい歌かに転じて、感じ入り泣きだす悪魔モノもいた。湿しめっぽい雰ふん囲い気きがつづいたかと思うと、突とつ然ぜん、背景曲付きの寸劇が始まり、そこかしこで笑いが弾はじけた。

　さっきまで腹を抱かかえて大笑いしていた悪魔モノたちが、いつの間にか涙なみだを誘さそわれていて、気がつくと何もかも忘れて

馬ば鹿か騒さわぎしているのだ。なんたる豊かな才能、たぐいまれなる精神性、なんという巧たくみな楽師なのだろう。

　心地ここちよく疲つかれ果てた悪魔モノたちが去り、泥でい酔すい者しやたちが雑ざ魚こ寝ねしている酒場で、私は楽師と、それから一人の精せい悍かんな猟師ハンターと卓たくを囲み、ゆっくりと酒しゆ杯はいを傾かたむける機会をえた。

　八本の腕を持ち、鱗うろこ状じようの肌はだは黄土色で、猛もう禽きんのような顔立ちの楽師はザンツと名乗り、これまでの旅で回ってきた土地のことをぽつりぽつりと語った。演奏、歌唱しているときとは違い、素す顔がおの彼は木ぼく訥とつだったが、旅を習性としている私とは、共通の話題がいくらでもあった。

　猟師ハンターの名はスオルツゥア。ゼオルクスギャンドという種族の悪魔ヒトで、身の丈たけは二メーテルを超こえ、肩かた幅はばはその半分ほどもある。鉛なまり色いろの皮ひ膚ふの下にみっちりと詰つまっている筋肉は鋼はがねのようだ。頑がん丈じような兜かぶとのごとき頭の左右から二本の湾わん曲きよくした角が突つきだし、その双そう眼がんには青く猛たける炎ほのおを宿らせている。彼らは地獄軍六百六十六師団の殲せん滅めつ師団に徴ちよう用ようされ、地獄帝てい王おうの戦士として働いていることが多い。なぜここで猟師ハンターをしているのか。

「俺の両親はある貴族に謀ぼう殺さつされた。俺の目標は仇あだ討うちだ。そのために腕を磨みがいている」

　スオルツゥアはアロッポを静かに飲みながらそう語った。だが、腕を磨きたいのであれば、むしろ殲滅師団に入団したほうがいい。彼かの師団における訓練の厳しさは音に聞こえている。

「いや。兵になるということは、誰だれかのために戦うということだろう。たとえば、師団の一員となれば、帝王陛下のために粉ふん骨こつ砕さい身しんし、場合によっては命を捨てねばならん。それも一つの強さだが、俺が求めるものとは違う」

「あなたが一人で歩む道と、あなたの戦いに」と楽師ザンツは言い、酒杯を掲かかげた。

　私もそれにならうと、孤こ高こうの猟師ハンタースオルツゥアは答礼して笑えみを浮うかべた。

「俺はおそらく、これからも一人で歩むのだろうが、今日、あんたが聴かせてくれた音曲は、幾いく千せんの夜に必ずや俺の背を押してくれるだろう。本当にすばらしかった。心底から楽しませてもらった」

「楽師にとっては無上の幸せだ」

「あんたの旅には何か目的はないのか」

「まだ見ぬ土地で──いまだ知らぬものたちの前で、今は影かげも形もないうたを歌いたい。それがわたしの生きる目的といえば目的かもしれない」

「果てがないな」

「そうだ」

「怖こわくはないか。終わりなき道を行くのは」

「もし行く先を思い我が足がすくめば、その恐おそれはわたしに新たなうたをもたらすだろう」

　楽師ザンツの言葉を聞き、猟師ハンタースオルツゥアは小山のような肩を揺らして笑った。私も笑った。なんとよき道だろう！
我々は乾かん杯ぱいした。

「ところで」とスオルツゥアが私に雄お々おしい顔を向けた。「あんたは流れ者か。いや、このシギムグウェイエンにいる悪魔モノはたいていそうだが──」

　彼が言わんとしていることは理解できた。私はできるだけ姿形を隠かくすような服装をしているし、私のような──つまり、人間ひとに似た悪魔ヒトがいないわけではない。ただ、私ほど人間ひとそのものといった見かけの悪魔ヒトはめったにいないだろう（私は人間ひとなので、あたりまえのことではあるのだが）。それに、私は最前までのどんちゃん騒ぎですっかり舞まいあがってしまい、目ま深ぶかに被かぶっていたフードをとって顔をあらわにしていた。

　さて、どう答えたものか。黙だまりこんで考えていると、ザンツが口を開いた。

「わたしが思うに、あなたは異界の方ではありませんか」

　私は正直に肯こう定ていした。

「ふむ」スオルツゥアは突とつ風ぷうに喩たとえられる鼻息を噴ふきだした。「そうか。異界から。それはめずらしいな。で、わざわざ異界からやってきて、ここで何をしているのだ」

　私は旅人である。

　まだ見知らぬ土地があれば、そこへ行きたいと願う。願うだけではなく、行くことができるのならば行く。

　私は土を、岩を、砂を踏ふむ者である。広く限りない空を駆かけることは残念ながらできないが、異境の地を踏みしめて歩く者である。

「いろいろな世界を旅してきたのですか」

　楽師に尋たずねられて、私はうなずき、とくに印象的だった旅について、かいつまんで話した。私は旅人だが、詩人ではない。私の感かん銘めいを、驚きよう嘆たんを、寂せき寥りようを、うまく表現する方法を、私は知らない。それでも、私は話した。彼らは耳を傾けてくれた。

「あんたの話を聞いていたら、なんだか俺も旅に出たくなってきたぞ！」

「わたしは歌いたくなってきた」

　それでは、旅に出ようではないか。長く道行きをともにする必要はない。別れたくなったら別れればいいのだ。望まぬ方向には行かなくていい。方角だけ決めて、あとはとりあえずまっすぐ進んでみる。そんな旅も悪くない。崖がけにぶちあたったら、そのときはそのときだ。何か考えればいい。

　荷物をあまり持たぬことだ。必要最低限よりも足りなくたっていい。旅に慣れると、何だって融ゆう通ずうがきくようになるものだ。創意工夫が旅の楽しみの一つでもある。

　旅は我々に教えてくれる。我々が生きるためになくてはならぬものはそう多くない。どんなものでも、たいてい見つけることができる。我々は身一つで生きてゆけるのだ。むろん、そのためには知ち恵えを働かさねばならないが、そうした事々も身についてゆくもの

なのである。

　そう。

　我々を生かしてくれるもの、それは希望である。

　希望さえこの手にしっかりと握にぎりしめていれば、我々は歩むことができる。歩むことさえできれば、どこかにたどりつける。

　希望を失った途と端たん、我々はうなだれて、前を向くどころか、後ろを振ふり返ることしかできなくなる。

　通りすぎた街は、だが、もう遠いのだ。後あと戻もどりするにしても、そこまで行きつける気がせず、さりとてまだ見えぬ目的地に向かって踏みだす足にはちっとも力が入らない。

　これまでの旅路で、私も何度か希望をなくしかけた。そのたびに、名も知らぬ異境に思いを馳はせた。

　行きたい場所が、この目で見たいものが、私にはまだまだたくさんある。

　無限にある。

　私はどこかに落としてしまった希望を捜さがしだして、拾いなおし、ふたたび握りしめた。それだけで、顔を上げることができた。

　旅に出よう。

　意気投合した相手を旅に誘さそうのは、私の悪い癖くせである。

「……だが、俺には討うたねばならぬ仇きゆう敵てきがいるのだ」猟師ハンタースオルツゥアは低く呻うめいた。「正直、今、あんたと旅に出たいと一いつ瞬しゆんでも思った自分自身の意志薄はく弱じやくさに、俺は呆あきれている」

「わたしにはわたしの旅があります」楽師ザンツはそっと微笑ほほえんだ。「ですが、旅の途中で、またあなたと出会うこともあるかもしれませんね」

　私はザンツとの再会を願い、スオルツゥアの宿願が果たされることを祈いのった。

　語りつくせぬそれぞれの記き憶おくや思いを肴さかなに、我々は酔よい潰つぶれるまで痛飲した。

　友よ。

　地獄ヘルはおもしろい。

　きみはこの地獄ヘルをたいそう憎にくんでいるようだが、私は気に入っている。

Omenage 900 8th revolution 24th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

chapter.7

もしかして永遠

　エルデンはけっこう北のほうにある。冬は雪も降るくらいだから、夏の間はそれなりに暑いとはいっても、さほどではない。気温が上がってもわりと乾かん燥そうしているし、たまにクソ暑い日があってもたいしてつづかないので、ちょっと我が慢まんすればいい。

　今年は違ちがう。なんだかやけに暑い。例年なら真夏でも朝晩は過ごしやすいのに、けっこう蒸むし蒸むしする。

　こんな日に、ずっとフル装備の状態でいないといけないというのは、軽い拷ごう問もんだ。そうかといって、警けい戒かいしないわけにもゆかない。

　リビングの窓まど硝子ガラスは、特注品になるので三日かかると業者に言われた。

　マリアローズは床ゆかに腰こしを下ろし、硝子のない窓から外へ足を投げだしている。

　裏庭は静かだ。

　家の中も騒そう々ぞうしくはない。

　トマトクンはソファーで寝ねていて、きゅーとサフィニア、ユリカは遅おそい夕食の後片付けをしている。トマトクンの隣となりに座っているカタリは少し眠ねむそうだ。ピンパーネルとルーシーは外を見回っているので、今はいない。〝ハニーメリー〟はやっぱり床に正座している。

　一瞬、ハニーと目があった。

　マリアローズはすぐに窓の外へと視線を投げつけて、小さくため息をつきながら指先でガスマスクをいじった。

　マスクは明るいうちにカタリが調達してきたもので、一応、全員持っている。催さい涙るいガスだろうが、催さい眠みんガスだろうが、これを装着すればなんとか防ぐことができるだろう。トマトクンは手て許もとに大剣を置いているだけだが、他ほかは皆みな、武装しているから、何が起こってもすぐに対応できる。マリアローズに至っては、靴くつまで履はいているくらいだ。

これでいいのかな。

まだ結論が出たわけではない──と思う。ハニーの話を聞いたり、さしあたって備えを固めたり、おなかがすいたのでご飯を食べたりしているうちに、時間が過ぎてしまった。

だいたい、物事をバシッと決めて、サササッ、テキパキパキッと進めるというようなことは、ＺＯＯではあまりない。たいがい場当たり的で、なし崩くずし的だ。もうどうしようもない。それか、どう考えたってもう、そうするっていう流れなわけでしょ、これ。そんなふうになってからようやく、よし、やろう、みたいな感じになる。

こういうのって、あんまりよくない気がするんだけどね。

だから、できるだけ僕が音おん頭どをとって、早め早めにみんなの意見を聞いて、方針を決めることにしてるんだけど。そうしようとしてるし、できてる場合もあると思うんだけどさ。

なんか、ね。

情が絡からんでくると、やりづらいんだよ。

ＺＯＯうちは基本、お人ひと好よしが多かったりするし。困ってる人がいると、つい助けたくなっちゃう、みたいな。ここって、でも、サンランド無統治王国なんだけど。エルデンなんですけど。どうなの？　そのへん。クランの仲間は家族同然だからいいけど、それ以外は、ね。なんていうか、区別して考えないとさ。きりがないし。かわいそうとか気の毒とか、わかるよ？　わかるんだけどさ。でも、そういう境きよう遇ぐうの人はいっぱいいるわけで。数限りなくいるわけで。そこらじゅうにごろごろしてるわけで。

僕の腕うではそんなに長くないっていうか。正直、クランの仲間＋αくらいで精せい一いつ杯ぱいなんだよね。そのαって何だよって感じだけど。そうだよ。何なんだよ、αって。や、それはほら、モリーとかリーチェでしょ。あたりまえじゃないか。バッカじゃないの。

ハニーが立ちあがって近づいてこようとしていることには気づいていた。

隣に腰を下ろしても、マリアローズはそっちに目を向けなかっ

た。

「クランって」とハニーは言った。「──クランって、どこもこんな感じなのかな」

「さあ」マリアローズはかすかに肩かたをすくめた。「僕はここしか知らないから」

「大きいクランじゃないでしょ」

「まあ、そうかな」

「なんだか、家族っぽい？」

　マリアローズが答えずにいると、ハニーは話題を変えた。「メルアドラって知ってる？」

「知らない」

「古い、古い国。魔ま導どう王おう時代より前にあったんじゃないかって言われてる。複数の文ぶん献けんでその名が確かく認にんされてるけど、オーメネイジ以前のことはよくわかってない。だから、いつからいつまで存在したとか、どういう国だったとか、そのへんはほとんど謎なぞ」

「それがどうかしたの」

「トマトクンが言ってたでしょ。メルアドラのジヌビニフって」

「言ってたっけ」

「ジヌビニフっていう名前にも心当たりがあって、ずっと考えてたんだけど、思いだした。引き裂さく王ジヌビニフ。たしか、何かの文献で見た。メルアドラの王様なのかな。そこまでは覚えてないんだけど」

「物知りなんだね」

「トマトクンもそうなの？」

「どうだろ」

「でも、たとえ知識として知ってたとしても、特定の人物を見てそ

の名前が出てくるのって、なんか変。あの時代の肖しよう像ぞうが残ってるなんて話は、聞いたことがないし」

　マリアローズはハニーをーいち瞥べつした。「何が言いたいわけ？」

　ハニーは蛍光緑ルミナスグリーンの瞳ひとみを煌こう々こうと輝かがやかせていた。「不思議じゃないの？」

「だったら、本人に訊きけば」

「いいのかな。あたしはほら」ハニーは少しだけ笑った。苦笑いだった。「立場が微び妙みようだし」

「答えられるなら答えるだろうし、そうじゃなきゃ黙だまってるんじゃないの」

「マリアローズは気にならない？」

「何が？」

「引っかかることがあったら、解き明かしたいと思わない？」

　マリアローズは返事をしなかった。

　そんなの、思わないわけがないじゃないか。

　これだけーいつ緒しよにいるんだし、そりゃあ気にはなるよ。尋たずねてみたことだってある。

　でも——きみは何歳なの。だいたいでいいから教えてよ。

　そんな質問にさえ、トマトは口ごもったんだ。あの黄玉トパーズの瞳を揺ゆらして、すごく困ったように唇くちびるをへの字に曲げて、言いたいけれど、言うべき言葉がどうしても見つからない、そんな表情だった。

　ま、いいや。そう言って、冗じよう談だんめかして笑うことしか、僕にはできなかった。次の瞬しゆん間かんには何事もなかったかのように振ふる舞まうことしか、僕にはできなかった。

　僕だって、訊かれたくないことはある。無理にふれてほしくな

い。そういうことはある。

　いっそ打ち明けてしまったほうがいいのかもしれない。そうしたらそうしたで、何の問題も生じないのかもしれない。実はもう、みんな察しているのかもしれない。だけど、言えないんだよ。言わなくたって、こうしていられる。この状じよう況きように甘えているのかもしれない。でも、甘えられる相手がいるんだ。それって本当にすごいことなんだ。僕だって、誰だれかの胸の奥底に手を突つっこんで、乱暴に引っかきまわすような真ま似ねはしたくない。

　なんとなくわかってはいる。

　だからどうしたっていうのさ。そんなふうに思ってもいる。

　僕はそんなふうに思ってもらえているだろうか。

　不安なんて、これっぽっちもない──なんて、さすがに言えないけれど、怖こわくはない。

　僕には仲間がいる。友だちがいる。居場所がある。おかげで僕は生きている。そう言っても、まったく大おお袈げ裟さじゃない。

　物事には優先順位がある。カタリが言っていたとおりだ。

「ハニー」

「うん」

「何かあてはあるの？」

「今はない。ちょっと手て詰づまりかな。考えてる。エルデンにはＥＭＵの本部があるから、探さぐりを入れたいけど、忍しのびこめるような場所でもないし」

「そっか」

「ちょっとだけ進んで、止まったり引き返したりして、またちょっとだけ進んで──ずっとそんな感じだった。こんなものかなって。何だってそうでしょ」

「そうだね」

「マリアローズ」

　ハニーに名を呼ばれて、マリアでいい、と言いそうになって思いとどまった。

「何？」

「あなたが何を考えてるのか、あたし、わかる」

「そう」

「いい人たちだね」

「うん」

「あたし、一人だったんだな」

　横を見ると、ハニーは両りよう腕うでで抱かかえこんだ膝ひざに顎あごを押しつけていた。

「考えたことなかったけど、一人だったんだ。〝沈黙サイレンス〟の家を出てから、ずっと一人だった。ここにいて、気づいた。気づく暇ひまがなかったのかも。お父さんと〝沈黙サイレンス〟が死んじゃって、あたし、本当に一人なんだね。あなたも一人だったの？」

「そうだよ」

「だから、大事なんだ」

「すごくね」



「ここにくる前なら、わからなかったかも。でも、今はわかる」

「そっか」

「一人って――」ハニーは顔を伏ふせた。「誰もあたしを愛してくれない。誰も眠ねむる前にあたしの名前を呼んだり、あたしの顔を思

いだしたりしてくれない。そういうことなんだね。ぜんぜん気づいてなかった。あたし、一人なんだ」

　マリアローズは奥歯を噛かみしめた。僕はハニーをかわいそうだと思っている。安っぽい同情なのかな。そうかもしれない。しょうがないよ。僕はちんけな人間なんだし。もし僕にありあまるほど力があったら、ハニーのために何かしてあげようとするかもしれない。誰にも迷めい惑わくがかからないのなら、そうするかもしれない。

「ハニー」

「うん」

「あのさ」

　黙っていたら、ハニーは自分から言いだすだろう。出て行くって。たぶん、そういう子だ。それがわかっているのに言わせるなんて、なんだか卑ひ怯きようじゃないか。

　僕がきつい言い方をして追いだしたとしても、この子は恨うらんだりしないだろう。僕の事情を、気持ちを汲くみとって、まあ仕方ないって納なつ得とくしてしまうんだろう。

　だからこの先もきっと、追われているかぎり、この子は一人でいようとする。他人を利用しても、信しん頼らいすることはたぶんない。他人に信用されるような関係を築くこともない。

　気づかないほうがよかったんだ。自分が一人だって、気づかずにいたほうが、その事実から目をそらしつづけていたほうが、この子にとってはよかった。

　おそらく、この出会いは間ま違ちがいだった。だけれど、今さらなかったことにはできない。

　後片付けを終えたユリカとサフィニア、きゅーが、ソファーに腰こしかけてこっちを見ている。カタリも魚耳をそばだてているようだ。さっきまで寝ねていたトマトクンも、どうやら目を覚ましたらしい。

　ピンパーネルはともかく、ルーシーがいないところで言うべきではないのかもしれない。でも、ぐずぐずと引き延ばせば引き延ばす

ほど、ためらいばかりが大きく膨ふくらんでゆきそうだ。

　口を開こうとしたら、足音がした。

　ソファーのほうに目をやると、トマトクンだった。ゆったりとした大おお股またで近づいてくる。まだちょっと眠そうだ。まだっていうか、いつもなんだけど。

　トマトクンはマリアローズのすぐそばにしゃがんだ。

　でっかい手で、上から頭を押さえつけられた。「おい」

「……な、何？」

「なんでお前が勝手に背し負よいこもうとしてるんだ」

「え？　や、僕はべつに……」

「園長マスターは俺だぞ」

「わ、わかってるけど？」

「頼たよりないと思ってるのかもしれんが──」

「そんなことないってば！　そうじゃなくて、なんていうか、僕にできるのってこういうことくらいだし、くらいっていう言い方もあれだけど、できることはしなきゃだし……」

「お前」トマトクンはマリアローズの頭を揺ゆさぶり、髪かみの毛をぐしゃぐしゃにした。「そんなに役に立ちたいのか」

「そ、そりゃあ……」マリアローズはトマトクンの手をどかそうとしたが、ダメだ。なんて力だろう。びくともしない。「……役に立たないよりは、立ったほうがいいでしょ。働かざる者食うべからずっていうし……」

「まあ、働く気がまるでないとなると、ちょっと困るかもしれんがな。お前はそうじゃないんだ。仮に働けなくたって、飯くらい食わせるぞ」

「馬車馬みたいに働かないと食べさせてもらえないとか、そんなふうには思ってないってば。てゆうか、手。離はなしてよ。首が痛い

んだけど」

「うむ」トマトクンはようやく手を引っこめて顎を撫なでた。「──とにかく、お前はがんばろうとしすぎだ。そんなにあれもこれもやろうとしなくたって、お前のことはみんな認めてる。正直、あてにしすぎてるくらいだ」

「ど、どこがっ……」マリアローズはそっぽを向いて、フードを被かぶった。「──や、み、認められてないとか思ってるわけじゃないけど、分担っていうか、役割っていうか、仕事は任せてもらってるし、そのへんは重々承知してるっていうか……だけど、た、たいしたことはできてないし⁉　結局、僕のやってることって、隙すき間ま産業みたいな──なんていうか、みんながあんまり得意じゃないことを、ちまちま隙間を埋うめるみたいにやってるだけっていうか、そんな感じにすぎないわけだしさ⁉」

「何だろうと、十分だ」トマトクンはマリアローズの背中を軽く叩たたいた。「お前はよくやってる。無理して貧びん乏ぼう籤くじを引くような真ま似ねをしなくていい」

　マリアローズは横目でハニーの様子をうかがった。ハニーの表情は淡たん々たんとしている。もう覚かく悟ごしているのだ。それでいて、自分から言いださないのはなぜか。腹を決めてはいても、立ち去りがたい。一人になりたくない。心のどこかにそんな思いがあるのではないか。きっとそうに違いない。だから、マリアローズはなかなか言えなかった。

　トマトクンはハニーに向きなおった。「バニーベリー」

　マリアローズはトマトクンの首筋にチョップを叩きこんだ。「なんでそこでっ」

「ぬ？」トマトクンはけろりとしている。

「な・ま・え！　ハニーメリーだから。やめてよ。そういうとこで間違えるのとか。てゆうか、ハニーメリーくらいの長さだと、きみの場合、そう簡単にはちゃんと覚えられないし、ハニーでいいから。ここで僕がいいっていうのも変な話だけど」

「おお。そうか。じゃあ、ハニー」

「うん」

「お前はしばらくこの家にいろ」

　ハニーはゆっくりと二度、まばたきをした。「……はい？」

「え──ちょっ……」マリアローズは平然としているトマトクンと明らかに動どう揺ようしているハニーを交こう互ごに見た。「な……ど──ゆう？　てゆうか──え……？　なんで……？」

　ユリカもサフィニアもきょとんとしているし、きゅーだって小首を傾かしげている。誰だれもがなんとなくある結末を予想していた。それが完全に裏切られたということだろう。

「何だ？」トマトクンは片方の眉まゆをつりあげた。「いやなのか」

「いや……じゃないけど」ハニーは口を押さえてうつむいた。「──あたしの気持ちは関係なくない？」

「関係なくはないだろう」

「だけど、あたしは」

「まあ、仲間とは言えないしな。友だちってわけでもない。お前はルーシーに拾われてきた。それだけだ」

「……拾われたわけじゃない。あたしはあの子を利用しようとして、ついてきたの」

「本気で利用したいなら、ちゃんと騙だましたほうがいいと思うぞ。つまり、お前は利用しきれなかったんだ。いい詐さ欺ぎ師しにはなれんな」

「残念」

「お前の気持ちは聞いた。いやじゃない。ここにいたくないってわけじゃないんだな」

「……それは」

「さて、次は俺たちの気持ちだ」トマトクンはマリアローズを、それから振ふり返ってユリカ、サフィニア、きゅーを見まわして、肩かたをすくめた。「──いないやつもいるが、まあいいだろう。お前

たちはどうだ。ハニーを放ほうりだしたいか」

「いいえ」きっぱりと即そく答とうしたのはユリカだった。「トマトクンが訊きいているのは、あくまでわたしの気持ちでしょう。しょれなら、いいえ。お節せつ介かいかもしれないけど、やっぱり放ってはおけないわ」

　きゅーがうなずいた。「くう」

「……わたしも……ハニーさんの話を聞いていたら、なんだか……お姉様のもとを離れて、一人で旅をしていたころのことを、思いだして……それに、わたし……個人的に、ですが……ハニーさんに興味があります。機術のことは……よく知らないので……」

「マリアはどうだ」

「……なんでそうやって単純化しちゃうかな」

「お前は難しく考えすぎなんじゃないか」

「否定はしないけど」マリアローズはため息をついた。「――一人はつらいだろうって思うよ。とくに、僕は……今の僕には、きみたちがいるからさ。知っちゃってるから」

　トマトクンは口をへの字に曲げた。「回りくどいな」

「う、うるさいなぁっ」

「……素す直なおじゃ、ないから……」サフィニアはくすくす笑った。

「ねえ」ユリカがにやにやしながらサフィニアと目を見あわせると、きゅーまで「くう」と調子をあわせた。

「トーゼン！　わしも！」カタリは跳とびあがって握にぎりしめた拳こぶしを振りあげた。「気持ちとしてはァァァァ！　モチのロンでェェェェ！　女の子ぉを一人ぼっちにさせるんは忍しのびない！　嗚あ呼あ忍びない忍びない！　そないに思とることはァァァァ！　ゆうまでもないなッ！　わしは紳しん士しなわけやしッ！」

「あれ？　てゆうか、カタリ、いたの？」

「おったわァァァァァァァァッ！　ずゥゥゥゥゥゥーッとここにおったがなァァァァァッ！」

「ちょっとなんか、僕の意識の中から完全に外れてたよ。ただそこにいるだけでうざすぎて傍はた迷めい惑わくだからかな。ごめんごめん」

「軽ゥーく謝る前にサラァーッとけなすなボケェッ！」

「ああ。もっとけちょんけちょんにけなしたほうがよかった？」

「ええわけあるかぁーいッ」

「だけどさ」

「ハッ！　ナッ！　シッ！　をッ！　そらすなーッ！」

「──きゅー、悪いんだけど、その半魚人、少し黙だまらしといてくれる？」

「くう」

「おごうっ！　ひゅう！　はにははひへんへんひゅうっ！　おおほおおおおおおひ……！」

「……気持ちは大事だと思うけどさ。それだけでなんとかなるってものでもないし……」

「そうか？」トマトクンは唇くちびるをほんの少しだけ笑わせた。「お前は本当にそう思うのか？」

　底光りする黄玉トパーズの瞳ひとみに見すえられると、身動きがとれなくなった。

　トマトクンは眼光をゆるめた。「まあ、たしかに、気持ちだけじゃあどうにもならんことだってある。でもな。気持ちがないと、できることもできない」

「それは……できるできない以前の問題で、気持ちがなかったら、まずやらないだろうしね」

「……わたし、最近……気づいたんですけど……」サフィニアはや

けに真しん剣けんな顔つきをしていた。「……魔ま術じゆつの根本は、信じることなんです……できる、実現する……そう信じないかぎり、何も起こらない……これは、比ひ喩ゆでも何でもなくて……実際、そうなんです。逆に言えば、可能だと信じきることさえできれば……どんな魔術も、不可能ではないのかもしれない……」

「しょういえば医い術じゆちゆ式しきも、ある瞬しゆん間かん、ぱっと視みえるようになったり、動かしゅことができるようになったりしゅるのよね。しょれを、階段を上った──みたいに表現したりしゅるけど、あれには確信とか自信が大きく関係しているような気がしゅるわ」

「ふごごふごふふご！　ふごごごごっ！　ふごごふごごごごっ！　ふふごごごごごっ！」

「きゅう」

「まずは気持ちだ」トマトクンは首の関節をポキッと鳴らした。「どうしたいか。それが決まったら、あとはそのためにどうすればいいか考えて、実行すればいい。力ちから業わざなら任せろ。俺がなんとかしてやる。俺だけじゃない。そっち方面なら、みんなわりと頼たよりになるぞ」

「そのへんはよく理解してるつもりだけどね……」

　力が抜ぬけた。

　ようするに、どうしたいかなんて、自分の胸に訊いてみればすぐにわかることで、答えは決まっているのだ。どうせ悩なやむのなら、そこじゃなくて、わかりきっている「どうしたい」に向かう現実的な道を作るために、どうすればいいのか。入口の前でまごまごしているより、さっさと入ってしまって、出口にたどりつくために知ち恵えを絞しぼったほうがいいということだ。

「え、と……」ハニーは一同に視線をめぐらせた。「つまり──あたし、ここにいていいってこと……？」

「ピンパーネルとルーシーの意見は訊いてないけど」マリアローズは首筋を搔かいた。「まあ、異存はないだろうしね」

「ほんとに、いいの？　迷めい惑わくかけちゃうけど」

「きみが何のトラブルも抱かかえてなかったら、そもそもここにきてないでしょ？」

「それは、そう」

「了りよう解かいの上ってこと。とりあえず、ここで次に打つ手でも考えたら？　手伝えるかどうかはわからないけど、相談に乗るくらいだったらできなくはないと思うよ。ただし──」マリアローズはハニーの鼻先に人差し指を突つきつけた。「約束して」

「……何を？」

「黙っていなくなるのは、なし」

「うん」ハニーは神しん妙みような表情でうなずいた。「わかった」

「そ」マリアローズは軽くうなずき返した。「なら、いいよ」

「……なんか」ハニーの顔がとろけるようにゆるんだ。「嬉うれしい。あたし、ここにいてもいいんだ。すごく嬉しい」

　喜んでる場合じゃないけどね──と言いそうになったけれど、やめておいた。照れ隠かくしの皮肉なんかで曇くもらせてしまうには惜おしい、無む邪じや気きな笑え顔がおだ。間ま違ちがいなく頭がいい子だし、背が高くて、身体からだつきや顔立ちも大人っぽいのに、妙にあどけないところがある。芯しんがまっすぐなのだ。心がねじけていない。

　いじけ虫の僕とは違う。

　つい卑ひ屈くつになってしまいたくなって、胸がちくりと痛んだ。

　我ながら、性しよう根ねが腐くさっていると思う。でも、この子は嫌きらいじゃない。嫌いになんかなれない。そう感じていることも事実だ。

　どっちも自分なのだから、打ち消してもしょうがない。どのみち消せやしない。抱えて、背負って、引きずってでも歩いてゆくしかない。

マリアローズは裏庭のほうに向きなおり、夜空を仰あおごうとした。

何を──やってるわけ？

ピンパーネルとルーシーは？　見回り、してるんじゃないの？

それなのに、なんで──

「フッ……」

いつの間に、いったいどういうわけで、あの強きよう烈れつ臆病チキン馬鹿が、裏庭のど真ん中に突っ立って前まえ髪がみをいじくりながらかっこつけてるつもりなのか何なのか知らないけどトンデモなアホアホにしか見えないっていうか超ちよう絶ぜつきもいとしか言いようがなくて吐はき気すら催もよおさずにはいられない間ま抜ぬけな仕し種ぐさを披ひ露ろうしくさったりしちゃってるの……？

ハニーも馬鹿に気づいたらしい。片かた膝ひざ立ちになって腰こしのケースに手をかけたが、皆みなの様子を見て、リトルジョニーを抜くべきか否いなか迷っているようだ。や、出してもいいけどね？　飛び道具らしいし、何なら撃うっちゃってもかまわないんだけど。むしろ、撃て。

「やあ、マリア」馬鹿は意味不明にはにかんだような笑みを浮うかべ、どこからか一輪の赤い薔ば薇らをとりだし、その花弁を鼻に近づけて一ひと嗅かぎした。「──突とつ然ぜんの訪問という形をとったことを、どうか許してほしい。キミのことだから、きっと何の用かと尋たずねるだろうネ。その問いに対して、ボクはこう答えるヨ。にわかに、猛もう烈れつに、途と方ほうもなく、キミに会いたくなった、ただそれだけサ──と、ネ。これは必ずしも用事とは言えないのかもしれない。でも、よく考えてほしいんだヨ、スウィートハート。そもそも、ボクらは用事がなければ会ってはいけないのかな？　いや！　そんなことはない！　決してない！　断じてない！　ないはずだヨ？　だからボクは──」

「……あっ！」と遠くでルーシーの声がした。

その一瞬後にはもう、ピンパーネルが馬鹿のそばまで接近していた。

　馬鹿は身構えているピンパーネルをちらりと見て眉まゆをひそめた。「……何？　何なのかな？　このボクと拳こぶしで語りあいたいというのなら、申し訳ないけど遠えん慮りよさせてもらうヨ？　ボクも暇ひまじゃないのでネ。何しろ、ボクの時間は、マリア」

　駆かけつけてきたルーシーが、モトロール刀の柄つかを握にぎって、マリアローズと馬鹿の間で視線を行ったり来たりさせている。

「マリア……！」馬鹿はくるっと回って陶とう然ぜんとした馬鹿面づらで薔薇をこっちに向けた。「マリアマリアマリア！　ボクのすべての時間はキミのために！　キミだけのために存在しているといっても過言じゃないんだからネ！　キミに捧ささげるために！　愛の証あかしとして！　ああ、それこそが愛の理ことわり！　愛の真実！　ボクは今こ宵よい、キミを夜空へと運び去る風になろう！　天あま翔かける愛の風に！　さあ、マリア！　恥はずかしがらずにボクの胸に飛びこんできておくれ！　さあ！　さあ、さあ、さあ……！」

「てゆうか」マリアローズは鼻先で笑った。「恥ずかしがってるのはきみでしょ？」

「……へ？」

「恥ずかしくてたまらないもんだから、そんなわけのわからないことベラベラ喋しやべってごまかそうとしてるんだよね？　自分自身を。馬鹿みたいっていうか馬鹿そのものの台詞せりふを並べてなんとか勢いつけようとしてるのかもしれないけど、こっちはそういうの、いいかげん興きよう醒ざめだからやめてくれる？」

「え――」馬鹿の手が震ふるえはじめて、薔薇の花が落ちた。「あ……」

　マリアローズは振ふり向いた。「きゅー」

「きゅう？」

「やっちゃって」

「くう！」きゅーは押さえつけていた半魚人を解放するなり、嬉きゝきとして裏庭に飛びだした。

「――ムッ……！」馬鹿はあとずさりしながらきゅーの二連れん撃げ

きを防ぎ、鋭するどい蹴けりで牽けん制せいして距きょ離りをとろうとしたようだが、甘い。きゅーは読んでいて、あえて前進して馬鹿の蹴りを受け、のしかかるようにして突つきを繰くりだした。その瞬しゅん間かん、馬鹿の姿が消えた。そう見えるほどの高速移動だった。左へ。きゅーは、だが、これも見通していた。馬鹿ときゅーはもつれあった。

「──くっ……！　やるネ！」「ＧＡＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＮＮＮＧ……！」「しかし、これはどうだッ！　これなら……！」「ＳＨＹＹＹＹＹ！　ＳＨＹＹＹＹ！　ＧＡＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＨＨＨＨ……！」「ム、ム……！　どんどん手て強ごわくなるじゃないか……！」

「あ、あの！　マリアさん！」ルーシーは胴どう震ぶるいしている。武む者しゃ震ぶるいというやつだろう。「ぼ、ぼくも！　加わっていいでしょうか！」

「……なんで僕に訊きくのさ」

「な、なんとなく！」

「好きにすれば」

「はいっ！」ルーシーはモトロール刀を放って、素す手でで馬鹿めがけて突っこんでいった。いいのに。刀を使っても。むしろ、使え。



　ピンパーネルは無表情で三人のとっくみあいをぼんやりと眺ながめているけれど、呆あきれているのに違いない。

「ええのう」半魚人は腕うで組ぐみをし、目を潤うるませて、うんうんうなずいている。「漢おとこの青春や」

「ふむ……」トマトクンはあくびをした。

「……わからないわ」ユリカはふるふると愛らしく首を左右に振った。「ああいうのは、わたしにはわからない……」

「でも……」かすかに笑ったサフィニアの顔は、ちょっと引きつっている。「きゅーは、楽しそうだし……まあ……」

「もしかしゅると、お友だちみたいなものなのかしら」

「そう……かも？」

「あれ」ハニーは馬鹿を指さしてマリアローズを見た。「何なの？」

「気にしないで。単なる馬鹿だから」マリアローズはフードをきゅっと縮めて、膝ひざを抱かかえこんだ。「……害はないよ。そんなにはね。少なくとも、敵じゃないから。ただの馬鹿。ずっと馬鹿。いつまで馬鹿のままでいるつもりなのか知らないけどね。馬鹿なんだよ。ほんっと、馬鹿なんだから。どうしようもないんだよ。馬鹿……」

Omenage 900 8th revolution 26th day

サンランド無統治王国首都エルデン第四区

chapter.8

踏みとどまるのさ

レオナルド・〝パパ〟・デスパレード。

艶つやのある美しい白しろ髭ひげは胸にまで届き、長い白はく髪はつをうなじのあたりで束ねて、銀の額ひたい飾かざりをつけている。柔にゅう和わな笑えみを絶やさない好こう々こう爺やという印象だが、染しみどころか皺しわもほとんど目立たない、張りのある肌はだは赤子を思わせた。瞳ひとみは黒い硝子ガラス玉を塡はめこんであるかのようだ。虹にじ色いろにきらめく糸の刺し繡しゅうで埋うめつくされた長衣は豪ごう奢しやにも滑こつ稽けいにも見え、威い厳げんと剽ひよう軽きんとあたたかみで見事に男を飾り立てている。

間ま違ちがいなく老人のはずだが、年ねん齢れい不ふ詳しようだ。読めないというよりも、底が知れない。

大Ｇ老Ｅ師Ｍデスパレードはエルデェ Ｅイニオン Ｍ機術士匠合Ｕの顔だ。エルデンでも彼ほどの重要人物はそういないが、その腰こしは驚おどろくほど軽い。とにかく、礼節を守って招待しさえすれば、どんな行事にも、パーティーにも顔を出す。まるで無節操が節操であるかのようだ。しかし、その行動にゆえがないわけではない。

ＥＭＵは中立なのだ。求められ、適切な対価をえられさえすれば、何者とでも契けい約やくを交かわし、技術を提供する。少なくとも、それが建前だ。

デスパレードはＥＭＵの姿勢、理念を、身をもって体現している。さながら、そのためだけに存在しているかのように。

銀の砦とりで主しゆ塔とう五階の総長室に客人を応接するための設備を整えさせたのは、秩ちつ序じよの番人四代目総長ヨハン・サンライズだ。

初代のころは第八区の「泉セン里リ」や第五区の「ゾーイ」といった高級店で会見、会合することが多く、二代目総長は対外的な交こう渉しようを副長にほぼ任せていた。

三代目総長が駆かけ抜ぬけていったあと、四代目総長は組織の体制固めを急がば回れでじっくりと進めようとしている。ＥＭＵ、錬

金Ａ士組合Ｇ、汎大Ｐ陸医Ｃ術士Ｍ会Ａ、第５五区Ｃ商業Ａ振興Ｓ会Ｔといった団体との結びつきを今まで以上に強めようとしているのも、その一いつ環かんだ。

　四代目総長は、大小様々な団体の代表者やそれに準ずる者と頻ひん繁ぱんに会っている。その際、こちらから出向くか、中間の地で対面するか、呼びつけるか。当然、用件によっても違ってくるのだが、こうした部分に互たがいの力関係が如によ実じつに表れる。表し、見せつけずにはいられないのが人なのだ。

　くだらぬ。そう切って捨ててもいい。己おのれ一人の身であれば。

　しかし、総長たる者、隊士六百七十三名の身命を双そう肩けんに担になわねばならぬ。義を守り、貫つらぬくためには、保たねばならぬ体面というものがある。

　すべては全隊士のため、我が団のため、義のためだ。雑事だろうが、猿さる芝しば居いだろうが、おろそかにはせぬ。

　だが、ＥＭＵの大Ｇ老Ｅ師Ｍともあろう者が、先さき触ぶれもなく銀の砦に押しかけてくるとはどういうことだ。

　供の者は三人。二人は知っている。

　一人は大Ｇ老Ｅ師Ｍの秘書を務めている黒い肌をした中年の男で、名はガガノ・サンチェス。もう一人はＥＭＵ外交部の副部長、気き障ざで抜け目がないユスティアーノ・ヴァレッティだ。

　あとの一人は初めて見た。

　女だ。かなりの長身で、顔立ちは整っているが、つめたい目をしている。隙すきがまったくない。あれは武人だ。ということは──執しつ行こう部ぶの特とく殊しゆ部隊トラジェディーの関係者か。

　四代目総長の真向かいでソファーに腰を埋めている大Ｇ老Ｅ師Ｍの後ろに、その三人が並んで立っている。

　秩序の番人側は、総長の後ろに琺瑠フオール副長がいて、総長室の出入口の前に二番親衛隊の李イ童ドウ晏アン隊長と一番総長直属隊の隊長補コンラッド・アシャーが控ひかえている。

四人と四人。同数だが、唐とう突とつな会談だ。

ＥＭＵはありとあらゆる物資の製造に携たずさわっている。良好な関係を維い持じしたい。さりとて、従属するつもりはない。してはならない。突つっぱねずに、十五分待たせた。他ほかの予定があったからだ。少し早めに切りあげて、時間をとった。恩を売った形だ。

ヨハン・サンライズはかすかに口くち許もとをゆるめた。「──それで、デスパレードどの自らお越こしくださるとは、いったい何のご用件でしょう」

「まずは、急な推参にもかかわらず、お会いしてくださったことに感謝を申しあげる」大Ｇ老Ｅ師Ｍは笑みを深めたが、頭は下げなかった。考えようによっては慇いん懃ぎん無礼だが、そうは感じさせない。特殊技能のたぐいと言ってもいいだろう。

ヨハンは軽くうなずいた。「我が団は、デスパレードどのに向けて閉ざす扉とびらを持ちあわせておりません」

「光栄に存ずる」デスパレードが後ろに向けて手をさしのべると、秘書のサンチェスが鞄かばんから一通の封ふう書しよをとりだして、その掌てのひらにのせた。

デスパレードはテーブルの上に封書をそっと置いた。

ヨハンは封書には目を向けず、デスパレードの黒い瞳を見つめた。

「今日は」デスパレードはしれっとした顔で封書を進めた。「当匠しよう合ごうより、たってのお願いがあって参った次し第だい」

「それはまた、どのような？」

「口頭では申しあげかねるのだ、ヨハンどの」

「なるほど」

ヨハンは封書を手にとって開封した。琺瑠は前だけを見ているだろう。まあ、茶番ではあるが、つきあってやるしかない。

秩序の番人総長ヨハン・サンライズどの

　当日八巡じゆん月げつ二十六番日より明日八巡月二十七番日の間、貴団の第十二区に立ち入らざる事を、イアン・タイドムードの名において要よう請せいする。

ＥＭＵ総そう帥すい　イアン・タイドムード

「……ほう」ヨハンは書状を封ふう筒とうに収め、封書をテーブルに戻もどした。

　考えるまでもない。

「委細諒りよう解かいしました」

　デスパレードは、今度は深々と頭を下げた。「誠まことにありがたく存ずる」

　狸たぬき爺じじいめ。

　腹が立てば立つほど、作り笑いを浮うかべるのに痛つう痒ようを感じなくなる。養ち父ちも鷹おう揚ような笑えみの裏で腸はらわたを煮にえくり返らせていたのか。そうかもしれない。ヨハンが幼いころの養ち父ちは血気盛さかんだった。少なくとも、現在のヨハン・サンライズより冷静沈ちん着ちやくだったとは思えない。それほど熱かったということだ。おれは養ち父ちに及およばぬ。あれだけの器量は、おれにはない。だが、おれなりのやり方で義の旗を振ふることはできる。

　デスパレードとは、それから十七分ほど世間話をした。

　この老人は、各組織の裏事情から巷ちまたの下世話な風説まで、気味が悪いほどよく知っている。しかも、実におもしろおかしく話す。かつて総長だったころの羅ラ叉サが、この老人と語らったあとで吐はき捨てた。「あの年寄りなら、貴人の夕ゆう餉げで便所の糞くそについて話しても、誰一人眉まゆをひそめんだろうな」

　品のないたとえだが、たしかにそうかもしれない。どんな話題にふれても、決して人を不快にさせない話術を、この老人は有している。あまりに口こう舌ぜつが巧たくみすぎて、それだけしかないのではないかと思えるほどだ。

　デスパレードと供の者たちが李童晏に導かれて去ると、コンラッドもわざとらしい澄すまし顔で部屋から出ていった。勘かん違ちがいの内容はだいたい想像がつくが、なじる気にもなれない。事が事だし、諜ちよう報ほう部門を一手に引き受けている副長との話しあいが密議になるのは当然だ。

　琺瑠が隣となりに腰を下ろして封書を手にした。「読んでも？」

「ああ」

「前例がないことね」琺瑠は書状を一読して、そっと息をついた。「……十二区」

「思い当たる節はあるか」

「一つしか」

「私もそうだ」

「でも、なぜ？」

「女がいたな」

「知らない顔だったわ」

「君でもか」

「ええ。ただ、あの身のこなし。只ただ者ものじゃないわね」

「おそらく、トラジェディー」

「ＥＭＵの関係者なら、それ以外にはありえない」

「トラジェディー絡がらみの案件か」

「イアン・タイドムード」琺瑠は目を細めて書状を眺ながめている。「総帥の直筆かしら」

　ヨハンは鼻で笑った。琺瑠の横顔からどうしても視線を外すことができない。半分以上、自じ嘲ちようの笑いだ。「実在するかどうかもわからぬ人物だ」

「そうね……」琺瑠は書状を封筒にしまい、こちらを向いた。

　目があった。

　琺瑠はすぐに顔をそむけた。「……な、何？」

「いや……」ヨハンは胸ポケットから眼鏡めがねをとりだしてかけた。「すまない。裸ら眼がんではよく見えないのでね」

「調子が悪いの？」

「君の勧すすめに従って、モリー・リップスには診みてもらった。一度視力がここまで落ちると、回復は難しいそうだ。やむをえないな」

「無理をするからよ」

「君に言われたくはない」

「あなたが背負っているものの重さは、わたしとは比べものにならないわ」

「私一人の背に負っているわけではない。皆みなが支えてくれている。それに、君がいる」

「そういう……」琺瑠は下を向いた。その頬ほおがかすかに赤らんでいる。「そういうことを、いきなり言うのはよして」

「そうだな」ヨハンは右手の中指で眼鏡を押しあげた。

　おれはどうかしている。

「──しかし、トラジェディーか。いったいどういう繋つながりなのか。厄やつ介かいなことを、あの人は次々と……」

「まだ決まったわけじゃないのよ」

「他ほかに考えられるか。おそらく、何か妙みようなことに首を突つっこんだのだろう。妙なことに首を突っこんでいる人間と関かか

わりを持って、巻きこまれようとしている──と言ったほうがいいか。そうに決まっている」

「天性のお節せつ介かいなんでしょうね」

「そのおかげで助けられたことのある我々には何も言えないがね」

「恩を仇あだで返すようなものだわ」

「ＥＭＵと手を切るわけにはいかぬ。違うな。そんなことは不可能だ」

「そうね。わたしたちの装備にしても、ＥＭＵの機術工場で作られていないもののほうが少ないくらいだし」

「当然のことと考えてきた。いや、考えてさえいなかった」

「首根っこを押さえられているようなものね」

「リヴァイスの製品もＥＭＵが作っていたのか……？」

「え？」琺瑠は虚きよを衝つかれたようにまばたきをしたが、その瞳ひとみにはすぐに思案の波が揺ゆらめきはじめた。

「ふと思ったことだ」ヨハンは首を振ふった。「──今はいい。それより、この件だ。ラフレシアがオークリッドの首都アマツを落とした。今後、難民が大挙してエルデンに押しよせてくることが予想される……こんなときに、まったく……」

「それとこれとは別でしょう」琺瑠はヨハンの手の甲こうに掌てのひらをのせようとした。

　寸前で、その手が止まった。

「ああ」ヨハンは琺瑠の手をつかまえ、その中指を人差し指と中指で挟はさんだ。「完全に別だ。私はどうも苛いら立だっているようだな」

「大事なんでしょう、あの人が」

「仮にも先代だ」

「それだけ？」

「初代の友だった人だ」

「ＥＭＵも、それを承知しているからこそ、わざわざ約束をとりつけたんでしょうけど」

「正直に言えば、さして心配はしていない」

「信じているのね。だけど、じっとしてもいられない」

「手はあるか」

「ええ」

「頼たのむ、琺瑠副長。知らせるだけでいい」

「お任せを。総長」琺瑠はヨハンの指を振りほどいて立ちあがった。

　ヨハンは封ふう書しよを持ちあげて、指先でもてあそんだ。

　部屋から出てゆきかけた琺瑠が、足を止めた。「……あ」

「どうかしたのか」

「いえ……」琺瑠はちらりと振り向いて、黒くろ髪かみをかきあげた。「たいしたことじゃないの。それこそ、ふと思ったことで」

「何だ。言ってみてくれ」

「本当にくだらないのよ？」

「いい」

　琺瑠はヨハンの手て許もとに視線を向けた。「筆ひつ跡せきなんだけど」

「筆跡？」ヨハンは封書を見た。「この書状の？」

「ええ。でも、きっと気のせいよ」

「見覚えでも？」

「小説のね」琺瑠は肩かたをすくめた。「リンデ隊長に借りたんだ

けど。サイン本なの。裏表紙に、著者の直筆で文章が書いてあって。それがけっこう特とく徴ちよう的な筆跡だったから」

「似ているのか」

「もちろん偶ぐう然ぜんだと思うけど、曰いわく付きの作家だから」

「誰だれだ」

「ルイ・カタルシス」

　このまま環かん状じよう通どおりを北へ向かえば、マーベラス・グッダー・ストリートにぶちあたる。そう遠くない。もうすぐだが、薄うす汚よごれた外がい套とうを身にまとい、片足を引きずっているその男にとっては、ちょっとした旅だ。

　まだ夜は深まっていない。人通りは多く、大小の馬車も行き交かっているが、誰も男には見向きもしない。

　男はときおり立ち止まり、顎あごを上げてあえぐように息をする。老いて、弱っているのだろう。そのうち野垂れ死ぬ宿命さだめの男が、金目の物を持っているとは思えない。男は今のところ、無価値だ。死ねば蟲むしどもの餌えさになるか、ラビッシュバレーのフォーレンたちに運び去られる。

　それまでの時間を早めようとでもしているかのように、男は歩く。よろよろと歩く。

　ようやくだ。やっと交差点にたどりついた。

　男は腰こしをさすりつつ一息、二息つくと、馬車を気にしながら、交差点の真ん中を目指してまた歩きだした。

　その足どりはおぼつかない。直進する馬車はとくに猛もう速度だし、右折、左折する馬車にしても、かすっただけで男を粉々に砕くだいてしまうだろう。男の行こう為いは無む謀ぼうだ。もし男に注目している者がいたら、危ないからと止めるか、轢れき死しするさ

まを想像して嘔おう吐とを催もよおすか、ほくそ笑えむかしたかもしれないが、誰も男に気をとめていないのだ。だから、驚おどろく者もいなかった。

　男は酔よっ払ぱらいよりも頼たよりない歩き方で、だが、それでいて馬車に接せつ触しよくするどころか、御ぎよ者しやに怒ど鳴なりつけられることもなく、交差点の真ん中に到とう達たつしてしまった。

　そこには牢ろう獄ごくがある。

　小さな牢獄だ。

　囚しゆう人じんはたった一人しかいない。当然といえば当然だ。この牢獄は作られたときから一人用だった。たった一人の囚人のために作られた。それも、囚人自身がこの牢獄の中だけの生を望んだのだ。

　男は格こう子しに手をかけて、一分ほども荒あらい息をしていた。

　以前はいつも見物客に囲まれていたこの牢獄も、今となってはほとんど単なる障害物だ。やがて、交差点のど真ん中にこんなものがあっては邪じや魔まだから、取り除いてしまおうと言いだす者が現れるだろう。

　男は懐ふところから水すい筒とうをとりだして口をつけ、喉のどを鳴らして中身を飲んだ。そうして格子に背をあずけ、地べたに腰を下ろして、鼻をすすった。

「……忙いそがしいかい」と牢獄の中から低い声がした。

　男は答えず、また水筒を傾かたむけた。

　牢獄の囚人は低い笑い声を立てた。「くだらない質問だった。暇ひまなわけがないねえ」

　男は馬車の流れに目をやりながら、囁ささやくような声を出した。「そっちはどうだ」

「満まん喫きつしているよ。なすべきことのない時間を……ねえ」

「これからもつづく」

「ああ」

「訊ききたいことがあってきた」

「なすべきことがあるってだけで、すばらしいものさ。俺に答えられることなら、何でも答えさせてもらうよ」

「悔くいているのか」

「それが訊きたいことかい」

「違ちがう」

「悔いてはいないよ。この決断を悔いたことは一度たりもない」

「リヴァイスはＥＭＵと契けい約やくを結んでいたのか」

「……なぜそんなことを？」

「何でも答えると言わなかったか」

「ＥＭＵとは──直接、契約を結んだわけじゃあない」

「迂う回かいか」

「いろいろさ。機術工場の、あるラインを拝借したりもした」

「現場に協力者がいた」

「賛同者と言うべきかもしれないが。ＥＭＵは管理社会だしねえ。ひどい管理社会だよ。籠かごから出ることはできないが、出たがっているやつはいくらでもいるのさ」

「社会」

「入ったら出られないだろう。中で生きていくしかない」

「彼らは手を引いたのか」

「もともと運命共同体ってわけじゃあなかった。俺には俺のやりたいことがあって、彼らには彼らの主張があったのさ」

「利害が一いつ致ちして、手を組んだ」

「残念だが、おそらく無理だよ。とりこもうとしてもね。彼らはとても臆おく病びようなんだ。あの社会は独どく占せん欲よくが強すぎる女みたいなものさ。男でもべつにいいが――四六時中監かん視しされて、不自由で、息もろくにできない。ただ、飯を作り、食わせて、服を脱ぬがせて風ふ呂ろに入れ、着る物を選んで、着る手伝いまでしてくれる。どこまでも甲か斐い甲が斐いしく世話を焼いてくれるんだ。逃にげだそうとさえしなければね」

「計画は挫ざ折せつした」

「そう。最終的にはＥＭＵも襲おそうつもりだった。そこまでいかなかったからね。彼らはもう忘れているだろう。少なくとも、忘れようとしているだろうねえ。籠の中では飛べなくたって、歌をうたうことくらいはできる」

「ＥＭＵとは何だ」

「構造だよ」

「……構造？」

「ここも同じさ」

「エルデンのことを言っているのか」

「構造だよ」

「わかるように話せ」

「知らないほうがいいことだってある」

「どういうことだ」

「そのままの意味だよ」

「問いには答えると言っただろう」

「すまないねえ。まさかこんなことに話が及およぶとは思ってなかったのさ。前言撤てつ回かいだ」

「口を割らせる」

「できないよ。喋しゃべらないと決めたら、俺は喋らない。何があっても。わかってるだろう？」

「……何を知っている」

「さあねえ。ところで、俺からも訊かせてくれ。べつに答えてくれなくたっていい」

「言え」

「俺を恨うらんではいないのかい？　怒いかりは？　憎にくしみは？」

「わからないか」

「いや……そんなことはないさ」

「では、なぜ訊く」

「その恨みつらみも、憎ぞう悪おも、愛いとおしむ気持ちも、何もかもが無意味だと考える連中がいるんだよ」

「誰だれを指して言っている」

「この世界を動かしているのは──動かしているつもりでいるのは、そういうやつらさ」

「ＥＭＵにも関係があるのか」

「ヨハン・サンライズ」

「何だ」

「俺はくだらない下げ衆すかもしれないが、すべてが無意味だなんて思っちゃいない」

「貴様の思想など知ったことか」

「Ｈａ□ｈａ……」

「話す気がないのなら、自ら突つき止めるまでだ」

「そうしてくれ。答えを見つけても、お前なら絶望することはない

さ」

「知ったふうな口を」

「会えてよかったよ」

　男は返事をせずによろよろと立ちあがり、足を引きずりながら歩きだした。

　囚人は独りかすかに笑った。「誰か……俺の名を呼んでくれないか。いいさ……いい。俺は踏ふみとどまるよ。ただここにいるさ」

Omenage 900 8th revolution 26th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

chapter.9

秘技

「──ずっと気になってたんだけどさ」

　ガスマスクはベルトに引っかけてある。入浴するとき以外は、交代で睡すい眠みんをとる際もボディスーツを脱ぬがない。暑いから、いろいろなところを開けたりゆるめたりしないといけなくて、かなりめんどくさい。武器は常に手て許もとに置いてある。この家はふだん土足厳禁だ。今は違ちがう。断腸の思いで靴くつを履はいて過ごしている。掃そう除じのことを考えると頭が痛い。

　あれ以来、ユリカとサフィニア、カタリもトマトクン邸ていに泊とまりこんでいる。皆みな、抜ぬきどころを知っているというか、緊きん張ちよう感を保ちながらも、たまに息抜きをすることも忘れない。信しん頼らいしあっている仲間同士だから、寝るときはちゃんと熟じゆく睡すいできている。今のところ、疲つかれた様子を見せている者は一人もいない。

　マリアローズはリビングのソファーに腰こしかけて、片方の膝ひざを抱かかえている。癖くせなのだ。知らないうちにこの体勢になっていて、妙みように落ちつく。

　ハニーはすぐそばの床ゆかに正座している。

「なんできみ、そんなふうに座ってるの？」

　ハニーは目をしばたたいた。「そんなふうって？」

「や、なんていうか……何も床に座らなくたってよくない？　べつにいいんだけどさ。それならそれで、膝を崩くずしたっていいような感じもするし」

「ああ。これ？」ハニーは自分の身体からだをざっと見た。「でも、ちっちゃいころから、よくこうやって座ってたから。染しみついてるのかも」

「脚あしが痺しびれたりしない？」

「しない、かな」

「ま、どうでもいいことではあるんだけどね……」

　どうでもいいことが口を突いて出るくらい、正直、暇ひまなのだ。

　時刻はもうすぐ二十一時。夕食はとっくにすませた。

　トマトクンはだらしなくソファーに寝そべって、惰だ眠みんを貪むさぼっている。カタリとピンパーネルとルーシーはダイニングテーブルでカードゲームに興じているが、あまり盛りあがっていない。サフィニアはリビングの隅すみで瞑めい想そうしている。あるいは、己おのれの妄もう想そうと戦っているのかもしれない。ユリカときゅーは屋根の上で見張りをしている。

　交こう替たいで見張っているだけではない。カタリとピンパーネルが施ほどこした仕し掛かけのおかげで、誰かが敷しき地ち内に侵しん入にゅうしてきたらすぐにわかる。塀へいの上などに極ごく細ぼその糸が巡めぐらしてあって、何かがそれにふれると小さな鐘かねが鳴るという単純なものなのだが、昨夜、どこかの馬ば鹿かが引っかかったくらいだから、効果はありそうだ。

　てゆうか、何も起こらないんですけど。

　当然、平へい穏おん無事のほうがいいに決まっている。その間に、ハニーはハニーでいろいろ考えているみたいだし、皆で意見を出しあったりもしていて、次の一手を検討しているところだ。それ以前の問題についても話しあっている。

　すなわち、ハニーは「知りたい」と言うけれど、いったい何を知りたいのか。

　ＥＭＵとＡＧとＳＳとモルフォ党とラフレシア第三帝てい国こくとの間には、もしかすると何らかの繫つながりがあるのかもしれない。興味を引かれる話ではあるものの、そのへんをくわしく知りたいというだけでは、ちょっと漠ばく然ぜんとしすぎている。情報を収集するにしても、もっと的を絞しぼらないと、とっかかりをつかむのだって難しいだろう。カタリがおもしろがって〝カルテル〟と名づけたＥＭＵ□ＡＧ□ＳＳ□モルフォ党・ラフレシア第三帝国の結けつ託たくについて、その全ぜん貌ぼうを把は握あくしている者はそれほど多くないだろうと思われるからだ。ただ、モルフォ党の党首キプリス・モルフォとＳＳの〝無ゼ位ロ〟ダイ・モノアディットが一いつ緒しよにいるところを目もく撃げきした（のかもしれない）元党員のギァムのように、個別の結びつきを証明する事実を見

聞きして承知している者は、実はけっこういたりするのかもしれない。

　モルフォ党の主戦場は現在、暗黒大陸のさらに向こうにあるグラー大陸だというから、とても手が届かない。ラフレシア第三帝国だって、サンランド無統治王国と国境を接している隣りん国ごくだとはいっても、散歩感覚で行けるわけではないのだ。ＥＭＵはどうか。エルデンにはＥＭＵの本部がある。第八区だ。灰色のやたらと頑がん丈じようそうな建物だから、すぐにわかる。とはいえ、普ふ通つうに訪ねても無む駄だだろう。押し入る？　物ぶつ騒そうな話だ。そもそも、無理やり入りこんで何をするのか。ＡＧは？　同じく第八区に支部がある。支部でしかない。本部はたしか、ファー・セルジナかどこかにあるはずだ。ＳＳはどうだろう。カリオサーク内やその周辺にある拠点ベースの場所は、ハニーがだいたい知っている。エルデンにもＳＳの拠点ベースはきっとあるだろう。ハニーはそう言っているけれど、じゃあどこにあるのか。探しだす方法はあるのか。ＳＳの会員メンバーと接せつ触しよくすることはできないのか。

　考えているだけでは何も起こらない。行動しないと。

　いずれ必ずそうなるだろうが、その前に何かが起こらないという保証はない。てゆうか、起こるんじゃないかって思ってるからこそ、こうして備えてるんだけどさ。

　マリアローズは天てん井じようを見上げてため息をついた。
「……なんか、かえって落ちつかないね」

「慎しん重ちようになってるのかも」ハニーは腰のケースに手をやった。「一度、やられてるし。たしかに、トラジェディーは恐おそれられてる。機術士には。追われたら、まず逃げられない。みんなそう思ってる。でも、あたしたちは所しよ詮せん、兵士でも侵入者クラツカーでもないから」

「や、でも、あれはけっこう手て強ごわい相手だと思うけどね」

「ここの人たちほどじゃない」

「ＺＯＯうちの連中はちょっと普通じゃないし。僕以外は」

「けど、あたしがここにいるかぎりは、その普通じゃない人たちを

どうにかしないといけない。やつらにしてみれば、そう考えざるをえないでしょ」

「実際、そのとおりだしね」

「あとは、数。実は、そんなに多くないのかも」

「トラジェディーの人員自体がってこと？」

「うん。あたしも、そんなに大勢に追いかけられたことはないし。せいぜい五人。たいてい三人か二人」

「こっちは今、きみを入れて九人」

「それより少ない人数で攻せめてくることはないと思う」

「戦力を集めるのに、時間がかかってるとか？」

「わからないけど」ハニーは眉まゆをひそめた。「……やっぱり、ＥＭＵの本部を監かん視ししておいたほうがよかったかな」

「でも、トラジェディーが本部に出入りするかどうか、定かじゃないわけでしょ」

「うん」

「それに、トラジェディーの動向をうかがうことがきみの目的なの？　違ちがうんじゃない？　アメディ・ドン・トワだっけ。トラジェディーの隊長。その人が出てくるっていうなら、話はまた変わってくるのかもしれないけど」

　ハニーは蛍光緑ルミナスグリーンの瞳ひとみでマリアローズを見すえた。「すごい」

　マリアローズは首を傾かしげた。「何が？」

「あなたと話してると、考えが整理される」

「他ひ人とと話すのって、そういうものなんじゃないの」

「今までは、何か考えるときは自問自答してたから」

「効率はいいんじゃない。一人よりは。視点も増えるわけだし」

「お父さんと一緒にいたころは、あたしまだ子供だったし、〝沈黙サイレンス〟は無口だった。そういえば、ＥＭＵにいたころ、注意されたことがある。ぜんぶ自分でやろうとするなとか、説明不足だとか」

「ま、そういう傾けい向こうがあるってのは感じなくもないね。きみの話って、要点だけ並べた箇か条じよう書がきみたいだよ。意味はわかるんだけど、ちょっと流れがつかみづらいかな」

　ハニーは軽く頭を下げた。「気をつけます」

　変な子。

　マリアローズは苦く笑しようして、リビングの窓のほうに目を向けた。硝子ガラスはまだない。明日の昼ごろに業者が持ってくるはずだ。でも、考えてみたら、馴な染じみの家具建具業者が扱あつかっている窓硝子にしても、製造元はＥＭＵの機術工場だろう。機術工場がない地域では事情が違うのかもしれないけれど、機術の恩おん恵けいを受けていない者なんて、ほとんどいない。

　暑い夜なのに、寒気がした。

　ＥＭＵと敵対するのって、とんでもなくリスキーなんじゃないの……？

「どうかした？」とハニーに訊きかれた。

「ううん」マリアローズは首を横に振ふった。「べつに。なんでもない」

　軽く考えすぎていたのかもしれない。違う。そうじゃなくて、そこまで考えていなかった。意識していなかったからだ。ＥＭＵは人々の生活に、これ以上ないくらい密接に関かかわっている。大おお袈げ裟さに言えば、空気みたいなものだ。ないと困る。不可欠だ。でも、空気があるかないかなんて、よっぽどのことがないと考えもしない。

　これはそのよっぽどのこと―なんだ。

　何か音がした。外じゃない。家の中だ。ユリカときゅーか。二人は屋根の上にいた。屋根の上には家の中から梯はし子ごを使って行ける。リビングのドアが開いた。ユリカだった。きゅーは玄げん関

かんのほうへ向かったらしい。

「誰だれかきたみたい」

　ピンパーネルとカタリ、ルーシーが同時に椅い子すから立ちあがった。

「きよったか！　敵かっ!?　敵なんやなッ……!?」

　マリアローズはため息をついた。「……なんで嬉うれしそうなの……」

「敵かどうかはわからないわ。でも、きゅーは一人だって」

「一人……」ルーシーはモトロール刀の柄つかを握にぎりしめた。

　トマトクンがあくびをしながら上半身を起こすと、サフィニアが目を開けて杖つえを持った。ハニーはもう立っている。ピンパーネルが指示をうながすようにこっちを見た。

　マリアローズはうなずいた。「じゃあ、みんなで外へ。絶対、ばらばらにならないで」

　全員で玄関へ急ぎ、外へ出た。鐘かねが鳴ったので驚おどろいたが、きゅーが門の上に飛び乗った拍ひよう子しに、例の仕し掛かけを作動させてしまっただけらしい。

　きゅーはこっちを振り返って首を傾げた。「きゅう」

　敵ではないのか。トマトクン邸ていの門には覗のぞき穴がある。マリアローズはカタリを押しのけて、覗き穴から門の向こうを見た。

　女だ。

　若い──女というよりも、お下げ髪がみの少女が一人、門の前に立って、顔を上げている。おそらく、きゅーを見ているのだろう。

　少女は花はな柄がらのワンピースを着て、野暮ったい眼鏡めがねをかけ、麦わら帽ぼう子しを被かぶってバスケットを持っている。このエルデンで、夜道を歩くのに適した恰かつ好こうではない。

「……あ」

「お？　何や……!?」カタリが半魚顔を近づけてこようとした。

　マリアローズはすっと下がってカタリをかわし、その後ろ半魚頭を両手で押さえて門もん扉ぴに押しつけた。

「──ぼぐごっ……！」

　崩くずれ落ちた半魚人にはかまわず、マリアローズは解かい錠じようして門扉を開けた。

　少女は軽く頭を下げ、倒たおれ伏ふしてぴくぴくしている半魚人を一いち瞥べつした。「……どうも」

「ピンパーネル」マリアローズは顎あごをしゃくって半魚人を示した。「撤てつ去きよ」

「はイ」ピンパーネルは半魚人を担かつぎあげた。

「入って」マリアローズは少女を招き入れ、素す早ばやく門扉を閉ざして施せ錠じようした。「ここじゃなんだから、家に」

　少女はうなずいて、ピンパーネルの肩かたの上でのびている半魚人をちらっと見た。まあ、いくら相手が半魚人でも、ちょっとだけひどかったかもしれないけどね。ぎゃあぎゃあ騒さわがれるとめんどくさいっていうか、めちゃくちゃうざいし。まず間ま違ちがいなく、確実に大騒ぎするだろうから、この処置は適切だったと思う。マリアローズたちは家の中に引き返し、玄関ホールで少女を囲む形になった。

「──で」マリアローズは少女の全身を見まわした。

　見事な変装だ。もともと童顔で、小こ柄がらな女性ではあるけれど、これなら十代半ば、いや、下手をしたら十三歳くらいに見えなくもない。まさか、この少女が秩ちつ序じよの番人の、しかも隊長だとは、誰も思わないだろう。

「遊びにきたわけじゃないよね。アーニャ・クルチバ」

「当然です」クルチバはマリアローズを睨にらみつけた。「言付けを頼たのまれました。ある方から」

マリアローズは寝ねぼけ眼まなこのトマトクンと視線を交かわした。ある方。

言付けだから、クルチバの意思できたわけではない。頼まれたというよりも、命じられて、派は遣けんされてきたのだろう。

隊長に命令できる立場の者といえば、クルチバが率いている二十七番無名隊は琺瑠フオール副長直属だから、あの東方美人か。あるいは、その上だ。四代目総長ヨハン・サンライズ。基本的には、二人のうちのどちらかということになる。

いずれにしても、わざわざ変装してやってきて、さらに、あえて名前を出さないということは、表おもて沙ざ汰たにはできない用件なのだ。

クルチバはそっと息をついて、たぶんカタリのほうを見そうになったのだろうが、なんとかこらえたようだ。「危険が迫せまっています。ご用心を」

「どういうこと？」ハニーがこっちを見た。

クルチバはそのとき初めてハニーの存在に気づいたようだ。いや、ハニーの存在はすでに認にん識しきしていたかもしれないが、きっと瞳ひとみの輝かがやきに驚いたのだろう。軽く目を瞠みはって、すぐにうつむいた。

「この人は──」ルーシーは真しん剣けんな表情で言った。「カタリさんの、彼女さんです！」

「え……」ハニーはぽかんと口を開けた。

「ちょっ──」クルチバの顔が一いつ瞬しゆんで真っ赤になった。「な、な、何を言ってるんですか、か、か、か、彼女ってそんな、わ、わ、わ、わたしはぜんぜん……ち、ち、ち、違いますから！」

「……本人の前で……」サフィニアは責めるような眼まな差ざしをクルチバに送った。だいぶわざとらしいけど。「きっぱりと、否定するのは……」

「はっ……！」

「大だい丈じよう夫ぶよ」ユリカはくすくす笑った。「聞こえてな

いみたいだし」

「にゅお……？」カタリは半魚眼をしばしばさせた。「何や……？　魚畑が……」

　ルーシーは目を見開いた。「魚って、畑でもとれるんですか……!?」

「や」マリアローズは手を左右に振ふった。「とれないとれない」

　トマトクンはまだ眠ねむそうだ。「養よう殖しよくじゃないのか？」

「魚畑ワ」ピンパーネルはクルチバを指さした。「アナタでス」

「きゅう……？」きゅーだけではない。皆みな、一いつ斉せいに首を傾かしげた。

　ピンパーネルはうなだれた。どういうわけか、頰ほおがわずかに赤らんでいる。「……忘れてくださサイ」

「あ」クルチバは口を押さえた。「な、な、何を言って──は、は、は、破は廉れん恥ちなっ……！」

「へ？　何？」マリアローズは顔をしかめた。「ぜんぜんわかんない……」

　ユリカも愛らしく眉まゆ根ねを寄せている。「わたしもわからないわ……」

「……同じく、わたしも……」

「あたしも」

「つ、つまり──」ルーシーは鼻息が荒あらい。かなり興奮しているみたいだ。「大人のジョークってことですか……!?」

「むう」トマトクンは後ろ頭をボリボリ搔かいた。「俺は大人のはずなんだがなあ」

「くう」きゅーはトマトクンの肩を叩たたいた。

「と、と、と、というか！」クルチバはピンパーネルの肩の上から

カタリをひったくった。身体からだが小さいわりに力強い。諜ちよう報ほうが専門とはいえ、彼女も番人だ。「いつまで担いでるつもりですか!?　物じゃないんですから！」

「……むお。あろ……？　アーニャちゃんの幻げん覚かくが見えよる……これ、夢か……？」

「違います！　しっかりしてください！　せっかく危ないって伝えにきたのに……！」

「そうだよ」マリアローズは腐くさった魚を見る目で半魚人を見下した。「しっかりしてよね。いいかげん。ほんっと、使えないったら」

「わしに一いち撃げきぶちかましたんは、お前じぶんやろがっ！」

「そだっけ？」

「せや！」

「ま、それはそれとして——」

「おくなァッ！　おかせへんでェェッ！」

「てゆうか、マジでそれどころじゃないから」マリアローズは腰こしに提さげているガスマスクをさわって、クルチバを見た。「危ないって、具体的には？」

　クルチバはマリアローズとは目をあわせずに、カタリを立ちあがらせた。「先方は明日までに終わらせるつもりのようです」

「それだけ？」

「はい」

「きみは急いで帰ったほうがよさそうだね」

「用事はすみましたから」

「わ、わし、送ってくわ！」

「いりませんよ。何だと思ってるんですか、わたしのこと」

「な、何て、そらまあ……わしにとっては、たった一人の最愛の人やけども」

「そ、そういう意味じゃないでしょう⁉　何って言っても、そ、そ、そういう話じゃ──か、帰ります！」

　駆かけだしたクルチバの腕うでを、カタリがつかんだ。「あかんて！　一人はまずいがな！　夜やし！　そないなかっこで──」

「べつに普ふ通つうの恰かつ好こうじゃないですか！」

「普通にかわいすぎるわ！」

「や、や、やめてよ！　そういうくだらないことを言って、わたしをこれ以上──」

「あのぉー……」

　何なんだろ。この人たち。てゆうか、こいつら。馬ば鹿か馬ば鹿かしすぎて、心がカラッカラに乾かわいて乾いてしょうがないんですけど。

「痴ち話わ喧げん嘩かとか、よそでやってもらえる？　ああ、カタリ、心配なら送ってったら？　何なら、帰ってこなくていいし。そのまま二人でどっか行っちゃってもいいし。むしろ、そうしちゃってもらいたいくらいだし。邪じゃ魔まだし。こっちはこれから忙いそがしくなりそうだし。うざいし」

「腐フッ……」半魚人は、どういうわけかやたらと苦み走った笑えみを浮うかべ、人差し指と中指を眉まゆ尻じりにそえてみせた。「了りよう解かいや」

「……放してください」クルチバは半魚人の手を振り払はらって一礼した。「それでは、お気をつけて」

「しょっちもね」ユリカは向日葵ひまわりのような笑顔だ。

　トマトクンは鷹おう揚ようにうなずいた。「ヨハンによろしく伝えてくれ」

　クルチバは返事に詰つまって微び妙みような顔をした。気持ちはわからないでもない。その名前を出せない事情があるから、彼女は

変装してやってきたのだ。

「む？」トマトクンは片方の眉をつりあげて首を傾げた。「何かまずいことでも言ったか」

　マリアローズはそっとため息をついてカタリをうながした。
「行って」

「おう。すぐ戻もどってくるさかい！」カタリは玄げん関かんのドアを開け、クルチバを先に行かせてから自分も外へ出た。

　きゅーが二人のあとにつづいた。マリアローズも一応、門まで行くことにした。もしかして、みんなそうするつもりなのか。ぞろぞろついてくる。なんだか無む駄だに盛大な見送りになってしまいそうだ。何なの、これ。

　二人を追い抜ぬいたきゅーが門を開けた。

　門をくぐろうとしたカタリが足を止めた。「……むぉろ？」

　きゅーも外を見ている。

　第十二区ではめずらしくない造りなのだが、トマトクン邸ていは人工的な高台の上にあるから、門を出たら階段を下りることになる。階段の下に誰だれかいるのか。声がした。

「ああ、ご注文の硝子ガラスをお持ちしたんですが……」

　聞き覚えのある声だ。第二区の外れに店を構えている家具建具商「スキラッチ」は創業百年以上の老舗しにせで、高級店用の椅い子すテーブルから、多種多様な扉とびら、窓まど枠わく、窓硝子まで、幅はば広ひろく扱あつかっている。スキラッチの従業員か。何度か家に出入りしているから、覚えている。でも、何かおかしい。や、何かじゃないってば。

　窓硝子の取り付けは明日のはずだ。しかも、今は夜じゃないか。

「おお」カタリは手招きしてみせた。阿あ呆ほうだ。知ってたけど。「せやったら、中に──」

　マリアローズは叫さけんだ。「ダメ……！　門を閉めて！」

「へ？」カタリは振ふり返った。「なんでやねん」

「いいから！」マリアローズは仲間たちを見まわした。「戦せん闘とう準備！」

　誰だれ一人として戸と惑まどったりためらったりせず、それぞれの武器を構えた。カタリもクルチバを下がらせて、きゅーと一いつ緒しよに素す早ばやく門を閉ざした。「すみません！」という従業員の声が聞こえたような気がする。

　外はどうなっているのか。敵はどこからくるのか。スキラッチの従業員を利用して、門を開けさせようとしていたことだけは、ほぼ間ま違ちがいない。力押しではなくて、策を弄ろうしてきたということだ。かといって、敵の戦力が充じゆう実じつしていないと考えるのは危険だろう。

　とりあえず玄関前に陣じんどることにした。カタリとクルチバ、きゅーは間もなく合流した。ピンパーネルに偵てい察さつしてもらうべきか。そんなに迷っていたわけじゃない。物の数秒だ。その間に事態は動いた。

　鐘かねだ。

　鳴りはじめた。

　後ろだ。それだけじゃない。

　右のほう、そして左のほうの鐘も鳴っている。

　少しだけ遅おくれて、前方の鐘も鳴りだした。

「……梯はし子ご」

　この家は高台の上にあるだけではなくて、高い塀へいに囲まれている。門のすぐ脇わきだ。塀の上から何かが突つきだした。そう。あれは梯子だ。塀に梯子をかけて、登ってくるつもりらしい。一つじゃない。いくつも。たくさんだ。左右と後方の塀も、たぶん同じようにして乗り越こえられようとしている。敵は四方から押しよせてくるということだ。

「みんな、マスクを」マリアローズは言いながらガスマスクを装着した。「……守る側になっちゃうと不利だね」

「家は気にしなくていいぞ」トマトクンはガスマスクを首にぶらさげただけで、顔を覆おおってはいない。「最悪、捨てたっていい」

　そんなわけにはいかないっての。私物だってあるんだから。

「まずここで迎げい撃げき。押しこまれたり、囲まれたりしたら、外に出るか、地下に誘さそいこむか、状じよう況きように応じて決める。いい？」

「うむ」「了解やっ」「はイ」「わかったわ！」「……はい……！」「くう！」「わかりましたぁーッ！」

「ハニーとクルチバは僕のそばに」

「あたしも戦えるけど？」

「じゃあ、僕の命令に従って動いて」

「従う」

「わたしも護身用の短刀は持っています」

「専門じゃないでしょ。僕に助言を」

「必要なら」

「必要だよ」マリアローズは、ふう、と息をついた。マスクのせいで息苦しい。「──くるよ。ユリカはサフィニアをカバー！　中央トマト、右カタリ、左ルーシー！　ピンプときゅーは掻かき回して！」

　返事は聞こえた。でも、意識には入ってこなかった。皆みな、ちゃんとやってくれる。確信している。それよりも、敵だ。きた。梯子を登りきって、塀の上に。フード付きの外がい套とうを身につけている。容姿はわからない。武装も不明だ。門の両脇の梯子から、まずは一人ずつ。梯子はまだある。門の五メーテルほど右に一つ、同じく約五メーテル左に一つ。そっちの梯子からも一人ずつ。合計四人──いや、次々とくる。最初の四人が塀から飛び降りるころには、さらに四人。その四人につづいて、また四人。これで十二人だ。あれで終わりだとしても、敵は四方からくるわけで、各部隊が同数だとしたら×４で四十八人。それですめばいいけど。ぜんぜんよくないけど。

敵前方部隊は門を挟はさんで右と左に分かれている。右の集団にきゅーが猛もう然ぜんと、左の集団にピンパーネルが音もなく襲おそいかかった。きゅーは一人を蹴けり飛ばし、もう一人を殴なぐり倒たおした。ピンパーネルもやはり敵二人をあっという間に斬きり刻んだ。残りの八人はまっすぐこっちに突っこんでくる。きゅーとピンパーネルはやつらに背後から飛びかかろうとしたが、ダメだ──梯子。四人。新手だ。まだくるのか。

きゅーとピンパーネルは新手を片付けるべく、そっちへ向かった。八人はトマトクン、カタリ、ルーシーに押さえてもらわないといけないが、なんとかなるだろう。前の三人組よりも手て応ごたえがない。そう判断するにはまだ早いか。

「サフィニア、右か左からくるやつら用に魔ま術じゆつを」

「……はい……」

「左のほうが早そうです」クルチバはバスケットの中から短刀をとりだした。

マリアローズは左の方向に目を転じた。何も見えないが、たしかに気配は感じる。「ハニー、右を見てて」

「うん」ハニーは腰こしのケースからリトルジョニーを出して構えた。

敵前方部隊はトマトクンを避さけて、カタリとルーシーを狙ねらおうとしている。カタリとルーシーが四人ずつ。ちょっと荷が重いか。ピンパーネルときゅーは──くそ。新手は四人じゃなかった。その倍だ。八人。マリアローズは決断した。「──トマト！　前進してピンプときゅーを！　ユリカ、行って……！」

トマトクンが無言で駆かけだすよりも、ひょっとしたら早かったかもしれない。

「はい……！」ユリカは白い稲いな妻ずまのように突っ走ぱしって、ルーシーを押し包もうとしていた敵四人のうちの一人を極限クライマックス九手棍ナインポールでぶっ飛ばし、もう一人の脚あしを薙なぎ払はらって転てん倒とうさせた。その直後だった。

「ＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨ……！」

　ルーシーの第一撃はいつもだいたい体当たりだ。身体からだごとぶつかっていって、敵の身体のど真ん中にモトロール刀をぶっ刺さし、突き倒して踏ふみにじる。足も速いがそれだけではない、獰どう猛もうとしか言いようがない突とつ進しん力の持ち主だから、相手としてもなかなかよけづらいだろう。でも、ほとんど捨て身だ。いつか痛い目に遭あいそうで怖こわい。とりあえず、うまくいったみたいだ。ルーシーは不意打ち同然に一人目を倒して、二人目に斬りかかった。そのときにはもう、ユリカはカタリと連れん携けいして敵四人を挟きよう撃げきする態勢に持ちこんでいた。

「くぉらぁっ！　どっせい！　どぬらららららららららららららららららああっ……！」

「拝はいっ！　羅らぁっ！　騰とうっ……！」

　似ても似つかない二人だ。もちろん血の繋つながりなんかあるわけがない。それでいて、この二人にはどこか姉きよう弟だいみたいなところがあって、ばっちり息があっている。ユリカとカタリは程ほどなく敵四人を沈しずめるだろう。ルーシーも問題なさそうだ。敵前方部隊の新手も、トマトクンとピンパーネルときゅーによって掃そう討とうされつつある。

「左です」クルチバはさすがに冷静だ。

　マリアローズは右手で剣けんを抜ぬきながら、左の方向に目を転じた。敵左方部隊は何人だろう。三人か。いや、前列が三人で、総数は不明だ。マリアローズは軽く唇くちびるを舐なめた。「──サフィニア、左を……！」

「真願濤威悩摩朗ＲｅｕＬａＦｕｒａｕ婁那美主汰ＵｒａｆＳｅｌＬｏｕ界ＲｅｕＭｏｕ」

　サフィニアが詠えい唱しようを開始してすぐに気づいた。これは氷ひよう翅し覇はの呪じゆ文もんだ。氷翅覇はサフィニアが最近編みだした要素魔術で、縛ばく氷ひよう獄ごく、縛ばく氷ひよう殺さつの威い力りよくを上回る大だい氷ひよう界かいの、さらに上を行く。これはかなりすごいことになる。マリアローズは慌あわてててハニーとクルチバを後退させ、自分も飛びのいた。それとほぼ同時だった。サフィニアが魔術を発動させた。

「罵濫王土苦坐末悪Ｓａｉ令Ｉｎｄｕｓ常久邇氷覇」

　サフィニアが杖つえを突つきだすと、その十サンチくらい先に透とう明めいな花が咲さいた。氷の花だ。回っている。ゆっくりと。回転速度をぐんぐん上げながら、氷の花は直進しはじめた。雪だ。雪みたいなものを撒まき散らしている。というか、吹ふきつけてくる。夏だから、涼すずしくてちょうどいい。そう感じたのは一いつ瞬しゅんだけだった。さ、寒っ。寒いってば。寒すぎ。前が見えないし。吹雪ふぶきだ。猛もう吹雪。それ以上かもしれない。全身が凍こおりついてしまう。ここは家の庭なのに、まるで遭そう難なんしているみたいだ。マリアローズはしゃがみこんでしまいそうになった。なんとかこらえて、中ちゅう腰ごしくらいの体勢で持ちこたえた。顔の前面を覆おおうガスマスクをつけているので、いくらかましなのかもしれない。ちょっと前にアンダーグラウンドで実用試験したときよりも、ずっとすごい。むしろ、ひどい。

「――うううううううううううううううううううううううううううううううううう……！」

　知らずに声を出してしまっていた。

　前のほうで何かが弾はじけた。そんな音がした。

　途と端たんに吹雪がやんで、寒さがゆるんだ。

　マリアローズはマスクのゴーグル部分を手でぬぐった。終わったのか。

　そのようだ。

　芝生しばふも家の外がい壁へきも、そこらじゅうが真っ白になっている。霜しもが降りているというか、積雪していると言ったほうがいいかもしれない。ただ、雪よりも透明で、細かい氷という感じだ。最終的に氷翅覇が炸さく裂れつしたらしい場所には、氷の柱が渦うず巻まきながらそそり立っている。中に人がいるみたいだ。敵だろう。

「……す、すみません……」サフィニアは杖にしがみつくようにして肩かたで息をしていた。「まだ、加減が……」

「さ、さ、寒……」クルチバはまだ震ふるえている。一人だけ夏らしい恰かっ好こうをしているので、人一倍寒いはずだ。



「すごいんだ。魔ま術じゆつって」ハニーは呆あつ気けにとられているようだけれど、魔術がすごいっていうよりも、サフィニアがすごいだけだから。てゆうか、右を見てろって言わなかったっけ。まあ、こんな大魔術を披ひ露ろうされたら、気をとられないほうがおかしいし、しょうがないけど。

　マリアローズは右方向に視線を向けた。「サフィニアはもう一発準備」

「……はい……」

「ユリカ、戻もどって！　トマトも！　ピンプときゅーは右に！」

「はい！」ユリカは元気よく返事をするなり身をひるがえした。

　敵前方部隊は全ぜん滅めつした。トマトクンにはひとまずもとの配置に戻ってもらう。ピンパーネルときゅーが、敵左方部隊から少し遅おくれてやってきた敵右方部隊の出鼻を叩たたく。すり抜けてきた敵を、トマトクン、カタリ、ルーシーで片付ける。簡単だ。でも、そんなにうまくいくはずがない。

　ピンパーネルときゅーが敵右方部隊に接せつ触しよくした。それから間もなくだった。鐘かねが鳴って、クルチバが叫さけんだ。
「──前！　またくる……！」

　第二波か。ざっと見たところでは四人。梯はし子ごを登って塀へいから飛び降りてきた。どうしよう。トマトに迎げい撃げきしてもらい、ユリカをそこに入れて、抜けてきた敵前方部隊第二波と敵右方部隊をぜんぶ、カタリ、ルーシー、ユリカで仕留めてもらう。ダメだ。上。上……？　というか、後ろだ。家の屋根か。

　足音がする。走っている。屋根の上を。近づいてくる。敵後方部隊か。

　敵後方部隊は、敵右方部隊か敵左方部隊に合流せずに、わざわざ屋根の上に登ってまで、マリアローズたちの後背を衝つこうとしているのだ。どうする？　ユリカを前に出して、マリアローズとクルチバ、ハニーでサフィニアを守る。できるか？　敵後方部隊が他ほかの部隊と同程度の規模なら、十人以上だ。ハニーはどのくらい戦えるのか。わからないけれど、知らない以上、あてにはできない。そう考えると、難しい。というか、無理だ。家の中へ？　狭せまい場所なら、敵の戦力を限定できる。ただ、屋内ではサフィニアの魔術が十分には生かされない。トマトクン邸ていの地下には髭ひげの祭さい壇だんがある。鉄筋と合成骨材コンクリートでがちがちに固められていて、金属の扉とびらがあるから、閉じこもることも可能だが、なるべくなら採りたくない手段だ。家の中がめちゃくちゃになっちゃうし。

とにかく、動かないと。どこに？

マリアローズは舌打ちをした。「──全員、後退！　家の中に……！」

いやだけど、やむをえない。いやとか言ってる場合じゃないし。

みんな無事に後退できるだろうか。退くのが一番大変だ。見届けたい。ダメだ。ここにとどまっていたら、僕が足手まといになってしまいかねない。信じろ。信じている。屋根の上は。敵後方部隊はまだこない。マリアローズは剣を鞘さやに収め、半分精神集中チヤネリング状態にあるサフィニアの腕うでをつかんで家の中に駆かけこんだ。クルチバとハニーがマリアローズとサフィニアにつづいて、ユリカは玄げん関かんのドアのところで他の仲間を待つ構えだ。マリアローズはサフィニア、クルチバ、ハニーを引き連れてリビングへと向かった。どうやら敵は家の中には入りこんでいないようだ。リビングは静かだった。すぐにユリカ、カタリ、ルーシーが追いついてきた。トマトクンがなかなかこない。玄関のほうでやりあっている音がする。カタリが引き返そうとした。マリアローズはすかさず怒ど鳴なった。「ダメ！　ここで！」

「……わかっとるがな！」

「ドアの前は少し開けて！」

指示どおり、ドアの前から皆みなが遠ざかった。その直後、トマトクンがリビングに駆けこんできた。間を置かずに、全身の毛を黄金色に輝かがやかせているきゅーも。きゅーは無理やり装着していたガスマスクを脱ぬぎ捨てた。「きゅう！　くう！　くう！」

「──ピンプは外に残った！」トマトクンも通訳しながらガスマスクを外して放った。

マリアローズはうなずいた。「……大だい丈じよう夫ぶ。ピンパーネルなら」

自分に言い聞かせようとしたわけじゃない。平気だ。ピンパーネルなんだから。平気に決まっている。

「ぬうあ……！」不意にトマトクンが開け放したドアめがけて大たい剣けんを突つきだした。敵だ。大剣で串くし刺ざしにされた敵の隙すき間まから、別の敵がリビングに入りこんでくる。トマトクン

はそいつを蹴け飛ばしながら大剣を引き抜ぬいて即そく、大おお振ぶりした。ドアや壁かべごと二、三人の敵がぶった斬ぎられ、血やら肉にく片へんやら何やらが飛び散った。それでも敵は怖おじ気づかない。もはやドアとはとても言えない元ドアからリビングに突とつ入にゅうしようと、どんどん押しよせてくる。これをトマトクンの大剣がガスガス突きまくり、カタリの変形斧おのがズタズタにして、ルーシーのモトロール刀がザクザクにするのだ。その光景といったら凄せい惨さんの一言に尽つきる。おぞましいから目をそらしたわけじゃない。マリアローズは硝子ガラスの嵌はまっていない窓に視線を投げた。その向こうは裏庭だ。あっちからも侵しん入にゅうされたら、挟はさみ撃うちに遭あう。今はまだ敵の姿はないが、相手がその手を打ってくる可能性は否定できない。というか、時間の問題だろう。先を越こさないといけない。かといって、焦あせってもいけない。タイミングが重要だ。

　敵の勢いが弱まった。

　ここだ。

　マリアローズは叫んだ。「──退ひいて！　外に出る……！」

　ユリカときゅーを先頭にして、マリアローズ、サフィニア、ハニー、クルチバが裏庭に飛びだした。振り返ると、ルーシーとカタリが元ドアの前から離はなれようとしていた。しんがりはトマトクンだ。敵を食い止めながら逃げる。ものすごく難しい役目だけれど、トマトクンなら確実にやってくれる。自分の仕事をちゃんとこなすことができないのは、他の誰だれでもない。

　僕だ。

　左のほうを見ると、敵が。右からもくる。読まれていたのか。バレバレだったんだ。

　眩暈めまいがした。自分が情けなくて、頭にくる。てゆうか、どれだけいるんだよ。敵。数。かなりの人数だ。

　マリアローズは一いつ瞬しゅん、歯を食いしばった。「──左に……！」

　サフィニアがすっと進みでて杖つえを前にさしむけた。

「爆条Ｍｅｘｅｓ雷來礼」

　杖の先せん端たんから幾いく条じようもの稲いな妻ずまが迸ほとばしって、左からくる敵部隊の数名を直ちよく撃げきした。間かん髪はつを容いれずハニーがリトルジョニーを操作すると、立てつづけに大きな音がして、敵が一人倒たおれた。

「ユリカ！　きゅー！」マリアローズが指示を飛ばしたときにはもう、二人はスタートを切っていた。「──カタリとルーシーは後ろを……！」

「任せとき！」「はいッ……！」

「行くよ……！」マリアローズはサフィニアとハニー、クルチバを素す早ばやく見まわしてから駆けだした。

　足を動かしながらリビングのほうを見ると、トマトクンが出てきた。こっちに走ってくるのかと思いきや、立ち止まって振り返った。いや、そうじゃなくて、振り仰あおいだのだ。

　屋根だ。

　何かいる。人だ。敵か。四人。四者四様というか、全身をすっぽりと覆おおう外がい套とうを着用していても、体格の差がはっきりとわかる。一人は巨きよ漢かんだ。トマトクンどころか、トワニングよりも大きい。確実に二メーテルを超こえている。横よこ幅はばもすごい。おかげで他の三人が小こ柄がらに見えるけれど、実際に身体からだが小さいのは一人だけだろう。あとの二人はそれなりに上背がある。というかたぶん、かなり長身の部類に入るはずだ。

　巨漢と小柄な男と背の高い一人は横並びになっている。残りの一人は三人の後ろに立っているようだ。

　マリアローズは思わず足を止めてしまった。

　やばい。

　よくわからないけど、そんな気がしてしょうがない。

　小柄な男は筒つつのようなものを小こ脇わきに抱かかえていて、背の高い男は何か長いものを持ち、その先端をトマトクンのほうに向けていた。巨漢はやたらとでかい、長くて厚い板みたいな巨剣を担いでいる。

トマトクンが大剣を振りあげた。それと同時だった。筒が、そして長いものが火を噴ふいた。波打つ琥こ珀はく色いろの剣身が瞬間、炎ほのおに包まれたように見えた。あれも飛び道具なのか。何かを発射した。トマトクンはそれを大剣で打ち払はらったのか。

「長ちよう銃じゆう……!?」ハニーの声だった。

小柄な男と巨漢が屋根から飛び降り、長身の男は片かた膝ひざ立ちの姿勢になって何かを引くような仕し種ぐさをした。残りの一人は突っ立ったままでいる。傍ぼう観かん者しや気どりか。それか、指揮官か。

あいつらは危険だ。

巨漢が巨剣を唸うならせてトマトクンに打ちかかった。トマトクンは大剣で巨剣を弾はじきかえしたが、追撃せずによろめいた。長銃とやらか。屋根の上からトマトクンを狙そ撃げきしたのだ。肩かどこかに当たったらしい。トマトクンはたまらず距きよ離りをとろうとした。そうはさせじと巨漢が迫せまる前に、小男の筒が轟ごう音おんを発して何かを撃ちだした。わりと大きなものだ。はっきりとではないが、なんとなく見えた。それは命中しなかった。トマトクンには。

それは硝子のない窓からリビングに飛びこんで、爆ばく発はつした。リビングから出てこようとしていた敵二、三人が吹ふっ飛んだ。なんてことを。

味方じゃないか。同士討うちだ。てゆうか、ああ—

ああ！

家が……！

その間にも巨漢の巨きよ剣けんがトマトクンを襲おそい、トマトクンはこれを打ちかえしたが、体勢を崩くずした。また長銃だ。家のことはとりあえずいいとして—ちっともぜんぜんよくないけど、あいつをどうにかしないと。でも、どうやって？

カタリとルーシーは右からくる敵部隊を押しとどめるだけで精せいーいつ杯ぱいだ。ユリカときゅーも、左から寄せてくる敵部隊を突とつ破ぱできずにいる。苦戦しているのだ。敵部隊の先頭に、あの二人がいる。家の窓を壊こわして逃げた。双剣使いと槍やり使い

だ。

　クルチバとハニーの足も完全に止まっている。サフィニアは魔ま術じゆつを準備しているようだ。でも、まだ呪じゆ文もんの詠えい唱しようが始まっていない。

　マリアローズは剣を鞘さやに戻もどし、ベルトのホルダーから小こ瓶びんを抜ぬきとった。左右の手で、二本ずつ。ぜんぶで四本。目標は長銃使い。距離は十五メーテル以上ある。しかも、目標までの間にトマトクンが。

　大だい丈じよう夫ぶだ。

　やれる。

　振ふりかぶろうとしたら、長銃使いがこっちを向いた。

　長銃の先端が滑すべるように動いて、ぴたりと止まった。

　息ができない。狙ねらわれている。撃うたれる。ダメだ。動かないと。弩いしゆみと一いつ緒しよだ。動きまわれば、そうそうあたらない。たぶん。いや──その必要はない。

　長銃使いは何かを感じたのだろう。振り向きかけた。遅おそかった。

　彼は破は壊かいの方法を知っている。熟知しているだけではなくて、手慣れている。

　雌めすのリレッザと雄おすのグレアデは彼の一部だ。彼は雌し雄ゆう一いつ対ついの短剣で長銃使いの頭部を胴どう体たいから切り離はなしたが、それは一連の複雑な作業の果てになされた。外套のフードをそっと外して、皮ひ膚ふを、筋肉を斬きり裂さき、血管を切断して、首の骨を強ごう引いんに叩き斬るのではなく、頸けい椎ついと頸椎の間に短剣の刃は先さきを埋うめこんでくいっと返す。それを素早く何度も繰くり返すことによって、実にきれいに、後あと腐くされなく離ればなれになるのだ。

　彼はサフィニアのような魔術士ではない。彼はいわゆる魔術の使い手ではない。だけれど、あれもまた魔術だ。そう思いたくなる。

　彼のやり方はどこまでも洗練されている。もしかすると、その方

法は無む駄だだらけなのかもしれないが、少なくとも彼の動作には余分が一いつ切さいない。美しく、厳おごそかでさえある。その行こう為いを、彼は間ま違ちがいなく愛めでている。そうでなければ、あそこまで追求して高めることはできない。だから、魔術でないとしたら、あれは残ざん酷こくな芸術だ。

　生首が転がり落ちて、長銃使いの身体は長銃を取り落とした。

　そのそばにいたもう一人の背高が、飛びすさって何かを閃ひらめかせた。剣か。両手に一本ずつ持っている。長い、まるで鎌かまの刃はみたいに湾わん曲きょくしている剣だ。

　背高は逃のがれたのだ。砂色の元アッサシンから。ピンパーネルは長銃使いの息の根を止めてすぐ、背高に肉にく薄はくした。あの速さに反応できるのだから、背高も只ただ者ものではない。

「──おいしいところをさらわれてしまったようだネ」

　耳みみ許もとで声がした。もちろん驚おどろいたけれど、それ以上に呆あきれた。右斜ななめ後方。距離は五サンチと離れていない。

　そこに馬ば鹿かがいる。

　真性の救いがたい馬鹿が。

　マリアローズは、でも、あえてそっちを見なかった。

「いつからいたわけ……」

「数秒前サ。本当だヨ。虫の知らせとでもいうのかな？　胸むな騒さわぎがしてネ。駆かけつけてみたら、こんなことになっていたというわけなのサ」

　馬鹿に何かを知らせたその虫はきっと脂羽蟲ゴキだ。この馬鹿はおそらく脂羽蟲ゴキの仲間なのだろう。気がつくといる。どこに潜ひそんでいたのか知らないが、出てくる。見たくもないのに、見てしまう。一いつ匹ぴきいたら、千匹はいると思ったほうがいい。根絶やしにしたい。滅ほろぼしたほうが世のため人のため、何より僕のためじゃない？

　いろいろ言いたいことはあるけれど、あとにしよう。

「この状じよう況きようを見て、何かしなきゃいけないことがあるとは思わない？　馬鹿なりに」

「何でも命じてくれ、マリア。ボクはどんなことだってするつもりだヨ。愛ゆえに」

　じゃあ、今すぐ滅んで？

　マリアローズは口から出そうになった言葉を引っこめて、双剣使いと槍やり使いがいる敵部隊を指さした。「やっちゃって」

「喜んで」馬鹿は胸に右手をあてて一礼した。

　次の瞬間にはもう、そこにはいなかった。

「え……」ハニーはきょろきょろあたりを見まわした。馬鹿は見失うほど速い。

「虐殺人形カーネイジドール……」クルチバは唇くちびるを噛かんだ。

「それってたしか、昼飯時ランチタイムの頭領マスター──だっけ？　前にも見たけど、へえ……あの人が。でも、どうして？」

　答える必要性は微み塵じんも感じられない。マリアローズは叫さけんだ。「ユリカ！　戻って！　カタリとルーシーを援えん護ご！」

「──了りよう解かいっ……！」ユリカは馬鹿と入れ替かわる形で後退し、そのままマリアローズたちのそばを駆け抜けて、カタリとルーシーの間から敵部隊に突つっこんでいった。

　ピンパーネルは屋根の上で背高と追いかけっこをしているみたいだ。

　長銃使いがいなくなったので、トマトクンはだいぶ楽になった。そうはいっても、巨剣使いと筒持ち小男の二人を相手にしないといけない。筒が何かを発射するたびにあちこちで爆発が起こるのも恐おそろしいいし、もしあんなものをまともに食くらったら、いくらトマトクンでも怪け我がくらいはするだろう。なんとかしたいところだけれど、マリアローズでは力不足だし、クルチバはいろいろな意味で論外だ。ハニーにしても、あのレベルで戦えるとは思えない。

敵味方三人があれだけ激しく動きまわっていると、サフィニアの魔ま術じゆつでもちょっと支し援えんしづらいか。

　ユリカが加わったカタリ、ルーシー組は一気に勢いづいた。もともとユリカとカタリは通じあっているし、カタリとルーシーも競きそうように力を出しあえるそこそこいいコンビだ。漢おとこ道みちだか何だか知らないが、悪ノリする悪あく癖へきがある点は困りものだけれど、ユリカが入ってくれればいい具合にビッと締しまる。あっちは敵部隊の人数もそれほど多くはない。見たところではもう七人、いや、六人か。今、五人になった。たぶん、心配ないだろう。

　きゅーと馬鹿は──

「フフッ……！」

　馬鹿は馬鹿だけに馬鹿みたいに遊んでいる。

　そんなふうにしか見えない。

　何しろ、双そう剣けん使いが繰くりだす二本の剣も、槍使いが矢や継つぎ早に突きだす槍も、馬鹿がよけているのではなくて、二人があえて見当違いの場所を狙ねらっているのではないかと思えるほど、まったく当たらないのだ。

　もちろん、そんなわけがない。馬鹿の動きは速すぎる。でたらめに近いほど不規則で、予測することも難しい。だから、ああなる。

　そしてまたタチが悪いことに、あれはわざとだ。ああやって双剣使いと槍使い、二人の手て練だれを自分に引きつけて、その間にきゅーがピンパーネル仕込みの体術で他ほかの敵を次々と蹴け散ちらしている。てゆうか、まあ──きゅーはよくピンパーネルに稽けい古こをつけてもらってるけど、勝負の相手はあの馬鹿なんだよね。おかげで、お互たがいに手の内を知ってたりして。あれだけ拳こぶしをあわせて（？）いれば、見えてくる部分もかなりあるだろうし。なんていうか、こうやって見ていても、きゅーは馬鹿の意図をちゃんとわかっていて、そのとおり動いてるっぽいし。馬鹿もきゅーを信じてるみたいだし。僕も当然、うまくやってくれるだろうと思って、この組みあわせにしたんだけどさ。それにしても──

「まだわからないのかい？」馬鹿の馬鹿面づらのすぐ横を槍使いの

槍が突いた。馬鹿は槍の柄えを嫌いやみたらしくそっと押しだした。「キミらとボクでは違ちがうのサ」

　槍使いが槍を引くと、双剣使いが横合いから馬鹿に斬ざん撃げきを浴びせようとした。あれがどうしてかすりもしないのか。マリアローズにもよくわからないが、馬鹿はたぶん、敵の攻こう撃げきが自分の身にふれる寸前に、少しだけ移動しているのだろう。

「いったい何が違うのかって……？」馬鹿は双剣使いの脇わきを悠ゆう然ぜんと通りすぎ、回れ右をして前まえ髪がみをかきあげた。「──格だヨ。格が違う」

　双剣使いと槍使いが左右から馬鹿に突とつ撃げきした。

　馬鹿が消えた。そう見えた。一いつ瞬しゅん後には双剣使いと槍使いの後ろにいた。

　双剣使いと槍使いが振ふり返ると、馬鹿は二人の肩に手を置いて跳とんだ。

　そうして足をきっちり揃そろえてくるっと回り、また双剣使いと槍使いの背後をとった。「言うなれば、キミらは蟻ありだ」

　双剣使いと槍使いが激しく馬鹿を攻せめたてる。声こそ出さないものの、二人は必死だ。明らかに全力で、全開だ。それなのに、馬鹿はダンスのステップを踏ふんでいるかのようだ。しかも、本気で踊おどっているわけじゃない。本番に備えて、足の位置を確かく認にんしている。悠然と練習しているかのようだ。「──キミらは蟻で、ボクは大空を飛ぶ鷹たかだ。たとえ蟻が何万匹集まろうと、鷹を狩かることはできないだろう？　ふれることすら叶かなわない。つまり、これがボクとキミらの差なのサ」

　馬鹿が双剣使いと槍使いをおちょくりながら敵部隊から引き離はなして、金色に輝かがやくきゅーが他の敵兵どもを着実に打ち減らしている。双剣使いと槍使いは、まんまと馬鹿の術中に嵌はまっているということだ。

「何がこの差を生みだしているか、わかるかい……？」馬鹿はいきなり双剣使いの懐ふところに飛びこんで、顎あごに掌しよう底ていを見み舞まった。「──愛だヨ……！」

　馬鹿なことを。

本物の馬鹿だから、しょうがないけど。

のけぞった双剣使いに追い打ちをかけようとした馬鹿の背中めがけて、槍使いが槍を突きだした。馬鹿はひらりと身をかわして槍をわしづかみにし、手首をひねった。たったそれだけの動作が引き起こした結果にしては大おお袈げ裟さすぎる。槍使いは横転して地面に叩たたきつけられた。

「この胸を！　絶えず焦こがしつづける灼しやく熱ねつの炎ほのお！　それは愛！　愛こそがボクの力の源！　この愛があるかぎり、ボクが敗れることはない……！　少なくとも、キミらのような──」

双剣使いが体勢を立てなおして二本の剣を縦じゆう横おう無む尽じんに舞まわせた。十分以上に鋭するどく力強い打ちこみだ。馬鹿は、でも、すいすいよけながら、不満そうにしている。「──それが義務であるかのように、与あたえられた役割を淡たん々たんとこなそうとしているかのように、おもしろくもなさそうに戦う野暮な連中には、ネ──愛の騎き士したるこのボクが負けるわけもないッ！　そもそも、勝ち負け以前の問題なのサ……！」

まあ、馬鹿だから……ね。

馬鹿の考えることはわからない。わかりたくもない。わからなくたっていいと思う。

ただ、馬鹿と鋏はさみは使いよう、という言葉がある。うまく利用すれば、馬鹿も役に立つ。あの馬鹿もそうだ。

馬鹿が馬鹿をやっているうちに、とうとうきゅーが双剣使いと槍やり使い以外の敵を壊かい滅めつさせてしまった。そのときを待っていたらしい。馬鹿はニヤリと笑った。「──行くヨ……！」

「くう……！」きゅーが低い姿勢になった。え？　何？　何なの……？

きゅーの毛が。

逆立って、金色に光っているだけじゃない。細かい稲いな妻ずまみたいなものをバチバチ飛ばしはじめている。てゆうか、なんでそこまで呼吸があっちゃってるわけ？　そんなに仲がいいの？　いつの間に……？

　双そう剣けん使いと槍使いが左右から馬鹿を挟はさみこんで、それぞれ剣と槍を繰くりだした。馬鹿はまっすぐ後退してこれをかわした。双剣使いと槍使いは吸い寄せられるように馬鹿を追った。背中だ。二人は、馬鹿ではなくて、きゅーに背中を見せる恰かつ好こうになった。馬鹿の動きは誘さそいだったのだ。きゅーは地を這はうように疾しつ駆くし、回転しながら跳びあがった。ＧＡＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＮＮＮＮＮＮＮ……！

　金色の旋せん風ぷうが双剣使いと槍使いを巻きあげた。何、あの奥おう義ぎ。秘技？　必殺技わざ？　どっちでもいいんだけど。いつ編みだしたの？　けっこうすごくない……？

　双剣使いと槍使いより先に着地したきゅーが、すかさずふたたび跳ちよう躍やくした。同時に馬鹿も跳んだ。「──トウッ……！」

　決着は空中でついた。

　きゅーが槍使いの槍を打ち払はらいながら喉のど元もとに蹴けりをぶちこむと、馬鹿は双剣使いの喉のど頸くびに手刀をねじこんだ。

　地べたに叩きつけられた槍使いと双剣使いは、ぴくりともしない。

「フッ……」馬鹿は二人を一いち瞥べつしてから、横目でこっちを見た。「決まったネ」

　きゅーは目をくりくりさせて、口の周りをぺろりと舐なめた。「きゅう」

　マリアローズとしては、きゅーが馬鹿に染まってしまわないことを願うばかりだ。きゅーだし、大だい丈じよう夫ぶだとは思うけど。

「虐殺人形カーネイジドール、か……」ハニーが感心したように呟つぶやいた。

　その二つ名を聞くたびにイラッとする。だって、そんなご大層なやつじゃないし。ただの馬鹿だし。

「これで──」クルチバが何か言いかけた。

　口笛のような音が響ひびき渡わたったのはそのときだった。どこだ。屋根の上。背高だ。口笛ではなくて指笛らしい。背高は外がい套とうがズタズタになっているが、深刻な手傷は負っていないのか。ピンパーネルに迫せまられたものの、背高は素す早ばやく逃げた。てゆうか、指笛？　何？　合図……？

　鐘かねが鳴った。近い。裏庭に面している塀へいだ。くる。敵。まだいたのか。

「応戦……！」マリアローズは叫さけびながら小型強弩ベイビーファイアを抜ぬきとって構えた。カタリたちのほうもそのうち片づきそうだし、少しだけ耐たえればきゅーと馬鹿がきてくれる。下手に動くより、この場を死守したほうがいい。

「爆条Ｍｅｘｅｓ雷來礼」

　サフィニアの爆雷索が四、五人の敵をいっぺんに薙なぎ払った。ハニーが連続で射しや撃げきして一人倒たおし、マリアローズも小型強弩ベイビーファイアの矢を一人の顔面に命中させた。「──ハニー！　サフィニアを……！」

「うん！」

　任せてもいいのかな。きっと大丈夫だ。なんとなくだけど、そんな気がする。

　マリアローズは小型強弩ベイビーファイアを捨てて、右手でＡＮＧＲＡロンド09を、左手でＡＮＧＲＡレクイエム04を抜いた。ちょっとの間でいい。時間を稼かせぐだけでいいんだ。駆かけだしてから気づいた。クルチバに指示を出していなかった。忘れていた？　そういうわけじゃないと思うんだけど。やっぱり番人だからか、若じやつ干かんやりづらい。カタリの彼女だし。そんなことよりも、敵は目前だ。こいつら、なんか不気味なんだよ。喋しやべらないし。全員同じ外套を身にまとっていて、装備もわからないし。正直、一対一でも勝てる気がしない。勝たなくていいんだ。しのぐだけでいい。相手は四人──いや、六人。もっとか。

　とりあえず、先頭の一人だ。相手は湾わん刀とうを持っている。突つっこむと、湾刀がきた。左手の剣で弾はじこうとしたが、押し返されたので、とっさに右手の剣で押しのけた。力が強い。こっちが弱いだけか。ダメだ。踏ふみこめない。下がると、相手が出てき

た。ひょっとして、そこを狙ねらっていたのか。

「いやあああああああああああああああああああああああ
あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」

　ワンピースの裾すそをひるがえして、クルチバが敵に体当たりした。違ちがう。短刀だ。首の横側にぶっ刺さして、突き倒すなり飛びすさった。堂に入っている。訓練を積んだだけではできない動きだ。舐めるなってこと？

　マリアローズが二人目の剣をなんとか受け流している横で、クルチバは別の敵と斬きり結びはじめた。だけど、クルチバの得物は短刀だ。さっきみたいな使い方ならまだしも、正面を切って渡りあうとなると厳しい。僕も他人の心配なんかしていられるほど余よ裕ゆうがないし。てゆうか、押されてるし。相手が増えたし。まだ増えるし。もう二対四──じゃなくて、五か。六。いや、二対七だ。
七？　無理！　早く……！

「──つっ……！」クルチバがよろめいた。右みぎ腕うでだ。斬られたのか。やばい。そっちに気をとられている間に、こっちも……！

　マリアローズは自分から尻しり餅もちをついた。斜ななめに振ふりおろされた敵の剣から逃のがれるためには、そうするしかなかった。敵は返す刀でマリアローズの頭部を両断しようとした。その前に飛び道具の音がした。ハニーだ。左ひだり肩かたと、それから胸に命中したらしい。敵は一歩、二歩、下がった。安あん堵どしている暇ひまはない。別の敵がくる。マリアローズは立ちあがらずに横っ跳とびしようとして、やめた。やっときた。遅おそいんだよ、馬ば鹿か。

「スアァッ……！」

　夜の闇やみよりも黒い風が吹ふいて、マリアローズに襲おそいかかろうとしていた敵をぶっ飛ばした。立てつづけに金色の暴風が起こって、別の敵がまるで同情できない被ひ害がい者しゃになった。

「大丈夫だネ、マイスウィーテスト……!?」馬鹿が手をさしのべてきた。もしぜんぜん大丈夫じゃないって言ったら、どんな顔をするだろう。

　マリアローズは馬鹿の手を打ち払った。「──いいから！　敵

を……！」

「時と場所を選べということだネ！」馬鹿は馬鹿だ。そんなこと誰だれも言ってないでしょ？

　でもまあ、このろくでもない馬鹿はもうそろそろ用済みだ。
きゅーが敵を二人ほど蹴け飛とばして、クルチバに加勢しようとしている。馬鹿なんかいなくても、きゅーさえいてくれれば問題ない。カタリたちのほうも──って、え……？

「ぬおおおおおおおおおええええええええええええええええええいいいいいいいい……！」

　駆けてくる。カタリが。やばい顔になっている。ちょっと正視に耐えない。とんでもない形相だ。怒いかりの半魚人が、猛もう烈れつな速度で走ってくる。

「わしの女にいいいいいぃぃぃぃぃ！　なぁぁぁぁぁにさらしとんじゃワレェェェェ……！」

　カタリはクルチバを厳しく攻せめていた敵に突っこんだ。敵はすかさずカタリに向きなおって剣けんで迎むかえ撃うとうとしたが、無む駄だだった。カタリは右手の変形斧おので敵の剣を簡単に叩たたき折るなり、そのドタマを左手の変形斧でかち割った。「──お前じぶんの血ィも赤いんかい！　生意気やないかオウッ……!?」

　完全にブチ切れている。こうなるともう手がつけられない。

「喝カツッ！　喝ッ！　喝ッ！　喝ッ！　喝ッ！　喝ッ！
喝ッ！　カァァァァーツッ……！」

　カタリは敵の武器を、敵の肉体を、そして敵の魂たましいまで打ち砕くだかんとするかのように、休みなく二本の変形斧を振るいつづけた。動く敵は間もなく一人もいなくなった。あの力をふだんから半分でも発揮できたら、そうとうなものなのに。でも、大事な人のためだからこそ、自分の限界を超こえることができる。それは間違いなくカタリの美点だ。ただ、長所は短所に通じる。いつか墓ぼ穴けつを掘ほる羽目にならなきゃいいんだけど。

「あかんで」カタリは荒あらい息をしながら顔を汚よごしている返り血を腕でぬぐい、ちらりとクルチバを見た。「わしも前はよう死んどったし、言えた義理やないけどな。無茶したらあかん」

「……そんなつもりはないです。わたしは、ただ──」

「命を粗そ末まつにせんといてくれ。お願いや。アーニャちゃんに死なれたら、わし、かなわんわ」

「し、死にませんよ。こんなところで。ちょっと怪け我がをしただけで……」

「せや！　どないやねん、怪我の具合は。見してみい」

「い、いいです！　大だい丈じよう夫ぶだから、これくらい……」

「うおっ！　けっこうザックリいっとるやん！　痛いか？　痛いやろ……？」

「少しだけだから……」

　うん。

　勝手にやってて？

　マリアローズは一つ息をついて、ざっとあたりを見まわした。背高が指笛で呼びよせた新手は逆の上ぼせ半魚人に一いつ掃そうされたし、ユリカとルーシーもこっちに向かってくる。あっちも片づいたようだ。姿が見えないけれど、ピンパーネルと背高はまだ屋根の上なのか。トマトクンの足あし許もとには巨きよ漢かんが倒たおれ伏ふし、巨剣が粉々になって散らばっている。残りは筒つつ持ちだが、あの様子だとそう長くはかからないだろう。

　トマトクンは大剣を振りかぶって叫さけんだ。「──ゲーデ……！」

　ゲーデ？　何のことだろう。名前……？

　筒持ちはがら空きになったトマトクンの土手っ腹に向かってぶっ放そうとしたのだろう。でも、焦あせっていたのか。追いつめられて、判断を間違ったのかもしれない。近すぎる。あれはトマトクンの大剣が届く距きよ離りだ。それに、あの大剣は大きさのわりに軽いし、トマトクンの筋力はとにかく並外れている。

　筒持ちは何もできなかった。何かする前に、トマトクンの大剣が筒持ちの腕ごと筒をぶった斬ってしまった。

トマトクンはすぐさま筒持ちの横よこ面づらに回し蹴げりをお見み舞まいした。筒持ちは丸太みたいに横よこ倒だおしになったが、起きあがろうとした。見上げた根こん性じようだ。敵ながら見事だと感心したのか。そういうわけでもなさそうだ。

トマトクンは左手一本で筒持ちの首根っこをつかみ、持ちあげた。

フードが外れて、顔があらわになった。何だよ、あれ。

口が異様に大きい。

つぶらな瞳ひとみをしている。でも、顔中が皺しわだらけだ。

人間じゃない……？

トマトクンは首を左右に振った。「……ゲーデ。なんでお前がいるんだ」

ゲーデと呼ばれた筒持ちは、焦しよう点てんが定まりきらない目でトマトクンを見た。そうして奥歯を嚙かみしめた瞬しゆん間かん、トマトクンは大剣を持ったままの右腕でゲーデの顎あごを殴おう打だした。たぶん、骨が砕けた。ゲーデは白目を剝むいて、大きな口をいっ杯ぱいに開けた。口の中は血だらけだ。毒で自害しようとしたのだろうが、ゲーデは望みを果たしたのかどうか。トマトクンは地面にゲーデを横たえて、空を仰あおいだ。その頭上を何かが飛んでいった。

背高だ。

屋根から跳んで、裏庭に着地した背高は、外がい套とうを脱ぬぎ捨てていた。

湾わん曲きよくした長い剣は、右手に持っている一本だけだ。左ひだり腕うでがだらりと下がっている。血だらけだ。ピンパーネルに斬きり刻まれたのだろう。他ほかにも身体からだ中に手傷を負っている。でも、顔はきれいだ。

ピンパーネルが少し遅おくれて屋根から飛び降りた。そのまま背高に肉にく薄はくしようとした元アッサシンを、トマトクンが止めた。「──待て！」

ピンパーネルは即そく座ざに静止した。

どうして……？

トマトクンはなぜピンパーネルを制止したのか。

それよりも、なんで……？

マリアローズは目を瞠みはった。

あの顔。

知っている。

たぶん、ユリカとサフィニアも。覚えていれば。

少なくとも、マリアローズは忘れていない。「お前とはいつかまた会うだろう。あたしはお前個人の敵に回らないということだけ、覚えておくがいい」と彼女は言った。

今日がそのいつかだった。そういうことなのか。

違ちがう。

そんなわけがない。

たしかに、あの顔は──あまり高くはないけれど、細くてすっきりとした鼻び梁りようにしても、適度にふっくらした桜色の唇くちびるにしても、頰ほおや顎のラインも、そして黒々とした瞳も、記き憶おくのとおりだ。一度しか会っていないのに、なぜこんなに覚えているのか。自分でも不思議なくらいだ。はっきりと思いだせる。

彼女の顔と背高の顔は、完全に一いつ致ちする。そう断言してもいい。

でも、違う。

彼女は紅色の甲かつ冑ちゆうを一分の隙すきもなく身にまとっていた。兜かぶとが左右に割れて、顔が現れた。美び貌ぼうだった。でも、髪かみの毛がなかった。女性の頭部の前半分だけが、開いた兜のようなものに包まれている。そんなふうに見えた。異様だった。彼女は普ふ通つうの人間ではない。そうとしか思えなかった。

背高にはちゃんと髪がある。黒い髪の毛だ。長い。腰こしまで届きそうだ。

女性にしては、かなり上背がある。ただ、それだけだ。人間だ。

人間にしか見えない。

それなのに、背高は彼女に似ている。

顔だけでいえば、瓜うり二つだ。

「りりぃ……？」

呟つぶやくと、背高はマリアローズのほうを見た。表情は動かなかった。無表情だった。

背高は駆かけだした。

追いかけて、つかまえたほうがいい。背高は負傷している。ピンパーネルなら──アジアンでもいい。殺さずに生け捕どりにすることもできるだろう。そうするべきだと思うのに、決断できない。塀へいを乗り越こえようとしている背高を、ただ見送っているトマトクンも同じなのか。

「……行っちゃった」ハニーはため息をついた。

「あの人……」ユリカはそこまで言って口ごもった。

「……何が……どうなっているのか……」サフィニアも混乱しているようだ。

「な、何ですか……？　わけがわからないんですけど……？」ルーシー。うざい。や、それはいくらなんでもひどいかな。だけど、ちょっと──今は、ね。

「フム……」馬鹿は分別顔でうなずいた。「何かわけありのようだネ」

「あのさ……」

そのわりに、たいしたことは言わないし。わけもなくこんなことになると思うのかな。馬鹿だからしょうがないけど。

　マリアローズはうなだれた。「……いいや、もう」

「そ、そんなことは言わずに！　ボクに話してくれないかい？　どんなことでも相談に乗るし、力になるヨ？　いや、キミの力になりたいんだ！　どうか、是ぜ非ひ……！」

「あっそ。じゃ、お願い。黙だまってて」

　馬鹿は唇を引き結んでうなずいた。なんだか知らないけれど、妙みように嬉うれしそうだ。馬鹿だからだろう。

　トマトクンはそのへんに転がっていた長ちよう銃じゆう持ちの生首を拾いあげて眺ながめている。

　家はできるだけ見ないようにした。

　見てしまうと、きっと頭が痛くなる。

　てゆうか、泣いちゃうかも。

Omenage 900 8th revolution 27th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

chapter.10

泣けてくる

七十六。

べつに数えたかったわけではないけれど、放ほうっておくわけにもゆかないので、どうにかするしかない。そうすると、必然的に数える羽目になってしまった。

七十六人。

エルデェＥイニオンＭ機術士匠合Ｕ執しつ行こう部ぶ特とく殊しゆ部隊トラジェディーが、トマトクン邸てい襲しゆう撃げきで失った人員の数だ。

把は握あくしている範はん囲いでは、敵側の生せい還かん者しやは一名。りりぃに似た顔の背高。彼女だけは取り逃にがした。というよりも、追わなかった。

その振ふる舞まいからして、彼女は襲撃部隊の指揮を執とっていたのではないかと思われる。だとしたら、やはり仕留めるべきだったのかもしれない。悔くやむ気持ちはある。でも、あのときは決断を下すことができなかった。マリアローズだけではない。トマトクンもそうだった。

どういう関係なのかはわからないけれど、トマトクンとりりぃは旧知の間あいだ柄がららしい。友人という感じではなかった。少なくとも、りりぃはトマトクンを憎にくんでいるようだった。トマトクンはどうなのだろう。いずれにしても、あれはりりぃではない。それなのに、りりぃにそっくりだった。トマトクンの知りあいに。

敵の生還者は一名だが、生存者はもう一人いる。

筒つつ持ちの小男。実際には、百七十くらいはありそうだけれど、他ほかが大きかったし、猫ねこ背ぜのせいで小こ柄がらに見えたらしい。トマトクンは男をゲーデと呼んだ。

ゲーデは、ユリカに治ち療りようを施ほどこしてもらったあと、手て枷かせ足枷猿さる轡ぐつわ等々で厳重に緊きん縛ばく拘こう束そくして地下に監かん禁きんした。

トマトクン邸の地下には、蘇そ生せい式しきの祭さい壇だんが設置されている関係で、死体を低温で保存できる安置室もあったりす

る。そこには大たい剣けん使いの骸むくろが横たえられていたのだが、これはもう他の死し骸がいと一いつ緒しよに処分することにした。髭ひげがいないから自前で死者を蘇生させることはできないし、わざわざ高層寺院に連れていって高い金を払はらうなんて馬鹿らしい。それに、ゲーデという新しい捕ほ虜りよを確保したので、死人にこだわる必要はなくなった。死人の代わりに、ゲーデが安置室の住人となったというわけだ。冷れい房ぼうは切っておいたので、快適ではないかもしれないけれど、死ぬほど居い心地ごこちが悪いということはないだろう。自害しようとしたくらいだから死にたいのかもしれないが、一応、自分で息を止めて窒ちつ息そく死しでもしないかぎり死ねないようにしておいた。そこまでして死ぬというのなら、もう死なせてやるしかない。

　やることはいっぱいあるわけだし。

　まず死体の処理だ。これはカタリが解決策を思いついた。

　マリアローズは初めて知ったのだが、死体にも需要があるらしい。何に使うのか。不明だし、知らないほうがいいのかもしれない。とにかく、死体を買いとってくれる業者がエルデンにはいるのだ。

　心当たりがあるというカタリが、クルチバを送っていきがてら交こう渉しようをまとめてきて、翌朝には業者に雇やとわれた男たちがぜんぶ運び去ってくれた。

　支し払はらわれた金額は、お一人様につき三十ダラー。今回ばかりは金なんかどうでもいい。そうはいっても、正直、なんとも言えない気分になった。でも、一人二人ならともかく、あれだけの人数になると、葬ほうむるにしてもどこかに置いておくにしても、そうとうな手間がかかる。はっきり言って現実的ではないし、そこまでしてやる義理だってもちろんない。迷めい惑わくを被こうむったのは、あくまでこっちなのだ。

　それにしても、何か起こるだろうと予想してはいたけれど、まさかあんなに大勢で攻せめてくるとは。家が戦場になるなんて、信じたくないほど超最低ＳＵＣＫだ。甘かったのだろうか。そうかもしれない。ただ、相手は常じよう軌きを逸いつしている。それだけは間ま違ちがいない。

　おかげで、掃そう除じ、掃除、掃除で時間が過ぎる。こんなこと

をしている間に、また敵がきたらどうするのか。当然、その可能性を排はい除じよしていたわけではない。考えてはいた。でも、すぐにはこないだろう。きたくてもこられないはずだ。

　あのやり方。敵は数日かけて戦力を集め、それを一挙に投入した。確実に目的を達成しようとしていたのだ。万ばん全ぜんを期していた。それが失敗した。態勢を立てなおさないといけない。時間がかかるだろう。もしくは、力押しをやめて、違う手を打ってくるか。

　どっちにしたって、めちゃくちゃにされた家をこのままにはしておけないじゃないか。家なんだから。

　ユリカと二人で廊ろう下かの床ゆかを水みず拭ぶきしていると、馬ば鹿かが駆かけてきた。

「マァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ
リ
アァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ
……！」

　もはや顔を上げる気力もない。

　気力が残っていたとしても、馬鹿の顔なんか見たくない。

　馬鹿はマリアローズのすぐそばで立ち止まった。「──マリア！」

　マリアローズは手を止めてため息をついた。「……何」

「終わったヨ……！　当然、キミにおおせつかったリビングの掃除サ！　使い物にならないソファーやテーブルは外に出しておいたからネ！　修理しないとどうにもならないところも多いけど、あとはほぼ完かん璧ぺきだヨ！　くつろぎの空間が蘇よみがえったとは言いがたいとしても、できるかぎりきれいにはした！　むろん、これもキミへの尽つきせぬ愛がなせる技わざサ……！」

「おちゅかれしゃま」ユリカが笑いかけてやるような価値はない馬鹿なのだけれど、そんな馬鹿にも惜おしみなく笑え顔がおを見せてねぎらうあたりがユリカのユリカたるゆえんだ。



「フッ。これくらいなんでもないサッ」馬鹿はちょっとだけマリアローズに近づいた。「なんだったら、他にも仕事を言いつけてくれてかまわないヨ？　ボクとしてはまったくかまわないんだけどネ……？」

　マリアローズはいやいや顔を上げた。

　途と端たんに馬鹿は目を輝かがやかせた。もしこの馬鹿に尻尾しっぽが生えていたら、間違いなく振ふりまくっているだろう。

　うざい。

　罵ののしるのもめんどくさい。

「ありがと」マリアローズは表情筋をほとんど動かさずに言った。「悪かったね。掃除なんか手伝わせて。もういいからさ」

「え……もういいのかい……？」

「聞こえなかった？」

「いや、聞こえたヨ？　あたりまえサ。キミの言葉を聞き逃のがすはずがないじゃないか？」

「じゃあ、そういうことで。どうもね」

「あ……うん」

　馬鹿はそう返事をしたくせに、立ちつくしている。

　マリアローズはわざと馬鹿の足の近くを雑ぞう巾きんでふいた。「ごめん。そこにいられると、邪じや魔まなんだけど」

「そ、そう？　ああ、そうだよネ……」馬鹿は飛び跳はねるようにしてその場から離はなれた。

　それからもしばらくじっとしていたが、やがて諦あきらめたようだ。馬鹿は玄げん関かんの上がり口に腰こしかけて、靴くつを履はきはじめた。

　ちなみに、土足承しよう認にんの特別措そ置ちは掃除開始とともに解除されている。

　靴を履いている馬鹿の背中はあからさまに打ちひしがれていて、無む性しように腹が立った。あんなふうにしかできない馬鹿もむかつくけれど、こういうふうにしかできない自分もどうかと思う。もっと普ふ通つうにしたい。できるのなら、とっくにやっている。できるわけがないじゃないか。

　靴を履き終えた馬鹿が、立ちあがって振り向いた。

　一秒の半分くらいの間だけ目があった。

　マリアローズはうつむいて手を動かした。「ばいばい」

「うん。また」

　あいつがどんな顔でそう言ったのかなんて、知りたくない。

　足音が聞こえて、ドアが開く音がした。

　あいつもう、閉ざされたドアの向こうだ。

　気がついたら、ユリカに顔をのぞきこまれていた。

「──わっ。な、何っ……!?」

「よかったの？」ユリカは気き遣づかいながら苦く笑しようしている。そんな表情だった。

　妙みように大人っぽかった。

　まあ、大人なんだけどさ。

　マリアローズは口を尖とがらせ、床をふく手に力をこめた。
「……な、何が？」

「ちょっとひどかったんじゃない？　でも、マリアだって、あんな態度をとりたかったわけじゃないんでしょう？」

「べっつにぃ？　いつもあんな感じだけどね。あれが普通っていうかさ。ふだんどおりだし。ずっとこうだしね」

「本当にしょうなら、いいんだけど」

「ほんとにそうだよ？」

「わたしは、なかなか素しゆ直なおになれなかったの」

「え？」

「自分が飛燕フエイヤンに惹ひかれていることには気ぢゅいていた

わ。だけど、認めたくなかった。理由はいろいろあるけど──どう言えばいいのかしら。誰だれかを好しゆきになったり、好しゆきになってもらったり、しょういうことって、わたしには許しゃれないんじゃないかって思ってたし。わたしはこういう身体からだだし……」

　ユリカは下を向いて、かすかに震ふるえていた。きっと怖こわいんだ。自分のことを話すのが。

　どんなことでも受け止めて、包みこんでくれる人だけれど、他人にそれを求めることはしない。強いからだと思っていた。そんなわけがない。それだけじゃないんだ。

　受け容いれてもらえるかどうか、ユリカだって不安なんだ。

　大だい丈じよう夫ぶだよ。心配なんかしなくたっていい。そう言うのは簡単だ。でも、そんなふうに言ってもらったとしても、不安が完全に消し飛ぶわけじゃない。一時的に晴れても、また雲が垂れこめてくる。不安の根は深い。とても深い。

　わかるよ。すごく、わかる。

　ユリカとは次元が違ちがうけどさ。ユリカのほうがずっと大変だと思うけど、でも、わかる。

　僕もそうだから。

「……自信がなかったのね。わたしは信じられなかったの。飛燕フエイヤンじゃないわ。自分のことを信じられなかった。でもね。だから信じようって思ったわけじゃないのよ。しょうじゃなくて、しょんなことなんか、どうでもよくなってしまったの」

「そっか」

　なんか、泣きたいかも。

　よくわからないけど、泣きたいよ。

　どうしてこんなに嬉うれしいのかな。

「大好きなんだね、飛燕フエイヤンのことが」

「ええ」

　ユリカは目を細めて頰ほおをゆるめ、そっとうなずいた。

　大事な大事なユリカに、こんなにいい顔をさせる。悔くやしいけれど、それだけでも飛燕フエイヤンに感謝しないといけないのかもしれない。

　マリアローズは床ゆかに腰を下ろして天てん井じようを仰あおいだ。「……そのうち、髭ひげにも伝えないとね。次に会ったとき、いきなり──っていうのもあれだし。たぶん、かなりびっくりするっていうか、ショック受けるだろうしさ。僕でもこうだからねえ……」

「わたしも、何度か手紙に書こうとしたんだけど──いじゃとなると、どう書いたらいいか迷っちゃって」

「うーん。どうなんだろね。あらたまってっていうのも変だから、さらっとこう、たとえば追つい伸しんとかで──そういえば、彼氏ができました、とか？」

「しょの彼氏って言葉、どうもしっくりこないのよね」

「あー。なんとなくわからなくもないかな？　じゃあ、何だろ。恋こい人びと？」

　ユリカは顔を赤くした。「……なんだか、恥はじゅかしいわ」

「けど、他ほかになくない？」

「しょうだけど」

「もうさ。だったらいっそのこと、結けつ婚こんします！　とか書いちゃったら？」

「け、結婚!?　しょんなの、考えたこともないわ。だいたい、結婚って……」

「まあ、この国だしねえ。他の国では宗教絡がらみとかの結婚式があったりするし、あと、友だちとか知りあい集めて騒さわいだり、やる人はそんな感じでやってるみたいだけどさ。てことは、やるなら龍りゆう州しゆう式？　どんなのか知らないけど」

「しょもしょも、結婚って、したらどうなるの？」

「え……？　や、そりゃあ……一いつ緒しよに住んだりとか？　するのかな……？　するんじゃない、やっぱり？　何も変わらないってわけにはいかないだろうし」

「想像がちゅかないわ」

「たしかに……」

「マリアは？」

「へ？」

「マリアはどうなの？」

　灰色がかった青い瞳ひとみに見すえられると、目をそらすことなんかできやしなかった。

　ユリカが何を尋たずねているのか。それはわかる。あいつのことだ。

　そばにいるユリカの目には、どんなふうに映っているのだろう。僕とあいつって、結局のところ、何なのかな？　どういう関係？

　何だっていい。このままでいい。何も変わらなくていい。

　もしかしたら、それが本音なのかもしれない。だいたいこれくらいの距きよ離りで、傷つけることも、傷つくこともなくいられるのなら、一番いい。それじゃあダメなのかな。

　よくないことなのかな。

　口を開いたら、ため息がもれた。

　きゅーがとてとて歩いてきて、きれいな水をたたえたバケツと、洗った雑ぞう巾きんの山を床に置いた。「きゅう」

「ごくろうさま」ようやく出てきた言葉がそれだった。

「マリア」ユリカはマリアローズの背中をさすった。「ちょっと休んだら？」

「や、でも」

「ちゅかれてるでしょ？」

「てゆうか、僕よりもユリカのほうが大変だったでしょ。戦って、治して、だし──」

「わたしは平気。鍛きたえ方が違うもの」ユリカは悪戯いたずらっぽく笑った。「しょれに、マリアは身体からだよりも頭をいっぱいちゅかったでしょう」

「それくらいしかできないからね。力不足もいいとこだけど」

「卑ひ下げしないの」

「……だね」

「ここはわたしときゅーがやるから。寝ねられしょうなら一ひと眠ねむりしてもいいし、ただ横になるだけでもだいぶ違うわ」

「くう」

「ん……それじゃあ」マリアローズは立ちあがった。「眠くはないけど、ちょっと一回りしてこようかな」

「あんまり考えしゅぎないでね？」

「わかった」

「──って言っても、無理なんでしょう？」

「まあね。そうかも」

　ユリカにはかなわない。

　マリアローズはリビングへと向かった。馬鹿が掃除したリビングは、傷ついたり破損したり焦こげたりしている箇か所しよはそのままだが、汚よごれは見あたらなかった。壊こわれた家具類はすべて裏庭に出してある。思ったよりきれいになっているけれど、昨日までの面おも影かげはない。かなり手を入れないと、ここではくつろげないだろう。直したら直したで、あそこが違ちがう、ここが違う、みたいに感じて、きっとしばらくはしっくりこないのだ。

いつの間にか、この家に強い愛着を持っていたらしい。

前の部屋は、何年も住んでいたわりに、意外とあっさり捨てることができた。今となっては思いだすこともない。

あそこは僕だけの家だった。

ここは違う。

みんなの家なんだ。

だから、なのかな。

のこぎりで木材を切る音や、金かな槌づちで釘くぎを打つ音が聞こえる。カタリとピンパーネル、ルーシーの三人は、素人しろうと大工になって家の外側の応急補修をしているらしい。もちろん、カタリが言い出しっぺだ。無む駄だなことを。どうせ職人に修しゅう繕ぜんしてもらわないといけないのだ。どうせなら、腕うでのいい大工に頼たのまないと。たしか、モトロール刀を鍛たん造ぞうする鍛か冶じ士しがあえて機術と距離を置いているように、機術に頼たよらない昔むかし気質かたぎの大工もけっこういるはずだ。多少金がかかっても、信用できる大工を選ぶべきだろう。金。

金か。

ほんとに請せい求きゆうできないかな。

ＥＭＵ。大きい相手だ。金は腐くさるほど持っているに違いない。でも、敵だ。ＺＯＯとＥＭＵは、今やはっきりと敵対している。

これが、そうとは言い切れないのだ。

なぜなら、相手がこれこれこういう者だと名乗ったわけではない。連中はトラジェディーだろう。でも、そんなことは知らなかったと言い張れなくもない。相手は自分の身み許もとを明らかにしなかった。要求を突つきつけてくることもなかった。それどころか、一言も喋しやべらなかった。連中はただいきなり襲おそってきたのだ。トラジェディー？　何それ？　単なる正体不明の暴漢集団でしょ。そう見なしたとしても、矛む盾じゆんは生じない。

もし、相手が交こう渉しようを持ちかけてきたら、マリアローズ

としてはかなり悩なやまざるをえなかったはずだ。ハニーの身み柄がらを引き渡わたせという話であれば、トマトクンはたぶん、のまなかっただろう。心情的には、マリアローズだってそうだ。でも、迷うところではある。襲しゅう撃げきしてくる前に、相手は何らかの形でこちらに接せつ触しよくしようとするかもしれない。その可能性は低くないと、実は思っていた。

　予想は外れたが、この先はどうか。

　相手が被こうむった被ひ害がいは、どう考えても小さくない。むきになって再戦を挑いどんでくるか。今回の襲撃はなかったことにして、交渉役を送りこんでくる。そんな手も考えられる。もしくは、諦あきらめるか。手を引いたふりをして、機会をうかがうか。

　何にしても、現時点ではＺＯＯとＥＭＵが敵対しているという事実は存在しない。そういうことにしておいたほうが、選せん択たく肢しが増えるし、都合がいいのかもしれない。

　ただし、それだと、ＥＭＵに修しゅう繕ぜん費ひ及および慰い謝しや料りようを請求することもできない。

「……ひどい話」

　マリアローズはリビングをあとにした。

　トマトクンはやたらと眠そうにしていたので、二時間くらい前に自室で仮か眠みんをとるように申し渡した。ふらふらしはじめたサフィニアに眠るようすすめたのは一時間くらい前だったか。ハニーは地下で捕ほ虜りよの見張りをしているはずだ。

　あくびをこらえながら廊ろう下かを歩いてゆくと、サフィニアが廊下に崩くずれ落ちていた。なんでこんなところで。

　謎なぞはすぐに解けた。というか、謎でも何でもない。

　その場所はトマトクンの部屋の前だ。

「あーあ……」マリアローズはサフィニアのそばにしゃがんだ。

　サフィニアは身体を横向きにし、左ひだり腕うでを一応、枕まくらにしている。肩かたをつついてみたが、ぴくりともしない。口を少し開けて、寝ね息いきを立てている。熟じゆく睡すいしているの

だ。

　マリアローズのベッドを使ってもいいと言っておいたのだが、想像するに、トマトクンの部屋の前で足が止まったのだろう。寝顔を見るくらいのことは、してもいいのではないか。ふとそんな考えが浮うかんだのかもしれない。もっと踏ふみこんで、あんなことやこんなことまでしてしまいたい。もうやってしまうしかない。やれ。行け。行っちゃえ、サフィニア……！

　でも、結局、何もできなかったのだ。

　サフィニアはおそらく、壁かべにもたれかかって床に座り、ため息の一つや二つはついただろう。自分の意い気く地じのなさを責めたり、妄もう想そうを膨ふくらませたり、なんとか勇気を振ふりしぼろうとしたりしているうちに、きっと眠ってしまったのだ。

　不意にサフィニアの瞼まぶたが震ふるえた。起きたのか。違った。「……トマト……クン……」

　寝ね言ごとだ。

　思い人の夢でも見ているのだろうか。

　マリアローズは、サフィニアの頬ほおに落ちかかっている銀糸のような髪かみの毛を、そっと脇わきのほうへどけた。「どんな夢、見てるんだか……」

　せめていい夢だといいんだけど。

「……ふふ……」サフィニアは肩を揺ゆらして笑いだした。「……ふふ……ふふふ……」

　マリアローズは手を引っこめた。「こ、怖こわっ……」

　ドアが開いて、二重に驚おどろかされた。

「ぬ……？」

　もちろん、トマトクンだった。鎧よろいは着ていない。シャツにジーンズというラフな恰かつ好こうだ。目が三分の一くらいしか開いていない。ものすごく眠そうだ。

　トマトクンはぬぼーっとした顔でサフィニアを見下ろして、頭を搔かいた。「……何だ？　寝てるのか」

「うん」マリアローズは肩をすくめた。「みたい」

「しょうがないやつだな」

「……きみには言ってほしくないんだけどね」

「なんでだ？」

「なんでだろうね？　わかんない？」

「むう……」トマトクンは片方の眉まゆをつりあげてしばらく唇くちびるをひん曲げていたが、おもむろに腰こしを屈かがめた。

「……え？　何？　どうするの？」

「どうするってお前」トマトクンは軽々とサフィニアを持ちあげた。「このままにしておくわけにもいかんだろう」

「そりゃあ……そうだけど」

「まあ」トマトクンはサフィニアを抱かかえなおした。「俺の部屋でいいか。近いしな」

「……すぐそこだからね」

「うむ」トマトクンはサフィニアを横よこ抱だきにしたまま、部屋に戻もどっていった。

　ドアが閉まると、胸がどきどきしはじめた。てゆうか、抱えあげられたとき、サフィニア、起きてなかった？　一いつ瞬しゅん、目を開けようとしたような。顔も赤かったような。むしろ、そうだったらいい。すべては眠っている間の出来事で、本人は何も覚えていませんでした──じゃあ、ちょっと、かなり気の毒だし。たまにはご褒ほう美びっていうか、こういうこともないとさ。だけど、サフィニア的にはチャンスだったりしない？　ベッドに寝かせてもらったその瞬間に──抱きつく！　とか。それくらいやらないと、どうにもならなくない？　いっそ、やっちゃったほうがよくない？　サフィニアもけっこう切せつ羽ぱ詰つまってるっぽいし、思いきった行動に出たりしないかな？　だとしたら、僕がここにいるのって、なん

か微び妙みよう？　いないほうがいい？　トマトが出てこなかったら、部屋の中で何かが起こってるってことだし──何かって？　き、気になる。でも、ドアに耳を押しつけたりするわけにもいかないしね。うん。だいぶ気になるけど、ここは離はなれよう。

　足を一歩踏みだそうとしたら、ドアが開いてトマトクンが出てきた。

　マリアローズは肩を落とした。「……やっぱり」

　トマトクンはゆっくりと首を左右に曲げた。「何がだ？」

「や、なんでもないよ。こっちの話」

「そうか」

「てゆうか、いいの？　あんまり寝てないけど。二時間くらいじゃない？」

「いくら寝ても眠いしな」

「だよねぇー……」

「お前は大だい丈じよう夫ぶなのか」

「僕は──」

　疲つかれはある。身体からだがだるいし、頭の働きも多少鈍にぶっている。でも、眠ねむ気けは感じない。寝ようとしたら、かえってあれこれ考えてしまいそうだ。

「平気かな」

「あまり根を詰つめるなよ。お前に倒たおれられたら大変だ」

「そのときはそのときで、なんとかなるでしょ」

「お前はいつもそうだな」トマトクンは片かた頬ほおをゆがめて笑った。「家がちょっとぶっ壊こわれただけですんだのは、お前がうまくやったからだぞ」

「……やめて。そういうこと言われると、調子に乗っちゃいそうになるから」

「お前が調子に乗ってるところなんて、見たことがないような気もするがな」

「そう？　わりとあったりするんだけどね。図に乗ると、だいたい失敗するんだよ」

「カタリに言ってやれ」

「言っても聞かないでしょ」

「違ちがいない」トマトクンはゆっくりと歩きだした。

　マリアローズはトマトクンに従った。「トマト」

「何だ」

「ゲーデって何者？」

「知りあいだ。昔の、な」

「どれくらい昔……？」マリアローズはうつむいて唇の端はしを軽く嚙かんだ。「……言いたくないなら、いいけど」

「ずいぶん昔だ。他人の空似ってことはないだろうな。ゲーデは獣人ブルタスだ」

「ブルタス……？」

「亜人デミヌスともいう。異界生物フリークスと人間の混種ミツクスだ」

「異界生物フリークスと──って、そんなの……」

「今はいない。昔はいた。人間が生みだしたんだ」

「何のために……？」

「戦争だ。遊戯戦争ランプウオー。お前も知ってるんじゃないか」

「それって、魔ま導どう王おう時代の──」

　魔導王時代末期。今から約千年前、魔導王たちは互たがいの魔術を披ひ露ろうしあい、軍勢の力を競きそわせた。それは戦争ウオー

という形の遊戯ランプだった。広く知られている話だ。物語本として出版されてもいる。もっとも、魔導王時代の歴史は、史し跡せきの崩ほう壊かい、書物の散さん逸いつ等々によって、ほとんど正しく伝えられていないようで、本の中の遊戯戦争ランプウオーは大半が創作らしい。千年前というのも、魔導王時代が終わってオーメネイジが始まった。それが今から九百年前のことだから、それより百年ほど前の出来事だろうという、かなり大おお雑ざつ把ぱな設定にすぎないとか、何とか。

　まるで事実のように語られてはいるものの、真実かどうかはわからない。

　その遊戯戦争ランプウオーの話を、トマトクンはしている。

「共食いをする獣ってのもけっこういるんだ」トマトクンは低い、乾かわいた声で言った。「ただ、同族同士が日常的に殺しあう獣はそんなにいない。仲間をぶちのめして息の根を止めるのは、普ふ通つうじゃないってことだ」

「普通じゃないなんて、あたりまえだと思うんだけど」

「そうか？　人間は違うぞ。俺が言えた義理じゃあないがな。いや──だからこそ、俺にはよくわかるんだ。人間は同じ人間でも、違うと見なすことができる。自分と違うやつなら、殺そうが焼いて食おうがかまわん。同じだと思うから、殺したらかわいそうだとか、食うのはまずいんじゃないかと考えるんだ」

「それは……そうかもしれないけどさ」

「遊戯戦争ランプウオーってのは、そういう戦争だったんだ。王たちは自分を特別だと思ってた。自分は他ほかのやつらとは違う。人間も、それ以外の生き物も。だから、平気で道具にできた。数を揃そろえて、遊ぶ。壊れたら、また作ればいい。どうせなら、質のいい道具が欲しい」

「そうやって作られたのが、獣人ブルタス……？」

「他にもいろいろあるけどな。魔導兵だって同じだ」

「でも、あれは──」

「生き物じゃない。だが、あいつらにとっては何だって一いつ緒し

よだったんだ。自分以外は」

「魔導王たちは、大きな力を持っていて……それで、共とも倒だおれしたくないから、本気では戦争しなかったって」

「そうだ。他はどうでもいいが、自分だけはかわいかったんだろう。あいつらは示しあわせて場所を決めて、そこで遊戯ランプをした。勝者は敗者から土地を奪うばう。負けつづけて相手に渡わたす領地もなくなったら、降こう伏ふくして生きながらえようとした。そのうち遊戯ランプに強いやつだけが残って、誰だれと勝負しても一進一退を繰くり返すようになった」

「……そして、どうなったの？」

　トマトクンは何か言いかけて口を閉じ、階段を下りはじめた。

　マリアローズは下り口で足を止めた。トマトクンの背中が少しずつ、でも、確実に遠ざかってゆく。追いすがりたいのに、足が動かない。動いてくれない。

　首を振ふった。

　足を前に出した途と端たん、トマトクンが振り返った。

「俺はだいぶ長く生きてきた。でもな。生きてるって実感は正直、なかったんだ。今は違う。お前たちのためなら、死んだっていい。お前たちがいるから、死にたくないとも思う。俺は生きてる」

「うん」

「俺はここにいる」

「幻まぼろしではなさそうだしね」

「ああ」

「トマトはトマトだよ。何があっても。みんな同じ気持ちだよ」

「わかってる」

「僕はね──」

「マリア」トマトクンは微笑ほほえんでうなずいた。「わかって

る」

「そっか」

　力が抜ぬけた。

　マリアローズはため息をついた。「……そっか」

「ゲーデは戦友だった」トマトクンは眉まゆを曇くもらせた。「──いや。あのころの俺は、つきあいが悪かったからな。しつこくつきまとってくるあいつを、犬コロ呼ばわりして遠ざけようとしてた」

「だけどさ」

「ああ、そうだ。昔の話だからな。ゲーデは死んだ。ここにいるわけがない」

「あの……ジヌビニフっていう人も？」

「あいつとは口をきいたこともなかったな。もちろん、やつも死んだ」

「それから、りりぃ」

「本人じゃない」

「だよね。なんていうか……違ちがうし。それなのに、すごく似てた」

「悪ふざけがすぎる」トマトクンは顔をしかめて鼻柱に皺しわを寄せた。黄玉トパーズの瞳ひとみが不ふ穏おんな輝かがやきを帯びている。もしかして、怒おこってる……？

「……心当たりでもあるの？」

「まあな。こんなことをやらかしそうなやつを、一人だけ知ってる」

「誰？」

「ジュジだ」

「……ジュジ」

　そうだ。

　思いだした。

　猫ねこだ。灰色で、目は青く、赤い首輪をしていた。あの猫の名前がジュジだった。

　どうしてトマトクンが、あの猫の名を知っているのか。

「お前も会ったんだろう」

「え？」

「ルイ・カタルシス──だったか」

「猫……じゃなくて？」

「違う。やつの名だ」

「本名──ってこと？」

「そういうことになるか」

「でも、あの人は」

「ユリカの目の前で死んだ」

「だけど、それなのに……」

「最近、ラフレシアのアデナ大だい元げん帥すいとやらになったらしいな」

「ちょっと待って、頭がこんがらかって──」

「ジュジはりりぃの弟だ」

「りりぃ……の？」

「ああ」トマトクンは短く息を吐はいて、階段を下りはじめた。

　その背中を追いかけながら、マリアローズは必死に頭の中を整理しようとした。無理だよ。でも、混乱しているし、驚おどろいてもいるけれど──受け止めることはできている。そういうことなら、

もっといろいろ教えてほしい。根ね掘ほり葉掘り聞きたい。そんなふうにも思わない。今までと同じだ。変わらない。カタリあたりなら、こうはいかないだろうけどね。意外と、それがめんどくさくて、今まで黙だまってただけだったりして。

　そんなわけ、ないけど。

　地下に下りると、左手に安置室の扉とびらがある。祭さい壇だんは通路の先だ。

　安置室の扉は開いていた。ハニーは中でずっとゲーデを見張っていたらしい。さすがに正座はしていないが、床ゆかに腰こしを下ろして膝ひざを抱かかえている。隅すみに転がっているゲーデは芋いも虫むしみたいに丸まって動かないものの、目を開けているので意識はあるようだ。

「何かあった？」ハニーはゲーデから視線をそらさずに言った。

「異常なし、だよ」マリアローズはハニーのそばで立ち止まった。「今のところはね」

「よかった」ハニーは親指を噛かんだ。「これ以上はきつい」

「こっちは？」

「何も。目を覚まして以来、体勢を変えようともしない。身体からだ、痛いと思うんだけど」

「すごい根こん性じようだね」

「何のために耐たえてるのかな。秘密をもらさないために、最後には自分で自分を殺しちゃう。どうしてそこまでできるの？　考えてるんだけど、思いつかない」

「簡単だ」トマトクンはゲーデの肩かたをつかんで起きあがらせた。「こいつらはそのために作られた。こうやって生きて死ぬことが目的なんだ」

　ゲーデは眼球を動かしてトマトクンを見た。猿さる轡ぐつわを噛ませているし、表情はわからない。でも、初めて感情らしきものを表したような気がする。

「そうだろう、ゲーデ」トマトクンはゲーデに顔を近づけた。「──いや、お前はゲーデじゃないな。だが、名前を知らないし、名乗るつもりもないだろうから、そう呼ばせてもらうぞ。お前はたとえ拷ごう問もんしたって吐かないだろう。そもそも、知らんのかもな。何も知らされずに、命令されるままに動く。そういうものとして生みだされたんだから、疑問に思うこともない。違うか？」

　ゲーデは目を伏ふせた。何か考えているのか。何も考えていないのか。やはりよくわからない。

「いいさ」トマトクンは笑った。「答えなくたっていい。どうせ答えられんだろうしな。お前に何か言いたいことがあるなら聞いてやらんでもないが、喋しやべりたそうにしてる顔にも見えん。話をする気がないなら、ここに置いておいたって仕方ない。帰るぞ、ゲーデ」

「え……」ハニーは腰を浮うかせた。

　マリアローズは目を瞠みはった。「ちょっ──」

「お前も一人じゃあ心細いだろう？」トマトクンは片方の眉まゆをつりあげて、唇くちびるの片かた端はしをゆがめた。「ちょうどお前らの親分に用ができたんでな。俺が連れてってやる」

Omenage 900 8th revolution 27th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

chapter.II

あなたがいるから

ゲーデ。

その言葉に何らかの意味があるかのように、男は彼をそう呼ぶ。

彼にとっては無意味だ。彼には名がある。

イプサス17。それが彼の名前だ。

最初からそうだった。最初。

気がつくと、彼はいた。存在していた。彼は命じられるまま食べて、身体を動かした。そうすれば、薬液の注入が待っていた。

それを受ければ、何もかもから解放される。特別な浮ふ遊ゆう感を味わうことができる。薬液なしの睡すい眠みんは罰ばつのようなものだった。それなくしてはいられない。それさえあればいい。

与あたえられた任務を全まつとうできなければ、二度と薬液を注入してもらうことはできない。

それならばいっそ、消えてしまったほうがいい。

男が言った。

こいつらはそのために作られた。こうやって生きて死ぬことが目的なんだ。

おそらく、そのとおりだ。

彼は失敗した。

希望はない。

彼は男の肩に担かつがれている。

ここはどこだろう。暮れなずむ空の下だ。

エルデン。

第八区。

自分はどうなるのだろう。

どうにもならない。

男は足を止めた。

「ついたぞ、ゲーデ」

声をかけられても、彼は反応しなかった。

自分はゲーデではない。

なぜだか不快だった。そうではない。

みじめだ。

彼は恥はじていた。消えたかった。

「……大だい丈じよう夫ぶ、でしょうか……」

サフィニアは部屋の隅すみっこに自分を追いやって、壁かべと同化してしまおうとしているかのようだ。ついでに、負のオーラ的なものを発しまくっている。部屋の出入口付近で正座しているハニーに呪のろいをかけたい気持ちもなきにしもあらずだが、そうすると決めたのはトマトクンなのだから、恨うらむのは筋すじ違ちがいだ。わかってはいるものの、ふくむところがまったくないとまでは言えない──といったところだろうか。

「うーん……」マリアローズはベッドの上で寝ね返がえりを打って仰あお向むけになり、手に持っていた紙を広げた。

Die Monoadit

Amedi Don Toi

Ian Tidemood

Didoa Montie

Louis Aschmedai Magnus-Ikis Adeimontdio

Idiot Daemon

「まあ、大丈夫……かどうかはわかんないけど、ついてくるなって言われちゃうとね」

　マリアローズの隣となりで、ユリカがすやすや眠ねむっている。ついさっきまで起きていたのだけれど、さすがに疲ひ労ろう困こん憊ぱいしていたのだろう。きゅーもベッドに背をもたれさせて、うつらうつらしている。交こう替たいで見張りをしてくれているカタリとルーシー、ピンパーネルだって、そうとう疲つかれているはずだ。

　ぼろぼろっていえば、ぼろぼろなんだよね。家、とくにリビングだけじゃなくて、体力的にも。限界まではいってないけどさ。もっときついことも経験してきたから、無理ができないわけじゃない。

　でも、トマトクンは一人で片を付けるつもりみたいだ。マリアローズたちが反対して一いつ緒しよに行くと言っても、トマトクンは聞き入れようとしなかった。ＺＯＯうちの園長マスターはこうと決めたらなかなか曲げない。しかも、強ごう情じようを張っているというわけではなくて、そのほうがいいという確信がトマトクンにはあるようだった。

「ＥＭＵの……イアンなんちゃらだったか。そいつと話をつけてくる。喧けん嘩かを売りに行くわけじゃないからな。お前たちはついてくるな。俺一人でいい。いや──一人じゃないか」

　トマトクンはゲーデを肩かたに担いで家を出た。向かった先は第八区のＥＭＵ本部だ。あれからもう三十分以上経たつ。

　たしかに、全員で行ったら、こちらに殴なぐりこむつもりはなくても、そんなふうに受けとられてしまうかもしれない。いきなり押しかけても歓かん迎げいされるとは思えないし、帰れと言われて引き下がるわけにもゆかないから、押し問答になり、一ひと悶もん着ちやくあって、果ては実力行使──そんな展開が目に浮うかぶようだ。てゆうか、ＥＭＵ本部って、ちょっとした要よう塞さいだよ

ね。秩ちつ序じよの番人の銀の砦とりでほど物々しい外観ではないものの、堅けん牢ろうさは引けをとらないだろう。攻せめ入るとなったら、かなりの覚かく悟ごが必要だ。とりあえず、サフィニアの魔ま術じゆつでぶっ壊こわすとか。ほら。ついこんな荒あらっぽいこと考えちゃってるし。

　マリアローズは紙を下ろして目め頭がしらを揉もんだ。「──話をして、それでなんとかなるなら一番いいわけだしさ」

「でも……話しあいができる相手なのか、どうか……だいたい、イアン・タイドムードなんて、実在するかどうかもわからないのに……」サフィニアはちらりとハニーに視線を送った。

　その瞬しゆん間かん、ハニーがびくっとした。「……え。何？今の？」

　きっと悪お寒かんでもしたのだろう。何しろ、サフィニアだ。それくらいの力はある。

　マリアローズは身体からだを横向きにし、ふたたび紙を開いて低く唸うなった。「──イアン・タイドムード、ね……」

　ハニーは膝ひざに両手を押しつけて、かすかに眉まゆをひそめた。「同じ人間が何人もいるのかな」

　ユリカが身じろぎした。目を覚ましたわけではなさそうだ。

　マリアローズはルイ・カタルシスの顔を思いだそうとした。ダメだ。黒くろ髪かみに白いメッシュが入っていて、片眼鏡モノクルをかけていた。それくらいしか覚えていない。「……そんなことあるわけないって、言いたいとこではあるけど」

　遊戯戦争ランプウオー。獣人ブルタス。亜人デミヌス。異界生物フリークスと人間の混種ミツクス。人間が生みだした。死んだはずのルイ・カタルシスがラフレシアにいるらしい。実は生きていた。そうではなくて、ルイ・カタルシスはやはり死んだのだとしたら？　ルイ・カタルシスが一人ではなくて、複数いるのだとしたら。ギァムというモルフォ党の元党員は、党首専用の船室で二人の男を目もく撃げきした。同じ顔をした、二人の男を。

　りりぃの弟。

ジュジ。

それが本名なのだと、トマトクンが言っていた。つまり、猫ねこを自分の名で呼んでいたということだ。たしかに、ふざけている。

たとえば、そのジュジという男は一人ではなくて、何人もいる。本物は一人で、他ほかは影かげ武む者しやなのかもしれないが、とにもかくにも複数いて、それぞれが錬金Ａ士組合ＧやＥＭＵ、モルフォ党、贖罪のＳ緋山羊Ｓ、そして今やラフレシア第三帝てい国こくにまで大きな影えい響きよう力りよくを持っている。

だいぶ長く生きてきた。トマトクンはそう言っていた。たぶん、りりぃやジュジもそうなのだろう。長い長い時間をかけて、ジュジはいろいろな組織に入りこんだ。もしくは、それらの組織自体、ジュジが作ったものなのかもしれない。

何のために？

わかるわけがない。

トマトクンは何か知っているのだろうか。

突とつ然ぜん、蛇へびみたいな顔が脳のう裏りに浮かんだ。
「知ってるよ、赤毛レツドちゃんヘアリー。お前のことはよォーく覚えてる。だが、いや待て──」

ＳＩＸ。なんで。ＳＩＸの顔が近づいてくる。ＳＩＸが、すっ──と目を細める。「──お前は……そういうことかい。気づかなかったよ。あのときはねえ。まさか……でも、そうか。そういうことなんだね。それで、ディオロットは──」

ディオロット。トマトクンのことだ。ディオロット。あの男もトマトクンをそう呼んだ。ルヴィー・ブルーム。あの男が。

ＳＩＸが笑う。「──けどねえ。我わが輩はいには関係ないことだ。どうだっていい。あいつらが何を企たくらんでいようと、興味がないんだよ。どうせ我輩は除のけ者ものさ。ひがんでるわけじゃない。こっちから願い下げだよ」

あいつら？

それは誰だれのことだろう。

「お前を殺したら、ディオロットはさぞかし怒おこるだろうねえ」

　ＳＩＸの指が首にかかる。

「結局、ディオロットもあいつらと同じってことさ。つまらない男だよ」

　──あいつら。

「あるいは、あの男なら──俺の気持ちがわかるかもしれないって、そんなふうに思っていなくもなかったんだがねえ」

　違ちがう。

「残念だよ」

　これは、ＳＩＸじゃない。

　自分の手だ。

　マリアローズは息を吐はいた。自分で自分の首を絞しめようとしていたのか。何やってるんだよ。でも──そうか。ＳＩＸ。あの男もそうなんだ。あいつら。ＳＩＸの口ぶりからすると、トマトクンはその中に含ふくまれてはいない。ＳＩＸも。ジュジは？　りりぃは？　死んだルヴィー・ブルームは？　わからないけれど、ＳＩＸがあいつらと称しようした連中は何かを企たくらんでいる。

　僕も──関係ある……？

　どうしてそう思うのか。

「マリア……？」

　サフィニアの声だった。

　マリアローズは慌あわててサフィニアのほうを見た。「え？」

「……大だい丈じよう夫ぶ？　何か……様子が変だったから……」

「あ……うん。大丈夫だよ。ちょっと考えごとしてて」

「そう……」

「疲れてるのかも」マリアローズはちょっとだけ笑って腹をさすった。「……おなかもすいてるっぽいけどね」

「何か……作る？　台所は……なんとか使えるから」

「いいの？」

「じっとしているよりは……気が紛まぎれるし……」

「そっか。そうだよね」

　サフィニアがそっと笑って立ちあがると、ハニーも動いた。
「じゃ、あたし、ついてくね。一応、一人では行動しないほうがいいだろうし」

　怖こわいもの知らずというか、何というか。サフィニアにおもしろく思われていないことに気づいていないのだろうか。

　ハニーはサフィニアを見て首を傾かしげた。「行かないの？」

　サフィニアは目を伏ふせてため息をつき、苦笑いを浮うかべた。
「……料理は……？」

「それなり、かな？　下手ではないと思うけど」

「……だったら、手伝ってもらえますか？」

「うん。もちろん、そのつもり」

　二人が出て行くと、部屋が妙みように広く感じられた。

　胸が苦しい。

　隣となりでユリカが寝ねている。きゅーも座ったまま眠ねむっているらしい。それだけが救いだ。

　マリアローズは紙を畳たたんで目をつぶり、閉ざした瞼まぶたの上に手の甲こうをあてた。

　今、一人きりになってしまったら、たぶん、ものすごくきつい。

正面玄げん関かんの受付係に用件を言って、間もなく通された部屋は、四十平方メーテルほどもあって、家具や調度品も上等だった。扉とびらは二つある。入ってきた扉は施せ錠じようされた。もう一つの扉にも鍵かぎが掛かかっているだろう。窓はない。空調がきいていて、空気が乾かん燥そうしている。涼すずしいほどだ。接客係を装よそおった見張りが二人いる。腰こしに提さげている棒みたいなものは、マリアローズが使っている小型の弩いしゆみと同様の武器だろう。他ほかにも鎚つちを持っている。木で偶くの坊ぼうではなさそうだ。

　大きなソファーが二つ、向かいあわせに置かれていて、その間にテーブルがある。

　彼は大たい剣けんを立てて、そのソファーに腰を埋うずめていた。座り心地は悪くない。ゲーデは隣だ。拘こう束そくを解くのが面めん倒どうなので、横向きに寝かせている。

「つらくないか」

　訊きいても、ゲーデはこちらを見ようともしない。

　この男はこれからどうなるのか。自由にしたら、おそらく自害するだろう。連れてくるしかなかった。だが、連れてきたからといって、たぶんどうにもならない。

　彼はテーブルに足をかけた。苛いらついている。憤いきどおりを感じているのだ。数えきれないほど多くの命を叩たたきつぶしてきた。大量の死の上に立つ者。それが彼に与あたえられた名だ。ふさわしい名前じゃないか。そんな自分が腹を立てている。お笑い種ぐさだ。

　それもこれもぜんぶひっくるめて、貴様らは笑い飛ばすんだろうな。

　扉が開き、黒い肌はだをした中年の男が部屋に入ってきて目礼した。つづいて、白はく髪はつ白しろ髭ひげの老人が姿を見せた。やけにつややかな顔に笑えみを貼はりつけている。会ったことがあるのか。見覚えのある顔だ。

「いやいや。これはこれはトマトクンどの」老人は軽かろやかな足

どりで彼に近づいてきて、両手を差しだしてきた。「一別以来ですな。ご活かつ躍やくの程ほどは聞き及およんでおります。お元気そうで何よりですな」

　彼は老人の奇き妙みように白く美しい手を一いち瞥べつして、片方の眉まゆをつりあげた。「あいにくお前が誰だれだか、俺にはわからん。見覚えはあるんだがな」

　黒い肌の中年男が表情をこわばらせた。

「これは失礼を」老人の笑みは崩くずれない。「私はレオナルド・デスパレード。エルデェイニオン機術士匠しよう合ごうの大Ｇ老Ｅ師Ｍとして当匠合全機術士を指導し、これを代表する者です」

「ああ。羅ラ叉サの襲しゆう名めい式しきにきてたのか」

「然さ様よう」

「で？」

「──と、申されると？」

「俺はイアンなんちゃらに話があるんだ。お前に用はない」

「トマトクンどの」老人はゆったりと両りよう腕うでを広げ、笑みをさらに深めた。「先ほども申しあげたとおり、私は当匠合の代表者です」

「何が言いたい」

「用向きは私に申し述べられよ。さすれば必ずや然しかるべき対応をさせていただく」

「それがお前の役目か？」

　老人はまばたきをした。「は……？」

「お前はそのために作られたのか。そう訊いてるんだ」

「おっしゃっておられることの意味が──」

「今、気づいた」彼はゲーデに視線を向けた。

ゲーデはこっちを見ていた。

もうたくさんだ。

「覚えがあるわけだ。お前の顔を見たのは襲名式が初めてじゃない。天テン正セイ具グ象シヨウ。〝東の原野の魔ま導どう王おう〟とか呼ばれてたな。冬トウ亥イの王。お前が知ってるかどうかはわからんが、そっくりだ。どうせ見た目だけだろうが」

「ご冗じよう談だんがお上手だ」

「どうだかな。少なくとも、褒ほめられたことはないような気がするぞ」

「むろん、私もその名は心得ております。黄昏たそがれの魔導王の一人ですな」

「お前たちは張りぼてだ。ジヌビニフも、シュナイトスも、フェルアロンも、ヘルメル、ロレンツ──それからゲーデも、こんなにやわじゃなかった」

「トマトクンどの……」

「俺の名を呼ぶな」彼は目を細めた。「貴様らを残らずぶった斬ぎったっていい。だが、そんなことをして何になる。ぜんぶ茶番だ。いいか。余計なことは喋しやべるな。黙だまってイアンなんちゃらを連れてこい」

老人は目を見開いて胸の前で両手をあわせた。その仕種に強きよう烈れつな既き視し感を覚えた。他の連中もそうだ。能力は明らかに本物より劣おとる。それでいて、外見だけではなく、身のこなしの特とく徴ちようが不気味なほど似ていたりする。

こいつらは玩具おもちゃだ。

道具として使うこともできる玩具なのだろう。

「この場でしばしお待ちいただこう」老人はそう言い残して踵きびすを返した。

彼は老人と黒い肌の中年男が部屋から去るのを見届けると、目を閉じた。

赤々と燃える夕ゆう陽ひが西の彼方かなたに沈しずもうとしている。

見下ろす庭に寝ね転ころんでいるカタリとルーシーは、完全に寝入っているようだ。

ピンパーネルは屋根の上に立ったままでいる。

どれだけ座っていないのか。よくわからない。気を張っていれば、何日でも立っていられるし、動きまわりつづけることもできる。放たれれば敵に食くらいつき、嚙かみちぎって殺す。そのように育てられた。

──でも、さ。いいんだよ？

声が聞こえた。空耳だ。マリアローズは自分の部屋にいるだろう。

カタリは大おお鼾いびきをかいている。横を向いて身体からだを丸めていたルーシーが大の字になり、その拍ひよう子しに右手がカタリの顔面に命中した。カタリは「ごひょっ」と奇き声せいをもらしたが、目を覚ますことはなかった。

──もっと楽にしてもいいと思うんだけど。

「そうでしょうカ」

呟つぶやいてから、自分が声を出したことに気づいた。

ピンパーネルはゆっくりと屋根に腰こしを下ろした。それでもまだ、即そく座ざに立ちあがることができる姿勢を維い持じしている。習性だ。染しみついている。

敵はこない。ピンパーネルの勘かんはそう告げていた。

トマトクンの交こう渉しようがどうなるのか。気がかりではあるものの、無事に戻もどってくるだろう。根こん拠きよがあるわけではないが、不安はない。

ピンパーネルは衣のポケットから単語帳をとりだした。しばらく前にマリアローズが作ってくれたものだ。ピンパーネルにとって、共通語は難しい。聞きとることはできるが、話すのは得意ではないし、読み書きはもっと苦手だ。共通語には表意文字と表音文字の二種類がある。この表意文字がくせもので、読み方が一通りではなく、二通り、場合によってはそれ以上あったりするのだ。ラハン大陸の言語とはまったく違ちがう。

ただ、よく用いられている文字の数は、それほど多くない。これだけ覚えておけばまず不自由しない、最低限の文字、単語というものがある。そう言って、マリアローズが何日もかけて作ってくれたのが、この単語帳だ。

本人の前では出さないようにしている。なんとなく照れくさいからだ。一人のときに開いて、文字の形やそれらを組みあわせた単語を目で覚え、口の中で発音してみる。気になった単語を自分で書き加えもした。

「仲間」

ピンパーネルは膝ひざを崩くずした。

気をゆるめると、切せつ迫ぱく感に襲おそわれる。

「信しん頼らい」

これでいいと思っているわけではないのだ。

変わりたい。

自分は人殺しのために作られた。たとえ友ができて、仲間に囲まれても、それは変わらない。自分自身を変えることはできない。そう思っていた。

諦あきらめていたのだ。

仲間はそんな自分でも受け容いれてくれる。だから、いい。どれだけ血に飢うえても、渇かわいても、我が慢まんすることはできる。耐たえることも教えこまれた。問題はない。

問題がなくても、変わりたい。

方法などわからないし、不可能なのかもしれない。

でも、少しずつ、ゆっくりと足を前に進めようとして、実際、進みつづけている。

そんな仲間が、友が、すぐそばにいる。

思えば、ＺＯＯも変わった。とくに、カタリとマリアローズ。彼らは図ず抜ぬけた才能の持ち主ではない。厳しい戦いの中では、正直、危なっかしく感じることもある。しかし、飛び抜けていなくても、大きな力を発揮することはできるのだ。

ルーシーはある種の異能者だが、この仲間たちを持つことができて幸いだった。彼は傑けつ出しゆつした戦せん闘とう者しやに育つ可能性を秘ひめている。その資質が、ひょっとしたら彼に道を誤らせたかもしれない。だが、ＺＯＯに出会ったことで、彼は多くを学んでいるだろう。他者をねじ伏ふせる力だけが力ではない。そのことを自然と体感しているはずだ。

ルーシーだけではない。ピンパーネルにとっても同じだ。

彼らと巡めぐりあうことができて、本当によかった。

幸運を享きよう受じゆするだけではなく、自分自身も前へ進みたい。

そう願っている。

「一進、一退……」

簡単にはゆかないものだ。

ピンパーネルは単語帳を閉じようとした。

風が吹ふいた。

違う。

何かが舞い降りてきた。

麝じや香こうのような強い香かおりが押しよせてきて、まとわりついた。毛穴が開いている。汗あせが噴ふきだした。喉のどがカラ

カラだ。息ができない。腰の短たん剣けんに手をのばそうとした。本能が警告を発している。だめだ。あらがおうとしたら奪うばわれる。すべてを。簡単なことだ。この相手にとっては。先手をとられた。その時点で勝負はついた。

　ピンパーネルはゆっくりと顔を左に向けた。

　女はすぐそばに座ってこちらを見ていた。

　絹のような髪かみだ。目を半開きにして物もの憂うげな表情を浮うかべていても、獰どう猛もうな気配を消し去ることはできない。それとも、ピンパーネルが彼女を知っているから、そう感じるだけなのか。肌はだもあらわな紫むらさき色いろの服を身にまとっている。美しい女なのだろう。

　魂たましいが別物ならば。

　女はピンパーネルの手から単語帳をかすめとった。「これは何？　ああ──あなた、勉強をしているのね。よいことだわ。少しは覚えた？　共通語」

「返してくだサイ」

「いやよ」女は嗤わらい、単語帳を放ほうった。「どうしてあたくしが、あなたの言うことを聞かねばならないの？」

　単語帳は屋根を転がって地面に落ちた。

　頭に血が上っている。

　この女の柔やわ肌はだを斬きり裂さいて、血管を断たち斬るのではなく、斬り開きたい。素す早ばやく、丁てい寧ねいに。わかっている。わざとだ。

　この女は挑ちよう発はつしている。掻かき乱すことが、おそらくこの女の本ほん性しようなのだ。そのためなら、何でもするだろう。

「なぜここにいますカ」

「それを言うのなら」女は人差し指と親指でピンパーネルの顎あごをつまんだ。尖とがった爪つめが顎に食いこんだ。「──なぜここに

いらっしゃるのですか、でしょう。言ってごらんなさい、ピンパーネル」

「答えてくだサイ」

「あたくしを怒おこらせたいの？」

「アナタはこれくらいで怒ったりしナイ」

「そうよ、ピンパーネル。覚えてくれているのね、あたくしのことを」

「ただ忘れてない・それだけデス」

「ずいぶん上手になったわ。あれからだいぶ経たったから、あたりまえといえばあたりまえね」

「何をしに・きましたカ」

「あの人が拾ってきたあなたに、あたくしはいろいろと教えてあげたでしょう。それなのに、ろくに覚えてくれないのだもの」

　この女はラハンの言葉を知っていた。だからといって、通訳してくれたり、ラハンの言葉で話しかけてくれたわけではない。女はピンパーネルを責め、なじるときだけラハンの言葉を使った。女の表現は多た彩さいだった。ピンパーネルにもよく意味がわからない、ただ、罵ののしられていることだけは明確に伝わる言い方を巧たくみに用いた。女はアッサシンについても詳くわしく知っていた。ピンパーネルの出自や境きよう遇ぐうを、おおよそ見抜いてもいたようだ。女はラハンの言葉でピンパーネルに囁ささやいた。

　あなたには無理よ。まともには生きられない。

　ねえ、あなた、あたくしの道具にならない？

　人としては出来損そこないのあなたでも、道具にはなれるでしょう。あなたはもともと道具なのだから。そのほうが、あなたにとっては幸せだわ。

　あたくしが何もかも決めてあげてもいいのよ。あなたはそれを望んでいるのではなくて。あたくしの言うとおりにしたら、ご褒ほう美びだってあげるわ。

あなたは何が欲しいの？

知っているのよ。

あなたが欲しがっているものを、あたくしは与あたえてあげるわ。

━欲しいのでしょう？

この女は理解していた。この身体からだはたやすく欲よく望ぼうに反応する。そのようにできている。そのように作りあげることによって、アッサシンは制せい御ぎょしやすい道具となるのだ。

ピンパーネルは軛くびきを脱だつして海を渡わたったはずだった。そのために大切なものを、たった一人、心に抱いだいていた人を失った。だが、その人ですら欲望の対象だった。

この女はピンパーネルの傷を繰くり返し繰り返しえぐった。

やめてくれ。

どうかやめて欲しい。

ピンパーネルはラハンの言葉で頼たのんだが、女は聞こえないふりをした。共通語を自由に話すことができたら、他ほかの者に訴うったえようとしたかもしれない。当時のピンパーネルにはできなかった。だから、耳を閉ざし、口をつぐんだ。女のことはできるだけ無視した。殺すことができるのならば、そうしようとしたかもしれない。少なくとも、たやすくはなさそうだった。

この女は危険だ。

「ここに・アナタの居場所はありまセン」

「言うわね、ピンパーネル」女はピンパーネルの顎をつまんでいる指に力をこめ、凍こおりつくような微笑ほほえみを浮かべた。「でも、あなたは勘かん違ちがいしているわ」

「手を離はなしてくだサイ」

「お願いしている態度ではないわね」

一ひと突つきでいい。

この女があの奇き妙みような力を使う前に、急所を一いち撃げきする。

その可能性を考えはじめた瞬しゅん間かん、ピンパーネルの身体が後方に移動した。

吹ふき飛ばされるのとは違う。見えない手で、力任せに引っぱられている。そんな感覚だ。ピンパーネルはとっさに踏ふんばろうとした。右足だ。屋根に届く。右足の踵かかとで屋根を蹴けって身をひるがえし、左足をついた。体勢を立てなおそうとしたら、内臓が、血が、押しあげられた。浮ういた。

急上昇だった。

女は屋根に立ち、右みぎ腕うでを持ちあげて、ピンパーネルを見上げている。「一見くびったりはしないわ、ピンパーネル。あなたはとても優ゆう秀しゅうな道具だもの」

上へ。

まだ上へ。

止まらない。

女は左手で何かをとりだした。魔ま術じゅつだ。くる。

わかっていても、なすすべがない。ここは空中だ。いったいどこまで一いや。女が右腕を下ろすと、止まった。一瞬だった。すぐに落ちはじめた。

「爾屢Ｄｙ唵婁閤Ｉｎ斎」

女が差し向けた左手が光った。正確には手が光ったわけではないのかもしれない。とにかく、強きょう烈れつな光が弾はじけた。よけなければ。そう思ったときにはもう遅おそかった。ピンパーネルは背中を丸め、両腕で自分の身体を抱くようにして、防ぼう御ぎょ姿勢をとろうとした。その途と中ちゅうだった。

両足の一足首だ。熱を感じた。灼しゃく熱ねつだ。それと、衝しょう撃げき。「……っ……！」

　やられた。

　両足首が三分の二ほど焼き切られている。

　ピンパーネルは短たん剣けんを手にとろうとした。だめだ。この足では。両腕を駆く使ししないと、受け身をとることはできない。

　不意に落下の速度がゆるんだ。

「嫌きらいではないのよ、あなたのこと」女は右腕で何かを支えるような仕し種ぐさをしている。「むしろ、気に入っていました。だってあなた、とてもいじめ甲が斐いがあるのだもの」

　何のつもりだ。

　ピンパーネルはゆるゆると屋根に降りたった。

　立っていることはできず、膝ひざをついて女を見上げる恰かつ好こうになった。

　女は髪かみをかきあげた。「あの人はいる？」

「……いまセン」

「そう。残念だわ」

「ここに用・ないはずデス」

「あなたが決めることではありません。ピンパーネル、あなたはあたくしのことを何も知らないでしょう？」

　否定はできない。それどころか、まったくもってそのとおりだ。ピンパーネルだけではないかもしれない。トマトクンにしても、トワニングにしても、ロム・フォウも、クローディアも、きゅーも、ひょっとしたらあのジャン・ジャック・ド・ジョーカーでさえ、この女のことをよく知らないのではないか。振ふり返ってみれば、なぜこの女はＺＯＯの一員だったのだろう。まるで腑ふに落ちない。誰だれも彼もが女を迷めい惑わくがっていた。そんな印象しかない。そしてある日、別れも告げずに去った。どうやら、トマトクンとの間に何かあったらしい。ピンパーネルはそれくらいのことしか承知していない。

「そういえば、まだ挨あい拶さつをしていなかったわ」リルコはふわりと浮きあがった。「お久しぶりね、ピンパーネル」

「……リルコ」

　この女は何者なのか。

　天てん井じようも壁かべも床ゆかもやけに滑なめらかだ。この通路は無む駄だに曲がりくねっている。一見したところではまるで迷宮のようだが、一本道なので迷うことはないだろう。

　通路に入る前に階段を下りた。ここは地下だ。これだけの規模の建物だから、地階には他にも部屋だの何だのがあるに違いない。それらの間を縫ぬうようにして、この通路は延びているのかもしれない。

　管状の照明器具が、壁や天井の紋もん様ようみたいな溝みぞに張りめぐらされている。たいして明るくはないが、暗くもない。

　見覚えがある眺ながめだ。

　──それは遺跡の一つだと思われていた。だが、ただの遺跡ではなかったのだ。

　長く入り組んだ通路には最果てがあった。通路はどこにも通じていなかった。行き止まりではない。その先には何もなかった。あえて言えば、断絶だけが立ちふさがっていた。

「ここからは行けないのです」と人でありながら竜りゆうと化した者が吐はき捨てた。「この道は閉ざされたのでしょう。おそらく、管理者たちの手によって」

「つまり──」傲ごう慢まんな王は髭ひげをしごきながら鼻を鳴らした。「我々は別の道を探さねばならんということだ」

「見つけますよ」片眼鏡モノクルの男は微笑ほほえんだ。「必ず見

つけてみせます。ぼくらにはできますよ。そうでしょう……？」

　似せて造ったのか。あの場所に。

　馬鹿げている。

　ゲーデは彼の肩かたの上で相変わらず身じろぎ一つしない。

　前を行くレオナルド・デスパレードは無言だ。秘書か何からしい黒い肌はだの中年男は連れていない。あの男はここに足を踏み入れることを許されていないようだ。階段の手前の、やたらと頑がん丈じようそうな厳重に施せ錠じようされた扉とびらがある部屋にも、立ち入ろうとしなかった。

　この通路の果てに何があるのか。そんなことは考えなかった。たどりつけばわかる話だ。

　角を曲がると、行く手に扉が見えた。

　扉に刻まれている印を目にして、彼は奥歯を嚙かみしめた。

「──こいつが？」

　男は蛇へびとか蝮まむしと呼ばれて蔑さげすまれていた。双そう生せい児じ魔ま導どう王おうニオ・キオ率いるジャジャ自由軍の一部隊を任されていたが、抜ぬけ目のない山さん賊ぞくの頭領といったほうがしっくりくる。

　蝮は腰こしまでの高さしかない檻おりの前にしゃがみ、チッチッと舌を鳴らした。四つ足の獣けものが檻の中で震ふるえている。一向に隅すみのほうから動こうとしないので、蝮は痺しびれを切らして格こう子しの合間に指を突つっこんで獣にふれようとした。獣はすかさず蝮の指に嚙みついた。

「──ツウッ……！　このケダモノめ！　何しやがるんだよ！　人がせっかく……」

「どけ」りりぃは蝮を容よう赦しゃなく蹴け飛とばして檻を開け

た。獣は別の隅に逃げこんで身体からだを縮めたが、りりぃはかまわなかった。獣は捕とらえられた。

　りりぃは獣を檻から出して抱きあげた。「──たしかに」

「逃がさないでよ、姉さん」と片眼鏡モノクルの男が怯おびえたような声で言った。りりぃは返事をせず、男のほうを見ることすらなかった。

「きみは獣好きなのだね」白ずくめの男が笑った。「そのような形なりになっても、獣を愛する心を失っていないのだね。ありとあらゆる意味において、非常に滑こつ稽けいだよ」

　──俺は、すべてを取り戻もどせるかもしれないと、一いつ瞬しゅんでも思ったのか……？

　レオナルド・デスパレードが扉の前で足を止め、振り向いた。
「この先には、お一人で参られよ」

　彼は顎あごをしゃくって扉を示した。「開けろ」

「扉は相応ふさわしかる者の前に自おのずと開かれましょう」

　彼が足を前に踏ふみだすと、レオナルド・デスパレードが手をあげた。「どうかお一人で」

「ふむ」彼は肩に担かついでいるゲーデを一いち瞥べつした。下ろさずに進んだ。レオナルド・デスパレードはもう止めようとしなかった。

　滑すべるような音を立てながら、扉が左右に開いた。

　暗い。左右は金かな網あみだ。何かいるのか。気配がする。息づかい。動いているものもいるようだ。目を凝こらすと、何か白いものが見えた。ゲーデの身体がこわばった。

「どうかしたのか」

ゲーデは答えなかった。

扉が閉まった。

前方に光がある。

彼は歩いた。

光が近づいてくる。

また扉だった。扉の上に照明器具がある。青白い光が扉を照らしだしていた。

前に立つと、扉は勝手に開いた。

薄うす暗ぐらい部屋だった。水すい槽そうだ。円えん筒とう形けいの水槽が所ところ狭せましと並んでいる。どの水槽も青緑色にぼんやりと輝かがやく水に満たされていた。水だけではない。

彼は水槽に手をふれた。

やけに白っぽく見えるが、水槽の中に設置されているらしい照明の光を浴びているせいだろう。泳いでいるわけでも、沈しずんでいるわけでもない。全身を弛し緩かんさせて、水中をゆったりと漂ただよっている。全身。

それには二本の腕うでがある。同じく二本の脚あしがある。指があわせて二十本ある。胴どう体たいがあって、首がのびていて、頭部がある。目鼻立ちがはっきりと確かく認にんできる。目は閉じている。髪かみの毛が生えている。頭とう髪はつの合間から数本のケーブルがのびていて、水槽の蓋ふたへと繋つながっている。

人間だ。

大きな水槽の中には成人の男女が、それよりも小さな水槽の中には少年や少女が、さらに小さな水槽の中には赤子がたゆたっている。ただの人間だけではない。亜人デミヌスもいる。いずれも死体ではない。よく見ると、胸が上下している。心臓が動いているのだ。彼ら、彼女らは生きている。

彼は水槽から手を離はなして息をついた。

　ゲーデは食い入るように水槽を凝ぎょう視ししている。正確には、水槽の中の人間を。

　彼は水槽の隙すき間まを進んだ。床ゆかや天てん井じょうを無数のケーブルが這はいまわっている。ただでさえ水槽のせいで狭せま苦くるしいのだ。余計に歩きづらい。

　唐とう突とつに水槽の列が途と切ぎれた。

　その先は開けていた。奥にはやはり水槽がずらりと並んでいるが、その前に箱形の機械が積まれていて、色とりどりの光を発している。椅い子すに座った男はこちらに背を向けて、機械や水槽を眺ながめているのかもしれない。男の傍かたわらには背の高い女が立っている。女はこちらに身体を向けていた。ぴったりしたボディスーツを身につけ、腰に湾わん曲きょくした長い剣けんを佩はいている。左腕がない。使い物にならなくなったので、切断したのだろう。

　彼はゲーデを床に下ろして寝ねかせた。「挨あい拶さつくらいはしたいところなんだがな」

「わたしはアメディ・ドン・トワ」

　顔だけではない。

　声までそっくりだ。

　りりぃ。

　彼は軽くうなずいた。「トラジェディーの隊長、だったか」

「そのとおりだ」

「妙みような気分だ」

　アメディはかすかに首を傾かたむけた。

　彼は短く笑った。「知りあいにえらく似てるもんでな。そいつとはこんなふうに落ちついて話ができる間あいだ柄がらじゃないんだ」

　アメディは目を伏ふせただけで、何も言わなかった。

「で？」彼は片方の眉まゆをつりあげた。「こいつらはお前が作ったのか、ジュジ」

「あなたのことは—」

　椅子が回転して、男がこちらに向きなおった。

　ストライプのスーツを着ている。黄色と黒だ。シャツは深い赤あか紫むらさき色いろで、銀色のネクタイを締しめ、金のブレスレットをつけている。黒い髪はそうとう長いようだ。編んである。長いつきあいといえば長いつきあいなのだが、この男の顔はすぐ忘れてしまう。とらえどころのない顔立ちだ。

　男は片眼鏡モノクルの位置を指先で直し、うさんくさい微び笑しようを浮うかべた。「存じあげておりますよ、サー・ディオロット・マクスペイン」

「そうか」彼は目を細めた。「お前も違ちがうんだな」

　男は肘ひじ掛かけに右肘をのせて、右手の中指と親指をこすりあわせた。「何をもってあなたが違うと言っているのか、私にはわからないんですが」

「イアン・タイトルホルダー、だったか」

「イアン・タイドムードですよ、サー・ディオロット・マクスペイン」

「お前の役回りは何だ。ここの見張り番か」

「私はエルデェイニオン機術士匠しよう合ごうを統すべる者ですよ、皆みな殺ごろしの騎き士し」

「やつの分身スペアってわけか」

「私は私ですよ、破は壊かいの主」

「何人いるんだ」

「私はただ一人です」

「だったら」彼はイアン・タイドムードの後ろに並んでいる水槽を

視線で示した。「そいつらはいったい何だ」

「名はまだないんです」イアン・タイドムードは肩かたをすくめてみせた。「彼らは眠ねむっているような状態でしてね。生まれる前と表現してもいい。ですから、あなたの問いに対する答えは、現時点における彼らは何者でもない──ということになるでしょうか」

　機械の向こうに並んでいる水槽群の中身は男だ。

　ジュジと、もしくはルイ・カタルシスと、あるいはイアン・タイドムードと瓜うり二つの、同一人物にしか見えない男たちだ。

「ＥＭＵも、ＡＧも、モルフォ党も、そしてＳＳとやらも、ジュジのやつが作ったんだな」

「私が知っているのは、このＥＭＵのことだけですよ」

「お前はいつ生まれた」

「年ねん齢れいですか。私は永遠の三十歳です」

「ふざけるな」

「今日が七年と百六十三日目ですね」

「まだ餓が鬼きなんだな」

「普ふ通つうの人間とは違うんです。我々はね。世代を重ねるごとに改良が進んでいます。無力な赤ん坊ぼうとして、この世に生まれ落ちるわけじゃない」

「お前らは何なんだ」

「デュプリカント」イアン・タイドムードは仰ぎよう々ぎようしい口調で言った。「彼は我々のことをそう呼んでいます」

「やつは何を企たくらんでる」

「あなたのほうがご存じなのでは？」

「俺はあいつらの一味じゃない」

「もともとこの世界に叡えい智ちをもたらしたのは彼です。彼は当

然の権利として、さらには責務として、それを管理しているだけですよ」

「管理だと」

「人は愚おろかです。過ぎたる力を持つべきじゃない。不幸を招くだけですからね」

「おためごかしを言うな」彼は大剣の柄つかに手をかけた。「誰だれのためでもない。自分自身のためだろうが」

　イアン・タイドムードは唇くちびるの両りよう端はしをつりあげた。「姉さん」

　アメディ・ドン・トワが剣を抜ぬいて飛びかかってきた。

「あたし」ハニーメリーは包丁を器用に操あやつっていた手を止め、そっと息をついた。「謝ったほうがいい？」

　サフィニアはざっと研といだ米を軽くすすぎ、鍋なべに入れて適量の水を加えた。「……あなたが、そうしたければ……でも、何を謝るんですか……？」

「悪いなって、思ってるんだけど。だいぶ迷めい惑わくかけてるし」

「……あなたを追いだすことも、わたしたちにはできた……だけど、しなかったんです」

「自じ業ごう自得？」

「まあ……そういうことに、なりますね……」

「数えてみたの」ハニーメリーはふたたび手を動かしはじめた。「あたしが関かかわったせいで、死んじゃった人の数。けっこういるし、やっぱり悪いなって思う。でも、その程度。気がついたら他ほかのことを考えてる。こういうのって、どうなの？　ひどいかな」

サフィニアは目を伏せて、うなずくともなくうなずいた。「……わたしの両親は、隕いん石せきにあたって、死にました」

「隕石……？」

「ええ……しかも、父と母は……別の日に、別の場所で……わたしの目の前で」

「それは……すごい確率」

「……その後、わたしをひきとってくれた叔お父じの家は……鉄てつ砲ぽう水みずで流されました。それから、孤こ児じ院いんに……その建物に雷かみなりが落ちて……大きな火事で、大勢の子供が……焼け死にました。でも、わたしは無事で……ある魔ま術じゅつ士しに見いだされ、その方のもとで……修業させてもらうことになったのですが……兄あに弟で子しが二人、弟弟子が一人、わたしと一いつ緒しょにいたときに、大おお怪け我がをしたり……命を落としたり……」

「……何、それ」ハニーメリーは包丁を置いた。「どういうこと？」

「わたしは……そのような星の下もとに、生まれたんです……」

「そんなことって──でも、そこまで重なると、単なる偶ぐう然ぜんじゃ片付けられないよね」

「……わたしがいなければ……彼らは死にませんでした。わたしの……せいです」

ハニーメリーは眉まゆをひそめて口を引き結んでいる。

「でも……」サフィニアは鍋に蓋ふたをした。「わたしは……すばらしい仲間に、囲まれて……友だちもいて……今、とても……幸せです。わたしのせいで死んだ……わたしが殺した人たちのことを思うと、胸が締しめつけられる……ですが、やっぱりわたしは……幸せなんです。こういうのって……ひどいですか？」

「どう──なのかな……」ハニーメリーは唇をひん曲げた。「わからない。あたしには」

「わたしも……そうです……」サフィニアは少しだけ首を左右に振

ふった。「……わかりませんよ。ただ……」

「ただ？」

「……大事な人がいて、大切な思いがあれば……おろそかにすることは、できない。投げやりでは、いられません。前を向くことは、できなくても……前を向こうとしていれば……みんな、支えてくれるから……」

「信じてるんだ」

「はい」

「いいな。うらやましいかも」

「……あなたは、正直な人ですね……ハニーメリー」

「あたし、必要がなきゃ嘘うそはつかない。そんなことしても、無む駄だだし。でも、サフィニア、あなただって正直」

「……え？」

「トマトクンのことが好きなんでしょ？　だけど、あんまり相手にされてない」

　サフィニアはふらつきそうになってなんとかこらえ、胸を押さえた。「……ずけずけ……言いますね……」

「あ。ごめん。でも、ああいう人って難なん儀ぎそう。好きとか言っても、おおそうか、とか返しそうだし」

「……た、たしかに……」

「どうなんだろ。やっちゃうしかない？」

「や……やっちゃう……？」

「セックス？」

「せっ……」

「責任感は強そうな人だし、やっちゃえば何もなかったことにはされないんじゃない？」

「……せっ……」

「あたしは経験ないから、推測で物言ってるだけなんだけど。セックス、興味はあるけど、試ためす機会が今までなくて」

「……た、試す……って……」

「サフィニアって、あたしより年上だよね。ある？」

「い、いいえ……！　な、ないですよ……!?　あ、あるわけ……ないでしょう……!?」

「そうなんだ。きれいだし、恋こい人びととかいてもおかしくないのに」

「……お、おかしい……ですよ……わたしに、そんな……」

「ぜんぜんおかしくないと思うけど。そういえば、ユリカさんは小こ柄がらだけど、サフィニアよりも年いってるでしょ？」

「あ……はい」

　考えてみれば、ハニーメリーは自然とユリカのことを「ユリカさん」と呼んでいたし、容姿と内面のギャップについて違い和わ感を覚えているそぶりも見せなかった。常識にとらわれない、柔じゅう軟なんな物の見方ができる人間なのだろう。

「ユリカさんはどうなのかな」





「……どう……とは？」

「いる？　恋人」

「ああ……それは……」

「いるんだ。じゃあ、きっと経験あるよね」

「け…………」サフィニアは目を見開いて頭を抱かかえた。

　そ、想像したくない。できないけど。できないわけじゃない。子供じゃないんだから、何をどうやってどうするのかくらい、一応、わかる。なんとなく。間ま違ちがっていないという保証はないけど。でも──ユリカが……？

　ハニーメリーが顔をのぞきこんできた。「どうしたの？」

「……い、いえ……」サフィニアはうつむいた。「……どうもしないです……べつに……」

「そう？」ハニーメリーは天てん井じようを見上げた。「でも、ピンパーネルはいい感じ。あたし、あの人、けっこう好きかも」

「ぴっ……ピンパーネル……ですか？」

「うん。顔が好み。あと、たたずまい？　そんなに喋しやべらないとことか。〝沈黙サイレンス〟にちょっと似てるかな。見た目は違うけど、雰ふん囲い気きが」

「……すごく、頼たよりになる人では……あるけど……」

「あ。そこも。強いとこ。男はやっぱり強いほうがいいな。弱いよりは」

「それは……わたしもそう思うけど……」

「トマトクンも強いものね」

「つ、強い……ですよ？　あたりまえでしょう……？」

「ていうか、ＺＯＯ、すごい。マリアローズだって、指示ばんばん飛ばしてたし。あたし、どう動けばいいか、よくわからなかった」

「……いろいろな経験を、積んできたから……一いつ朝ちよう一いつ夕せきにはできないですよ。がんばってるんです……マリアは」

「うん。状じよう況きよう判断が速くて、ミスしてもすぐ取り戻もどそうとしてた。打たれ強い人だね」

「マリアがいつも踏ふんばっているから……わたしだって、もっとやれる……そんなふうに思わされたことが……何度もあります」

「クラン、かぁ」ハニーメリーは蛍光緑ルミナスグリーンの瞳ひとみをリビングのほうに向けて、ゆっくりと二度、まばたきをした。「……誰だれ？」

　サフィニアは弾はじかれたようにハニーメリーの視線の先を目で追った。キッチンは明かりをつけているが、リビングは照明が壊こわれてしまった。外はもう薄うす暗ぐらい。もはや原形をとどめていない窓の外だ。

　裏庭に誰かいる。

　髪かみの長い女だ。

　胸むな元もとが大きく開いた紫むらさき色いろのドレスを身にまとっている。

　女は立っているのではない。

　浮ういている。

　サフィニアが近くに立てかけてあった杖つえを手にとると、ハニーメリーも腰こしのケースから黒い拳けん銃じゆうを抜ぬきとった。魔ま術じゆつ士し衣はいたるところにポケットがついている。触しよく媒ばいや秘薬を小分けにして収納しておくためだ。サフィニアは右手で杖を握にぎったまま、左手で触媒をとりだしながら低く叫さけんだ。「──撃うって……！」

　ハニーメリーは即そく座ざに発はつ砲ぽうした。同時にサフィニアは精神集中チヤネリングに入ろうとした。

　目を疑った。

　耳が破れそうな音がして、ハニーメリーの拳銃から銃じゆう弾だんが発射された。矢とは違う。銃弾は小さい。速度も速い。肉眼ではまずとらえられない。外れたのか。ハニーメリーは立てつづけに拳銃をぶっ放した。女は微び動どうだにしない。当たらない。一発も。そうではない。届かなかったのだ。

　女は手を振ふって、何かを払はらうような仕し種ぐさをした。

落ちた。

何か小さなものが。

日が暮れかけていて、暗いだけではない。距きよ離りもある。よく見えなかったが──まさか、落ちたものは銃弾なのか。防いだ？　女はそこにいるだけだ。どうやって？　魔術？　発動した気配は感じられなかった。だとしたら、いったい何だろう。女は浮いているのだ。サフィニアは呟つぶやいた。「……超越者オーバリスト……？」

女が笑ったように見えた。

入ってきた。裏庭から、リビングへ。そのまま接近してくる。足は動かしていない。空中を滑すべるように移動してくる。

ハニーメリーがまた発砲した。二発。いや、三発か。女の身体からだがすっと横にずれた。今度はかわしたのだ。

サフィニアは杖を両手で握りしめた。魔術を。集中しないと。自分にはそれ以外の武器がない。でも、わかっている。間に合わない。精神を集中させ、呪じゆ文もんを詠えい唱しようし、魔術を発動する。その前に、女に肉にく薄はくされてしまう。

ハニーメリーに腕うでをつかまれて引っぱられた。サフィニアはあらがわずに走ろうとした。

女はもうすぐそこまで迫せまっている。

止まった。

女は床に両足をつき、こっちに向かって両手を突つきだした。押されるというよりは、引っぱられる。後ろへ。強ごう引いんな力だ。抱きすくめられた。ハニーメリーはサフィニアを抱きしめて、なんとか踏みとどまろうとしたのかもしれない。無理だった。叩たたきつけられた。冷蔵庫だ。ハニーメリーが呻うめいた。衝しよう撃げきはさほどでもなかった。ハニーメリーが庇かばってくれた。そのおかげだ。精神集中チヤネリングは不完全だが、届きそうな気がした。サフィニアは呪文を詠唱した。

「爆条Ｍｅｘｅｓ雷來礼」

「爆条Ｍｅｘｅｓ雷來礼」

　同時だった。女も魔術を発動させた。爆ばく雷らい索さく。同じ魔術だ。稲いな妻ずまと稲妻が衝しよう突とつして、弾はじけ飛び消えた。相殺バニシユ。サフィニアは次の魔術を用意しようとした。女が凶きよう鳥ちようのように飛びかかってくる。認にん識しきはしているが、サフィニアの意識は別の場所にあった。引きずり戻される前に、途と切ぎれた。

　女の右足がサフィニアの左ひだり頰ほおを強打した。激しくも鈍にぶい音と、自分の声を聞いたように思う。目の前が真っ暗になった。おそらく、一いつ瞬しゆんだ。光はすぐに戻ってきた。不安定な、ぼんやりとした、かすかな光が。

　視界がゆがんでいる。

　女に──見下ろされているのか。

「あなたはマチルダが撒まいた種？」女は屈かがみこんできて、そろえた右手の指を槍やりの穂ほ先さきのように尖とがらせ、すっと引いた。「──芽が出かけているわ。危険な子ね」

　そこから一気に突きだして、抉えぐるつもりだ。何を？

　わたしを。

　この女はわたしを殺す気だ。

　死にたくない。まだ。こんなふうには。でも、身体が動かない。どうすればいいのかもわからない。

　だめ、かもしれない。

　きっと死んでいた。

　彼がきてくれなければ。

「──ッ……！」女は振り向きながら飛びのいた。

　彼の短たん剣けんは女をとらえず、空を斬きっただけだった。

　彼はサフィニアとハニーメリーの前に立って女に向きなおった。

いや──立ってはいない。床に両りよう膝ひざをついている。立つことができる状態ではないのだ。サフィニアは息をのんだ。

　彼は両足に傷を負っていた。足首から先がありえない方向に曲がっている。ものすごい量の出血だ。あふれるどころか噴ふきだしている。ちぎれかけているのだ。

「ピンパーネル」女は喉のどを見せて笑った。「あたくしはあなたのそういうところも嫌きらいではないのです。傷ついたあなたは、なかなか魅み力りよく的だわ」

「う……」ハニーメリーが低い声をもらして身じろぎした。

　サフィニアは杖を握りしめようとした。うまく力が入らない。

「ＳＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹ……！」ピンパーネルは聞いたこともないような裂れつ帛ぱくの気合いを発して跳とびあがった。あの足で、どうやって。とにかく、すごい勢いだった。目にもとまらぬ速さだった。

「いい声」

　それでも、女が右腕を振っただけで、ピンパーネルはあっさりと吹ふっ飛ばされてしまった。ピンパーネルは床に叩きつけられ、転がった。その拍ひよう子しに左の足首から先がもげた。

「な、何や何や何や……！」リビングにカタリが、それからルーシーが駆かけこんできた。

「ピピピピンプさんっ……!?」

　リビングのドアが開いた。マリアローズだ。「何が──」

「ＡＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ……！」ピンパーネルは床に両膝と両りよう肘ひじをつく姿勢になって、背をたわませた。

「っ……！」ハニーメリーが発はつ砲ぽうした。

　今度は見えた。

　女の豊満な胸の寸前で、銃じゆう弾だんが静止した。

「うぇっ……!?」目を見開いたマリアローズを押しのけて、ユリカが、さらにはきゅーがリビングに駆けこんできた。

　即そく座ざに極限クライマックス九手棍ナインポールを構えたユリカの隣となりで、きゅーが首を傾かしげた。「……きゅう？」

「あら」女は止まった銃弾を払はらい落とすと、振ふり返ってきゅーに笑いかけた。「お久しぶりね、きゅー。元気そうで、何よりです」

「どっ……」カタリはぽかんとしている。

　ルーシーはモトロール刀を抜ぬこうとしているが、戸と惑まどっているようだ。「……え？　え？　え……？　な、何です……か？　これ……」

「リルコ……！」あのピンパーネルが、怒いかりに顔をゆがめていた。「アナタ……ここに・何をしに・きたのですカ……！」

　──リルコ。

　かつてトワニングが口にした名だ。「四巡じゅん月げつ十一番日か……ＺＯＯを結成した日だな。どうせならばその日をトマトの誕生日にしてしまえと、リルコが勝手に決め──」

　いくら問い質ただしても、昔の仲間だということ以外は教えてくれなかった。昔、ＺＯＯの一員だったが、今はもう違ちがうということだ。何か事情が、何らかの経けい緯いがあって、クランから離はなれたのだろう。ふれないほうがいい過去なのかもしれない。下手に手を出すと痛い目に遭あいそうで、怖こわくもあった。サフィニアは忘れようとした。ほとんど忘れていた。

　その過去が今、ここにいる。

　マチルダが撒いた種。女はサフィニアに向かってそう言った。

　紫むらさき。紫色のドレス。

　魔ま術じゆつ士しは魔術士を知りたがる。他ほかのことにはまるきり興味がない魔術士でも、魔術に関する情報ならば、本質的な知識からおもしろ半分の噂うわさ話ばなしまで、貪どん欲よくに収集するものだ。その姿を見た者が少なくても、たとえ実在の人物かど

うかあやしくても、有力とおぼしき魔術士の名はすぐ知れ渡わたる。その中の一つだ。

　紫しのヴェロニカ。

「そうですね」女は満面に恐おそろしいほど艶なまめかしい笑えみをたたえて、ゆっくりと一同を見まわした。「あたくしもＺＯＯの一人でした。名乗らずにすませるのも無ぶ粋すいでしょう。とはいえ、あたくしはたくさんの名と顔を持っているのです。リルコ。あたくしをそう呼ぶ者もいます。ヴェロニカは師ルミエルがあたくしにつけた仮カ名ナ。そして──」

　ルミエル。

〝大いなる天の使い〟の異名を持つ魔導師マジスタだが、故人だ。

　魔導師マジスタでありながら、ルミエルが一人の魔術士としてあげた実績は皆かい無むに等しいとされている。ただ、彼にはその二つ名にふさわしい、大いなる才能があった。あるいは、非常な幸運に恵めぐまれていた。

　ルミエルは誘ゆう拐かいの達人だった。多くの子供をかどわかして、魔術の初期教育を施ほどこした。彼がさらった幼女の一人は、のちに〝閃光のスパークル魔女ウイッチ〟として大陸中にその名を轟とどろかせることになった。彼はマチルダの師だった。

　ヴェロニカ＝リルコは、マチルダと同じく、ルミエルに見いだされた魔術士なのだ。

　女は右手を持ちあげて指さした。

　ハニーメリーを。

「ときには、〝隠者ハーミツト〟とも」

「……あなたが」ハニーメリーは全身を震ふるわせていた。「……あたしの、お父さんを……殺したの？」

「あなたもあたくしに殺されるのです。悪く思ってくれてもかまいません」女は愉ゆ快かいそうに目を細めた。「慣れているわ」

―姉さん、だと……？

イアン・タイドムードは、たしかにアメディ・ドン・トワをそう呼んだ。

デュプリカント。

人間の模造品といったところか。

イアンはジュジそっくりで、アメディはりりぃに似ている。ジュジとりりぃは姉きよう弟だいだ。だから、この二人も姉弟だというのか。自分は自分だとイアンは言っていた。デュプリカントを人間と見なせば、実際、別人ではあるのだろう。別人なのに姉弟として作ったのか、それとも、姉弟を演じさせているのか。ジュジとりりぃの関係は険悪だ。姉が弟を毛け嫌ぎらいしていた。このことをりりぃが知ったらどう思うか。さぞかし腹を立てるだろう。悪あく趣しゅ味みなことをする。

やつらしい。

そんなふうに言えるほど、やつを知っているわけでもない。

やつだけじゃない。誰だれのこともどうだってよかった。何のつもりだかわからないがしつこくつきまとってきて、ことあるごとに勝負を挑いどんできたりりぃも、邪じや魔まだと思いこそすれ、興味を持ったことはない。関心がなかった。そのわりに、彼はりりぃを殺さなかった。したたかに打ちすえても、粉こな微み塵じんにすることはなかった。そうすることは可能だった。できたはずなのに、やらなかった。

なぜだろう。考えたこともなかった。犬コロみたいなものだ。じゃれついてくるだけならまだしも、吠ほえたり嚙かみついたりする。わずらわしいから、追い払はらう。それだけだった。

今ならばわかる。りりぃは誇ほこり高い。ずいぶん自尊心が傷つけられたことだろう。打ち負かすなら、殺してやればよかった。彼にそのつもりはなくても、生殺しの目に遭わせたのだ。何度も、何度も、数えきれないほど。憎にくまれても仕方ない。

アメディはりりぃの顔をしている。彼に敗れるたび、身体からだ

を作りかえていったりりぃ。それでもまだ人間らしく見えたころのりりぃ。りりぃをあんなふうにしたのは彼なのか。

りりぃは──違う、アメディは、湾わん曲きよくした長い剣けんで打ちこんでくる。左ひだり腕うでを失ったせいか。激しいが、甘い。力んでいる。それじゃあだめだ。簡単にかわせてしまう。彼は大剣の柄つかに手をかけている。抜ぬく気にはなれない。相手には隙すきがある。いつでも殺せる。一ひと振ふりで。彼はまた同じことを繰くり返そうとしているのか。違う。こいつはりりぃじゃない。アメディ・ドン・トワ。おそらくジュジが姉に似せて作った。別人だ。

アメディが低い姿勢から剣を斜ななめに振りあげようとした。彼は一気に踏ふみこんで、アメディの右腕を蹴け飛とばした。アメディは下がろうとしたのかもしれない。させなかった。左足の後ろ回し蹴りだ。アメディの横よこ面づらに叩たたきこんだ。アメディは横よこ倒だおしになって、剣を取り落とした。彼はアメディの右手を踏んづけた。骨が砕くだけた。これで剣を握にぎることはできまい。アメディは呻うめき声一つもらさなかったが、歯を食いしばって、いくらか顔をゆがめた。そうして繰りだしてきた蹴りを、彼は左腕でたやすく払いのけた。

大剣を抜こうとした。

こいつを殺して、どうなる。

「死にたいのか、お前は」

アメディは目を見開いて彼を見すえた。唇くちびるが動いたが、声は出さなかった。どうして喋しやべらないのか。

何か音がした。水すい槽そうか。蓋ふただ。開こうとしている。水音も聞こえはじめた。デュプリカントたちが泳いでいる。上へ、上へと。水槽から出るつもりか。

イアンのほうに目をやると、やつは椅い子すに座っていなかった。こちらに背を向けて、機械を操作しているらしい。

「何を──」彼は駆かけだそうとした。足が止まった。

後ろだ。

水槽の縁へりから、コードを引き抜きつつ裸はだかの男が飛び降りた。男だけではない。女もいる。デュプリカントたちは次々と床ゆかに降り立った。

「かかりなさい！」イアンが叫さけんだ。

彼は舌打ちをした。ずぶ濡ぬれのデュプリカントたちが襲おそいかかってくる。だが、その足どりは不確かだ。顔つきにも締しまりがない。こんな連中に何ができる。

彼は男の顔面に前蹴りを見み舞まって吹ふっ飛ばし、女を突つき倒して、別の男を腕一本で押しのけた。その次に迫せまってきた男には見覚えがあった。どこだ。どこで見た。タナソアの聖せい騎き士しか。ロレンツの部下だった。彼はそいつの顎あごに拳げん骨こつを食くらわせた。最初の男が彼の右みぎ脚あしにしがみついてこようとした。蹴飛ばすと、メルアドラの大王ダーナソルの后きさきによく似た女が金切り声をあげて飛びかかってきた。彼は女の鼻面を肘ひじ打ちした。女の顔が血まみれになった。女はそれでも彼にすがりつこうとした。彼は女を蹴け倒たおして、知った顔の亜人デミヌスを突き放した。こいつも聖騎士だ。違ちがう。違う。そうじゃない。デュプリカントだ。

ジュジそっくりのデュプリカントどもが押しよせてきた。彼はそいつらの喉のど頸くびを突いた。鳩尾みぞおちに蹴りをぶちこんだ。顎を粉ふん砕さいした。脇わき腹ばらに回し蹴りを食らわせた。髪かみの毛を引っつかんで、床に顔面を叩きつけた。

アメディが躍おどりかかってきた。

彼は無造作にアメディの右腕を鷲わしづかみにした。振りまわして、デュプリカントどもを薙なぎ倒した。いくら倒しても、やつらは起きあがってくる。やわじゃない。それだけか。違う。彼が生ぬるいのだ。

彼は連中を追い散らそうとしている。手加減しているということだ。情けをかけているのか。相手は敵だ。哀あわれんでどうする。

だいたい、笑える話じゃないか。この手でどれだけの命を叩き壊こわしてきた？

無数だ。

　数えきれない。数えようと思ったこともない。

　俺はあいつらと一いつ緒しよなのか？

　違う。

　仲間たちの、友たちの顔が脳のう裏りをかすめた。違う。そうじゃない。

　彼はアメディをそこらに放ほうり投げるなり、四、五人のデュプリカントたちに体当たりした。その後ろにいた十人以上のデュプリカントたちもろとも、崩くずれるように転てん倒とうした。彼は突とつ破ぱ口こうを開こうとしたのだ。後ろから別のデュプリカントたちが絡からみついてきて、そいつらを振りほどいている間に、ふたたび前にデュプリカントの壁かべができていた。彼は大たい剣けんを抜き放って、手近な水槽をぶち壊した。飛び散る液体と水槽の残ざん骸がいめがけて飛びこみ、その向こうに出ると、左右からデュプリカントたちが飛びかかってきた。彼はそいつらを突き飛ばし、蹴飛ばした。水槽を二つ三つ叩き割って、目くらましにしようとしたが、デュプリカントたちはあくまで彼だけに狙ねらいを定めているようだった。しかも、最初のころよりも動きが素す早ばやく、鋭するどい。数人にしがみつかれると、彼といえども撥はねのけるのに苦労する。

「くっ……！」彼はどこかで会ったことがある男の首筋に手刀を叩きこんで、戦友だったのかもしれない男の股こ間かんを蹴りあげ、知らない女の髪の毛をつかんで引きはがした。

　行く手に立ちふさがった全ぜん裸らの男のことは知っていた。

　若くはないが、老いてもいない。偉い丈じよう夫ふだ。亜あ麻ま色の髪は濡れ乱れている。まっすぐな目だ。それでいて、赤せつ褐かつ色しよくの瞳ひとみには生気がない。うつろだ。もともとは貫かん禄ろくを出したいと言って、髭ひげをのばしはじめた。

「……デニス」

　デニス・サンライズは腰こしを屈かがめて突とつ進しんしてきた。不ぶ恰かつ好こうだ。器用なやつじゃなかった。愚ぐ直ちよくなまでに節を曲げない男だった。違う。

　こいつは違う。

　きっとただ生まれたてで、うまいやり方を知らないだけだ。何を。

　何をしくさりやがる、ジュジ。

　こんなものを作って、何を。

　何のために。

　どう使うつもりだったんだ。

　彼は大剣を振ふりおろした。「──ぬうううううあああああああああああああああああ……！」

　デニス・サンライズは真っ二つになった。これはデニスじゃない。デュプリカントだ。

　何者かが彼の背にふれようとした。彼は振り向いた。「俺に、さわるな……！」

　デュプリカントの右腕が斬きれ飛んだ。そいつは、だが、かまわず組みついてこようとした。彼は大剣を振りまわした。斬った。斬ってしまった。軽い。

　軽い手て応ごたえだ。

　まるで木で偶くじゃないか。

「ぬうううううううおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお……！」

　近づくな。俺のそばに寄るんじゃない。斬るぞ。いいのか。なんでだ。弱い。お前たちはひどく脆もろい。脆すぎる。俺がさわっただけで、壊れてしまう。血を、臓物を撒まき散らして、倒たおれてしまう。すぐに息が止まる。命の形がなくなる。俺に近づくな。誰だれも、何も近寄ってこなければ、俺は行かない。ここにいる。じっとしている。何も求めない。お前たちは何を求めてるんだ。地位か。名めい誉よか。金か。優ゆう越えつ感か。快感か。そんなに何もかも失いたいのか。死にたいのか。いいだろう。だったら、こいよ。望みどおり殺してやる。意気込んでいたわりには、お前たちは簡単に死んでしまう。

死。

死。

死。

死。

死。

死。

死。

死。

死。

死。

死。

死。

死。

死。

死。

死。

死。

死。

死。

死。

死。

死。

　死。

　死。

　死。

　死。

　死。

　死。

　死。

　死。

　死。

　ああ。

　足あし許もとに大量の死が。

　りりぃ。

　俺はお前を踏ふみにじっている。

「……違ちがう」

　もう動かない、このりりぃは、りりぃじゃない。

　彼は左手で自分の顔をさわった。

　濡ぬれている。重く、鈍にぶく、濡れそぼっている。

　粘ねばつくような血をぬぐって、椅い子すに腰かけているジュジに近づいていった。違う。

　ジュジじゃない。

「イアン・タイドムード」彼はイアンの喉のど元もとに大たい剣けんの切っ先を突つきつけた。「こんなことをして、何になる」

「さすがですね」イアンは笑えみを浮うかべて手を叩たたいてみせ

た。「サー・ディオロット・マクスペイン。まるであなたは生き物を殺し尽つくすためだけに存在しているかのようだ」

「答えろ。何のつもりだ」

「私が訊ききたいくらいですよ」

「何……？」

「私はいったい何なんですかね」イアンはため息をつきながら片眼鏡モノクルの位置を直した。「もちろん、知っていますよ。私はデュプリカントです。彼に生みだされた。私は彼の道具です」

「いやなら、やめろ」

「どうやって？」

「貴様は餓が鬼きじゃない。そう言ってなかったか。だったら、自分で考えればいい」

「彼から逃にげられるとでも……？　私はこんなにも彼にそっくりなのに？」

「お前はお前なんだろう」

「あなたにはわからない」

「ああ。わからん」

「私にもわからなかったんですよ。今、気づきました。私は──」イアンは肩かたを震ふるわせて笑いだした。「私は、あの人になりたかったんだ。本物になりたかったんです。きっと、私たちはみんなそうだ。どれだけ足あ掻がいたところで、なれっこないのに」

「やつにはなれなくても、別のお前自身にはなれるんじゃないか」

「もう手て遅おくれだ」イアンは懐ふところから何かをとりだした。

　拳けん銃じゆうか。回転式ではなさそうだ。自動拳銃か。

「よせ」と言いながらも、彼はイアンを止めようとしなかった。

　イアンは銃口をこめかみに押しつけた。「遅おそいんですよ。私たちも用済みなんだ」

「どういうことだ」

「始まるんです」イアンは引き金を引いた。

　銃声がした。

　イアンの首が曲がって腕うでが弛し緩かんし、拳銃が床ゆかに落ちた。

　彼は奥歯を噛かみあわせた。「……始まる、だと……？」

　頭を揺ゆすって振り向くと、壊こわれた水すい槽そうに背をもたれさせて座っているゲーデが目に入った。

　彼は死し骸がいの山を踏み越こえてゲーデに歩みより、猿さる轡ぐつわをほどいた。

　ゲーデは彼を見ているが、どこか遠くを眺ながめているようでもある。

　彼はゲーデの手て枷かせと足枷も外した。その直後だった。

　ゲーデが大きな口を開けて跳とびあがった。噛みつくつもりだ。あの強い顎あごで。硬かたく鋭するどい牙きばのような歯で。彼はとっさにゲーデの額に拳こぶしを打ちこんだ。ゲーデは一度、崩くずれ落ちたが、すぐに立ちあがろうとした。彼は呆ぼう然ぜんとしていた。「……お前もか」

　彼はほとんど力をこめずに大剣を振ふるって、ゲーデの首を断たち斬きった。

　ゲーデはすべてを受け容いれていた。そんな一いつ瞬しゆんの表情が目に焼きついた。

　彼は後頭部をさらしているゲーデの生首を見下ろして呟つぶやいた。「……生きることだって、できたんだぞ」

　嘘うそじゃない。

　できたはずだ。

　それなのに、なんでだ。

　こいつは死を望んで、俺はこいつを殺した。

「疲つかれた」

　彼は大剣を床に突き刺さし、ひざまずいてうなだれた。

「──誰だれか、俺を助けてくれ」

　カタリとルーシーが突っこんでいって押し返された。リルコ。ヴェロニカ。〝隠者ハーミット〟。いくつもの名を持つ女は、でも、ただ腕を振っただけだ。それなのにカタリとルーシーは、後ろのほうへ引っぱられるようにして外へ、裏庭まで押し戻もどされた。

　自分が何を目もく撃げきしているのか、マリアローズにもよくわからない。とにかく、あの女にはそういうことができる。事実を認めるしかないが、何しろ異質な力だ。見み極きわめがつかない。

「ＫＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨＨ……！」ピンパーネルが女に襲おそいかかろうとした。足を怪け我がしているのだ。万ばん全ぜんではないから。そう思いたいが、判断がつかない。女が腕を振りあげると、ピンパーネルの身体からだが持ちあげられて宙を舞まった。その瞬間を狙ねらいすましたかのようだった。ユリカが女に詰つめよって極限クライマックス九手棍ナインポールを突きだした。読んでいたのか。女は後ろ宙返りをして棍こんをよけた。その際、ユリカの棍が鈍にぶって揺れた。不自然な揺れ方だった。あの力を使ったのか。女は着地するなり身をひるがえして飛んだ。跳んだのではない。女は低い位置を滑かつ空くうしていった。ハニーが発はつ砲ぽうしたが、その前に女がすいすいと蛇だ行こうしはじめた。おかげで当たらなかったようだ。

「何なの、いったい……！」ユリカはすぐに女を追いかけはじめた。寝ね起おきだからか。人を食ったような女の態度や振る舞いのせいか。めずらしくユリカは苛いらついているみたいだ。背中から

床に叩たたきつけられたピンパーネルも、すぐさま腹はら這ばいになってユリカにつづいた。きゅーは途と方ほうに暮れている様子だ。ハニーはサフィニアを助け起こしてから駆かけだした。サフィニアもハニーについてゆく。行く手に立ちはだかろうとしたカタリとルーシーをふたたび吹ふっ飛ばし、女は裏庭へ。逃げる……？　そんなわけがない。

　マリアローズはようやく走りだした。

　外に出ると、皆みな、屋根の上に目を向けていた。

「マリア……！」ユリカだ。こっちに駆けてくる。「──台に……！」

「あ、うん！」マリアローズはユリカに背を向けて膝ひざを両手でがっちり押さえ、思いきり踏ふんばった。「──ふっ……！」

　踏まれた。

　けっこうな衝しよう撃げきだったが、なんとかこらえることができた。

　ユリカはマリアローズを踏み台にして高く跳び、屋根の上に達した。

　それを見たカタリが起きあがりながら叫さけんだ。「──むぉう！　ルーシー！」

「は、はい！　カタリさん……！」ルーシーも心得たものだ。マリアローズと同じ体勢になってカタリを待ち受けた。

「いっくでえええええええええ……！」カタリは助走をつけて跳ちよう躍やくし、ルーシーの背中を蹴けって勢いをつけようとしたのだろうが、ずるっと滑すべってひっくり返った。「──どごおあっ⁉」

　寝ね込んじゃえばいいのに。いっそのこと、永遠に。

　ピンパーネルは短たん剣けんを一本くわえて右手で屋根の縁へりにつかまり、腕わん力りよくで身体を引きあげようとしていた。きゅーが出てきて、ピンパーネルに手を貸そうとしている。

　ハニーとサフィニアは、家からちょっと離はなれた場所に立って

いる。そうしないと、屋根の上が見えないからだ。マリアローズは二人のそばまで行った。振り向くと、ユリカの後ろ姿が目に入った。女は？　いた。屋根の上じゃない。そのさらに上だ。

　浮ういている。

　今にも夜に覆おおい尽つくされようとしているエルデンの空に、あの女が髪かみをなびかせてたたずんでいた。

「あたくしの専門を教えてあげましょう」女は胸の前で両手の指をふれあわせた。「要素魔ま術じゆつにはそれほど興味がないの。あたくしは古代呪じゆ式しきを偏へん愛あいしているのです。崩れ落ちてゆくさまはとても美しいわ」

　女の身体がぼんやりと発光しはじめた。あの揺らめく青あお紫むらさき色いろの光は魔力なのか。

「──え。何……？」

　マリアローズはあたりを見まわした。

　何だろう。この音。いや、音じゃない。

　音だけじゃない。震しん動どう……？

「はっ……！」サフィニアは息をのんで塀へいのほうに身体を向け、両手で杖つえを握にぎりしめた。いつ精神集中に入ったのか。わからないくらい早かった。

「無花果地軸音楽東軸ＫｕｇｅＬｄ□真土本土久土過渡人示度ＺｅｔＥｎ□ＩＮＤａＮＭａＮＫａＮＬａＮＳｅＮ□ＣＬＡＳＨ拝真名焼尽光ＶＭＢＬ□□Ｓｈｏｏｔｅｍ」

　サフィニアの髪の毛がひるがえり、杖全体からまばゆい光が放射された。光は切り裂さいた。呆あつ気けなく感じるほどだった。塀が三メーテルほどの幅はばにわたって破は壊かいされるというより消し去られた。地面もえぐられて、溝みぞができていた。サフィニアは杖を振ふって叫んだ。「──避ひ難なんしてください……！　急いで……！」

　理由なんてわからない。だからといって、尋たずねたりしなかった。マリアローズは声を張りあげた。「全員、退避……！」

　ユリカが屋根から飛び降りた。きゅーは屋根の上に押しあげようとしていたピンパーネルを担かついで駆けだした。カタリとルーシーも走った。ハニーも、当然、サフィニアも。マリアローズは皆が動きだしたことを確かく認にんしてから、塀の穴を目指した。地面が震ふるえている。かなりの揺ゆれだ。どんどんひどくなる。軋きしむ音がする。下か。地面の下は合成骨材コンクリートで固められているはずだ。それが、軋んでいる？　どうやらそうらしい。

「わ、わ、わ、わ……！」

　地面が波打ち、ひび割れはじめた。やばい。やばいって。仲間たちのことは気になるけれど、目を配る余よ裕ゆうはない。文字どおり足あし許もとがおぼつかなくて、ともすると体勢が崩くずれそうになる。何これ何これ何これ。何だよいったいぜんたい何なんだよ。わからない。でも、逃げないと。一刻も早くここから離れないと、まずい。まずいなんてものじゃない。

　サフィニアのあとに塀の穴から飛びだそうとして、危あやういところで踏みとどまった。ダメダメダメダメダメ。た、高いって。慌あわてて縁へりに腰こしかけ、できるだけそっと降りた。それでも高いことには変わりがない。着地の衝撃が頭のてっぺんまで響ひびいた。だけど、じっとしていたら邪じゃ魔まだ。転がるようにしてそこから離れると、ユリカとピンパーネルを抱かかえたきゅーが軽かろやかに降り立った。

「にょっほおおおおおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉ――――――――ん……！」

　半魚人が奇き声せいを発した。

　マリアローズは声も出なかった。こんな。

　こんなことって。

「い、い、い、家っ、家、がっ…………」ルーシーは座りこんでいた。

　土台ごと、トマトクン邸ていが激しく揺よう動どうしている。

　プリンじゃないんだから、あんなふうに揺れたら、壊こわれてしまう。すごい音が聞こえるし。もう軋む音なんかじゃない。硬かたいものが割れたり砕くだけたりしている。そうとう大きな音だ。揺

れ動く土台の部分にひびが、亀き裂れつが入っている。そこから細かな塵ちりが噴ふきだして、広がってゆく。みるみるうちに。

「……さ、さ──下がって……！　みんな！　下がらないと……！」マリアローズはルーシーの襟えり首くびを引っつかんで、あとずさりした。自分が涙なみだぐんでいることには気づいていた。だって、家が家が家が家が。だけど、何もできない。どうしようもない。

　歯を食いしばってルーシーを力任せに引きずりながら、マリアローズは崩ほう壊かいしつつある我が家を見つめていた。我が家。そうだよ。

　我が家だ。我が家以外の何ものでもない。

　僕らの家が、轟ごう音おんを立てて左右に、斜ななめに、上下に身をよじり、涙のようとはとても言えない大量の粉ふん塵じんを撒まき散らしながら、少しずつ、少しずつ、でも、確実に縮んでゆく。刻一刻と背が低くなっている。認めたくない。認めがたいけれど、頭では理解している。壊れる。壊れてしまう。家が。僕らの家が、潰ついえようとしている。

　敷しき地ちの四よ隅すみに青紫色の光の柱がそそり立っている。それだけではない。地面を走る線は何だろう。光っている。蛍けい光こう塗と料りようか何かで描えがいてあるのか。それにしては変だ。明めい滅めつしている。光の柱は大きくなったり小さくなったりを繰くり返している。あの動きと同調している。魔術。何かの魔術なのか。古代呪式、と言っていた。これがそうか。あの女はあらかじめ準備していたのだろうか。最初から家を破壊するつもりだったのか。〝隠者ハーミット〟。ＳＳの刺し客かくか。あの女はピンクショットを殺した。そして、その娘むすめハニーメリーを始末するためにやってきた。でも、ＺＯＯだったんじゃないの？　どうして、ここまで。何も家をぶっ壊すことはないじゃないか。それとも──ＺＯＯだったから……？

　これまで徐じよ々じよに進行していた崩壊が、突とつ然ぜん、勢いを増した。土台が一気に一メーテルほども低くなって、いくつもの巨きよ大だいな瓦が礫れきが道路に傾なだれ落ちた。

　もうもうと立ちのぼる粉塵が暗い空を曇くもらせている。

「爆条Ｍｅｘｅｓ雷來礼」

　呪じゆ文もん。サフィニアだ。爆雷索。粉塵の幕めがけて稲いな妻ずまが放たれた。リルコ。あの女か。見えない。わからない。

「──後ろ……！」まだきゅーに抱えられているピンパーネルが叫さけんだ。

　あの女は隣となりの屋や敷しきの真上にいた。

「蛮翅狂Ｉｇｎｅｉｍ虞隷Ｎａｙｄｏ」

　女の頭上で青紫色の炎ほのおが渦うずを巻きはじめた。

「に、逃げっ──」マリアローズはルーシーを引っぱり起こして駆かけながら目を剝むいた。

　何だよ、あれ。ただの魔ま術じゆつじゃない？　だって──女は手をのばして、青紫色の炎をちぎった。直接さわってはいないものの、そんなふうに見えた。そうして、女はその炎を投げつけてきた。くる。迫せまってくる。青紫色の炎のかたまりが。大きさは人間の頭くらいだ。身体からだの内側からいろいろなものがこみあげてきて、噴きだしそうな感覚。これは恐きよう怖ふだ。マリアローズは走った。「おおおお
おぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ
……！」

　なんでなんでなんで？　まままままっすぐじゃないんだけど？　あの炎、追いかけてくるんだけど？　どういうことどういうことどういうこと……？

　ひどい。理り不ふ尽じんだ。断固抗こう議ぎする。したいんだけど、その前によけるっていうか逃げるっていうか、とにかく足を、足を、足を動かさないと。瓦礫。行く手にかなり大きな瓦礫の山が。もうすぐだ。

「いぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃいいぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ
……！」マリアローズはとくに意味はない魂たましいの叫びを発しながら瓦礫の山の向こうに回りこんだ。足がもつれてつんのめり、爆ばく風ふうに背中を押されて転てん倒とうした。左ひだり肩かたを打って、左ひだり頰ほおのあたりに何か硬いものがガツンと当たったが、直ちよく撃げきはさけられたということだ。すぐに起き

あがって、顔の左半分を手でぬぐった。血が出ている。痛みはない。痺しびれている。左ひだり眼めがよく見えない。半分見えれば上等じゃないか。みんなは？　ピンパーネルを抱えているきゅーの姿が目に入った。無事らしいが、ユリカは見あたらない。ルーシーは。カタリは。わからない。

　サフィニアが倒たおれている。そこからたいして離はなれていない場所に、ハニーが。

　女は空中でハニーを見下ろしている。

　マリアローズは足を前に出そうとした。ふらついて、頭を振ふった。

「しょんなところにいないで、降りてきなしゃい……！」ユリカがどこかそのへんから飛びだしてきて、極限クライマックス九手棍ナインポールの先せん端たんを女に向けた。くそ。

　ダメだ。ぼんやりしている。

　マリアローズは顔の左半分を手でごしごしこすった。痛い。うん。痛い。いい感じで痛くなってきた。ザックリ切れているみたいだ。

　女はユリカを見て、笑ったようだ。「あなたがここまで昇のぼってきてはどうかしら」

「しょれができたら、こんなことを言う前にしょうしているわ！」

　たしかに。

　まさか、女も納なつ得とくしたのだろうか。意外だった。女が降りてきた。ゆっくりと。ユリカは速かった。猛もう然ぜんと踏ふみこんで、身体をねじりながら棍こんを突つきだした。上から下へ。女じゃない。地面を突いた。ユリカは棍を利用して跳とび、女を奇き襲しゅうした。「──離りゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」

　蹴けりだ。

　ユリカの右みぎ脚あしが輝かがやきを帯びている。あれは。

「……黄おう金ごん脚きやく！」

　トワニング仕込みの鵺ヌエ流古式戦闘術剛ごう柔じゆう体たい法ほう奥おう義ぎだ。

　女は両手を前に出した。あの力で防ごうとしたのか。ユリカは、でも、押し返されなかった。むしろ、女が後退した。当然のことなのかもしれないけれど、あの力は万ばん能のうじゃない。あの力を百だとしたら、百を超こえる力でぶつかれば打ち負かすことができるのだ。ユリカの黄金脚は、完全に押し切るところまではいかなかったのか。女は弾はじき飛ばされる恰かつ好こうになったが、それだけだった。女はあの力に守られた。ユリカの蹴けりは女の身体に届かなかった。

　女は着地するなり右みぎ腕うでを鋭するどく振るった。ユリカは地面に叩たたき落とされた。それで終わりではなかった。女は空を拳こぶしで突いた。「Ｓｈ！　Ｓｈ！　Ｓｈ！　Ｓｈ！　Ｓｈ……！」

　両の拳で、矢や継つぎ早に何度も何度も。その動きにあわせて、見えない巨きよ人じんの脚がユリカの小さな身体を蹴飛ばしているかのようだった。あの程度でやられるユリカではない。でも、体勢を立てなおす暇ひまがないのだ。

　マリアローズはもう一度、顔の左半分をぬぐいながら駆けだした。それとほとんど同時だった。きゅーがユリカと女の間に割って入った。ピンパーネルもきゅーに肩車をしてもらい、雌し雄ゆう一いつ対ついの短たん剣けんを構えている。カタリとルーシーも雄お叫たけびをあげながら近づいてきた。女はくるりと回りながら宙に舞まいあがった。

「蛮翅狂Ｉｇｎｅｉｍ虞隷Ｎａｙｄｏ」

　まただ。マリアローズの足が止まった。またあの魔ま術じゆつだ。マリアローズだけじゃない。起きあがったユリカも、きゅーとピンパーネルも、カタリも、ルーシーも静止した。女は頭上に渦うず巻まく青紫色の炎に手をのばした。

「Ｊａ翠Ｒａｙ斯迅廻」

　サフィニアの呪文だ。突とつ風ぷう。強風の刃やいばが青紫色の

炎を斬きり刻んで四散させた。

　見れば、サフィニアは杖つえを支えにして、わずかに身体を起こしていた。怪け我がの具合はわからないが、無傷ではないだろう。かなりつらそうだ。

「猪口ちよこオざいね」女は両腕を大きく羽ばたかせて、一気に五メーテルほど高度を上げた。「ですが、低てい俗ぞくな魔術にしがみついている者が、あたくしに勝てるなどとは思わないことです。あなたがたは遅おそすぎるわ」

　マリアローズはハニーにちらりと目をやった。食くらったのか。女の魔術を。そうらしい。明らかに火傷やけどを負っている。息はあるのか。わからない。

「ＥＬＭ」女は組みあわせた両手を高々と掲かかげた。「ＮＩＢＬＥＨＥＭ」

　呪じゆ文もん──なのか。女の全身から紫むらさき色いろの光がにじみ出て揺ゆらめいた。次の瞬しゆん間かんにはもう、足をとられていた。「──なっ……」

　さらわれる。空気が濁だく流りゆうと化したかのようだ。回る。回っている。転がっているのだ。どっちが上で、どっちが下なのか。地面。しがみつこうとした。できなかった。この空気の濁流はたぶん、螺ら旋せんを描えがいている。身体からだが浮うきはじめている。

　何かとぶつかった。

「ぐべおっ……！」カタリの声だ。

　マリアローズはカタリと絡からみあったまま、また何かと衝しよう突とつした。今度は人じゃない。どこかで、とても近いところで、大きな音がした。意識が飛んだ。

　息をしている。これは自分だ。僕は呼吸をしている。ということは、生きているのか。

　目を開けた。見える。でも、遠い。何もかもが。ひどく遠くにある。

耳が変だ。詰まっている。そんな感じがする。

身体は横を向いているのか。右側を下にして。そうらしい。右腕は感覚がない。下した敷じきにしているせい？　左腕は動きそうだ。

左手を地面について身体を起こそうとしたら、「お…………」という声がもれて力が抜ぬけてしまった。痛い？　よくわからない。とにかく、無理──じゃない。

すぐそばに大きなものがある。塀へいか。隣りん家かの塀だ。これに激げき突とつしたらしい。カタリが転がっている。

「……カタリ……？」

「ん……ん……ぁ………………」

声を出して身動きしたので、なんとか生きているのだろう。

マリアローズはもう一度、左腕に力をこめて身を起こそうとした。どこが痛いとか疼うずくというよりも、ひたすらせつなくなった。身体感覚が感情に直結している。おかしくなって、混ざりあってしまっているのかもしれない。もう諦あきらめてしまいたい。でも、ダメだ。そんなわけにはゆかない。「──く……うっ……！」

どうにかこうにか地面に座る姿勢まで持ってきて、ようやっと周囲に視線を巡めぐらすことができた。

トマトクン邸ていと隣となりの屋や敷しきとを隔へだてているわりと広い道は、土ど砂しややら瓦が礫れきやらが散乱しまくっていてめちゃくちゃだった。ユリカはわりと近くにいた。身体を丸めて、肩かたをかすかに上下させている。合成骨材コンクリート片に埋うもれているきゅーは、ピンパーネルを胸に抱いているようだ。瓦礫の山に突っこんだのかもしれない。押し潰つぶされているわけではなさそうなので、平気だと思いたい。ルーシーはどこだろう。見あたらない。サフィニアとハニーは折り重なるようにして道の真ん中あたりに倒たおれている。

舞い降おりてくる女は、まだ紫色の光をまとっていた。

マリアローズは立ちあがった。まっすぐ立つのはちょっと難しかった。息を止め、中ちゆう腰ごしくらいの姿勢で、倒れこみそう

になる勢いを利用して歩いた。

　女は地面に降り立つと、腕うでを軽く振ふってあの力でサフィニアをどかした。

　マリアローズは左手で剣を抜いた。走ろうとしたら、視界が大きく揺れた。転んだ。しょうがない。這はって進むことにした。

　女がこっちに顔を向けた。「まず仕事をさせてくれないかしら。焦あせらなくても、順番は回ってくるわ」

　仕事。狙ねらいはハニー。ということは、まだ死んでいないのか。

「……仕事に、しては……」マリアローズは笑った。笑うのもけっこう大変だし、笑いたいような気分でもないんだけどさ。「……ずいぶん……無む駄だな、こと……するんだね。何も、家まで……ぶっ壊こわさなくたって、いいんじゃないの」

「あたくしにとっては思い出深い場所なのです。いつかこの手で壊してしまいたかった」

「じゃあ……ついで……って、こと？」

「この仕事も、ついでといえばついでなのよ」

「トマト……と……」話を。何でもいいから、話をしないと。「何が……あったのか、知らないけど、残念だったね。ちょうど、留守でさ」

「あの人はどこ？」

　乗ってきた。よし。とにかく、時間を稼かせいで——

「さあ……」考えろ。ただはぐらかすだけじゃダメだ。キレさせないで、引き延ばす。「ちょっとした、用事でね。たいしたことじゃ、ないんだけど」

「そう」女は目をそらして腕を持ちあげようとした。

「い、ＥＭＵに！」

　女はまたこっちを向いた。「ＥＭＵ？」

「行ったんだよ。一人で。ああ……一人じゃないけど……」

　時間。時間が欲しい。一分でも一秒でも、時間が。時間を稼いで──

「と、トラジェディーの……やつを、一人……捕つかまえて。それで、そいつを連れてったからね。厳密に言えば、一人じゃないんだけどさ。まあ、一人みたいなもんだよね。もちろん、ついていきたかったんだけどさ。トマトが首を縦に振らなくて……もしかしたら、きみも知ってるかもしれないけど、ほら……トマトって、あれでけっこう頑がん固こでしょ。言いだしたら、聞かないからさ。それで……」

　時間を稼いで。

　それで、どうしようっていうんだよ。

　どうなるっていうんだよ。

「あなた、哀あわれね」女の声こわ音ねには、嘲ちよう笑しようと同程度以上に憐れん憫びんの成分が含ふくまれているように聞こえた。わざとに違ちがいない。「いいわ。あなたの順番は最後にしましょう。あの人が帰ってきて、あなたがたの亡なき骸がらを見たらどんな顔をするかしら」

「だ、だ、だっ……」マリアローズは首を左右に振りながら這って進んだ。どうしよう。何ができる？　ダメだ。時間稼ぎなんかしてもしょうがない。方法。何か。何かないのか。

「──お、お願いだから……！」

　わからない。ダメだ。何も思いつかない。でも、はっきりしている。このままだと、死ぬ。ハニーだけじゃない。みんな死ぬ。殺される。確実に。考えろ。思いつかなくたって、とにかく考えるんだ。

　マリアローズは這いつくばって頭を下げた。「──お願い！　頼たのむから……みんなを殺さないで！　何でもするから！　殺さないでください、それだけはやめてください、お、お願いだから……！　お願いします……！」

　馬ば鹿かじゃないのか。こんなことをしたって、意味がない。聞き入れてくれるわけがないじゃないか。でも、どうしようもないんだ。できることが他ほかに何もない。

「……マリ、ア……」すぐそばで仰あお向むけになっているサフィニアが目を開けた。右みぎ脚あしと右腕が変な方向に曲がっている。折れているのだ。出血もしている。でも、生きている。死なないで。死なないで、サフィニア。死なせない。

　死なせてたまるか。

　マリアローズは地面に額を押しつけた。「──本当に！　何だってするから！　殺さないでくれたら、何だって！　助けてください！　それだけはやめてください！　お願いします！　どうか……！」

「あなたに何ができるというの？」

「そ、それは──」マリアローズは絶句した。



　左手はベルトのホルダーをまさぐっていた。女は気づいていない。きっと。いや、絶対に気づいていない。

「だ、だから、何でも……！」マリアローズは左手でホルダーの蓋ふたを外しながら、右みぎ肘ひじと両りよう膝ひざを使って進んだ。まだ女まで距きよ離りがある。もっと近づかないと。「──言っ

てくれれば、どんなことでもするから……！」

「……爆条Ｍｅｘｅｓ」呪じゅ文もんを唱えようとしたサフィニアが、紙かみ屑くずみたいに吹ふっ飛ばされた。

　もちろん、女の仕し業わざだ。

「あなたがたは遅おそすぎる。そう言わなかったかしら」

　今だ。

　あと二メーテルもない。投げつけたらたぶん、あの力で止められてしまう。

　だから、密着して、小こ瓶びんを握にぎりつぶす。一番確実だ。これしかない。

　マリアローズは女に詰つめよろうとした。

「手に何を持っているの？」

　ばれている。

　空中に巻きあげられた。

　ハーレム・ゴードンの小瓶を手放してしまった。

　地面に落ちる直前に、爆ばく発はつが起こった。そう離はなれていない。閃せん光こう。爆風をまともに浴びた。自分の声を聞いた。真っ暗になった。

　──目を、開けないと。

「前言を撤てつ回かいします」

　どこだろう。

　女はどこにいるのか。

「哀れんだりしてごめんなさい。あなた、嫌きらいじゃないわ」

　まず、息を。息をしないと。苦しい。

　息ができない。

　目を、開けないと。

　女。

　いる。

　至近距きよ離りだ。

　見下ろされている。

　女は紫むらさき色いろの光を放つ右みぎ腕うでを振ふりあげた。
「最初に殺してあげる」

　振りおろされる寸前だった。青白い輝かがやきの激流が横合いから女を襲おそった。女は激流にのまれて押し流された。

「……やらせは……しない……！」

　サフィニア。

　声のしたほうに目を向けた。

　立ちあがってはいなかった。右脚の骨が完全に折れているのだ。立てるわけがない。

　サフィニアはうずくまり、左腕を前に差し向けていた。青い。青白い光がサフィニアの身体からだをとりまいている。

「……いつも……マリアが……わたし、だって……！」

「ＵＲＡＭ」女はもう空中にいた。あの一いち撃げきをしのいで、飛んだのだ。「ＡＭＡＮＴＥＳ」

　女の両りよう肩かたの上に青紫色の炎ほのおが渦うず巻まいて、槍やりのように細長くなった。槍のように？　違ちがう。それはまさしく火か炎えんの槍だ。二本の炎えん槍そうが放たれて突つき進んだ。

「疾はやく……！」サフィニアが右腕を振りあげると、青白い光が凍こおりついた。光が凍るわけがない。でも、そう見えた。凍いてついた光が壁かべとなって炎槍を防いだ。サフィニアは右手を女に

向かって突きだした。「──疾く……！」

　凍りついた光の壁が砕くだけ散って燃えあがった。光の炎が数十匹ぴきの蛇へびと化して女に食くらいつこうとしている。

「ＥＬＭ」女は顔の前あたりで両手を組みあわせた。「ＤＥＬＮＥＭ」

　吹きあがる猛もう風ふうが炎えん蛇じやを蹴け散ちらしたかに見えた。

「……疾く……！」サフィニアが叫さけぶと、ちりぢりになり、粉々になった青白い炎の欠片かけらたちが再結集して、一羽の燃えさかる大おお鷲わしとなった。「──もっと、疾く……！」

「詠唱放棄アリアレナンス……！」女は後ろ向きに飛ひ翔しようして大鷲から逃のがれようとした。「……マチルダ！　このような種を、撒まいたまま捨て置くなんて……！」

　でも、無理だ。女が飛ぶ速度よりも大鷲のほうが速い。追いつく。その寸前に、女の身体を包んでいる紫色の光が輝きを増した。「ＤＡＲＭＤ……！」

　炎の大鷲が弾はじけとんだ。

　女も吹き飛ばされて地面に叩たたきつけられたが、即そく座ざに起きあがってまた宙に舞まいあがった。

　サフィニアは女を睨にらみつけている。その全身から青白い光が立ちのぼり、今まさに何かの形をとろうとしていた。

「……恐おそろしい子ね」女は右手で左肩をさわった。左腕がだらりと下がっている。手傷を負ったらしい。「いいわ。一つ楽しみができました。今日はあなたがたの勝ちということにしておきます」

　気が抜ぬけそうになった。

　まだだ。

　サフィニアだって──そうだ。たぶん、サフィニアも限界なんだ。さもなければ、追い討ちをかけているだろう。

「さようなら。また会いましょう」女はゆるゆると離れてゆく。
「あの人によろしく伝えておいてください」

　こっちがぎりぎりどころか、極限をとっくに超こえていることを見通していて、わざとやっているとしか思えない。もうちょっと急いだら？　本音を言うと、だいぶ、ものすごく急いでもらいたいんだけど。早く。早く行ってほしい。消えろ。消えてください。

　ようやく女の姿が見えなくなった。

　それでもしばらく我が慢まんしていた。

　サフィニアが地面に倒たおれこむ音がした。「……マリア」

「うん」

　自分がうなずいたことまでは覚えている。

　その先は記き憶おくにない。

"knocking on the hidden door"

夜明けとともに行軍を開始して、予定どおり二時間で所定の位置についたラフレシア第三帝てい国こく軍三十四万名余の威い容ようは、地を覆おおい尽つくさんばかりだった。とりわけ、戦車八百両、重じゆう騎き兵へい五千騎、軽騎兵一万七千騎で構成されている機動皇ハイ帝部隊ラスの重厚きわまりない存在感は圧巻だ。その中心にして最先頭は、旧第三皇子領ブランシャールの大規模マツシブ地下工場アンダープラントで建造された〝アーノルディ〟。皇帝が座乗し、指揮の中ちゆう枢すうでもある全長四十七メーテルの弩級戦車ドレツドタンクは、まさしく動く砦とりでと呼ぶほかない。

アーノルディは九百十メーテルほどの距きよ離りを置き、七十七号境界要塞ボーダーフオートとほぼ正対している。

今、アーノルディの左右前方に展開しはじめた魔ま術じゆつ士したちの最前列が立っている八百九十七メーテル線を越こえれば、敵は動く。

三キルメーテルおきにある境界要塞ボーダーフオート、五十メーテルごとに置かれている監視塔ウオツチタワー、それらを結ぶ塹壕トレンチ、隧道トンネルによって、サンランド無統治王国の境界線は厳密に定められ、厳重に守られている。国境に配備されている兵は数万から十万。諸説あって、正確な数はわからない。いずれにしても、すべて魔導兵だ。

魔導兵は二十四時間、一秒たりとも休まず境界線とその周辺を監かん視ししつづけている。どのような条件で、彼らが防衛行動に移るのか。周辺各国、とくにラフレシア第三帝国が試行錯さく誤ごしてきたが、いまだに明らかになっていない。軍が国境を侵しん犯ぱんする試みはついに一度も成功せず、戦せん闘とう状態に突とつ入にゆうすると、国境は完全に閉へい鎖さされた。

魔導兵は平時、境界要塞ボーダーフオートに多く配置されていると思われるが、ある程度の数が塹壕トレンチと隧道トンネルを絶えず移動しつづけている。彼らの連係は完かん璧ぺきだ。まるで一個の個体であるかのように集結、分散を自在に行い、外敵を確実に壊かい滅めつさせる。

「軍事行こう為いにおいて、もっとも大きな障害となる要因が何か、わかりますか」

アーノルディは船のような甲かん板ぱんを備えている。皇帝並びに全軍の指揮を執とる者が将兵に姿を見せて、士気を鼓こ舞ぶするための設備だ。甲板に設しつらえられた御ぎよ座ざには皇帝オクタヴィアン・ギュスターヴ・ヴィド・ラフレシアその人が腰こしを埋うずめ、傍かたわらには金銀宝石をこれでもかとちりばめた大だい元げん帥すい杖じようを手にした男が立っている。

滑こつ稽けいなほど丈たけ高い帽ぼう子しも、装そう飾しよく過多でとくに襟えりが大おお仰ぎようすぎる長衣も、赤と黒のタイツも、爪つま先さきが反り返ったヒールの高いブーツも、皇帝に代わってラフレシア第三帝国軍全軍を統帥する大権を持つアデナ大元帥にだけ許されている装束だ。

男は指先で片眼鏡モノクルを軽く押しあげ、皇帝を一いち瞥べつした。「──ありとあらゆる軍事行為に必ひつ須すである兵員が、人間だということですよ。どれだけ訓練を積んでも、人間は人間であることから完全には離はなれられない。たしかに、国家のため、大義のため、戦友のため、愛する家族のため、身命をなげうって軍の勝利に貢こう献けんできる人間もいます。逆に言えば、何か大きな目的がなければ、人間は軍の一部になりきることができません。魔導兵団は理想的な軍です。魔導兵に個はない。敵を探し、発見したら、これを打ち負かす。彼らはそのためだけにあるんです」

皇帝は口くち許もとに微び笑しようを浮うかべ、目を細めて琥珀色アンバーの瞳ひとみにアデナ大元帥の姿を映している。絶えず動いている右手の人差し指は、膝ひざ掛かけの上で丸くなっている猫ねこの喉のどを撫なでていた。

大元帥は杖つえの先で軽く床ゆかをついた。「我が帝国が百万の兵を擁ようしていて、向こうに回す魔導兵の総数がたとえその百分の一だとしても、これを打ち破るのは容易ではありません。げんに、過去、帝国軍は数十万の兵力を動員して、たびたびこの国境を侵おかそうとしましたが、一度も成し遂とげられなかったんです。彼らは何があっても動じない。崩くずれない。粛しゆく々しゆくと戦いつづけます。また、我々はその事実を知っている。疲ひ労ろうせず、仮借なく、見み逃のがさない敵だということを承知の上で、我が帝国の兵たちは剣けんを振ふるい、槍やりを持って突とつ撃げきしなければならない。人間にとって、これはそうとう大きな負担です。もし敵を圧あつ倒とうする戦力で勇戦し、これに勝ったとしても、甚じん大だいな被ひ害がいを受けることは間ま違ちがいありません。必然的に、戦うべきではない相手だ、ということになる。

実際、ここしばらく、我が帝国はサンランドに対して本格的な侵しん攻こうを試みていなかった。正しい判断です。魔導兵団とは戦うべきじゃありません。戦わずに、勝つべきだ」

　皇帝が立ちあがり、刀を抜ぬいて掲かかげた。ラフレシア第三帝国皇帝が代々受け継ついできた、伝説的な鍛冶士狂きよう雲うん斎さい禍か勒ろくの絶刀「不ふ動どう不ふ知ち」は、刀身が一・二メーテルを超こえる大刀だ。身み幅はばが極きよく端たんに狭せまく、刀を知る者なら遠目からでもすぐにそれとわかる。

　蒼空の下、不動不知の刃やいばが旭きよく日じつを照り返して光り輝かがやいた。

　魔術士たちはすでに配置についている。

　三十四万余の将兵は息をつめて身じろぎもしない。

　皇帝は不動不知で直上を示したまま宣言した。「汝なんじらの力、今こそ余の前に示せ」

　魔術士の一団を統すべているのは一人の少女だ。魔術士たちは弩級戦車ドレツドタンクアーノルディの進路を開けるようにして列をなしている。アーノルディの前にいるのは彼女だけだ。見た目は十歳かそこら。銀色の髪かみをなびかせ、夜空のごとき黒い瞳に無数の星くずを宿して、今日は白い、白いドレスをほっそりした身体からだにまとっている。一見、夢見る乙女おとめといった風ふ情ぜいだが、残ざん酷こくな女め神がみのようでもあり、実際、どちらも彼女の本質からそう外れていないだろう。

〝閃光のスパークル魔女ウイツチ〟の名は誰だれでも知っているが、その姿を目にする機会はめったに与あたえられない。

「さあ」マチルダは九十九本の細い銀ぎん鎖さが巻きつけられている白い杖を振りかざした。「始めるわよ、わたくしのかわいらしい奴ど隷れいたち」

　魔女と同じ白い衣を身にまとっている魔術士たちは全員、彼女の弟で子しだ。その数、二百四十三名。七十七号境界要塞ボーダーフオートを挟はさんだ向こう側にも、同数の魔術士たちが整列している。

　tul-duk-lim-sail-gul-suk-eng-fulk-ol-moil-seg-nolk-lim-dul-tulk.

　魔術士たちが声を揃そろえて呪じゅ文もんを詠えい唱しようしはじめた。

　alk-noik-gulk-del-colk-welm-jif-nel-mon-tulk-dulk-lim-oom.

　呪文というより、それは歌だ。

　呪歌斉唱ラヴィアユニゾン。

　soil-flum-rem-eqol-moil-tem-salim-mon-frel-lim-yol-vilm.

　ein-kain-sain-eft-soi-moi-tolma-bee-stek-vtec-mon-lim-sail-tul-duk.

　tul-duk-lim-sail-gul-suk-eng-fulk-ol-moil-seg-nolk-lim-dul-tulk.

　alk-noik-gulk-del-colk-welm-jif-nel-mon-tulk-dulk-lim-oom.

　soil-flum-rem-eqol-moil-tem-salim-mon-frel-lim-yol-vilm.

　ein-kain-sain-eft-soi-moi-tolma-bee-stek-vtec-mon-lim-sail-tul-duk.

　tul-duk-lim-sail-gul-suk-eng-fulk-ol-moil-seg-nolk-lim-dul-tulk.

　alk-noik-gulk-del-colk-welm-jif-nel-mon-tulk-dulk-lim-oom.

　魔ま術じゅつ士したちの喉は、今日このときのためだけに鍛きたえられていた。通常の鍛たん錬れんだけではない。薬物の投とう与よや医術式を応用した形成も施ほどこされている。彼らの声量には帝てい国こく劇場の花形歌手でさえ及およびもつかない。それにしても、異常だ。

　古き呪のろいの歌は高まり、天地を満たして、震ふるわせようとしている。

　比ひ喩ゆではない。それがはっきりと感じられるのだ。

　耳には魔術士たちの呪歌が。

　視界は細かく揺ゆれて、ゆがみはじめている。

「すばらしい！」大元帥は大元帥杖を肘ひじにかけて拍はく手しゅした。「ただグッダーの制御パルス思念波レインを遮さえぎる、そのためだけにこの方法を考えだし、それ専用の魔術士数百人を養成

するなんて、正気の沙さ汰たじゃありません。閃せん光こうの魔女マチルダ、あなたはまさしく魔導王ドレツドロードたちに匹ひつ敵てきする、彼らを超えようとしているのかもしれない、オーメネイジ最大の魔術士だ……！」

　魔導兵は魔導核Ｄ□コアを動力源として自力活動可能な兵器だ。しかし、各自が自律行動すれば秩ちつ序じよは保たれない。たとえすべての魔導兵が寸すん分ぶん違たがわぬ頭脳を持っていたとしても、置かれる状じよう況きようはそれぞれ異なっている。しかも、刻一刻と変化する。各自が判断を行ったのでは、一糸乱れず、あたかも全体で一個の個体であるかのように動くことなどできない。グッダーはだから、各魔導兵を細さい胞ぼう化して、十か数十の魔導兵を構ユ成ニ単ツ位ト化し、いくつかの構ユ成ニ単ツ位トを器官化して運用することを思いついた。魔導兵はグッダーの身体の一部なのだ。全魔導兵はグッダーという脳が下す指令にもとづいて運動する。その指令自体もある程度、自動化されてはいるだろう。しかし、グッダーが全魔導兵を制せい御ぎよしていることは間違いない。

　首都エルデンの中心にあるシャイニンググローリーパレス。古代九く頭ず竜りゆうの呪いの中ちゆう枢すうとして機能しているあの城は、グッダーの制御パルス思念波レインを増ぞう幅ふくさせて放射する巨きよ大だいなアンテナの役割も果たしている。グッダーといえども、古代九頭竜の呪いを維い持じしながら、独力のみで魔導兵団を操あやつることは難しいのだ。

　マチルダが編みだしたこの呪歌は、グッダーの制御パルス思念波レインに対する妨害波ジヤマーとして作用する。秀しゆう逸いつなのは、現代における最高の魔術士といっていいだろうマチルダ自身は、実じつ施しに一いつ切さい関かん与よしないという点だ。しかも、呪歌斉唱ラヴイアユニゾンに参加している魔術士たちは皆みな、マチルダの熱ねつ狂きよう的な信しん奉ぽう者しやではあるものの、二流かそれ以下でしかない。本来ならば、使い物にならない木こっ端ぱ魔術士たちだ。マチルダにとって何の価値もない。そんな彼らでも、呪歌の歌い手になることで、崇すう拝はいするマチルダに貢こう献けんできる。彼らにとっては望外の幸せだろう。

　マチルダは一つうなずいて杖つえの先で地面を突ついた。彼女の身体は浮うきあがり、アーノルディの前輪を覆おおっている前橋部に降り立った。

皇帝が不動不知を振ふりおろした。「進軍開始」

浅い眠ねむりについていたアーノルディの機関部が目を覚ました。

呪歌斉唱ラヴィアユニゾンはつづいている。

アーノルディが前進しはじめると、戦車部隊がそれにつづき、戦車と戦車の合間を騎き兵へいたちが埋うめた。戦車の搭とう乗じよう員いんは、大半がモルフォ党の党員だ。彼らはすでにグラー大陸で戦車の実戦試用を繰くり返していて、その扱あつかいに習熟している。モルフォ党は長らく少数精せい鋭えいで活動していたが、近年一気に増員して火器や戦車の専門家養成を急ピッチで進めた。急ごしらえではあるものの、どうにか形になっている。戦車隊との連携が求められる機動皇ハイ帝部隊ラスの騎兵隊を指揮しているのは、血塗れブラッド皇帝インペリ騎士団アルナイツの団長アロンズ・ニードルスピアだ。天性のものなのだろう。彼のカリスマ性は傑けつ出しゆつしていて、頑がん迷めいなラフレシア貴族の子し弟ていたちを一いつ瞬しゆんで虜とりこにしてしまった。さらに、彼を補ほ佐さするリリアン・イヌテロとヘンリー・ブラックモアは有能な実務家で、経験豊富な用兵家でもある。穴はない。

アーノルディが八百九十七メーテル線を越こえた。

七十七号境界要塞ボーダーフオートに動きはない。

将兵たちが一いつ斉せいに歓かん声せいをあげ、アロンズ・ニードルスピア率いる騎兵隊が一気に加速して、隊列の先頭に立った。

皇帝が不動不知を鞘さやに収めて身をひるがえすと、皇帝陛下万ばん歳ざい、ラフレシア第三帝国万歳が連呼された。

呪歌斉唱ラヴィアユニゾンはやまず、戦車の機関音が、馬ば蹄ていの音が、歩兵の足音が、そして万歳の声が、天地を揺るがしている。

皇帝は大だい元げん帥すいと灰色の猫ねこを従えて甲かん板ぱんをあとにし、階段を下りて移動宮モビルパレスと呼ばれる私室へとひきとった。アーノルディの構造上、もっとも堅けん牢ろうな場所に作られたこの部屋には、皇帝と大元帥の他ほか、数名の側そば付つきしか立ち入ることができない。皇おう子じ時代から皇帝に仕え

てきた侍じ従じゆうと侍女も、表の間には出入りできるが、奥の間に足を踏ふみ入れることは許されていないのだ。

　表の間に入ると、皇帝は侍女に手伝わせて帝服ガウンを脱ぬぎ、甲かつ冑ちゆうを外した。

　皇帝の装よそおいは事細かに定められており、先ほどのように戦場で将兵らの前に姿を見せる際は、第二種武装で臨のぞまねばならない。これから車橋ブリッジに移動して指揮を執とることになるが、こうした場合は軽装の第四種武装を身にまとう必要がある。

　肌はだ着ぎ姿になった皇帝に襟えり付つきのシャツを着せようと、一人の侍女が近づいた。ルピドナという名で、十歳は若く見えるが、当年とって三十八歳、皇帝のそばでもう二十年近く働いている女だ。

　灰色の猫を肩かたの上にのせている大元帥が、片方の眉まゆを上げてわずかに首をひねった。

「失礼いたします」ルピドナは皇帝の背にシャツを掛かけた。

　皇帝はシャツの袖そでに腕うでを通そうとして、息をのんだ。

　途と端たんにルピドナの肩が激しく上下しはじめた。

「むう……」皇帝は右手で脇わき腹ばらを押さえて、床に膝ひざをついた。

　表の間にはルピドナの他ほかに侍女が二人、侍従が二人いる。皆、凍こおりついたように動きを止めていた。

　大元帥は片眼鏡モノクルを押しあげた。「……なんてことを」

　ルピドナは腹のあたりで両手を握にぎりあわせ、脂あぶら汗あせを流して震ふるえている。「……わ、わた、わたし、は……く、クリストフ、クリストフ殿でん下かの……仇かたき……わ、わ、わたし……」

　皇帝はルピドナを見上げようとしたが叶かなわず、崩くずれるように倒たおれた。全身が痙けい攣れんしている。右みぎ脇わき腹ばらに突き刺ささっているナイフはごくごく小こ振ぶりなものだ。これほど苦しむような刺し傷きずとは思えない。刃はに毒でも塗ぬら

れていたのだろう。

「……わ、わたし、わたし、は……な、何を……」ルピドナは大きく目を見開き、両手で口を覆った。「……く、クリストフ、殿下の……わたしは、でも……」

　大元帥はため息をついて懐ふところに手を入れた。「暗示でもかけられましたか」

　猫が大元帥の肩の上から飛び降りた。

「ぼくも迂う闊かつでしたね。親おや兄きよう弟だいより長い時間を陛下とともに過ごした者たちならば大だい丈じよう夫ぶだろうと、油断していました。それからもう一つ、あの無能な第一皇子に、仇あだ討うちを企たくらむような忠臣がいようとは。誰だれだろう。ルナン伯はくあたり？　彼の長男はクリストフ殿下のご学友で、親友でしたっけ。そのわりにはあっさり恭きよう順じゆんしたものだから、ちょっと引っかかってはいたんですが。そういえば、ルピドナ。あなたの故郷はルナン伯領の近くでしたね。そのあたりも何か関係があるのかな……？」

　皇帝は白目を剝むいて、泡あわを吹ふいている。顔色は蒼そう白はくに近い。すぐそばで皇帝の様子をうかがっていた猫が、大元帥を見上げて高い声で鳴いた。

　ルピドナはしゃがみこんだ。「……わたしは……わたしは……何を……ああ、陛下……」

「まあ、起きてしまったことはしょうがないですね」大元帥は懐から拳けん銃じゆうを抜ぬき、ルピドナの額に銃口を向けた。「とりあえず、あなたは死になさい」

「え……」ルピドナが大元帥のほうに顔を向けた。それと同時に、大元帥は引き金を引いた。

　額のど真ん中に穴を穿うがたれたルピドナは「ぬぇぇ……」というような声をもらしながら、だらしなく床に倒れこんだ。

「さて──」大元帥は銃口を上に向けて、他の侍女や侍従らを見まわした。「あなたがたは何も見なかった。そういうことにできるんでしたら、面めん倒どうがなくていいんですけどね」

侍女と侍従が一人ずつ、さっと頭を下げた。残りの二人は大元帥の言葉の意味を理解してさえいないようだ。

大元帥は「ん〜」と唸うなって、頭を下げている侍従の頭頂部に狙ねらいを定めた。「悪いんですが、やっぱり信用できません」

引き金を引いて、侍従、侍女、侍女、侍従の順に射殺した。

大元帥は拳銃を眺ながめた。「……ずいぶん引き金が重いな。ダブルアクションの機構は、まだまだ改良の余地がありそうだ。今のところはシングルアクションの銃を持っておいたほうがよさそうですね」

皇帝はもうぴくりともしない。

大元帥は肩をすくめて、拳銃を懐のホルスターに収めた。

灰色の猫は一足先に奥の間の扉とびらを前にして尻尾しっぽを高く持ちあげ、顔だけ大元帥のほうに向けている。「早く。早くしてください」

「はい、はい。わかりましたよ、ジュジ」大元帥は笑いながら歩いていって、長衣のポケットから鍵かぎをとりだした。「そんなに慌あわてることはないのに」

「のんびりする理由はどこにもないでしょう」

「それはそうなんですが」大元帥は解かい錠じようして奥の間の扉を開けた。

奥の間は皇帝の寝しん室しつだ。立派な寝台が設しつらえられている。一つではない。ぜんぶで四つある。どれも天てん蓋がい付きだ。一つをのぞいて、幕が掛かけられたままになっている。

猫は右手奥の寝台に歩みよっていって、幕に爪つめを引っかけた。「起きなさい、オクト８エイト。予定外ですが、あなたの出番ですよ」

大元帥が猫に手を貸して幕を引き開けると、寝台に横たわっていたオクタヴィアン・ギュスターヴ・ヴィド・ラフレシアが、ゆっくりと上体を起こした。

「まさしく」大元帥は大元帥杖じようを肘ひじにかけて腕うで組ぐみをし、一つうなずいた。「備えあれば憂うれいなし、というやつですね」

　猫が寝台に飛び乗って身体からだをこすりつけると、オクタヴィアンは右手の人差し指でその喉のどを撫なでた。「これでオクタヴィアンは七回も殺されたことになる。余にとっては他ひ人と事ごとではないが、難なん儀ぎなことだ」

「やむをえませんよ」大元帥は口をへの字に曲げた。「彼は一番出来のいい第三皇おう子じだったんです。馬ば鹿かな兄皇子たちにすれば、なんとかしてさっさと死んでほしかった。まあ、実際、何度も殺されたわけですが」

「オクト」猫はオクタヴィアンの指を鼻先で押した。「早く着替えて、車橋ブリッジに行かないと」

「そのようだな」オクタヴィアンは寝台から降りた。

「やれやれ」大元帥はため息をついた。「侍女も侍従もいない。着替えはぼくが手伝うしかないですね。側そば付つきがいないといろいろ不便だし、新しい人間を手配しないといけません。その前に後片付けだ。これから戦争ってときに、大おお忙いそがしですよ」

『薔薇のマリア15．愛も憎しみも絶望も』了

あとがき

　朝、起きると、見覚えのある顔をした男が一人、膝ひざを抱かかえて部屋の隅すみに座っていた。

　男は小声で何か呟つぶやいているようだが、その声は聞きとれない。

　僕は布ふ団とんから起きあがって、男に近づいた。

「終わらない夢を見ていたかったんだ」と男は呟いていた。

　僕は男のそばにしゃがんだ。「終わらない夢などありはしないよ」

「終わらない夢を見ていたかったんだ」と男は僕を見もせずに繰くり返した。

「すまない」僕は男の隣となりに腰こしを下ろすことにした。「僕はきみの言うことをちゃんと聞いていなかったようだ」

「終わらない夢を見ていたかったんだ」

「僕は夢を見た」

「終わらない夢を？」

「それがもし終わらない夢だとしたら、これも僕の夢だということになる」

　男は低く笑った。「違ちがいない」

　僕は肩かたをすくめた。「これは夢じゃない」

　そう言ったあとで、肩をすくめるという仕種はひどく芝しば居いめいていて、自分にはまったく似合わないのではないかというよう

なことを思った。

「その証しよう拠こがどこに？」と男は僕に問うた。

「証拠？」

「そうだ。これが夢じゃないという証拠はどこにある？」

「僕はついさっき、目を覚ましたところだ。夢は眠ねむっている間に見るものじゃないか」

「おまえが目覚めているという証拠はどこに？」

「頬ほおでも殴なぐれと言うのか。そんなことをしなくたって、自分が寝ていないことくらいわかる」

「おまえに何がわかっているというんだ」

「自分自身のことくらいわかるさ」

「どこに行きたいのか、何をしたいのかもわからないくせに」

「僕はどこにも行きたくないから、ここにいる。やるべきことはしている」

「本当にそう思っているのか？」

「ああ。本当にそう思っている」

「さっき夢を見たと言っていたな」

「そう言った」

「どんな夢を？」

「それは――」僕は顔をしかめた。「忘れてしまった。夢なんてそんなものだろう」

「夢なんてそんなものだろう」男は腹を抱えて笑った。「夢なんてそんなものだろう」

「やめろ。笑うな」

「夢なんてそんなものだろう」

「笑うなと言っているんだ」

「これが笑わずにいられるか。おまえは何一つ知らないくせに、何を知った気になっているんだ。これが笑わずにいられるものか」

「おまえに僕の何がわかるというんだ」

「わかるさ。おれは無知だが、おまえが何一つ知らないということだけはわかる」

「なぜわかる」

「もうわかっているだろう？」

「いいや。わからない」

「強ごう情じようを張るなよ。認めろ。認めるしかないんだ」

「何を認めろというんだ」

「おまえはおれじゃないか」

気がつくと、僕は膝を抱えて部屋の隅に座っていた。

「終わらない夢を見ていたかったんだ」と僕は呟いていた。

部屋には布団が敷しいてあって、見覚えのある男が一人、寝ね息いきを立てていた。

終わらない夢などないということは知っていた。

死に至る深い眠りの中で見る夢さえも、死によって果てるだろう。

果たしてこれは夢なのか。

そもそも、僕にとっての夢とは何なのか。

考えてみたが、やはり『薔薇のマリア』は僕の夢なのではないか

と思えてならない。

　頼たよりない、心こころ許もとない僕の歩みを支えてくれているたくさんの人たちのおかげで、もう少し進むことができそうです。

　できるだけネタバレをしないように書くつもりですが、あとがきを先に読む主義の方も、ここからは本編読どく了りよう後ごに目を通していただいたほうがいいかもしれません。

　前巻のあとがきで書いたように、『薔薇のマリア』は終章に突とつ入にゆうしました。

　本巻はその序じよ盤ばんということで、次巻以降、すでに起こっているある出来事が進行して、ついにはなんと、■■■■ピーが■ピ■ーしてしまいます。そのはずです。

　僕はこれからマリアローズたちに問いかけることになると思います。

　大切なものは何ですか？

　どうすればそれを守ることができますか？

　もし守ることができなかったらどうしますか？

　失ってしまったらどうすれば？

　これまで時間をかけて積みあげてきたものを、僕はこの手で壊こわしてしまわないといけないかもしれません。

　この物語を始めるにあたって、おおまかな筋はあらかじめ決めておきました。とはいえ正直、そのとおりに書き進められるとはあまり思っていませんでした。この物語は自分の手には負えないのではないかと考えていました。自分自身を信じることができず、とにかく一歩一歩じりじりと前進すれば、なんとかそこにたどりつけるかもしれないから、止まることだけはしてはならないと自分に言い聞かせて、どうにかこうにかここまでやってきました。現時点では、おおよそ予定どおりに進めることができています。

　今、終わりに向けて、細かい部分を少しずつ詰つめてゆく作業を

ちょっとずつ行っています。

　パズルのピースは徐じよ々じよにそろいつつありますが、それでもまだ定まりきっていない箇か所しよが多くあります。

　何が打ち砕くだかれるのか。

　何が消え去ってしまうのか。

　そして、何が残されるのか。

　彼らは最後に何を手にするのか。

　本当のところは、そのときになってみないとわかりません。

　物語がその場所に着地できるかどうかは、マリアローズたちのがんばりにかかっていると言っても過言ではないでしょう。

　まずおまえががんばれという声が聞こえてきます。

　たしかにそのとおりです。

　そうします。

　この物語を書きはじめて以来、ああしてほしいとか、こうしてほしいとか、こうしてくれなきゃもう読まないとか、いろいろなご意見、ご要望をいただきました。

　僕はあえてぜんぶ無視してきました。

　すべて自分の思うとおりに進めてきました。

　そのまま僕はこの物語を終わらせるつもりです。

　まだ道はつづきますが、最後まで行き着くことができたら、この見果てぬ夢は終わらない夢に変わるかもしれないと夢見ています。

　ＢＵＮＢＵＮさんをはじめ、本書の制作、出版、販はん売ばいに関わったすべての方々、そして今、本書を手にとってくださっている皆みな様さまへ、あらんかぎりの感謝と愛をこめて。

　またお会いしましょう。

十文字　青

カバー・口絵・本文イラスト / BUNBUN

デザイン / 朝倉哲也 + design CREST

MAP製作 / On Graphics

薔ば薇らのマリア

15．愛あいも憎にくしみも絶ぜつ望ぼうも

十じゅう文もん字じ　青あお

平成25年9月30日　発行

発行者　宍戸健司

発行所　株式会社角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3

http://www.kadokawa.co.jp/

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『薔薇のマリア　15．愛も憎しみも絶望も』平成23年1月1日初版発行